

---

# 盗賊と領主の娘

くらの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

盗賊と領主の娘

### 【Zコード】

Z6993L

### 【作者名】

くらの

### 【あらすじ】

過去の事件がきっかけで心に大きな傷を持った領主の娘レイピア。表はサークスの次期団長、裏は盗賊団の頭という2つの顔を持つた青年スキル。  
2人のピンクダイヤモンドをめぐる攻防と恋の行方を描いたロマンチックファンタジー。

## 第1章 盗賊からの予告状1

「トリ。

レイピアの泊まっている宿屋の寝室に手紙が投げ入れられたのは、まだ日も昇つて間もない頃のことだった。昨夜は連日の旅の疲れから早々に就寝してしまったため自然と眠りが浅くなっていたのだろう、その音は彼女の耳にしつかり届いた。

こんな時間に誰よ、と心の中で毒づきつつも気になってしまつた以上このまま眠ることなどできるはずもなく、氣だるそうに重い瞼をあげ、ゆっくりとベッドから身を起こした。

室内とはいえ朝は冷え込む。

ひんやりと冷たい床をヒタヒタと素足で歩いて扉に近づき、そこには落ちている手紙を拾う。

差出人を見て眉をひそめた。

長い間連絡を絶つていた父親からだった。

朝早くに起こされてしまつたせいといふことも重なり、苛立ち、すぐにその手紙を捨ててしまつた衝動にかられながらも何とかその思いを踏みどめ、眠い目を擦りながら手紙の封を切つた。

2年前、20歳の時ホットリープの領主の娘だったレイピアは父親と大喧嘩をして家を飛び出したのだ。原因は父にしてはささいなことだったかもしれない。けれど彼女にとつてはとても重要なことだった。

それは母親の墓参りのこと。

母の命日に向けて1カ月も前から父親と一緒に墓参りをする」と

を約束していた。しかし当日になつて父は仕事で出かけてしまつたのだ。彼が忙しいことは知つてゐる。そして急に仕事が入ることもよくわかつてゐた。そんなたつた一回のことであらねるほど子供ではなかつたが、去年もその前の年も同じように墓参りの約束は破られていた。

元々あまり父親のことは好きではなかつた。冷たくて家族のことを少しも見向きもしない仕事一筋の父。母親が死んでからは特にそう。ますます仕事に没頭するようになる始末だ。

長年積み重なつた父親に対する恨みと、考え方の違いによる確執によつてレイピアはとうとう家を飛び出したのだった。

家を飛び出してからは冒険者ギルドに所属して、冒険者として盜賊退治や獣狩りなどして生活費を稼いでいた。家も持たずに流れ者のような生活で各地を点々として。

……なぜ父は私のいる場所がわかつたのだろう。  
レイピアはそのことが不思議で仕方なかつた。

家にはもちろん自分の居場所を連絡した覚えはない。探偵でも雇つたのだろうか。

自分で私のところに来ないとこゝがあるのんらしいわ、と心の中で毒づく。

飾り気も何もない真っ白な紙で書かれた手紙は、父の字で「非常事態。家に帰つて來い」と短く書かれていた。それ以外何も書かれていなかつたのがとても彼らしかつた。

その自分勝手でレイピアの都合など少しも考えていない父親の手紙に苛立ちを覚えて、くしゃくしゃと丸めてゴミ箱に投げた。しかし弧を描いて飛んでいった手紙は壁にぶつかつて力なくポトリと床に落ちる。それがまたなんとも腹立たしかつた。

「何が帰つて來いよ。今さら……何よ!」

出て行ったときも追つても来なかつたくせに！

そう、レイピアの父親は今まで2年間、一切連絡をしてこなかつたのだ。レイピアを探すこともしなければ家に連れ戻すこともせずに……。

自分が居なくなつたことすら気がついていないのではないかと思つぽどだつた。

緊急事態だか何だか知らないがあまりにも虫が良すぎる話ではないか。苛立ちばかりが心を止めゐる。

しかし 。

この手紙に書かれている非常事態とは何だろつ。もしかして家に何かあつたのかもしれない。

それとも父の身に何かが？

そう考えてすぐに否定する。あの父が病氣にかかつて弱るなど、どう考へてもありえないからだ。しかし無意識に気になるのか、胸の中に煙が入り込んだように気持ちが悪くなつた。

## 第1章 盗賊からの予告状2

結局、レイピアはホットリープの自分の屋敷へ帰ることにした。くだらない理由だつたらすぐに出で行けばすむ。こんなスッキリとしない気持ちを抱えたまま次の冒険に出るよりは、ずっとましなはずだ。

ホットリープへの道のりはレイピアの泊まつてゐる宿から馬車で3時間ほどかかった。

レイピアが乗つてゐるのは乗合馬車で賃金が安い。代わりに幌がボロボロになつていて、木でできた座席のイスには座布団もなく座りここちが悪かつた。

大陸の外れの方にあるホットリープは街の中心にたどり着くまで延々と畑ばかりが広がり、穏やかでのんびりとした印象がある。畑はそろそろ始まる種まきのために次々と掘り起こされていた。田舎という言葉が似合うホットリープだつたが、レイピアはこの光景が嫌いではない。

しかし同じような光景ばかりが続き飽きが出始め、朝が早かつたことと春のやわらかい田差しも加わつたおかげどうとと居眠りを始めてしまつた。

ほゞなくして御者に起こされた。門の前にさしかかつた所で馬車から降りて別れを告げた。

2年ぶりに見る我が家は少しも変わっていなかつた。

レイピアが屋敷を出た時期も今と同じような、温かく過ごしやすい季節だつた。屋敷の建物はもちろんのこと、庭に咲く花々さえも全く同じ色取りだつた。

レイピアの姿を見つけた庭師がハツと驚いた顔をするが、すぐに

恭しく頭を下げた。その見知った顔の庭師の姿にレイピアは安心感を覚える。

庭師の承諾を得ると、庭に咲いている沈丁花じんぢょうげの花の枝を手折り香水代わりに胸元に挿し入れた。沈丁花は常緑の庭木で春になるとかわいらしい花を枝先につけ、その花は芳香性の強い甘い香りを漂わせる。

今のレイピアにできる精一杯のおしゃれだった。家を出てからは金銭的におしゃれなどする余裕もなく、先程乗つた馬車だつて乗合のボロボロ馬車だった。

家を出たときから覚悟はできていたけれど、やはり父親から蔑んだ目で見られるのは嫌だった。

長い廊下を真っ直ぐ進んだ先は父親の居る書斎。

途中レイピアを知っている何人かの使用人に声を掛け、父の手紙について話を聞こうとしたが、誰もが眉を寄せて「まずは旦那様にお会いください」と答えた。とりあえず父が病気だと、そういう類の話ではないことに安堵を覚えた。

ためらいがちに扉をノックすると中から低いレイピアの父と思われる声が返ってきた。ふう、と深呼吸をした後で扉を開ける。

書斎の真ん中にある革張りの椅子に腰を掛けっていた父親はレイピアの方をちらりと見た後、表情どころか眉一つ動かすことなく、再び机の上にある紙に視線を落とした。

久々に会つたというのにその態度は何！？  
何の感動もないわけ？

もつともレイピアの方も久しぶりに会つた父親に対して何の感動もなければ何の感情も湧いてこないが、あからさまにそういう態度を取られると腹が立つ。口の端を怒りの形に歪めたが、きわめて冷静に努めようとした。

「こんな男のことをいちいち腹を立てるなんてエネルギーが勿体無い、としつつ思って。

「お久しぶりですね。一体用件は何なのです?」

何の感情もない声で言った。

一刻も早くレイピアはこの部屋から、そして屋敷から出たいと思つた。やはり来るべきではなかつたのだ。もう一度と顔も見たくなり。

だから单刀直入に用件を聞く。

「IJの紙を見ろ」

父親の方もレイピアと同じように何の感情もない声でたつた一言。それだけ言い放つた。

2年という歳月を経てもお互いの溝は埋まつてはいなかつた。むしろますます深くなつたのではないかとさえ感じじる。

レイピアの父は黒髪を撫で付けて後ろへ流していく、スーツをきつちりと着こなしていた。お世辞にも愛想があるとは言えない男で、常に氣難しい顔をしている。そしてその父は今、口を固く引き結んでいるためよりいつそう威圧感が感じられた。

父は何がしたいのだろう、と疑問に思いながらも素直にレイピアはその紙を受けとつた。黒い紙に金色の文字で書かれた文面を見てレイピアはますます困惑した。

祝福の日元にピンクダイヤモンドをいただきに参上します

黒のピエロ団

眉根を寄せて父親の方を見ると彼も険しい顔をしていた。

「なんです、これは」

まるで物語に出て来る盗賊がやるような予告状ではないか……。

「先週屋敷に送りつけられた。……予告状だ」

父の真面目な口調にレイピアは信じられない、と目をみはった。あまりにも衝撃を受けたので呆然として間抜けにもポカンと口を開けていたかもしれない。

真面目で石頭の父はこいついた冗談をやるような人ではなかつたからおそらく本当に送りつけられたものなのだろう。

「一体誰がこんな馬鹿らしいいたずらを？  
そしてこんな物を父は信じているのだらうか？」

「誰かのいたずらではないのですか？」

あまりにも馬鹿馬鹿しくてレイピアは額を押さえため息をついた。

「お前は……冒険者のくせに黒のピーポー団を知らないのか？」

知らない。そんな話は一度だって聞いたことがない。

「何なのですか？ その黒のピーポー団とは」

「今、全国各地を荒らしまわっている盗賊団のことだ。まさかこの領内に来るのはな……」

「その盗賊達はわざわざ手告状など出してから盗みに入るのですか

？」

レイピアの問いに父親は頷く。

盗賊といつてこれでは怪盗ではないか……。

もう一度レイピアは母の黒のピアロロゴとやうが書いた予告状に目を向ける。

ピンクダイヤモンド　。

その文字に視線が止まる。

「あなたはピンクダイヤモンドを取られる」と心配してこののですか。だから・・・私を？」

冒険者としてこくらか名前のある自分に「ダイヤを持ち去る」として、呼び寄せたというのか。

その意味を汲み取った父は、相変わらずむつむつと口を開き結んだまま頷いた。そこからは相変わらず何の感情も読み取ることはできない。

ピンクダイヤモンドは確かにレイピアの屋敷にあった。そしてそれは生前母親が一番大切にしていたもので、唯一の形見の品でもあった。

父は母の形見だから盗まれるのを恐れているのだろうか。それとも宝石として価値の高いピンクダイヤモンドだからだろうか。

どうしてもレイピアには後者の方に思えてならなかつた。一度も母の命日に墓参りに行くことがなかつた父だから。

母が生きている頃であり愛情を向けている姿を見たことがなかつたから。

そんな父のためにダイヤを守るのは腹立しかつた。けれどもむむむと盗賊風情に母の形見をくれてやる気にはならない。

レイピアにいたのもかのダイヤは母の想い出の詰まつてこる大切なもののなのだ。

「わかりました。私がピンクダイヤモンドを守つてみせます」

自分でも驚くほどの言葉が出ていた。

これは父親の為ではなく、自分の為なのだ。  
母親の想い出を守るための。

\* \* \*

部屋に入つてからレイピアは「んん、とベッドの上に寝転んだ。  
唯一、自分が心を落ち着けることのできる場所。2年ぶりの自分の  
部屋に自然と父と対面して緊張していた筋肉がリラックスしていつ  
た。

再び予告状に手をやる。

祝福の日とはおそらく明後日の父の誕生日のことだひつ。誕生日  
を祝つて夜会が行なわれる。その浮かれた雰囲気を狙つて来るもの  
と思われる。

「わざわざ予告状を出すとはねえ」

よほどこの盗賊団は田立ちたがり屋か、自信過剰なのだろう。そ  
れか心底盗みといつ行為を楽しんでいるのかもしれない。そうでな  
ければわざわざ捕まる危険を高くしてまでこんなことをするはずが  
ないのだから。

いずれにしても盗賊の考へてこむことなど理解する氣にならない。

すぐに屋敷の者に黒のピエロ団のことを聞いて詳しく述べた。過去の犯行の手口などに田を通しておこした方がやりやすいと思つたからだ。

しかし、有名と書かれている割にはその犯行について書かれている資料が少ないことにレイピアは顔をしかめた。ないよりはいくらかはましすぎるだと思い、その資料に田を通す。

そこには黒のピエロ団のメンバーは複数いるらしいことや、狙われるのにはいずれも領主や金持ちの貴族だということが書かれてあつた。

なるほど、どうで資料が少ないはずだ。  
たとえ被害にあったとしても体面を氣にするあまり隠け出を出さない貴族が多いということか。

意外にもわくわくしている自分に気がついた。形見を取られるかもしれないという不安はあるものの、それよりも自信過剰な盗賊を一目見てみたいと感じているのだ。

レイピアは知らなかつたが有名な盗賊団らしさので、捕まることができたら冒険者としての名声も上がるだろ？

手の中でもてあそんでいた宝石のケースをベッドの上に置いた。黒のピエロ団が狙っているダイヤだ。あの後すぐに父の手からレイピアの手に渡されたのだった。

蓋を開けて中のピンクダイヤを取り出す。母の胸で光っていた頃とまるで同じ輝きにしばらく魅入つていた。

ピンクダイヤを身に付けている母親は宝石と同じくらい、いやそれ以上に美しかつた。やさしくて綺麗で心があたたかい母はいつだってレイピアの血縁だった。

母のことを思い出してしまい、少しだけ悲しくなつた。母が死んでからもう5年も経つていうところに、今だに思い出すだけで辛

くなる。楽しかった思い出よりも母を亡くしたあの日のことの方が記憶の奥底に根付いてしまってなかなか離れてくれないのだ。

絶対に守つてみせるわー！

レイピアはピンクダイヤに軽く口づけると、いつ盗賊がやつてきても大丈夫なように身につけた。そしてベッドのすぐ近く、いつでも手を伸ばせる位置に剣を置く。

下手にしまいこんでいるよりも剣の腕がある自分自身が身に付いている方が何倍も安全だと感じた。

## 第2章 2つの顔を持つ男

ホットリープの街から少し外れた広大な空き地、くるぶしの辺りまで背を伸ばしている草むらの中に巨大な極彩色のテントが立てられた。

周りには何台もの馬車と、動物が入った檻。そして宿舎用に使われるいくつもの小さいテントが軒を連ねるようにして立っていた。これらのテントは宿舎用だけでなく衣装など小道具が置かれているものにも使われている。

そこに住んでいるのは、サークัสという見せ物をして街から街へ移り歩く旅芸人達だつた。

彼らのステージである巨大なテントは、団員40人がかりでおよそ3日かけて立てられた。1日目はテントを支えるための高さ15メートル程の支柱を何本も立て、そして2日目にテントを張り、3日目でステージと観客席がつくられた。

テントから突き出ている鉄柱には赤と黄色の何とも派手なストラップの旗がひるがえる。

幸い穏やかで風のない日が続いたため、順調に作業は進んだ。

ようやく昨日になつてその作業を終えた団員達はステージに向けてリハーサルや稽古といった自分の役目を果たしていた。

街では路上においてサークัสの来訪を告げるビラが配られ、店やら民家の壁やらいたるところにポスターが貼り付けられた。娯楽の少ない田舎のホットリープは思いがけない旅人達の来訪に誰もが心を弾ませた。そうしてサークัสの幕が開く日を今か今かと待ち望んだ。

\* \* \*

くあ～っと大きな欠伸をして一人の青年が宿舎用の青色のテントから出てきた。田を眠たげにとろりとさせて、前髪をかきあげている。

目的の人物を田ぞとく見つけたリグは肩をいからせてその青年に寄つて行く。

「若君！ 仕事は明日なんですよ！？ こんなところで寝ていてどうするんです。打ち合わせに出てくれないと」

今にも口から火を吹きそうな勢いでリグは怒鳴った。

若君、と呼ばれた青年は名をスキルと。彼はこのサークル団の団長の息子にして次期団長の座にある。そのため彼は団員から「若君」と親しみを込めて呼ばれることが多かった。リグもそう呼んでいる1人である。

リグはサークルの一員として動物の世話を任されていて、同時にスキルを幼い時から世話をしている。ある意味育ての親とも言える彼の怒鳴り声にもスキルは全く悪びれる様子もなく、のん気に肩をすくめてみせた。それがまた彼の怒りをよけいに煽つた。こめかみに青筋を浮かべて再度怒鳴り声を上げる。

「若君……」

「あ～、悪い悪い」

スキルは悪戯っぽく笑つて片手を謝る形で顔の前に突き出して謝罪した。けれど実際のところ本当に謝っているかと言えば怪しいものだ。いや、むしろ少しも悪いと思つていない。長いつきあいのリ

グにはそれがわかる。

黙つて立つていればスキルは男の自分から見ても良い男だと思う。年齢はまだ22歳と若く、サラサラとした金髪と整つた顔立ち、すらりとした体格。ステージに上がった彼は貴族のような振る舞いと、それに似合わないスリリングな演技の数々で女性はおろか男性の心も魅了して止まない。実際スキルの母親は貴族だつたらしいので血は受け継いでいるのだが……。

しかし普段の彼は貴族らしいところはちつともなく、まるで悪戯小僧のようだ。毎度のようにリグはこの風のよくな悪戯小僧に手を焼かされている。

再度怒鳴り声をあげようとしたりグは、スキルが今までいたテントから1人の少女が出てくるのを見つけて絶句した。

頭が真っ白になる。

テントから出てきたのは、シャンナリーといつ名の少女だ。艶やかな黒髪と薔薇色の頬をしていて誰から見ても「守つてやりたい」と思われるような少女。そのシャンナリーは今や黒髪を少しだけ乱れさせて、身にまとつた服にしわをつけている。頬を上氣させて、マスカット色の瞳を潤ませて。

シャンナリーはリグと目が合つと、恥ずかしそうに目を伏せてスキルの後ろに隠れた。

テントの中で行なわれていたことが容易に想像がつき、リグは頭を抱える。

大事な打ち合わせを放り出して何をやつているんだろうか！

「若君、あなたという人は！　ああもう、こっちに来てください！」

リグは頭を搔きむしった後、半眼でスキルを睨みつけると、半ば引きずるようにして彼の腕を引っ張つて隣のテントに連れていった。

「これから明日に向けて大事な報告があります！」

リグはバン、と机を叩いた。

そして怒りが抜けきれていならしく、震わせた手で報告書を取り出した。座っている椅子が小刻みにカタカタと揺れる。

スキルは興味がなさそうに再度くわ～と大きな口を開けて欠伸をした。だらしないとも言える行動だが、彼がやるとそれが1つの優雅な動きに見えてしまうのだから不思議である。しかしリグはますます苛々する一方だ。

カタカタと再び椅子が揺れる。リグの怒りを物語ついているようだ。

「明日の打ち合わせはもう午前中に終わったはずだろ？」

「それは舞台の方です。私が今から言つるのは明日のピンクダイヤモンドの件です」

リグの言葉にスキルは鋭く碧眼を光らせた。

「どうか、悪かつたな。報告を聞こう」

短く謝罪をすると、スキルは先程の態度とはまるつきり正反対の真面目な顔つきになつた。そして奥から2脚椅子を引つ張りだすと、リグに1つを渡し彼も腰をかけた。長い足を組んでその上に肘を乗せて頬杖をつく。一見すると不真面目そうなのだが、これがスキルにとって真面目に話を聞く体制であることをリグは知っている。ようやく本気になつたな、と安堵のため息をつく。

そう、このサークス団こそレイピアの屋敷に予告状を送りつけた主であった。

表の顔はサークスとして、裏の顔は盗賊として、全員が全員盗賊

稼業に手を染めているわけではないものの、スキルを筆頭として全國を股にかけて活動していた。

「領主宅には昨日一人娘が戻ってきたそうです」

リグは報告書に書かれた内容をそのまま読み上げる。

「戻ってきた？」

「はい。領主の娘は冒険者として旅に出ていたようですね」

スキルはその言葉に興味を持ったように眉を上げる。

「領主の娘が冒険者……ね。単なるお嬢様じゃないといふことかな」

領主のお嬢様といったら儂げでシャンナリーのようなイメージがある。

リグから報告書を受け取るとしげしげとその内容を確かめた。レイピアという名前にスキルはおや、と目を見張る。レイピアといつたら剣の名前ではないか。

レイピアは装飾を施された美しい剣ではあるが、領主の娘の名にしては相応しくない。

名前の通り剣のような鋭さを持っているのか、それとも単に名前だけのお嬢様なのか。一体どんな顔をしているのだろう。

あれこれと考えていたらリグの声で現実に引き戻された。

「当口は屋敷のどこかに隠すものだと思われます」

スキルもこの意見に頷く。大方の貴族連中は予告状を出すとよけに見つかりにくい場所に隠そとする。ここに領主もまた一緒だらうとスキルは考えたのだ。例え娘が冒険者であつたとしてもわざ

わざ胸に下げるよつなことはしないだろ。」

もつともどこに隠したとしてもスキルには見つける自信があつたが。

狙つた獲物を逃がしたことなど、今まで一度もない。例えそれがどんなに盗み出すのが困難な物であつても同様だ。

「お嬢様の部屋を荒らるのは気が引けるが……仕方がないな

くつくつと喉をならして楽しげに目を細めた。

リグは眉を寄せたが、スキルに意見することはなかつた。彼は悪戯がすぎる傾向があるものの、盗賊としての腕を信頼しているからだ。

### 第3章 領主の娘と貴族の男1

ホットトリープの領主の屋敷では、誕生日という名目の盛大なパーティーが開かれた。親族はもちろんのこと近隣の貴族達も招かれ、庭で行なわれた。

白いテーブルクロスで覆われたテーブルがいくつも並べられての立食形式で、招待客には料理人自慢の肉料理や魚料理やとつておきのワインがふるまわれた。

庭木には電飾がつけられ、控えめに明かりを灯す。

招待された者達はそれぞれ片手にワイングラスを持ち、話に花を咲かせる。

レイピアも領主の娘としてパーティーに参加していた。

レイピアは自分の瞳と同じ色の青いドレスを身にまとっていた。あまり派手すぎずシンプルなデザインのそのドレスは、着ている彼女をほつそりと見せた。

長い銀の髪の毛をアップにして耳元にはパールのイヤリング。そして首から大粒のピンクダイヤを下げた。ダイヤは世界中の月の光を集めたように眩しく輝いている。ダイヤを繋いでいるのは金色の鎖。こちらの方はダイヤをよりいっそう引き立てるために控えめな光を放っていた。

パーティの招待客は誰もがほうつとため息をもらして彼女の姿を見つめた。普段の彼女も魅力的だが、ドレスアップした姿はそれより何倍も魅力的だ。月の女神が人間の姿をしていたなら、まさしく彼のことだろうと思うに違いない。

パーティの参加者には混乱を防ぐためにも盗賊が侵入すること

は話していない。そのため事情を知らない者から見ればレイピアは何の不自然もない姿だ。しかし事情を知っている者から見たらあまりにレイピアは無謀な姿をしていた。盗賊に狙われているピンクダイヤモンドをこれ見よがしに身につけているからである。明らかにこれは盗賊に対する挑戦に思える。

さあ、狙つてきなさい。

くすりとレイピアは真っ赤なルージュをつけた唇を笑みの形に歪めた。

盗賊はもう中に入り込んでいるのかもしれない。レイピアはそれとなく会場の中を見回した。

今のところそれらしい動きはない。

先程から代わる代わる貴族の青年達がダンスを誘いに来るのがとても鬱陶しかった。これではまるで父の誕生日パーティーというよりお見合いパーティーではないか。

うんざりしつつも口元に笑みを絶やすことなく愛想を振りまいてレイピアはそのダンスに答えていた。もちろん盗賊かどうかを見極めるように目をギラギラと光らせながら。

何人かと踊つた後でようやくダンスから開放される。

1時間近く踊つていて、くたくたになつたレイピアは会場の片隅に置かれた椅子に腰かけた。

家を飛び出してからはこんなふうにダンスを踊る機会もなければパーティーに出る機会もなかつた。疲れが回るのは早いのも当然かもしれない。

しばらくして休んでいるとすりとワイングラスが差し出された。

ちらりと顔を上げて見ると、いつのまにか一人の青年が前に立っている。踊り疲れてくたくなっていたから気がつかなかつたのだろうか。

それにしても気配も、足音すら気がつかせないとは一体

？

「どうぞ。先程から何も口にされていないようなので」

金髪で、背の高いその男はレイピアを気遣うように碧色の瞳を細めてにっこりと微笑んだ。その青年は白いタキシードで正装し、手にも白い手袋をはめていた。穏やかな顔つきと低くて耳に心地よく響く甘い声。まるでどこかの王子様のよう。

レイピアは青年に微笑み返すとワイングラスを受けとった。

今宵のパーティーにピッタリな、月を浮かべた琥珀色のワイン。

「ありがとうございます。ちょうど喉が渴いていたところなの」

レイピアは白い喉をこくこくと鳴らしてワインを飲んだ後、優雅な仕草で口元をハンカチで拭つてから「おいしいわ」と微笑む。その様子を見守つていた青年は満足げな表情をすると隣に座つてもいいかどうか尋ねてきた。断る理由がなかつたレイピアはすんなりと許可をする。

「挨拶が遅れました。私はスペニティ家のランスと申します」

優雅にお辞儀をした後、ランスはレイピアの手をとり甲に口づけた。この美貌の青年にはその仕草がひどくよく似合つていた。

レイピアはにこりと微笑んでそれを受ける。

「私はこのホットリープ領主の娘のレイピアと申します、ランスさん

「ランス」という言葉を少しだけ強めてレイピアは青年に向かって自己紹介をした。

「貴女のような女性にレイピアと云ふ名前は珍しいですね」

青年はそんなことを言に出したのはレイピアの容姿があまりにも剣の名に相応しくないと考えたからだろう。よい身分の娘らしく清楚なドレスに身を包んだ彼女からは剣のような鋭さがどうしても感じられなかつたからだ。

「まあ、そうかしら。では私にはどんな名前が似合つと思ひます？」

そう返されるとは思つていなかつた少し驚いた表情を見せるが、しかしほんの一瞬考え込むと「シャンナリー」という名前はどうでしょ」と答えた。

「素敵な名前。由来は何かしら？」

レイピアが聞くと青年は悪戯っぽく笑つて

「私の飼つている猫の名前です」

と答えた。

「まあ、私は猫の名前なんですか、ひどいわ」

レイピアはくすくすと笑つて抗議の声を上げた。青年も穏やかに笑つて返す。

傍から見ると2人の姿は恋人同士のように見えるのだろうか、先

程までうんざりするくらいダンスの誘いがあったというのにランスが来てからはピタリと止んでしまった。しかしやはりレイピアとランスのことが気になるのか貴族の男性達は遠巻きにチラチラと視線を投げかけてくる。

レイピアはその視線に気がついていたが、あえて気づかない振りをする。ランスもおそらく気がついているのだろう。しかしランスはその視線を気にとめる様子もなくさつと立ち上るとレイピアの手をとつた。

首を傾げるレイピアに向けて微笑んだ。

「レイピアさん、私と一緒に曲お相手を」

ダンスに誘っているのだ。レイピアは理解すると、肯定の印にドレスの裾を軽く持ち上げてお辞儀をした。そしてランスに手を引かれるままダンスのために設けられた中央の広場に歩いていく。

やわらかな月明かりに照らし出された広場。

その中心では曲に合わせてワルツが踊られていた。輪を描くようにして踊っている男女の中にランスとレイピアも入って行った。輪の中に入るとランスによって左肩に手を回された。レイピアもそれに合わせて左手でランスの肩に手を回し、そして右手で彼の手を握った。4分の3拍子のテンポに合わせて優雅に踊った。

レイピアがランスの方に顔を向けるたびにパチリと目が合つた。彼の熱っぽい視線にレイピアはすぐにさつと目をそらしてばかりだつたけれど。

「とてもダンスがお上手なのね」

「実はワルツはあまり踊り慣れていないんですよ。いつあなたのドレスの裾を踏んでしまわないか緊張しています」

「まあ」

あんまりにもおどけた様子で言つものだからレイピアはくすぐすと笑いが止まらなかつた。

ランスはああ言つてはいるけれど、踊り慣れていないどころか彼のリードの上手さは今日踊つたどの貴族の男よりも洗練されているよつに思えた。ステップは優美で軽やか。

自然と周囲の視線がレイピアとランスの2人に注がれたのは言つまでもない。

そうして30分くらい踊つていたところで急にレイピアの隣で踊つていた男女が倒れた。すぐに異変に気づいた周りの女性達が悲鳴を上げる。しかしその悲鳴を上げていた女性達も数分と経たずにバタバタと次々に倒れていった。

何か会場中に異変が起きたのは誰の目から見ても明らかだつた。

\* \* \*

来たわね。

レイピアはすぐに盗賊が仕組んだ罠だということに気がついた。おそらく食事やワインの中に眠り薬が仕込んであつたのだろう。ちらりと田の前にいるランスを見ると、彼は戸惑つたようにレイピアの顔をまじまじと見ていた。

くす、とレイピアはランスに向けて冷ややかに笑い飛ばした。

「私が眠らないのがそんなに不思議？ 盗賊さん」

ランスと名乗つた青年はおや、といつ風に田を見張つたかと思つたら、急にくつくつと楽しげに笑いだした。今まで穏やかに笑つていた青年とはまるつきり別人である。先程の微笑みが天使的な微笑

みだとしたら、今のは悪魔的といったところか。

「バレていたとはね。単なる貴族のお嬢さんではないということかな」

「ありがとう。私、優男は信用しないことにしてるの。もちろんいただいたワインは飲む振りをして後は捨てちゃったわ」

レイピアはワインを飲んだ後にそつと口元にハンカチを当てたのだ。傍から見れば単に口元をぬぐっているように見えたが、実はそうではなく飲んだワインを染み込ませていたのだ。

その様子をジェスチャーで示してからパチンと手をつぶつてみせた。

「君はたいした演技力だね」

「あら、あなたには負けるわ」

この青年が近づいてきた時から、レイピアは盗賊ではないかと睨んでいた。

あまりに盗賊という肩書きの似合わないその青年に少々驚きはしたが……。

貴族らしく振舞う青年に会わせて、あえてレイピアは貴族の娘らしくしとやかに振舞っていた。まるで狐の化かしあいのようで、途中でおかしくなって笑いをこらえるのが大変だった。もちろんランスという名が偽名ということもわかつていた。

「さあ、大人しく捕まつてしまつだい」

レイピアはそれまでドレスの内側に縫い付けてあった短剣をさつと引き抜いた。

盗賊の青年は信じられない、といった感じで目を見開く。お嬢様

だと思つていた女がドレスの中から剣を引き抜くとは思つてもいかつたのだろう。

しかし隙をついたにも関わらず、レイピアが青年に向けて難いだ短剣は寸でのところでひょいと避けられた。

青年は先程の驚いた顔はすでに内に潜めて今は涼やかな顔をしている。

「訂正だ。君はレイピアとこの名が似合つてない」  
「光栄ね」

レイピアの持つている短剣は刃渡り25cmほどのがれつきとした戦闘用のものである。当然刃をつぶしてもいい。しかし盗賊の青年は短剣を向けられても恐怖するどころか実に堂々とした態度をしている。

余程自信があると見える。

一気に間合いをつめて斬りかかるとするのだが、なかなか思うようにいかない。青年がふわりと逃げてしまつのだ。まるで風でも相手にしているようだ。

レイピアはそれなりに剣の腕に自信があつた。けれども一向に斬りつけるどころか、かすめることさえもできない。青年はいつも簡単そうに間一髪でひょいひょいと避けていく。

傍から見れば2人の姿はダンスをしているよりも思えたかもしれない。しかし今や2人を除いて会場にいた人間全員が眠りこけてしまつたため、その姿を見ることもできなかつたのだが。

「なぜ剣を抜かないの！？」

こうしてレイピアの剣を避けている間に青年が自分の剣を抜くチヤンスはいくらもあるはずだ。それなのにこの青年はそれをしよ

「盗賊は剣を振り回したりしないのか。強盗になってしまつだらう」

「盗賊は剣を振り回したりしないのか。強盗になつてしまつだらう」  
軽口を言つよしに青年はレイピアに語つた。そして武器を持つてきていなことを示すためにタキシードの胸元のボタンを外して開いてみせた。

「そんな強がりいつまで言つてられるかしらねつー。」

レイピアは馬鹿にされていふよつた気がして腹が立つた。青年が剣を抜かないどころか持つてきてもいなのは、まるで自分ごときに剣を抜く必要がないと思つてゐるのでないかと、そんな気がしてならなかつた。

余裕を持つた涼やかなその表情も腹が立つー。  
だが、そんな様子を顔に出さないよつにして、きわめて冷静を装つて盗賊に短剣を振つた。

「君はとんでもないお転婆だ。さぞかし父親は手を焼いているだろ  
う」

「そういうあなたこそ猫被りのエセ貴族じゃないー。」

「ハハ、本当にお嬢様は気が強くていらっしゃる。」

氣の強

い女は、嫌いじゃない」

「何を……つー！」

挑発だとわかつていたけれどついカツとなつてしまつた。レイピアは冷静さを忘れて闇雲に剣を突き出していた。それを見逃す青年ではなく、いつも簡単にレイピアの手の甲を叩いた。その衝撃で思わず短剣を落とす。運の悪いことに落ちた短剣はちょうどレイピアの太股に突き刺さつた。

レイピアは短い悲鳴を上げる。

それは青年にとつても予想外の出来事だつたらしく、小さく舌打ちをするとレイピアの体をぐい、と引き寄せた。驚いて目を見開く彼女に青年は唇を寄せた。さつと口の中に何かが入つてきたが、それがあまりに突然のことだつたので思わず飲み込んでしまつた。「なにを……！？」と盗賊の青年に問いかげようとしたが、ろれつが回らずに實際にはうめくだけだつた。

ぐらりと視界が揺れる。

即効性の眠り薬だ 気づいた時にはすでに遅かつた。飲み込んでしまつた薬を吐き出すこともできない。

体から力が抜けていくのを感じた。足で立っていることができず、あつさりと地面に倒れこんでしまいレイピアは急速に意識を失つた。

\* \* \*

次にレイピアが目を覚ましたのは翌朝のことだつた。

鈍く痛む頭を押さえて周りを見わたすと、貴族達が眠りこけている姿が視界に映つた。そこでハッと気がついて胸元を確認する。

彼女の胸元に昨日まで輝いていたはずのピンクダイヤモンドは見事に奪い去られていた。

驚いたことはそれだけではなく、短剣が突き刺さつたはずの太股には盗賊が着ていたタキシードの袖で止血がされていた。そして片袖を無くしたタキシードがレイピアの体の上にかけられていたのだった。

「あいつ……！」

レイピアはくやしさのあまりその由いタキシードを地面に叩きつけた。そしてギリと奥歯を噛みしめる。

ダイヤを奪われただけでなく、同情をかけられ止血までされた。

レイピアにとつて屈辱と云ふ言葉以外、言い表すことができなかつた。

「よくも……お母様のダイヤを……」

唇を噛み締め、体を震わせる。

「あの男……！ 許さない」

絶対に取り戻してみせるわ、とレイピアは心の中に復讐の炎を燃え上がらせた。

テントに戻ったスキルは大歓声で迎え入れられた。団員にして盗賊仲間連中はバシバシとスキルの肩を叩いて仕事の成功を褒め称えた。

スキルが戦利品であるピンクダイヤモンドを掲げると団員の間からほう、というため息がもれた。大粒のダイヤはスキルの手の中で輝きに満ち溢れていた。

近くにいた1人にピンクダイヤを渡すと、それを見るために次から次へと団員達に渡つていった。

「よし、スキル。今日の仕事の具合はどうだったよ？」

スキルの肩を思いつきり叩いて話し掛けて来たのはブレンという男だった。

もともとこのサークルの団員達の間には上下関係というものが薄く、仲間意識の方が強い。それでもくだけきつた物言いから彼はスキルの親友であることが伺えた。

ブレンは活発な顔立ちに褐色の肌と黒色の髪をしていて、頭にバンダナを巻いている。

彼もサークルの団員にして、「黒のピエロ団」の一員だったが今回仕事に関してはスキル一人で出向いたため、そわそわと仲間達とスキルの帰りを待つていたのである。

ちなみにこのスキルとブレンの2人がつるむとたいてい口クなことがないため、リグはしそう頭を悩ませていたりする。

「あー、成功といえば成功だ……」

歯に物の挟まつたような言い方をするスキルにブレンは顔をしかめる。

「なんだ、お前らしくもない。いつもなら成功して当然つて顔して帰つて来るくせによ。あ、お嬢様は見れたか？ 美人だつた？」

前情報から領主に娘がいるということを知つていたブレンはス kill のわき腹を肘でつづいて尋ねた。

ブレンの言葉にスキルは眉間にしわを寄せた。

「あん？ どうかしたのか」

途端に不機嫌そうな顔になつたスキルに不思議そうに首を傾げる。

「あー、ハズレだつたのか。そりや『愁傷様』……」

「いや、とびっきりの美人だつた」

言葉とは裏腹にその表情は相変わらず不機嫌なまま。だつたらなんでそんなに不機嫌なんだよ、と言いかけたブレンの言葉を遮る。

「その話は後だ」

ひらひらと手を振つてブレンから離れると、ため息をついて椅子に腰掛けた。ひどく疲れてしまつた。するとそれまでじつと遠くで見守つっていたスキルの母親のソアラが静かに彼の側に寄つた。

「お疲れ様、スキル」

やせしい口調で労いの言葉をかけた。

おつとりとした雰囲気を持つ母親はかつて貴族の令嬢だった。どこをどう間違えたのかスキルの父親に惚れてしまい、家に勘当されてまで団長の妻として生きていくことを選んだ。旅芸人という職業に身を置いて20数年、しかしながら彼女の物腰や振る舞いは未だに衰えることがなく上品なものだつた。

もちろんソアラも盜賊稼業のことは良く知っている。そしてそれがとても危険なことも悪いことであるのも。けれどもソアラはそれを承知の上でスキルの父親に惚れたのだ。

「上着はどうしたの？」

そうソアラに問われてスキルは慌てた。まさか令嬢に怪我を負わせてしまってその手当てのために脱いできたとは言いづらい。

言えるわけがない。

ソアラは盜賊という仕事を認めているものの、人を傷つけることを大変悲しむ人だから。たとえそれが事故で故意に傷つけたのではないにしても。

「……汚れたので捨ててきました」

多少の後ろめたさを覚えつつもそう言つしかなかつた。人の言うことを素直に信じてしまうソアラもそれで納得したらしく深く追及はしてこなかつた。

「疲れたから少し休んでくる」

スキルは団員からピンクダイヤを受けとると休憩するためにテントに向かつた。

\*\*\*

テントに横になつたスキルはくそつと小さく毒づいた。

彼は今、スッキリとしない気持ちを抱えていた。

理由ははつきりとしている。いつものようにすんなりと仕事が成功しなかつたせいだ。

スキルは貴族というものが好きではなかつた。鼻持ちならない態度、人を馬鹿にした態度……。サークスの団員の娘を酒場の踊り子と勘違する貴族連中もいて、起こつたトラブルも一度や2度ではない。

サークスをして各地を点々と渡り歩いているスキル達は場所代として領主にお金を収めなければならなかつた。ほとんどの領主はサークスと聞くと下賤な芸人の集まりと馬鹿にしてとんでもない高額を要求してきた。

昔はサークスの知名度も低く、そんな馬鹿高い金額を払えずに盗んだ金で支払いをしていたが、知名度も興行収入も上がつた今や場所代を払うのは容易だつた。けれど貴族連中が大切にしている宝物を盗んだときの快感が忘れられずにいまだに盗みを続けていた。わざわざ予告状を送りつけて盗み、貴族の悔しがる顔を見るのが好きだつた。

けれど今日の盗みは

お嬢様だと思っていた女が剣を抜いてきたことが誤算の始まりだつた。そう考えてスキルは頭を振る。

いや、そもそもどこかに隠していると思つていたピンクダイヤを令嬢自ら身につけていたことだ。

一田剣の名を持つお嬢様を見てから屋敷の中を探そうと思い、わざわざ偽造した招待状で会場に入つた。レイピアを見つけたとき思わず口笛を吹きたくなるような美人だと思った。しかし何気なく目を向けた胸元にピンクダイヤを身に付けていたときは驚いた。

そして飲んだと思った眠り薬入りワインをこつそり捨てていたことも。全て彼女はスキルの予想を裏切ってくれた。

結果としてダイヤを手に入れたのはスキルだったが、どうも気分が晴れない。逆にスキルの方がイライラさせられてしまった。

月の光を集めてその背に流したような銀色の髪。

日焼けという言葉を知らないような白磁の肌。

あのとき、領主の娘として浮かべていたやわらかな笑顔がまさか作り物だったとは思いもしなかった。

短剣を引き抜いて自分に向かってきた、剣のような鋭さの性格。

あのあざやかな印象。

スキルはかぶりを振る。

いつまでも考えても仕方がない。もう終わったことなのだから。

スキルはそう思い、明日の公演に向けて休むことにした。

翌日。

朝から晩にかけて3回に渡る公演はいざれも拍手喝采で幕を閉じた。夜の公演が終わったのは9時であった。サークルを見終わった観客達は子供も大人も、誰もが満足そうな表情をしてぞろぞろと出口の方に流れていき、9時30分をまわったころには誰一人としてテント内からいなくなつた。

団員の1人である男がテント内に忘れ物はないかどうかチェックをしているところで1人の女に声を掛けられた。

「スキルさんに会いたいのですが」

凛とした声のその女性は帽子を深々と被つていて顔がよく見えなかつたが、唇の形の良いことから男は美人だな、と想像した。帽子からこぼれ落ちるように背中を流れる銀色の髪の毛は澄んだ月を思わせるように美しかつた。

もしも町中で見かける機会があつたなら間違いなく声をかけるだろう。最も、自分では相手にもされないだろうが……。

「若……いや、スキルさんに何の用事ですか？」

そう言いつつも男には何となく想像がついていた。この女性も花形スターであるスキルの追っかけの1人であると思ったのだ。こんな風にスキルに会いたがる女性は珍しくない、たくさんいるのだ。ところが次に女性が言った言葉は驚くべき内容だった。

「スキルさんに借りた上着を返したいのです」

男は女性が手に持つていた上着に目を向ける。その上着はスキルが昨日領主宅のパーティーに忍び込むために着ていたものである。

「ぐりと息を飲み込む。

嫌な予感が頭をよぎる。

男はその女性と上着を交互にまじまじと見つめると、腹を決めたらしく奥のテント街へと案内した。

奥のテントには公演を終えたばかりでまだ着替えも終えていないスキルの姿があつた。

照り付けられたスポットライトと激しい運動のせいで、背中にびっしょりと汗をかいて一刻も早く着替えをしたいと思つていた。そんなところに団員の1人の男が慌てた様子でテントに入ってきた。

「どうした？」

男のただならぬ様子にスキルは眉をひそめた。

「や、それが……」

男が言葉を言い終えるより前にスキルはテントの入り口に立つ女性に目が向いた。

女性は被つっていた帽子を脱ぐ。その見知った顔に驚いて目を開き、絶句しているスキルに彼女はどぎきりの艶やかな笑みを向けた。

「いきがんいかが？ ランスさん」

まぎれもなくその顔はスキルがピンクダイヤモンドを奪つた領主

の娘だつた。

レイピアがスキルの居場所を見つけられたのには訳がある。彼はタキシード以外何も証拠らしいものは残していかなかつたし、そのタキシードですら彼の居場所を見つける証拠になるわけもなかつた。けれどレイピアはあらかじめピンクダイヤが盗まれたときのために、罠をしかけておいたのだ。

ダイヤに仕掛けた罠は盗賊にあっさりと見抜かれるかもしないと思ったのだが、意外にも気づかれなかつたためすんなりとスキルの場所を見つけることができた。

スキルの本名を知ったのもサークルの宣伝用に配られていたビラからだつた。

案の定盗賊のスキルは驚いていたため、レイピアとしてはとても気持ちが良いものだつた。

「ふふ、びっくりした？　でも私もびっくりしたわ。あなたがサークルの次期団長だつたなんてね」「なぜここに……？」

スキルはレイピアの姿に動搖していたが、すぐに冷静さを取り戻してポーカーフェイスに戻る。

「ダイヤに仕掛けをしておいたの」

その言葉にスキルは懐に入れていたピンクダイヤモンドを取り出し、食い入るようにして見つめた。そして鎖の部分に何か小さな金属のようなものがくつついているのに気がついた。鎖と同色の金色をしているため、今まで全く気がつかなかつたのだ。

じつと見つめていたレイピアは満足そうに頷く。

「うう、それ。それはね、オリハルコンといって特殊な金属なの。盗賊さんならもちろん知ってるわよね？ それでこっちのはオリハルコンを探す探知機」

これでもうわかったでしょ？…と黙つよつてレイピアは右手に持つていた探知機を、スキルの方に見せびらかすようにして掲げてみせた。

ちょうど探知機の画面中央部分で光が点滅している。

オリハルコンとは金属の中で1番の硬度を誇るものとして武器などに用いられる。非常に貴重な金属であるため、一般に出回っていることはほとんどない。ましてやホットリープのような田舎ならばなおさり。

つまりあらかじめピンクダイヤの鎖にオリハルコンをえぐつけておけば後は探知機を使って探すことができる。レイピアが説明を終えると、それまで黙つて聞いていたスキルは体を屈めるようにして笑いだした。

その様子にレイピアは怪訝な表情を浮かべる。

スキルからはすでに先程の動揺など微塵も感じられないから。むしろ余裕すら伺える。

「君は本当にただのお嬢様じゃなによつだな。だが賢くはない」

賢くないとはつまら面と向かつて言われ、レイピアは顔を派手にしかめ口を尖らせる。

「それはどういう意味かしら？」

「言葉の通りさ。敵陣にたつた一人で乗り込んでビシショウつて

うんだい？」

スキルの余裕を伺わせる態度はそのせいだった。

レイピア一人で何ができるのか、そう思つてゐるのだろう。

「もちろん、ダイヤを返してもらうためよ！」

無謀なことは充分わかっていた。それが危険だということも。けれどそれ以上に母の形見であるピンクダイヤモンドを取り返さなくては、という思いの方が強かつた。

レイピアは腰に差していた短剣をすっと引き抜くが、スキルは慌てる素振りも見せず、ダイヤをわざと匕首の刃と懐に収めると、肩をすくめてみせた。

「君の腕じゃ無理だ。俺からこれを取り返すことなどできないな」

ピンクダイヤモンドの入った懐を指し、ニヤリと笑つた。明らかに挑発だ。

馬鹿にして！

そう感じたレイピアはカッとなつた。

「そんなのやつてみなくちゃわからないわつ！」

「リグ！」

レイピアがスキルに飛びかかる前に、スキルは大声で人を呼んだ。その声にテントの前で控えていたリグが、ただならぬ気配を察してすぐさまテントの中に入ってきた。

田の端に男の姿を捕らえてレイピアの怒りがわなわなと込み上げた。

「ひ、卑怯者っ！…」

レイピアの言葉にスキルは心外だな、と言わんばかりに片眉を上げてみせた。

「卑怯だって？ こうなるのを覚悟の上で来たんだろ？」

リグによつて両腕をあつさり捕らわれ、レイピアは怒りに顔を真っ赤にして暴れた。しかし拘束はいつそ強くなるばかりでその腕が解放される」とはなかつた。

「卑怯者 っ！ それだから盗賊なんて…！」

スキルはレイピアの顎を片手でくい、と持ち上げると注意深く観察するようにその顔を覗き込んだ。

「なんなのよっ！？」

「黙つていれば美人なのに、勿体無いな」

「つむさいわね、ほつといてよ！」

気性の激しい犬のように、まるで今にも噛みつきかねないレイピアの様子にスキルは肩をすくめると椅子に腰掛ける。

「卑怯者卑怯者卑怯者 っ！…」

「これだから盗賊なんてカスだわ、最低だわ、と悪態をつく。

その様子を眺めていたスキルはおもじろうとに目を細めて手をひらひらと振つた。それがよけいにレイピアの怒りを煽つたのは言うまでもない。

「そういえばあなたって最初から卑怯だつたわ！」

「うん？ 何のこと。もしかして眠り薬を飲ませたことかな？」

「やつよー。」

自分で言つて、その場面を思い出したのか顔を真っ赤にする。それは怒りのためでもあるし別の理由もあるよつに思えた。

「私としても眠つている女性の胸元に手をかけることは非常に心苦しいことだったのですよ。ああ、罪深き私をお許しください」

体を折つて謝罪の意を示す。口調はラシスのものだつたが、その表情はどこか楽しげである。レイピアが怒るのを承知でわざとそんなことをしているのだ。

ぐつぐつと腸が煮えくり返りそつた気分でスキルを睨みつけた。

「「」の女性はどうあるんです？」

状況がよくつかめていないらしく、困惑した表情のリグはスキルに尋ねた。

「そうだな、とりあえずテントに入れておけ。気性の激しい女だから縄で縛つて転がしておくといい」

捕らわれてしまい、これから自分がどうなつてしまふのか全く想像のつかないレイピアは顔を青くしたが、すぐにスキルのあんまりな言い方に顔を赤くして怒りに身を震わせた。

テントに連れて行かれる間際まで、青いギラギラとした瞳で射殺さんばかりにスキルを睨み続けた。

テントの一つに連れて来られたレイピアは、スキルの言葉通りリグによつて縄で手と足を縛られた。もちろん短剣など武器の類は全て取り上げられた上で。

怒りに肩を震わせてレイピアはリグを睨みつける。意外にも睨みつけられた男は戸惑つたような、申し訳無さそうな表情をした。

「すみません、手荒なことをしてしまって」

謝られるとは思つてもいなかつたレイピアは驚き、目を見開いた。よく見るところの男、盗賊といつて言葉とは無縁のよつた顔立ちをしている。じことなく穏やかでやさしげな感じだ。

「若君も普段はこんな命令を出すような人ではないのですが……。一体何をしたんです？」

スキルは今まで一度だつて女性に対して乱暴に扱つたことはなかつた。盗賊という荒々しいことをしているけれどその点については彼なりに信条を持っているようなのである。

しかしレイピアへの扱いはあるで。

リグは困惑を隠しきれないのでいた。

リグはテントの奥から椅子を一脚出すとレイピアを座らせて、縄の端っこを椅子の背もたれに縛り付けた。転がしておけと言われたが、さすがにそれはかわいそうだと思ったのかもしれない。ただしピアの扱いを決め兼ねているらしくおどおどとした態度をしているが・・・。

レイピアは若君？と首を傾げたがすぐにスキルのことだと理解した。

「私は、ただピンクダイヤを取り返そうとしただけよ

ふいつとそっぽを向いてレイピアはやっけなく言い放った。

「じゃあ、あなたは領主の娘！？」

よほど驚いたらしく半ば叫ぶようにしてリグが言った。その大声にレイピアは顔をしかめる。ハツと氣づいたリグは照れたように頭をポリポリ搔いた。

「あ、すみません。今まで若君を追つてきた貴族なんていなかつたものですから。しかも……」

ちらり、とレイピアを見る。

こんなお嬢様みたいな娘に　　と言いたいらしい。

「せつ、じゃあ今まであなた達が盗みに入った貴族達が無能だったところですね。それともスキルの運が良かつただけなのかしら？」

レイピアはとげとげしい口調で言つた。その言葉には絶対にスキルの腕が良いことを認めないと響きがあった。

言葉の端々から彼女の気の強さを感じ取つたリグは思わず puff と吹き出す。

「何よ！？」

「い、いえ何でもないです」

レイピアに睨まれ、慌てて首を振る。

まさか敵陣に捕らえられてしまつてもこんな風に悪態をつく貴族の女性がいるとは思いもしなかつたのだろう。

リグは何となくスキルがレイピアを縛つて転がしておけと言つた理由がわかつたような気がして、しばらく笑いが止まらなかつた。その度にレイピアに睨まれてしまつたけれど。

\*\*\*

リグはその後すぐにスキルのテントに足を運んだ。今後どうするかを問うためだ。

テントに入るとすぐにスキルの不機嫌そうな顔が目に入った。椅子に腰掛けて、しきりに机をとんとんと指で弾いている。

やつぱりな、と思つ。

スキルはレイピアの前ではつろたえることはなく、むしろ余裕すら見せていたけれど、内心ではかなり動搖していたはずだ。長い付き合いのリグにはその心の動きが手に取るようにわかつていた。

「若君、これからどうするつもりですか？」

「そうだな……」

スキルが顎に手を当て考え込んだところで、テントに慌てた様子のブレンと何人かの団員が入ってきた。

彼らに目を向けると、スキルは苦々しい顔をした。

「なんだ、もう話が広まつたのか」

相変わらず情報の回りが早いな、と呴く。

おそらくレイピアをテントまで案内してきた男が団員達に事の次第を話したのだろう。

「お前が盗みに入ったところのお嬢様が追つて来たんだって！？」

お嬢様の行動にも驚いたものの、つまりはスキルが失敗を犯したことだ。それがブレンには信じられなかつた。

今まで一度もそんな失敗はなかつたというのに。

「ああ、ドジつたみたいだ。今これからどうするか考へていこうだ」

改めてスキルの口からドジつたという言葉を聞いて、ブレンは田の前が真つ暗になつた気がした。

「お嬢様を逃がしでもしたら絶対にスキルの正体をバラすだらうよ

吐き捨てるように言うブレン。

そんなことになつたらスキルは捕まり、サークルも彼ら自身も危うくなる。何よりブレンにはスキルが捕まるなどといふことが許せない。

貴族連中は傲慢で、自分勝手で弱いものに対してはビームでも残忍だ。ましてや相手が盗賊とあつては。

おそらく、生きて帰つて来れる可能性は低い。

そんなことは絶対に許せない。

「いつそのこと殺るか？」

ブレンの黒い瞳に危険な光が宿る。団員の中にざわめきが生まれるが、しかしどのスキルはゆっくりと首を振ることでその意見を否定する。

「じゃあ、どうするんだよー?」

スキルは団員達を順番に見ると、決意したように口を開いた。

「俺はこれからお嬢さんと賭けをしようと思つ」

「……それはもちろん、お前と俺達の身の安全を考えての選択だろうな?」

スキルが考へている賭けの内容はわからない。しかしスキルのことがからそれが仲間の安全を考えた上で一番の最良の手段なのだろう。

いつだってそうだ、態度が軽そうに見えるけれど誰よりも団員達のことを考へているのはこのスキルなのだ。

ブレンの言葉にスキルは一いつ瞬に満ちた笑顔を向けた。ブレンと団員達の不安をかき消すような笑顔を。

「もちろん。負けるような賭けをするつもりはないさ。いつもなたのは責任は俺にある。責任をとらせて欲しい」

ブレンは一瞬考え込み、それから口元に微笑を浮かべた。

「わかった、それでこそ俺達のリーダーだ。俺はスキルを信じる

気合を入れるようにしてバシンとスキルの背を叩いた。リグも団員達もそれに乗じるように大きく頷いた。

彼らは皆、スキルに絶対の信頼を置いているのだ。

リグがテントから出て行つた後、レイピアは1人だけになつた。何気なくテントの中を見渡してみる。ここは物置として使われているらしく、サークス用の衣装などがダンボールに入つていくつも積み上げられていた。先のすぼまつた天井には照明用のランプが取り付けられていて夜でも衣装の出し入れが行なえるように明るい光を放つている。

レイピアはなんとか縛られた手を自由にしようと懸戦苦闘してみる。しかし手を動かせば動かすほど繩が手にくい込んでくるため、すぐに諦めた。この後どうしようかと考えていたところでハツと思ひ出す。

「やうだ！」

ブーツの踵のところに小さい折りたたみナイフを仕込んでいたことに気づいた。冒険をしているといろいろとトラブルがつきものなので、何かあつたときのために用意しておいたのだ。それさえあれば繩を切ることができる。

今度は左足を器用に使って右足のブーツを脱がせようと懸戦苦闘する。

「ぐつ、このひ」

「……あとちよつとひ」

もう少しで脱げかかつたブーツだったが、いきなりテントの幕を開けられて驚き、勢いよく飛ばしてしまつた。飛んでいったブーツは見事にダンボールの中に突っ込んでしまい中の衣装が床に散らば

り落ちる。

「ちよつティントに入ってきたスキルと田が合い、レイピアはバツが悪そうに顔をしかめチッと舌打ちした。

一部始終を見ていたスキルは苦笑しながらブーツを拾い上げると、踵に仕込んであつたナイフを取り外して同じくティントに入ってきたリグに放り投げた。折りたたみ式のナイフはペーパーナイフのようなもので、人を傷つけられる鋭さはないのだが、リグはついあわてて取り落としてしまった。

ちらり、と責めるようにリグを見た後レイピアに視線を戻す。

「君は本当に貴族らしくないお嬢さんだね」

「お褒めの言葉をありがとう、ランスさん」

皮肉を込めた言葉を言つて、レイピアは口の端を笑みの形に歪めた。

こんな時ですら強気の態度を崩さないレイピアに苦笑してから、スキルは彼女の隣に椅子を置いて腰掛けた。

「君の処分が決まった」

その言葉にレイピアは表情を固くする。

「そう、殺すなら殺しなさいよっ！」

絶対に弱みを見せまいと噛み付くように言った。……心中では捕らえられたことへの不安と恐怖から心臓が破裂しそうなほどに早鐘をうついていたけれど。

「本人の希望ならそうして差し上げてもいいが、生憎君にはゲーム

に乗つてもうおつと思つてね

「ゲーム？」

いぶかしげに眉をひそめるレイピアにスキルは悪戯っぽい笑みを浮かべて頷いた。

この男は何をしようとしているんだろう、探るよつな田をスキルに向ける。しかし生憎彼の表情からは何も読み取ることができなかつた。いつもよつなにやにやとした笑いを浮かべているだけ。

スキルはふいに眞面目な顔つきになると、懐からしやらりとピングダイヤを取り出してレイピアの前に突き出した。田の前にあるのに手を縛られていて取り返せない悔しさに、ギリリと奥歯を噛みしめる。

「1ヶ月以内にこのダイヤを取り返すことができたら君を解放してやつてもいい。そして俺達を捕らえるなり好きにするといい」  
「は……？」

いきなりスキルが持ち出した提案にわけがわからずレイピアは困惑の声を出した。

「もし1ヶ月以内に取り返すことができなかつたら、君はこのダイヤを諦めて俺達のことも忘れるんだ。いいな？」

つまりピンクダイヤモンドをめぐつて勝負をしようとしているのだ。その声には否とは言わせぬ威圧感があつた。だが、勇気をふり絞つて問い合わせてみると。

「私がそれに乗らなくちゃいけない義務はないと思つけど？」

「君に選択の余地はない。断るつもりなら動物の檻にでも入れて一生幽閉するまでさ」

レイピアは言葉から感じられる冷たい響きに思わず背筋に寒気を覚える。今まで見ていたスキルからは想像できないほど何の感情もこもらない表情で見つめてくる。睨まれるよりもこちらの方がよりいつそう恐怖を感じる。

本気だ。

本能的にそう思い、カサカサに乾いてしまった唇を噛み締める。椅子に縛り付けられていなかつたら間違いなく、恐怖に後ずさつていただろう。

「あなたでも……捕まりたくないと思つわけ？」

「俺が捕まるのは構わないが仲間までもが俺のミスで捕まるのは困る」

認めたくはないが、盗賊達は盗賊達なりに仲間への気遣いがあるらしい。もし断るようなことをすればスキルは間違いなく言葉通りレイピアを幽閉するだろう。

『ぐぐりと息を飲んでさうに尋ねる。

「本当に……ダイヤを取り返せば解放してくれるの？」

「もちろん。約束しよう

約束という言葉にレイピアはパッとスキルから顔を背けた。みるとみるうちに怒りに顔を歪める。

「盗賊の約束なんて……どうまで信じられるかしら？」

じうせそんな約束守らないに決まつてー

吐き捨てるよつにして苛立つた口調で言った。突然のレイピアの豹変にスキルは戸惑うが、かまわず会話を続ける。

「確かに、お嬢さんにそう思われても仕方がないが、俺は約束は破らない」

そっぽを向いたまま何も答えようとしないレイピアにスキルはため息をつく。

「まいったな。だが、君にはどのみちゲームに乗ることしか選ぶ道はない。期間は明日から1ヶ月だ。リグ、縄を外してやれ」

それまで緊張と不安の入り混じった表情で黙つて見ていたリグがスキルの命令に従つて縄を外そうとしたが、急にテントの幕が開いたため動きを止めた。入り口の方に目を向ける。

スキルもそれを追うようにして視線を移動させる。

そして固まる。

そこからなんとも悲しげな表情を浮かべたスキルの母親のソアラが入ってきたのだった。

「は、母上!-?」

いつになく狼狽した様子でスキルは声を上げた。

しづしづとソアラはスキルの側に寄るとパチン、と彼の頬を打つ。それはスキルにとつてはたいしたダメージではなかつたが、心に与えるダメージとしては充分だつた。

呆然とするスキル。

ハンカチを取り出してハラハラと流れ落ちる涙を拭くソアラ。

「スキル。あなたはいつから女の子を縛り上げて楽しむような子になってしまったの?」

私はそんな子に育てた覚えありませんよ、と言わんばかりにおつとりとした口調ながらスキルに非難の声を上げた。

「『』誤解です！」

「女の子の心を射止めたいならこんなことをしては駄目。逆効果よ」「だからつ、違います！」

なにやらソアラは激しく誤解しているらしい。

慌てふためくスキルをよそにソアラはレイピアの元にしずしずと歩いて行き、事のなりゆきを畳然として見ていたレイピアの縄を解いた。

「『』みんなさいね、息子には良く言つて聞かせますから」

縄を解いたところソアラが顔を上げるとレイピアと田代が合つた。ふんわりとまるで日溜まりみたいな笑顔を浮かべているその顔、それは。

記憶の中にある女性と重なる。

「お……母様……ー？」

解放された手を口元に当たして、レイピアは絶句した。

ソアラは5年前に他界してしまった自分の母親と似ていた。

レイピアの母親は銀の髪の毛で、ソアラは金髪だったけれど、どことなくおつとりとした雰囲気と顔の造り、そして日溜まりみたいな笑顔がとても良く似ている。

母親ではない。

そう思いながらも、レイピアは自分の母親とソアラの姿を重ね合わせてしまった。

困惑した顔で小首を傾げるソアラにレイピアはたまらず抱きついた。

「お母様　　っ！　お母様、お母様っ！」

ソアラの胸に顔をうずめたまま、レイピアは堪えていたものを吐き出すようにして子供みたいにわーっと声を上げて泣き出してしまった。

スキルもリグもソアラも突然のことによりとしてその光景を見ていた。

\* \* \*

レイピアはそのままソアラのテントに連れて来られた。ここから先は女の子だけの話があるので、とスキルとリグは追い払われテントにはレイピアとソアラの2人だけになつた。

ひくつひくつとしゃくりあげるレイピアの頭をソアラはやさしく撫でた。

ソアラはやがてのんびりした足取りで簡易コンロに向かっていき、ミルクを沸かした。沸いたミルクをカップにコポコポと注いでレイピアに手渡す。

温かいミルクに心を溶かされるように徐々にレイピアは落ち着いていった。その間ソアラは黙つて静かに彼女の側にいた。

レイピアは気持ちがすっかりと落ち着いた頃に、自分がここに来た訳を一つ一つソアラに語り始めた。領主の娘であること。スキルを追つてここまで來たこと。

そしてソアラが母親と似ていることも語った。

ソアラはそのたびに額をながら真剣に話を聞いた。

彼女も盗賊の仲間だ、けれどレイピアは自分でも驚くほど彼女に對して素直になっていた。

「それで、レイピアちゃんはスキルとゲームをするの？」

ソアラの静かな問いかけにレイピアは表情を暗くしてさつと顔を伏せた。

「私、彼の言ひ約束なんて信じられないんです」

「私達が……盗賊だから？」

悲しそうな顔をするソアラにレイピアは静かに首を横に振った。

「違います。そういうじゃないけど……」

その頑なな態度にソアラは向やけり察したようだった。

「レイピアちゃんは昔、約束でとても辛い思いをしたのね」

その言葉にレイピアはハッとした顔を上げる。

「どうしてそれを……？」

ソアラは一瞬ためらつた後、「女ですもの」と短く答えた。レイピアに昔、何かあったことに気づきながらもソアラはその事を聞いてくることはなかった。

それはソアラのやせしだつた。

そしてレイピアにはそれがたまらず嬉しかった。

「息子が決めたことだから、私にはレイピアちゃんにダイヤを返し

てあげることができないけれど……でも、できる限りお手伝いするわ」

がんばってダイヤを取り戻しましょうね、と言つてソアラは微笑んだ。

彼女はわかつているのだろうか……。もしレイピアがゲームに勝つたらスキルを捕らえるかもしないといふことを。それを承知で応援してくれるというのだろうか。

「息子は約束を破るようなことはしないわ。だからお願ひ、信じてあげて」

母親そつくりのソアラに言われてしまつてはレイピアは頷くしかなかつた。

ソアラを信じてもいいと思つた。

そして彼女の言つた言葉も信じてみよつと思い始めた。

スキルの約束を信じてもいいのかしら?

……信じても大丈夫なのかしら?

不安はいくつもあつたけれどゲームに乗ることを決意した。それ以外、選ぶ道はなさそだから。

## 第5章　長い1カ月のはじまり1

目覚めたとき、視界を覆っていたのは青色の天井。その見慣れぬ光景にレイピアは違和感を感じたが、すぐに昨日の出来事を思い出した。

そういえば盗賊を追つて来ただつけ……。

慣れない枕のせいで朝早くに目が覚めてしまった。乱れてしまつた髪の毛を手で撫で付けて辺りを見わたす。

1ヶ月間、レイピアの寝場所としてテントが与えられた。この青色のテントはそこそこ広く、ベッドを置いてもまだ余裕があった。もつとも荷物など持つてきていらないレイピアにとつてはベッドさえあればそれだけで充分だったが。

目覚めてしまったものの、この後どうしようかと思い悩んだ。テントの外に一步踏み出したら盗賊達が其処此処にいるわけだから。

スキルの正体を知つてここまで追つてきたレイピアが彼らに歓迎されるとは思い難い。むしろ殺されてしまうのでは、という不安さえ募る。

我ながら無謀なことをしたな、と改めて思い少しだけ後悔する。せめて屋敷の人に行き先だけでも伝えておけばよかつた。そうすれば少しは状況が良くなつていたかもしれない。

うーん、と唸りながら頬杖をついて考えていると急にテントの幕が開けられた。驚いてそちらを向くと黒髪の少女が立つていた。年齢はレイピアよりも2つぐらい年下に見える。

肩の辺りまで伸ばした黒曜石のような髪の毛は艶やかでウェーブがかかっている。そして唇には真っ赤なルージュ。けれど下品さが

少しも感じられないのは愛らしい顔立ちのおかげだろう。

レイピアが月のような美しさだとしたら彼女の美しさは太陽のようだ。

かわいい、と素直にレイピアは思った。

黒髪の少女は何も言わずテントに入り、レイピアの側に寄つていくと全身を踏みするようにして眺めた。どことなく敵意を感じさせる視線が肌につきかかる。

「な、なによー!?

不躾な視線にむつとしたレイピアが口を尖らせる。  
なぜ初めて会う人間にこんな視線を向けられなくてはならないのか……。

「なんだ、大したことないじゃん」

その少女はくりくりとした大きな瞳を細めて、せせら笑いつぶにして言い放った。

あまりにもその愛らしさに顔と声から想像もつかないような言葉遣いとその内容にレイピアは畠然として、口をポカンと開けた。頭が理解するのを拒否している。

「なつ、なつ……」

声を出せずに口をパクパクとさせるレイピアになおも少女は言葉を続ける。

「スキルとゲームするらしいけど、あなたが勝てるわけじゃん。あたし達のリーダーなのよ?」

音をたてて椅子に腰かけると煙草をふかし始めた。  
あまりにもその少女に似合わぬすがりの姿にレイピアは呆然とする  
しかなかつた。

頭が理解するのを拒否しているのかもしれない。こんなかわいらしい娘がこんなことを言つなんて、と。

それはスキル達がレイピアに対して思つていることと一緒になのだが、生憎自分のことはわからない。

「もしあんたがダイヤを取り返したとしても絶対にスキルを捕まえるようなことはさせないからー！」

そこでレイピアは納得した。この少女はスキルが好きで、だからこそレイピアが邪魔なのだと。

だが、レイピアもまたここまで言われて黙つているようなおとなしい娘ではなかつた。

「私とスキルのゲームでしょーっ！　あなたが口出しする権利はないと思つけど」

レイピアは少女から煙草をひつたくると床に落としてグリグリと踏みつけた。少女は何するのよー？？という顔をして、マスカットのような緑色の瞳でレイピアを睨みつけた。

2人の間に見えない火花が音を立ててあがる。

「絶対にあんたみたいな女追い出してやるんだからー！」

椅子を蹴飛ばすと少女はベートと舌を出してテントから出て行つた。

嵐のような少女だ。

一方、テントに一人残されたレイピアはメラメラと闘志を燃やした。根が負けず嫌いの性格をしているため、黒髪の少女の「スキルに勝てるわけないじゃん」という言葉に憤慨した。

絶対に勝つてやる！

そうとなつたらこうしてはいられない。一刻も早くスキルからダイヤを奪い返さなくては。

レイピアは盗賊連中のことをあれこれと気にするのをやめにして、ダイヤのことだけに集中しようと心に決めた。認めたくないが、少女の言葉が後押ししてくれたのは確かだ。彼女に感謝しつつレイピアはテントの外へ出た。

\* \* \*

テントの外に出ると、何人かの団員達に会つた。スキルを追つてきた女という噂はすでに広まっているらしく、その後もレイピアの姿を見ようと何人も集まってきた。彼らは話かけてくることもなければ、面と向かって悪口を言うわけでもない。ただ遠巻きにレイピアを見ているだけだつた。スキルをまんまと欺いてここまで追つてくることができたお嬢様とはどんな人物だろう、そんな視線だつた。しかしそこにある空気は好意的とは決して言えない冷たいものに感じた。

当然よね、私はスキルの敵なんだから。

そう割り切ることにした。

それでも少しだけちくちくと胸は痛んだが、たいして気にしないふりをしてスキルの姿を探した。

だが、同じようなテントがいくつも並んでいるため、彼がどこに居るのか全くわからなかつた。結果ぐるぐると同じような場所を歩くことになつてしまつた。

「そこそとテント街を嗅ぎまわつているとでも思われているのだ

るうか、団員達の視線も痛い。

そこに朝食をのせた盆を片手にしたリグの姿を発見した。リグの方もレイピアの姿を見るなり探しましたよ、と言い朝食をのせた盆を突き出した。

「これ……私の？」

肯定の印にリグはにこっと微笑んだ。

「でも、私が食べてしまつていいの……？」

「もちろんです。それとも何も食べないまま1ヶ月も若君とダイヤの争奪戦する気ですか？」

1日2日でスキルからダイヤを奪えるはずがない、そう言われていうようでなんとなくおもしろくなかったが好意は素直に受け取ることにした。

お礼を言つて盆を受け取つた。盆の上にはハムを挟んだサンデイツチヒオレンジジユースがのせられている。

レイピアはテントに戻ることなくその場でパクつく。

リグは目を丸くした。貴族の女性が！？と驚いているのかもしない。

「行儀悪くて」「めんね、でも今は時間が惜しいから。あなたは食べたの？」

「ええ、は、はい」

「そう、それじゃあこの後スキルの居場所とかテントの案内とかしてくれる？　まだよく場所がわからなくなつて

今のところこのサークス団の中でレイピアに好意的なのはリグとソアラだけなので、彼に道案内を頼むことにした。

レイピアはストローを挿したオレンジジュースを勢いよく飲み干す。リグはその様子に驚き、苦笑しながら頷いた。

## 第5章　長い1カ月のはじまり②

「それじゃあまずはこのテント街から案内しましちう」

食事を終えるとすぐに案内をしてもらつことに。歩きながらリグはテントの一つ一つを紹介していく。物置き場に使われる所とか、団員の寝泊りしているテントとか。  
そこでレイピアはふと気がつく。

「団員つて3人で1つのテントを使っているの？」

どのテントも皆3人から4人で1つのテントを使つていて、1人でテントを占領している者などいなかつた。

「ええ、そうですよ。若君は1人で使つていますが」「私も1人で使つているわ。何だか悪いわ……。私は歓迎されないのに」

「若君が決めたことですから、文句を言つ人なんていませんよ。あなたが気にする必要はありません」

「スキルの命令は絶対なの？」

「ええ。もつとも命令でなくとも、みんな若君のことを心から慕つてますから文句を言つ人なんていないんです」

てつきり次期団長というだけで団員が命令に従つていて、ただけにレイピアは意外だ、と思つた。

人柄で団員の信頼を集めているということか。そしてリグもまたスキルを慕つてゐる1人なのだろう。

それなのになぜリグは自分に対してやさしくしてくれるのだろう

か……？私はスキルの敵なのに。

レイピアは不思議で仕方なかつたが、リグがレイピアに対して好意的なにはちゃんと理由があつた。お嬢様なのにそれを気取らないところとか、スキルに対して堂々と悪態をつくところとか、……そんなところを好ましく思つてゐるからである。

テント街を奥まで進んでいくと2人は今までよりも一回り大きい2つのテントにたどり着いた。他のシンプルなテントに比べてこの2つのテントは色合いもカラフルだった。

「」の右にあるテントが団長とソアラ様のものです。そして左のテントが若君のものです

右のテントは昨夜レイピアも訪れていたので知つていた。リグは左のテントの前に立つと、声を掛けた。しかし中からの反応はなく、どうやらスキルはどうかへ出ているらしき。

「若君はいないみたいですね。まあ、そのうち会えるでしょう」

肩をすくめてリグは次の場所へ向けて歩き出した。レイピアも今すぐ会わなくてはならないという用事はなかつたのでたいして気にしなかつた。

次に2人が訪れたのは獣舎と呼ばれる動物達の檻だつた。

テント街のように動物達の檻は規則正しく一列に並べられていた。中には象やライオンなどレイピアが初めて見る動物達もいたし、犬や猫など見慣れた動物達もいた。しかし感動するよりも先に動物達

の匂いと鳴き声に顔をしかめた。

この辺りには風を防ぐ木も立っていないため風が吹くたび臭いが漂ってきた。獣舎とテント街が離れて設置されている理由の一つにこのことが挙げられるのだろう。

「動物達の檻にはあまり近づかないでくださいね」

リグのその言葉に不思議に思ったレイピアは小首を傾げる。

「なぜかしら?」

「動物達は繊細なんです。調教師以外の知らない人が来ると人見知りしますから。勝手に餌を上げたり、もちろん触ろうとして檻の中に手を入れたりしないで下さい。手を食いちぎられても知りませんよ」

釘を刺すようにして真剣な表情でリグは言った。

見るからに恐そうなライオンと目が合ひ、レイピアはぶんぶんと首を縦にふった。

「ええ、食いちぎられるのはごめんだわ。餌になんてなりたくないわね」

その答えにリグは満足げに頷いた。

ここに来ることはもうないだろう。そう思いレイピアはそれ以上先に進むことを止めて、次の場所に案内してもらうこととした。

\* \* \*

最後に2人が向かったのはステージである巨大なテントだつた。テントには大きく太陽の絵が描かれていて、ポツカリと口を開ける

ようにして入り口がある。その周りには赤、ピンク、黄色など色とりどりの風船がくくりつけられていて、何ともかわいらしい。

リグの言葉によると、現実と夢の世界を繋ぐという意味で入り口には特に念を入れて飾り付けが施されるらしいのだ。

「昼間から公演があるので今はリハーサルをしています。ステージに案内することはできませんが、観客席の方へ行つてみましょう」「リグはリハーサルに参加しないの？」

「私は動物の飼育担当ですから」

リグに案内されてテントに入る。

テントの中は鉄の支柱が所々に立てられているものの少しも圧迫感はなく、広く感じられた。ステージを囲むようにして馬蹄型に置かれた観客席は下から上にかけて階段状にせりあがっているため、とても見やすい造りになっている。

ステージの方に顔を向けると10人くらい人が集まっているのが目についた。その中にスキルの姿も見つける。取り込み中のようにつたので、レイピアとリグは観客席の1つに腰を下ろすことにした。

レイピアは団員の中に今朝の黒髪の少女も発見し、ハッとした。会話は聞こえないが、黒髪の少女はにこにこと誰から見ても愛らしい笑顔を浮かべて団員達に……特にスキルに愛想良くしていた。まるで先程とは猫を被つたように別人である。

「あっ、あの子！ ねえリグ、あの子の名前は？」

黒髪の少女を指差し、リグの服の裾を引っ張つて視線を向けさせた。

「シャンナリーですよ。あの子が何か？」

レイピアのただならぬ様子にリグが首を傾げて尋ねてきたが、すぐさま何でもないと否定した。

シャンナリーといつ名前の響きをビックで聞いたよつな氣がして、レイピアはしばらく考え込んだ。シャンナリー、シャンナリーと口中で反芻してみる。そしてハツと氣づく。

パーティー会場で「私にはどんな名前が似合います?」と尋ねたレイピアにランスと名乗っていた時のスキルが「シャンナリーといつ名前はどうでしょ」「う」と答えたのだった。そしてその後に由来を尋ねたら飼っている猫の名前だと言つていた。それを思い出してふと吹き出した。

黒髪の少女のステージ上での見事なまでの猫の被りよつ。まさこ大きな猫だ。

おそらくスキルは彼女の本性を知らないのだつ、あの時は適当に猫の名前だと言つたにしてもいい例えだと思つた。

けらけらと突然笑いだしたレイピアにひたすらわけもわからず首を傾げるリグだった。

「スキルはサークัสでどんなことをしているの?」

すでにリハーサルは終わっていたらしく、レイピア達が入つたときにはスキル達は最後の打ち合わせをしていた。

「若君は空中アクロバットといつ演目を行なつています  
「空中あぐらばつと?」

聞きなれない言葉にレイピアは首を傾げた。

そもそもレイピアはサークัสというものの自体見たことがなかつた

から、空中アクロバットがどんなものか想像もつかなかつた。それどころか空中ブランコや綱渡りすら知らない。幼い頃は深窓の令嬢として育てられ、つい最近までは冒険者として忙しく活動をしていたのだ。じつは、いつたサークルなどの娯楽に興じることがなかつたため、どんなものか知らないのも無理ないことだつた。

「レイピアさんもお昼から行なうサークルを御覧になつてはいかがです？」

リグの言葉にレイピアは「ええ……そうね」と曖昧に答えるだけだつた。

正直なところレイピアには盜賊達がやる芸なんて……と軽蔑している気持ちがあるのだ。だから見たいとは少しも思わない。それよりもスキルがどこかに隠したかもしれないダイヤを探す気持ちの方がはるかに高かつた。

早くダイヤを取り返して、さつやとここから逃げ出すのだ。

曖昧なレイピアの返事からそれを察したリグもそれ以上深く勧めようとはしなかつた。

ようやく打ち合わせが終わつたらしく、レイピアの姿に気がついたスキルはステージと観客席の間に張り巡られた柵をひょいと乗り越えて近くにやってきた。

「おはよー、ランスさん」

レイピアはわざとらしくにこやかに笑いスキルと対峙するようこそしてさつと椅子から立ち上がつた。またしても「ランス」という言葉に力を込めて言つたレイピアにスキルは苦笑した。

レイピアは彼の名前を知っていたものの、今まで正式に彼の口から名乗られることがなかったので、わざと皮肉たっぷりに「ランス」と呼ぶよつこしている。

「おはよひ、猫被りなお嬢さん。申し遅れましたが私の名前はスキルと申します」

わざとらしくくらいにスキルは恭しくお辞儀をしてみせた。  
レイピアは口の端が引きつりかけたが気づかれないようにつん、  
とわっぽを向く。

「あら、存じてましたわ。だいたい猫被りはお互い様じやあります  
ん？ パーティー会場で会ったランスさんと今のスキルさんは別人  
ですわよつ」

皮肉をたっぷりと込めてわざとらしく丁寧な口調でレイピアは返  
した。

スキルはおどけるような仕草でどこから取り出したのか、皿と口  
の部分にしか穴の開いていない真っ白な仮面を取り出すとそれを被  
つてみせた。

「いえいえ、どちらも私の本当の姿でござります。私にはまるでこ  
の仮面をつけたようにステージ用の顔と普段用の顔が存在するので  
す。貴女の猫被りとは違いますよ」

「猫被りですつて…？」

カツとなつて青い目で睨みつけたレイピアに、くつくつとスキル  
は体を折り曲げて笑つた。明らかにレイピアがムキになつて怒つて  
いるのを楽しんでいる。

馬鹿にして！

完全にレイピアの方がスキルにからかわれているのがわかつたので、それがおもしろくなかった。

「何で口達者な盗賊なのだらうー。」

「母上から聞いたのだがゲームを受けてくれるようだね。それで朝から会いに来てくれたのかな?」

「被つていた仮面を放り投げて、ようやく真面目な顔になつたスクリが尋ねてくる。

レイピアはにや、と口の端を上げて笑うとスキルを指し、大きく息を吸い込んでステージの方まで響き渡るような大声を出した。

「やうよ、私は宣戦布告を言いに来たの! 絶対にあんたからピンクダイヤを取り返してみせるわ! それでもつてあんた達みたいな盗賊を全員とつ捕まえて煮るなり焼くなり好きにさせてもらうから!」

レイピアはスキルだけでなく、ステージの方にいる団員兼盗賊にまで必ず捕まえてやると宣戦布告をしたのだった。

言いたいことを言ってスッキリしたレイピアはくるりと背を向けると、唚然としているリグを置いてスタスターと出て行ってしまった。唚然としているのはリグだけでなく、スキルもステージの方にいる団員達も一緒だった。口をポカンと空けて目を丸くしている。

どの顔にも貴族のお嬢様が怒鳴り散らして宣戦布告! ? という困惑の色が浮かんでいる。

いち早く立ち直ったスキルはふつと吹き出すと体を屈めて笑い続けた。

## 第5章　長い1カ月のはじまり③

ブレンは苛立ちを覚えていた。もちろんいつまでもなくレイピアに對してだ。彼もスキルと同じようにリハーサルのためにステージにいたのでレイピアの宣戦布告をバツチリと聞いていた。

（宣言布告だと！？　俺達を煮るなり焼くなり好きにさせてもいいからだと。ふざけやがつて）

あの小娘がゲームに勝つて俺達もスキルも捕まえるつていうのか！？

〔冗談じゃねえ！〕

ブレンの苛立ちはピークを迎えて、木に拳を打ちこんだ。鈍く音をたてて打った部分が少しだけめり込む。

確かにブレンはレイピアを見て口笛を吹きたくなるような美人だと思った。けれどそれはスキルに害をなす者ではない場合だ。

レイピアの存在は危険だ。彼女がスキルの正体を知っている限り、スキルには常に捕まるかもしれないという危険性がつきまとつ。

スキルはゲームに勝つ自信があると言っていた。もちろんブレンも信じている。しかし万が一といふこともある……。

（あの女を追い出すことができればな……）

スキルに知られることなく邪魔な小娘を追い出す方法はないかと、うるうる自分のテント内を考えながら歩き回る。

同じテントの2人の団員はブレンのいつもくせにたいして迷惑がる様子もなく自主トレーニングを積んでいる。

その時いきなりシャツとテントの幕が開けられ、ひょこりと黒髪の少女が顔を出した。シャンナリーだ。シャンナリーはテントを見回すが、男だけが3人生活している空間のあまりの荒れ果てようじ顔をしかめると、ブレンに向けて手招きした。

どうやらテントには入つて来たくないらしい。

仕方なく、ブレンは外へ出る。

「なんだ、何が用か？」

ブレンはシャンナリーのサークัส団としての腕も、黒のピエロ団としての盗賊の腕も認めていて、仲間として信頼を置いていた。シャンナリーがスキルに好意を寄せているのはもちろん、彼の前で猫を被っていることも知っているが、あえてスキルに言つようなことはしなかつた。そこらへんは勝手やりな、という感じで。リグのようにな人の恋愛のことについて口を挟むような性分を持ち合はせていいないのである。

ところがシャンナリーはたびたびやつかいな問題を押し付けてくることがあって、ブレンはそのことで彼女が少し苦手だつたりする。

「ブレン、お願ひがあるの」

かわいらしく小首を傾げてお願いのポーズを取るシャンナリー。彼女の本性さえ知らなければ天使のように愛らしい仕草だと思うかもしれないが、ブレンにとつてまさに小悪魔的としか言いようがない。

「ああ、またか……とブレンは心の中で呟く。

シャンナリーが言つお願いはいつだって口クなことがない。そんなブレンの心中を無視して、シャンナリーは言葉を続ける。

「あのレイピアって女を追い出したいの！」

その言葉にブレンは初めてシャンナリーの意見に共感を覚えた。  
同時にムクムクとからかい心が芽生える。

「はは～ん、お前さてはあのお嬢様に嫉妬してんや？」

図星だつたらしく、シャンナリーは瞳をギラリと光らせてブレンを睨みつけた。まるで射殺しそうなその視線にお～こわ、と肩をすくめるブレン。

「ま、安心しろよ。スキルはあのお嬢様に好意を寄せて1ヶ月間も側に置くわけじゃない」

「そんなの当たり前じやない！　でも……っ」

「それでもスキルの側にいられるのは迷惑つてか。女つてなんでもうワガママかねえ」

「あんたにはわかんないのよつ。……あたしだつてスキルの心さえ手に入れてれば……こんな不安な思いしないわ！」

体を小刻みに震わせて俯いたシャンナリー。

スキルは親友のブレンから見ても風のような奴で、例えどんな魅力的な言葉を持つても彼の心を一ヶ所に止めておくことなんてできなかつた。女性関係においても同様で彼が誰か1人の女性に深く心を縛られるところなど見たことがなかつた。

シャンナリーがそのことで不安になる気持ちは痛いくらいに伝わつてきた。

さすがに罪悪感が生まれ、ブレンは謝罪をする。

「わ、悪かつた。さつきはあんないと言つたけど俺もあんたの意見に賛成だ。あの女を追い出したいと思つてる」

シャンナリーはその言葉に目を輝かせて、パッと顔を上げた。

「本当！？　じゃあ協力してくれる？」

ブレンはわかつたわかつたと頷いた。けれど頷いてしまってから具体的な方法を教えて口をひくつかせた。

シャンナリーが考えたレイピアを追い出す方法とはどれもが世間一般で「イジメ」と言われているようなものばかりだった。例えば本人を前に悪口を言うとか、水をぶっかけるとか、靴に画鋲を……とか。ブレンが考へてもいなかつたような陰険で悪質極まりない内容のものばかりだった。

よくそんなに考えられるもんだ。

女つて恐いな……とブレンはしみじみ思つた。

\* \* \*

一方スキルのテントでは。

リグがスキルにお説教（？）をしていた。

「若君……。あなたは何だつてそう人を挑発するのが好きなんですか？」

ふーっと深いため息を吐いてリグは額を押さえた。  
まぎれもなくリグの言つ「人」とはレイピアのことを差している。

「何のことだ？」

熱々のコーヒーを片手にスキルはわざとらしく首を傾げた。

「また、とほけて。昨日のことといい、わたくしのことといい言葉の端々にからかいと皮肉がたっぷり入ってましたよ。めずらしいですね、あなたが女性にそんな態度をとるなんて。内心煮えくりかえつているからでしょ?」

スキルはリグの言葉に心外だ、とばかりに眉をひそめた。

「まさか。お嬢さんの行動に驚きはしても煮えくりかえってなどいないぞ。お前の勘違いだろ?」

それは半分事実だった。最初は腹立たしく思つたものの、今は怒りを持つどころかむしろ興味を覚えていたからだ。彼の周りにはあんなにも無謀すぎるほど行動をする女性などいなかつたから。けれどそれは恋とかそういう類のものではない。純粹な興味……だ。

「そうですかねえ」

リグはまだ疑わしそうな顔つきでスキルを見る。

「そうや。お前だつてむさくるしい男に追い掛け回されるよりも美人なお嬢さんに追いかけられる方が嬉しいだろ? 思わず抱きしまで、キスしたくなるね」

ふふん、と笑いながら言うスキルの本気だか冗談だかわからない言葉に、リグは大きくため息をつく。

「若君……。最初に言つておきますがレイピアさん」手を出してはいけませんよ」

リグの言葉にスキルはおもじろそつに目を見開いた。

「なんだ、惚れたか?」

「はっ!? な、なにを言つてるんです、違いますよ。拉致してい  
る上にあなたが手を出したりしたら縛り首どこひじやすまないから  
言つてるんです!」

リグは両手で首を絞めるジェスチャーをしてみせた。

とたんにスキルはつまらなそうに顔をしかめた。てっきりリグが  
恋にめざめてそんなことを言い出したのかと思ったからだ。今まで  
スキルが見ている限りリグにはそういう浮いた話の一つも見当た  
らなかつたから。

「なんだ、そんなことか」

「まったくもう、だいたい私との方では年齢も身分も違います  
ですよ」

ばかりしいと言わんばかりに肩をすくめた。

リグの年齢は26歳、レイピアの年齢は22歳。わずか4歳しか  
違わない。そのことはたいして問題ではないのだろうが、リグとレ  
イピアではあまりに身分が違いました。片や領主の娘、片や盗賊の  
一味だから。

「そんなことたいした問題ではないだろ? 要は本人同士が愛し合  
つているかどうかだ」

にやりと笑つてスキルはカップに残っていたコーヒーを一気に飲  
み干した。

## 第5章　長い1カ月のはじまり4

太陽が真上に昇った頃、辺りに軽快な音楽が流れ始めサークスの開幕を告げる花火が打ち上げられた。それと共にたくさんの風船が一斉に空中に舞い上がった。赤、青、黄色、白、オレンジの色とりどりの風船は風に流されてふわりふわりと遙かなる天上をめざして飛んでいく。レイピアはそれを視界の片隅に捕らえつつ、ステージのあるテントとは逆方向に走り出した。

リグにサークスを見てはどうかと勧められたものの、そんな気にはなれなかつた。軽快な音楽と楽しそうな雰囲気に心が躍らなかつたと言えば嘘になる。親子連れや恋人同士の嬉しそうな顔を見るたびにサークスとはどんなものかしら？ そんなに楽しいものなのかな？ という思いが胸に流れ込んだ。

「ううん、わざわざ盗賊達のサークスを見なくたっていつか違うサークスを見ればいい。」

レイピアはそう思うことによつて、もやもやとした気持ちを振り払つた。

それよりも今はダイヤを探すことの方が先だ。

レイピアが目指したのはスキルのテントだった。

彼は今、ステージに上がるためテントにはいない。まさかステージ上にまでダイヤを持っていくわけにはいかないだろうから、どこかに隠してある可能性が高かつた。そしてその可能性はやはりスキルのテントだとレイピアは考えている。

団員のほとんどはステージに詰めているので、テント街には人影が見当たらない。レイピアにはそれがありがたかつた。

朝の宣戦布告をしてからというもの彼女に対する風当たりがいつそう厳しくなつたからだ。団員の視線がいつも冷たくなつたのだ。団員のみんなはスキルを心から慕つているというリグの意見を聞いていたから覚悟はしていたけれど、やはり冷たい視線があるよりもない方が動きやすかつた。

スキルのテントに着くと辺りを確認してからすばやく忍び込む。中には誰もおらず、きちんと整理された荷物と簡易ベッドが最初にレイピアの目に飛び込んだ。注意深くテント内を見回すと、天井付近にワイヤーが張りめぐらされてそこに衣装がいくつも掛けられていて、他にも棚の上にコーヒーセットや簡易コンロがあった。全体的に置かれているものが少なくて簡素なイメージを持った。すぐにまた別の地へ移動するため物をあまり置かないようにしているのかもしれない。

まずは棚から探すこととした。上から順に引き出しを開けて行くが、あまり物が入つていなかつた。そのためレイピアは次に荷物、衣装のポケット、目につくところを端から順に探して行つた。

2時間程探し回つたところで、そろそろサークัสの終わる時間だと気がつきあきらめて自分のテントに戻ることにした。

それから夕方の公演の時間もレイピアはスキルのテント内をうろと探し回つたものの、結局見つかることはなかつた。

\* \* \*

深夜。

レイピアは布団に横にしていた体をむくりと起こすと、上着を羽織つて外へ出た。この時期は日中は暖かいが夜になると冷え込むため、ぶるると身震いをした。このテントが建てられている空き地は街の外にあることと風を防ぐ木々がないことも重なり夜間は特に

冷え込んだ。

辺りを見渡したが、人影はない。団員達は朝が早かつたため、夜も比較的寝静まるのが早かつた。

まだ起きている人がいるのか、とこぶじろテントから明かりが漏れている場所もあつたが、真っ暗に近い状態で月明かりだけが頼りだ。

昼間の賑やかな雰囲気とは異なつた顔を見せる夜のテント街はある種幻想的であると言えた。

しばしめためらつたが、覚悟を決めると忍び足でスキルのテントに向かつた。

もちろん目的はダイヤ奪還だ。いくらスキルが素早く隙が見つかなくとも、寝ているときなら懐からダイヤを抜き取ることができるかもしれないと考えたのである。

昼と同じようにスキルのテントの前に立つと、辺りを注意深く見回してからすばやく入り込んだ。

暗闇に目が慣れてきたため、ぼんやりとベッドの上に眠るスキルの姿が見える。規則正しく聞こえる寝息に命わせて忍び足で近づいて行く。

サラサラの髪の毛を投げ出して眠っているスキルが視界に入った。いつものからかうような憎たらしくてたまらない瞳も閉じられている。眠っているときは無防備なのね、とそんなことを考える。

……馬鹿みたい、何を考えてるの。

軽く頭を振つて馬鹿馬鹿しい考えを振り払つとスキルの懐に手を伸ばした。

ところが。

眠っていたはずのスキルがいきなりパチリと目を開けた。スキルは口元を笑いの形に歪めた後、たきやくよつてレイピアの耳元で呟く。

「夜這い？」

「さやあ！？」

その突然耳にかかった低い声に驚き、悲鳴を上げたレイピアは一メートルくらい飛びすぎた。

その様子にスキルは寝転がった姿勢のままにやせと悪戯っぽい笑みを見せる。明らかに今さつき田覓めたとは言い難い。まるでレイピアがテントに入つて来たときから氣がついていたような

そんな様子である。

「た、狸寝入りしてたわね！？」

破裂しそうなほど早鐘をうつ心臓を押さえたレイピアは抗議の声を上げた。

対するスキルは体を起こし、涼やかな顔をして心外だな、とばかりに肩をすくめる。

「たつた今起きたと」ひるむ

「うそばっかり！　ずっと起きていたくせに」

レイピアは顔を真っ赤にしながら怒鳴つて、ベッドに詰め寄る。

「お探しのものはこれ？」

しゃらりと音を立ててスキルは右手に持つていたピンクダイヤを掲げた。あつと息を呑んでレイピアは手を伸ばすが、むなしく空を切つた。その手を逆にスキルに掴まれてしまい、いとも簡単にベッドに組み敷かれてしまった。

「手癖の悪いお嬢さんだね、お仕置きが必要かな？」

スキルの顔を間近に感じてレイピアは慌てふためいた。恐いくらいに真面目なスキルと田代が合づ。

「ちよつ……、離しなさいよ。」

半ば悲鳴に近い恐怖に引きつった声を上げる。

逃げ出そうにも華奢なレイピアには、覆い被さるようなのしかかつてきたスキルを押し返すだけの力がなかつた。捕らえられた両手はスキルの右手によつて難なく押さえ込まれてしまつて、外れることがない。沈み込んだベッドは逃げ道を与えてはくれない。やわらかいはずのベッドなのに、ひどく背中に冷たく固く感じられた。

スカートの裾をたくし上げられ、肌に触れるスキルの手の冷たさにビクリと体を震わせる。

「やだつ！ 何するの！？」

羞恥心に顔を真つ赤にして叫んだ。太股の辺りを探るようにして撫でられレイピアはいやいやと首を振つて顔を背けた。

いやだ、こんなのは嫌！

今にも泣き出してしまいそうに田代を潤ませたレイピアを見つめて、スキルは口元に笑みを浮かべるとからかうようにして耳元で囁いた。

「傷はふさがつたみたいだな」

その言葉と同時にパツとレイピアの両手を解放すると、スキルは体を起こしてベッドの端に腰掛けた。

ゆつたりと足を組んでから、再び意地悪くにやにやとした笑みをレイピアに向けた。

「はつ？ な……！」

ベッドに横たわったままの体勢で体を固くしていたレイピアはわけがわからずにはくぱくと口を動かすことしかできなかつた。

一体どういうことなのか。

「俺は傷の具合を確かめただけなんだけど。それとも違つことを期待した？」

レイピアはハツとして右の太股についた傷の存在を思い出した。パーティーの際にスキルとやりあつた時につけた傷。

けれど先ほどの行為は絶対にわざとやつたとしか思えない。

何ていう悪質ないだずら！

レイピアが慌てふためく様子を見ておもしろがつていたのだと思うと先程の恐怖はどこかへ吹き飛び、代わりに怒りがこみあげてきた。怒りに震えながら思いつきリスクの顎を蹴り上げた。

「バカッ、最低！ ドスケベ

！」

怒りにまかせてその顎を3回くらいい蹴り上げたところでスキルにひょいと足首を掴まれる。

「夜更けに男の寝所に訪れるお嬢さんの方が悪い。今日は見逃すけど次に来たら襲つていいものと見なすぞ？」

心底楽しそうに言うスキル。

本気とも冗談とも取れないその言葉に、レイピアは頭の中を真つ

由にして何も言い返せないでいた。

「それとも」のまま続ける？」

スキルの脣が足首に降りてきそうになつて、レイピアは慌ててスキルを突き飛ばすと脱兎のよとくベッドから飛び出した。

「バカバカバカバカ変態っ！　2度と来るもんですかっ！」

手元にあつたコーヒーカップをスキルに投げつけて、真っ赤な顔をしてテントから逃げ出した。乱れた服と髪の毛すら直さずに。今のレイピアにはそんなことをしている心の余裕が少しもなかつた。

背中から聞こえてくるスキルの押し殺した笑い声がなんとも腹立たしかつた。

翌朝。

いつもなら気持ちの良い朝だった。テントの中に差し込む日差しはやわらかかったしこつまでも眠っていたくなるくらいに気温は温かかった。

しかし

。

気分はこの上ないくらい最悪だつた。自然との気持ちのいい朝ですら苛立たしいものに思えてくる。

レイピアはテントにあらかじめ取りつけられていた銀の鏡を眺めて盛大にため息をついた。目の下に大きな隈ができている。

理由は考えるまでもなかつた。

昨日あれから悔しくて、憤慨して朝方まで眠れなかつたせいだ。よつやく寝付いたかと思うと、悔しさで目が覚める。その繰り返しで結局ほとんど眠つていない。

考えてみるとここに来てからというのも、まだ一度もスキルにぎやふんと言わせていないばかりか、反対にレイピアの方がやられっぱなしなのだ。

「ぐ・や・し

……」

昨日のことを思い出してしまい、腹が立つて頭をバリバリと掻きむしる。

ダイヤを奪い返すことはできないにしても、今日こそは……あの不遜で悪辣なスキルに一矢報いてやりたい。

「顔、洗つてこよウかな」

隈ができるいる上に寝ぼけ眼では顔がしまらない。気分を変えるためにも顔を洗うこととした。

もちろんテント内に水道が通っているわけもなく、わざわざ水をもらいに井戸まで行かなければならなかつた。

井戸はテント街の中央広場にある。正確にいふと井戸を取り囲むようにしてテントが建てられたのだ。この中央広場では井戸があることと広く場所が設けられていることから食事の炊き出しも行なわれている。

レイピアは井戸に取り付けられている滑車を使って水を汲み上げた。水は凍るよつて冷たく、顔を引き締めるのにちょうどよかつた。

ザバーッ！

突然の水音にレイピアはパチパチと目を瞬かせることしかできなかつた。頭がようやく理解を示したところで、自分が水をかけられたことに気づいた。

パタパタと音を立てて髪の毛から水が滴り落ちる。水浴びをするにはまだ季節が早い。

急速に寒気が体全体に襲つてきた。ぶるぶると体を震わせたのは怒りのせいだけではなく、レイピアは水をかけた主を見るためにキツと顔を上げた。

見ると3、4人の団員がレイピアを囲むようにして立つていて、中にはシャンナリーの姿もあつた。その表情は楽しげに歪められている。

弱いものを見下す強者の顔、まさにそれだ。

「どうじつもりかしら？」

レイピアは頬を引きつらせながら、額に流れ落ちる水を袖で拭つて団員達を順に睨みつけた。

「それはこっちが聞きたいな。 ゆうべスキルのテントで何をしていた！？」

もう噂が広まっているのか……とレイピアは心の中でうんざりした。スキルのテントへ歩いて行くところを両撃を飛んでいたのだろうか。

最初に口を開いたのは男の団員だった。

頭にバンダナを巻いた褐色の肌の男は黒い瞳をギラギラさせて睨んでくる。その褐色の肌の男は言葉になまりはないものの大陸の方の血を受けついでいるのだろうか、どことなく異国風の顔立ちだ。そのことも加わって余計に威圧感が増す。

レイピアは弱みを見せまいと、両腕を腰にあてて堂々とした態度で対峙した。

「もちろんバンダナを取り返すためよ  
「本当にそれだけか？」

探るようなバンダナ男の視線を怒鳴りつけることではねかえす。

「それ以外に何があるってこののよー？」

あまりにレイピアが堂々としていたのでバンダナ男は隣にいる男と顔を見合わせる。それに業を煮やしたシャンナリーがウェーブのかかった黒髪を搔きあげると、一步前に出てレイピアを指さした。

「みんなあんたがスキルを色仕掛けで迫つたって噂してるわー！」

一瞬、レイピアはその言葉の意味を理解することができなかつた。

色仕掛けで？

迫つた？

私が…………！？

「あ…………！？ 何よそれ…………！」

「色仕掛けで迫つてダイヤを盗もうとしたんじょ」「…………？」

だんだんと腹が立つてきた。

そんな風に思われていたとは。大体色仕掛けで迫るどころか押し倒されたのはこっちの方である。その上、悔しくて眠れなかつたのだ。

言いがかりにもほどがある。

「そんなことするわけないでしょ！ 大体、私にはそんなことしなくつたって正攻法で取る自信があるわよ！」

レイピアは憤慨して顔を真っ赤にして怒鳴りつけた。

「本当ね！？ その言葉聞いたわよ」「もちろん本当よ」

シャンナリーはマスカットのような瞳を真っ直ぐレイピアに向けた。射るような視線を受けて負けじと睨み返した。

先にその視線を緩めたのはシャンナリーの方だった。

「それを聞いて安心したわ」

「安心していいわよ。私、男なんて大嫌いだから」

レイピアは吐き捨てるよひじて言つた。険しく、何者も寄せ付けないような表情で。

シャンナリーは驚おどろいたを見開くと、すぐさま微笑むよひじ田を細めてレイピアの耳元で囁いた。

愛らしき声で、歌ひよひじ。

「あたし、スキルと寝たことあるの」

それだけ言ひとくと踵を返し、足取りを軽くして団員達を引き連れるようになってしまった。

リグの朝はスキルに一杯のコーヒーを入れることから始まる。

スキルは朝早くから目を覚まして起きぱきと早朝訓練に精を出しているかに思われがちだが、意外と朝が弱い。寝ぼけてぼんやりしている間にコーヒーを流し込まないとすつきりと目を覚ますことができない性質だった。反対にリグは寝起きが良いため、いつの頃から自然とコーヒーを入れる役を任される形になった。

今ではすっかりスキルの好みのコーヒーの濃さからミルクの量まで覚えてしまったほどである。

そして今日も水を汲みにヤカンを片手にして井戸までやってきた。するとそこにはずぶ濡れになつてぼんやりと立つていてるレイピアの姿があった。レイピアは怒りとも悲しみとも取れないまったくの無表情をしていて、固く口を引き結んでいた。

これには朝からリグも仰天してしまった。しかし朝だったのが幸いだった、これが夜だったら間違いなくヤカンを放り投げて情けない悲鳴でも上げて逃げ出していただろう。

「ど、どうしたんです!? こんなにずぶ濡れになつて」

リグは慌てて側に駆け寄り、タオルがないかポケットの中を探つた。

レイピアはむか、とリグの方を見て

「集中豪雨」

と、たつた一言それだけをポツリと呟いた。

「な、何言つてるんですか！ そんなわけないでしょ。これで試していくださー」

「いいわよ。すぐに乾くわ」

レイピアはそのままつてこるもの、とてもじゃないがすぐに乾くよにには見えなかつた。全身がぐつしょりと濡れていて今もポタポタと雫を垂らしているのだ。

リグは強引にレイピアにタオルを渡すとすぐ拭くように促した。それからためらいがちに尋ねる。

「あ、あの……もしかして団員達に……？」

昨日のレイピアの宣戦布告で団員達の怒りを煽ったのはリグも感じていた。けれどこんな暴挙に出るとは予想もしていなかつた。

何も言わないレイピアに肯定であると見なしたリグは「私が注意しましょーーー」と憤慨した様子で言つたが、レイピアは首をゆつくつと横に振つた。

「このなることは予想してたから。それよりもリグも私から離れた方がいいんじゃない？」とばつちりが行くわよ

「私は大丈夫ですよ。若君の側近みたいなものですから。もしくは執事つてところですかね」

「ふうん、そなんだ……。このタオルありがとな」

タオルを片手にレイピアはくるりと背を向けるとそのまま歩いて行こうとした、リグはレイピアが泣いているかもしないという思いにかられてたまらず声を掛ける。

「あ、あの……」

意外にも振り返ったレイピアは笑顔を浮かべていた。  
少しも気にしていないという風に。

「泣いてると思った？ 残念、これくらいじゃ泣かないわ」  
普通のお嬢様だつたら、こんなことされて笑顔でいられるはずがない。泣いて逃げ帰つているだろ？  
なぜこの女性はこんなにも強くいられるのだ？……？  
リグには不思議でたまらなかつた。  
自然とリグはその疑問を口にする。

「辛いとは思わないのですか？」

「もつと辛いことを知つてるから……。だからね、これくらいへつちやりなの」

レイピアの表情は穏やかに笑つてゐるよつとも見えたし、微かに憂いを帯びてゐるよつとも見えた。  
レイピアの言葉の意味、その表情の意味。  
リグにはそれがわからなかつた。それを確かめよつとする前にレイピアは背を向けて走り出した。

「もつと……辛い」と……？

去つてしまつたレイピアに問い合わせるように「ポツリ」とリグは呟いた。

\* \* \*

さすがにやり過ぎたか？とテントに帰つたブレンは思つていた。  
しかしそうにその思いを否定する。

「これぐらいでいい。これぐらいやればさすがにお嬢様も泣いて逃げ帰るだろ？・・・。

「ブレン、探しましたよ

後ろからいきなりかけられた言葉にハッとして後ろを振り向く。見る限りが腕組みをして立っていた。怒りのオーラが体中から発生していく、その不機嫌な表情から話の内容を聞くともわかつてしまつた。

「あなた達ですってね、レイピアさんに水をぶっかけた犯人は」

案の定、リグはそのことについて切り出してきた。

わざわざ団員達に聞きまわって来たのだろうか。リグの性格を知つてゐるブレンはきっとそうに違いないと納得する。

リグはひそかに「お説教魔」というあだ名がつけられていた。つけたのは他でもないブレンなのだが……。昔からそうだった。いつも悪さをするどどいまでも追いかけてきて説教をしてくる。正直うんざりしていた。

「そうだ。邪魔なんだ、あの女が

少しも悪びれもせずにブレンは堂々とした態度を見せた。その態度に力チンときたリグは口を尖らせてブレンに詰め寄つた。

「ブレン、あなたのしていることは若君とレイピアさんの勝負を汚すことなんですよ！？ わかっているんですか  
「そんなことわかってる」

「それならなぜ！？ 若君がこのことを知つたらさぞかし怒るでしょうよ」

ブレンは子供のよう。ぶつこ、とそつまを向いて投げせりと言葉を吐き捨てる。

「それならスキルに告げ口するといい」

「な、なんですか告げ口って。あなたは子供ですかー? .....ちよ

つとブレン聞いてるんですか」

「とにかく、俺はあるの女が出てくまで嫌がらせでも向むしてやる

これ以上言つても無駄だと思い、リグは口をつぐんだ。

スキルは団員に慕われるが、いたさかその傾向が強すぎるようだ。

今後のレイピアに対する風当たりはますます強まりそうだ。リグは同情を覚え、深くため息をついた。

「あたしスキルと寝たことがあるの」

シャンナリーの言葉が何度も何度も頭を反芻する。可愛らしさに声と憎たらしい顔で歌うようにつぶやいたその言葉。これら消そうとしても忘々しくうちにまとわりついてくる。

なぜシャンナリーはわざわざ自分にそんなことを言ったのだろう。牽制のつもりだらうか。

馬鹿らしい。

スキルのことなど宝石を盗んだ盗賊にしか見えていないところに

不幸なことにレイピアは今着ている服しか持つていなかった。この服ですら昨日着たものと同じなのだ。まさか1ヶ月も滞在するハメになるとは思つてもいなかつたから替えの服など持つてきていなかつた。

とりあえずテントで乾かそうと考えた。

いつまでもそのまま服を洗つてしまおうかとも思うが、そうすると着る服が無くなってしまう。とりあえず今は乾かすことだけ考えてテントに戻ることにした。

顔を上げると団員達がレイピアを馬鹿にして笑う顔が見えるよつな気がして唇を噛み締めて俯いたまま走り続けた。

もう少しでテントにたどり着くという所で急に誰かに腕を掴まれ、顔を上げると田の前にスキルの驚いたような顔があつた。

「一体何があった？」

問いかけに対しレイピアは何でもないとやつて呟つてつい、とやつぽを向いた。

「何でもなくはないだろー！？」そんなに「ずぶ濡れで」

レイピアの投げやりとも言える言葉にムジと顔をしかめたスキルは肩に手を掛け、その顔を覗き込んだ。しかしレイピアは首を横に振りながらその手を強引に振り払う。

「本当に何でもないわ。間違つて水を被つただけよ、だから放つておこへ」

レイピアはなぜだかスキルに対し無性に腹が立つて仕方がなかつた。

なぜスキルにこんなにもイライラするんだろー？

スキルを慕う団員から水をかけられたから、昨日の夜のことが原因で？それともシャンナリーの言葉に。

すぐさまその考えを否定した。違う、きっと昨日の夜のことが原因だ。それに腹を立てているんだ。

とにかく放つておいて欲しい。

そう思いながらレイピアはそのままテントに入ろうとしたが、ムツとしたままのスキルが強引に手をつかんで引きずるようにして歩き出しだので、かなわなかつた。

「ちよつとー 離してよ」

レイピアの抗議の声を無視してひたすらスキルは歩き続けた。そしてソアラのテントの前に立つとよりやく手を離す。掴まれて

いた右手の部分は赤くなつていてヒリヒリと痛み、左手でさするとスキルを睨みつけた。

「痛いじゃない！」

「君が何も言いたくないなら俺も聞かない。ただその服は何とかした方がいい。風邪でも引かれたら迷惑だ」

「な……っ」

反論しようと口を開きかけたが、事実その通りだったので口を引き結んだ。このままの状態でいたら本当に風邪を引いてしまう。スキルはテントの中に入ると、ソアラにレイピアへ服を貸すように頼み、そのまま出て行ってしまった。

言葉の通り何も聞くつもりは無いらしい。

\* \* \*

「まあレイピアちゃん、その服はどうしたの？」

ソアラはずぶ濡れになつているレイピアに驚いた様子で目を見開く。そしておつとりとした動作でレイピアをタオルにくるませた。レイピアは先ほどよりは幾分か緩めたものの、いまだに不機嫌に歪んでいる顔で口を開く。

「集中豪雨です」

まあ、と驚いた声をあげたソアラは明らかに嘘だとわかるようなレイピアの言葉を信じたようだつた。どこまでも純粹で人を疑うといふことを知らないらしい。

すぐにソアラはいそいそと洋服が入つた衣装箱を開けて何着か洋服を持ってきてくれた。

どの洋服もとてもかわいらしげのだが、やけにひらひらとした部分が多く露出の高いものだった。色は赤や黄色といった原色がつかわれていて普段レイピアが着ないようなものばかり。これをソアラが着ているのかといふとそうではないようになり思える。ソアラの今着ている服はベージュ色の簡素なドレスだったから。

「あの……」  
「

そのひらひらとしたドレスをつまみ上げてレイピアは困惑した声を出す。

「どういつの嫌だった？ 私が若いときに着ていた服なんだけど。これなんて背中が露出しているからかわいいと思うわ」

若い頃に着ていたらしい。

ソアラがこんな露出の高い服を着ているのはとても想像もつかなかつたが、もしかしたらステージ用の衣装として着ていたのかもしない。それなら納得がいく。

レイピアはしばらく考え込むと、断ることにした。

「「めんなさい。」いつこの服はちょっと……」

ソアラは残念そうな顔をしたもの、気を悪くすることなくすぐにつの服を持ってくれた。今度はレイピアが普段着ているような動きやすさを重視したシャツとスラックスだった。

「じゃあ私は向ひつをむいてるかい」

ぐるりと背を向けるソアラ。

着替えるレイピアに気をつかってくれたのだ。お礼を言つて、濡

れて重たくなった服を脱ぎ始めた。

「あ、そうだわ。濡れたお洋服は……」

ソアラは言い忘れに気がついてレイピアの方を振り返るが、言葉を最後まで告げることができなかつた。

あつ、と言葉を飲み込んで目を見開いた。その視線の先にはレイピアの背中があり、大きな刺し傷の跡があつた。  
レイピアは慌てて渡された服を着てそれを隠す。

「「」「めんなさい……レイピアちゃん」

「あ……あの、だからさっきの服を嫌がつたのね……」

何て言葉を言つていいのかわからず、困惑するソアラ  
が声を掛けた。

「ええ、まあ……」

ぎゅっと服を握りしめてレイピアは俯いた。

ソアラは悲しげに目を細めると、意を決したように口を開いた。

「もしよかつたら……私にその傷ができる理由を話してくれないか  
しら？ もしよかつたらでいいから……ね？」

気遣うようなソアラの言葉にレイピアは顔を上げた。

まるで母親にどうしたの？とやせしく尋ねられていなければだつた。

「じつじつ、ソアラちゃんってそんなにお母様に似てるんだね？」

レイピアは今にも泣き出しそうな表情をつくりて弱々し

く笑う。

スキルや団員達の前で張つていた虚勢がソアラの前だといとも簡単に崩れてしまうのだ。

一昨日もそうだ。盗賊団のアジトに一人で乗り込んでしまい、本当は恐くてたまらなかつたけど精一杯弱みを見せまいと強がついた。それなのにソアラを目の前にすると砂でつくられた城のように一瞬で壊れてしまつ。ただの泣き虫で弱虫な本当の自分に戻つてしまつ。

レイピアは目に涙をいっぱい浮かべた。

「……聞いて……くれますか？」

「ええ。辛い事は全部吐き出しあしまつと良いわ」

母親が生きていたら、胸に抱えていた辛い出来事を全部聞いてもらいたかつた。そして「辛かつたのね」と言つて抱きしめて欲しかつた。

ソアラは今、母親の代わりにその思いを聞いてくれると言つてくれて、それがレイピアにはたまらなく嬉しかつた。

嗚咽をもらしながらレイピアはゆづくつと話し始めた。

\* \* \*

それは2年前の、レイピアが家を飛び出した頃のこと。  
世間知らずのお嬢様だった自分が1人旅をするのはとても不安だつた。そんな時に1人の青年に会つた。

彼の名前はユーザ。

ユーザは最初、レイピアが領主の娘だと知つて戸惑いを見せたが一緒に組んで冒険をしてくれることになり、色々なことを教えてくれた。

剣の扱い方、簡単な食事の作り方、冒険の基本。世間知らずだったレイピアには何でもこなすユーザがとても魅力的だつた。そして毎日が楽しかつた。

レイピアはユーザを愛していだし、そして彼もまた自分を愛してくれているものだと思つていた。

いつしか2人は結婚の約束をするよつな仲になつた。冒険者を辞めて結婚して、小さな家に住んで暮らそつと語り合つた。

2人は最後の冒険として、盗賊退治をすることになつた。簡単な冒険に思われたし、実際盗賊達もすぐに捕まえることができた。  
しかし

。

「盗賊達を捕まえて、いざ冒険者ギルドに戻ろつとしたときに彼が私にした仕打ちがこれなんです」

レイピアは目を伏せたまま、背中の傷を指し示した。短剣のよつなもので一突きした跡。一生残るであろうその傷は見ていて痛々しかつた。

「私は当時冒険者ギルドの保険に入つてました。これに入つていると冒険中に怪我や死亡をしたときにお金の保証をしてくれるんです」

レイピアは保険金の受け取りをユーザにしていた。レイピアが信頼していたのは彼だつたし、彼以外に頼る人もいなかつたから。そんなレイピアにユーザがした仕打ち、それはレイピアに怪我を負わせ、あたかも盗賊に斬りつけられたかのようにギルドに報告をしたことだつた。

保険金を受け取つた後、ユーザは病院で治療を受けているレイピアを置いてどこかへ消えてしまつた。

「彼はきっと私を殺すつもりだったんですね。けど……バカね、剣の腕は確かにはずなのに間違つて背中を刺すなんて。心臓を狙つていれば確実に殺せたといふのにね」

レイピアは頬を伝う涙を拭うこともせずにくすぐると笑い続けた。それはコーラに對しての笑いなのか、それとも裏切られた自分に対する笑いなのか、そこからは伺つことはできなかつた。

結婚の約束までしていた男に裏切られたレイピア。

ソアラはなぜ一昨日のレイピアが「約束」についてひどく不快感をあらわにしたのか理解できた。

そしてその心の傷の深さも。

「レイピアちゃんは、まだその人を愛しているの？」

ためらいがちに聞かれた言葉にレイピアはゆっくりと首を振つた。

「愛してない。……憎いの、でも復讐とかそんなことは考えてない。今はただ忘れたいだけ」

レイピアの何も感情を映さない硝子のような瞳に、たまらずソアラはそつと引き寄せて抱きしめると頭をやさしく撫でた。

母親が娘にするよ。

ふんわりと甘い匂いのする香水も、やわらかい腕の温もりもずっとレイピアが求めていたものだつた。

「辛かつたのね……」

レイピアは耳に響くその言葉を受けといつそう涙がこぼれた。声を押し殺してそれからじばりじばり泣きつけた。

「お母様……」

ソアラの腕にすがりついたまま、うわいとよびしだりふやく。その時のレイピアはソアラと自分の母親を重ねていたのだらう。けれどソアラはそれを知りながらあえて受け入れていた。

\* \* \*

「ありがとう……。とてもスッキリしました」

ようやく涙も止まり、ソアラの体につづめていた顔を上げると晴れやかな笑顔を向けた。それを見たソアラも満足げな表情を浮かべて微笑んだ。

「ねえ、ソアラさん。」このことは誰にも言わないでくださいね

「スキルにも……？」

「もちろん。だって同情をかけられるなんて」めんどう

スキルにはこんな自分を知られたくなかった。まだ知り合って間もないけれど、彼の性格からいつてレイピアの過去を馬鹿にしたりはしないだろう。だが、同情されることも弱みを知られることも嫌だつた。それは屈辱以外のなにものでもないから。

「そう。あなたがそういうのならスキルには言わないわ。2人だけの秘密ね」

ソアラは人差し指を唇に当てて悪戯っぽく笑った。その笑顔はとてもスキルに似ていてやっぱり親子だな、とレイピアに思わせるものだった。

翌日。

ソアラに苦しかった胸の内を全部吐き出したことによつて、レイピアは久しぶりに晴れやかな朝を迎えた。

今日もがんばろう、レイピアは決意をあらたにした。ゴーザの件からもう2年たつた。自分はいつまでもあの頃のようなお嬢様でもないし、強くなつたと思う。昨日ソアラに話したことでもつと強くなれた。正直人に話すことでこんなにも心が軽くなるとは思わなかつた。

内に溜め込んでいるよりも誰かに聞いてもらひうとも時には必要なかも知れないわね……。  
まだ……がんばれる。

両手で挟むようにして頬を軽く打つと、レイピアは朝食をもりいに行くことにした。

朝の炊き出しはテント街の中央広場で行なわれていた。朝食を受けると、広場の外れに腰掛け食べ始めた。今日の朝食は焼いたふかふかのパンと温かい野菜スープだった。

食事はおいしかつた。一人で食べることは慣れているけれど、やはり一人で食べる食事ほど味気ないものはない。そもそもそその食事を食べていると、スキルがこちらに向かつて歩いてくるのが見えた。

スキルはレイピアを見るなり何か聞いたそうに口を開きかけたが、すぐに口を引き結んで隣に腰を下ろす。

「私、まだ座つていいくつて言つてないけど」

パンを頬張りながら、ちらりとスキルに目をむける。スキルは口の端を少しだけ上げて、肩をすくめる。

「つれないね。パーティーの時はすんなり座らせてくれたのに」「あれは特別。あの日だって内心では喜んで座らせたわけじゃないわよ。……それで用は何なの？」

昨日のもやもやとした気持ちはこの間にか吹き飛んでしまい、いつも通りのやりとりになつている。結局あのもやもやの正体はわからなかつたが、気にすることもないだらうと思つた。

「今日も公演があるから今のうちに君にチャンスをあげようと思つてね」

そう言つて懐を指さず。おそらくダイヤが入つているのだらう。スキルは連日のようにステージに上がつていて、その間はダイヤをどこに隠しているのかわからぬいため、レイピアにはスキルと会つているときだけがダイヤ奪還のチャンスだった。  
わざわざチャンスを『えるために足を運んだような物言いだ。その余裕たっぷりの態度にレイピアはむう、と頬を膨らませた。

「あら、敵に塩を送つてゐる場合かしら？そんなことやつてると呪つくわれるわよ」

つん、とそっぽを向く。けれど視線だけはスキルの懐に向けていた。

「ハンデは必要だらう？」

「それは私の腕があなたよりも劣つてこるよう聞こえるわ

「否定はしないな」

くつくと笑いを噛み殺したように笑うスキル。心底レイピアとのやうとりを楽しんでいるように見える。もとも楽しんでいるのはスキルだけでレイピアの方は楽しくとも何ともないが。

「あなたってどうしてそつつかかってくるのよ。その口を何とかしたらどうなの？」

田をつり上げてレイピアはスキルを睨む。

いつも思つたが、視線で人を殺せるならどれだけいいか。そしたら田の前にいる憎つたらしい男を殺してやるのに。

「君につられてるだけさ。もつと君が素直な女性だつたら俺も合わせんんだけどね」

「へえ、そうなの。でも生憎ね、私があなたに素直になる田なんてこの世が終わつても来るはずないんだから」「

冷たく言い放つて、残りの朝食を一気に喉にかきこんだ。途中器官に入つて激しくむせこんでスキルに笑われたが、食事を終えるとさつさとその場から離れた。

スキルにわざわざチャンスを与えたのが悔しかつたから、彼の懷に手を突つ込むことはしなかつた。チャンスくらい自分で作つてみせるわ、と憤慨して。

\* \* \*

それから4日が経つた。

レイピアがここで生活するようになつてから一週間になる。それにも関わらずあいかわらずスキルとの攻防戦に終わりは見えなかつ

た。レイピアにしてみれば3日もあれば決着がつくと思つていただけに、苛立ちは募る一方だつた。

何度もスキルの懷に手を入れようとするものの、いつも寸前にひょいと軽くかわされてしまつ。いい加減レイピアも頑なに認めようとしなかつたスキルの実力を認めざるをえなかつた。

寸前で避けられてしまつのは決して偶然ではない。

スキルは剣士でいえばかなり腕の立つ部類に入るのではないだろうか。ただし避け専門だが……。

私に勝てる相手じゃないわ。

ふう、とため息をつき、ハツとしてすぐにかぶりを振つた。

弱気になつたらそこでおしまいだ、自分自身に言い聞かせるように顔を挟み込むようにして両手で打つた。

隙さえできれば、と思つ。どんなにすごい腕の立つものでも隙さえつくことができれば。

そう考えてレイピアは再びため息をついた。あんなに完璧なスキルのビートをビートやれば隙なんて作ることができんのだろう?

寝ているときですら無理だつたというのに。ステージに上がつているときはダイヤの隠し場所すらわからない。

そして団員達もあいかわらずレイピアには冷たかつた。一部団員（主にシャンナリー）からの嫌がらせ。彼らの意図はわかつていて、レイピアをここから追い出すためだらう。そのことがますますレイピアの気を重くしていった。

考えても何も始まらないという結論にたどりついたレイピアは、スキルのテントに向かつことにした。すでに日課になつていて攻防戦だ。

今日はサークスは休みだということをリグから聞いた。団員達の休養を兼ねて1週間に1日だけ休みを取ることになつてゐるらしい。ところことはスキルも1日テントにいるわけで　　レイピアにし

てみれば絶好の機会だ。

スキルのテントの前に来て、中に入るつとじてぴたりと足を止めた。中から話し声が聞こえてきたからだ。聞き耳を立てていたわけではないのだが、自然と会話が耳に入ってきた。

そしてその声の主がシャンナリーだということに気づいた。

頭の中に浮かんだのは前にシャンナリーが言った言葉だった。

あたしスキルと寝たことあるの。

レイピアは顔を赤くしてその場からパツと一步下がった。まるで自分が盗み聞きをしているように思えたのだ。いくらレイピアでも恋人達が愛を語らっているところに踏み入れる趣味はない。けれどすぐにそんな思いは杞憂であることがわかった。スキル達は単に会話をしているだけだった。

それでもここに居るのが気まずくなつたため、テントに帰ろうつとしたときにシャンナリーの言葉が耳を打つた。

あの愛らしくも憎たらしい声が。

「ねえ、スキル。私がレイピアさんを追い出してもあげるから!」

その言葉に思いつきり頭を殴られたような衝撃が走った。  
青ざめた顔で口元を覆つて立ち去くす。

もしかして……スキルが指示を出していたの? 団員達に私を嫌がらせして追い出すようにつけて?

ぐるぐると頭の中をシャンナリーの言葉がよぎった。信じられない……ところには次第に怒りに変わり、やっぱり盗賊のやること

なんてそんなものよね、といつ思いに支配された。

結局スキルには約束を守る気なんてなかつたといつことだ。

姑息にも一部の団員達の手をつかってレイピアを追い出し、そもそもゲームを放棄せたように見せたかったのだ。

そうまでして体面を守りたかったのか。

握りしめた拳に爪が食い込む。

何て卑怯な男！！

血が滲むほど歯を噛みしめて、レイピアはそのままの場から去った。

レイピアの耳には届かなかつたが、その会話には続きがあつた。

「ねえ、スキル。私がレイピアさんを追い出してあげるからー。」

「やめろ、シャンナリー。これは俺とお嬢さんの勝負だ。手出しあるな……」

彼にはちゃんと約束をする奴がある。レイピアには届かなかつたが。

頭の中はぐちゃぐちゃだつた。

レイピアはテントに戻ると、毛布を頭から被つた。思いつきり叫んで、泣きたい気分だつた。

だが、泣くのはもつと悔しかつた。

心のどこかでもしかしたらスキルは約束を守つてくれるのかもしれない……なんて考えてた自分があまりに馬鹿みたいで。そのことで涙を流す自分はもつと馬鹿みたいだつたから。必死に涙をこらえて、枕に顔をうずめた。

なぜ信じようなどと思つてしまつたのか。

相手は母の形見でもあるピンクダイヤを奪つた憎らしい盜賊だといつのに。約束を守つてくれる確証など最初からありはしなかつたのに。

くやしい……！　くやしい……！

スキルの顔なんて見たくもない。心に芽生えたのは裏切りに対する怒りだつた。親切してくれたりグの顔もソアラの顔すら今は見たくなかつたし、信じられなかつた。怒りは次第に憎悪に変わつていく……なのにどうして自分はこんなに傷ついているのだろうか。心臓がちくちくと痛んでたまらなかつた。

そうして何時間も枕に顔をうずめたまま過ごした。昼の時間が過ぎたが、昼食を取りに行く気にはならなかつた。

「レイピアさん？ 入りますよ」

ためらいがちに声が掛けられ、テントの幕が開いた。

レイピアはビクッと身をすくませるが、すぐに片手に昼食の盆を載せたリグを睨みつけた。それまで見たこともなかつた、ナイフのような鋭い視線にリグは何事かと戸惑つ。

「あ、あの……？ ビーフしたんですね」

「出でつて」

何者も寄せ付けない冷ややかな声でレイピアは呟いた。戸惑つり格になおも冷たく吐き捨てるよつに言い放つ。

「邪魔だつて言つてゐるでしょ」「一」

昨日までのレイピアから想像もつかないような荒れた様子にリグは声を失い、立ち尽くすことしかできなかつた。

出て行く様子がないリグにレイピアはチツと短く舌打ちをすると、ベッドから抜け出し彼を突き飛ばしてテントから出て行つた。

後には突き飛ばされて、呆然とした顔で尻もちをついているリグの姿だけが残つた。

「レ……レイピア……さん？」

\* \* \*

テントから出るとすぐ元に、前にレイピアに嫌がらせをしてきたブレンとシャンナリーに出会つた。ブレンの名前はリグに聞いたことがあるので知つていた。

また何か嫌がらせをしに来る気だつたのだろうか。

レイピアは2人に射るような視線を向けた。殺氣を孕んだ氷のような視線。しかしすぐにくつと侮蔑するよつて口元を歪めた。

「また何か仕掛ける気？　あなた達って、つまらない」としかできないのね

「なんだと！？」

「この言葉に怒つをあらわにしたのはブレンだった。

「だつてそうじやない。水をかけたり、脅しをかけたり。どれもこれもつまらない嫌がらせばっかり。正々堂々勝負できなーいの？」

レイピアはくすっとブレンに向けて笑い飛ばした。思いつきで馬鹿にした仕草で　事実、馬鹿にしているのだ。

姑息で卑怯でどうしようもないくらい野蛮な連中…

「まあ、無理でしょ、ナビ。金魚のフンみたいにスキル【くつ】こてる弱虫【よのぎ】になくな

「やめえ…」

ぐい、とブレンは怒りに任せてレイピアの胸ぐらを掴み上げる。しかし彼の気迫は、今の怒りに心を染めている彼女には伝わらなかつた。表情を変えることもない。たとえ彼がナイフを取り出して彼女の白い喉元に突きつけたとしても結果は同じだろつ。

「あら、本物のことと言わされて怒つたの？」

ふふん、と鼻をならす。

嘲りをやめようとしないレイピアにブレンは本氣で殴りつと思つた。右手を思いつきり振り上げたところでシャンナリーに止められた。いくら何でもそこまではやり過ぎだと思ったのだろうか。ブレンはチッと舌打ちすると、握りしめていた拳をしづしづ下ろす。

「セレモニアルアーチェリーアンダード正々堂々勝負してやるよー。」

怒りに髪を搔きむしった後、ブレンは背を向けて獣舎の方へと歩き出した。冷ややかにそれを眺めつつも、レイピアは後に従つた。

獣舎の前にはレイピアとブレン、シャンナリー。そして険悪な空気を感じ取つて、何事かと興味を持った見物人の団員達が詰めかけた。お互いに何が始まるのかと顔を見合わせる。その中にスキルやリグの姿はなかつた。

「何をする気なの？」

ライオンの檻の前でブレンが立ち止まつた。

レイピアは両腕を組んだまま、ちらりとライオンを見るとガラスのような琥珀色の瞳と目が合つた。王者の名にふさわしいしなやかな体躯と立派なタテガミ。こんなにも近くで見たのはリグに案内されたときを含めてたつたの2回だつた。

大勢で檻の前に詰め掛けているためそのライオンは気がたつているのか、しきりに尻尾を揺らしてうろついている。見ようによつては獲物を待ち構えている姿にも見えるかもしだれない。

ブレンはくつと口元を歪めて笑うとライオンの檻をゆづくつと指した。

「俺とお前で勝負をしよう。この檻の中に10秒間手を突つ込んでいられたら勝ちだ」

団員達の間にざわめきが生まれる。ブレンは何を言つてゐるんだ！？と口々に言い出した。

しかしレイピアは戸惑つ様子を見せることなく淡々とした口調で

質問をする。

「勝つたらどうするの？」

「お互いに言つことを聞く。俺が勝つたらあなたには出て行つてもいらぬ」

「じゃあ、私が勝つたら今後一切邪魔をしないで欲しいわ」

言しながらレイピアは皮肉げに口元を歪めた。

「でももし私が勝ったとしても、姑息で薄汚い盗賊のあなたがそんな約束を守るわけないわよね。果たして私がその勝負をやる意味があるのかしらね？」

ブレンはカツとなつた。

姑息で薄汚い盗賊だと！？ 約束を守るわけがないだと！？

「約束は守る！ ただしお前が勝つた場合のみだ。もつともお嬢様に勝負をする勇氣があるとは思えないがね」

へつと小馬鹿にした笑いを浮かべる。

それはあまりにも馬鹿らしい勝負だった。ブレンですら本氣で言ったわけではなく脅しのつもりで言つただけだ。レイピアが怖氣づいて、今度こそ逃げ帰ると思って。

レイピアだつて普段の彼女ならこんな勝負を受けるはずがなかつた。自分の腕を食いつぶされる危険があるといつた。

けれど。

「いいわ、受けてたちましょ！」

怒りと憎しみで冷静な判断を失っていたレイピアは受けたつこ

とにした。

動物の檻には近づかないでくださいね、と言つたソングの言葉が  
もはや頭の隅から消え去つていた。

なんだか全てがどうでもいい気がしてきた。

ただ、今は目の前にいるブレンに一矢報いてやりたかった。啞然  
とさせてやりたかった。

馬鹿にして。お嬢様だから怖がつて逃げ帰るとでも思つてゐるの?  
そんな弱い人間に見られているのか。舐められたものだ。

再び、団員達の間にざわめきが起つた。

「やめなさい!」

「馬鹿なことはやめるんだ!..」

団員達の中からそんな言葉が次々に出る。今まで空氣のよつこ  
イピアを扱つていた彼らからの初めてのコンタクトである。  
レイピアは何の感情もこもらない目で彼らを一瞥するが、すぐに  
視線を外した。まるで彼らを景色に溶け込んでしまつた静物のよ  
うにしか見ていないようだ。そして檻の前に近づく。

「一緒に手を入れるの? それともどちらか一人?」

「どちらか一人だ。まばほぢからやる? 僕はどちらでもいい  
ぜ」

挑むよつた視線を受けてレイピアはすつと前に出た。

「私からやるわ」「わ  
「本氣か? ビビつてるんならやめた方がいいぜ」  
「やめる? 冗談じやないわ」

『ぐぐり、ヒブレンは息を飲み込んだ。

レイピアは深呼吸をして、震える足を何とか静めた。

決意は決まった。

「こんなのでビビッてたら冒険者なんてやつてらんねーんだよ」

半ば金切り声で叫んで、鉄格子の隙間に手を突っ込んだ。途端に団員達の間から悲鳴があがる。

レイピアは震える声でカウントを取り始めた。

「1……2……」

時間がひどく長いように感じられた。

それまでうるうると艦の中を歩いていたライオンは、いきなりの侵入者に驚き、怒りをあらわにした。4秒を数えたころで急に咆哮を上げ、レイピアの腕に食らいついた。

最初、レイピアは何が起こったのかわからず、短い悲鳴をあげるだけだった。けれど艦に引っ張られる感覚と団員達の凍りつくような悲鳴に自分が噛み付かれたのだと理解した。

それでも、艦に引きずり込まれないようにその場に踏ん張つて、かされた声でカウントを取る。

「5……6……7……」

怖い。

このまま腕をちぎられるかもしない。

恐怖のために、どつと冷たい汗が吹きだして、急に目の前が暗くなつて耳鳴りがし始めた。ガクガクと足が震える。

もうだめだ……

そう思つたとき。

「何をしている…？」

「離せ、ライ！！！」

さまざま悲鳴が入り乱れる広場に、ひとりわ大きい怒鳴り声が2つ響き渡った。レイピアの耳にはぼんやりとしていてハッキリと聞こえなかつたが、その声は前者がスキルで後者がリグのものだとおぼろげながら理解できた。

飼育係であるリグの命令に従つたライといつ名のライオンは、すぐにはパツとレイピアの腕を離し、申し訳なさそうな顔をした。

レイピアは恐怖のために崩れ落ちるようにして地面に倒れこんだ。ガクガクと体全体が震える。右の腕は恐くて見れない。痛みとぬるとした感触から血で染まっていることは確かだ。  
冷たい汗が額から流れ落ちる。

「あ、あとひょっとだつたの……」

レイピアは青ざめた顔で勝負の邪魔をしたリグを睨みつけた。彼の顔はレイピアの顔と同じくらうに青ざめている。

「あとひょっとだつたのにびひじして邪魔するのよー！」

側に来たリグを怒りにまかせて何度も殴りつけた。右手で殴つたために、リグの服は血で染まる。

「何で……つ何で邪魔するのよー！」

しかしその腕はスキルによって簡単に掴まれてしまった。

「何す……っ」

抗議の声を上げようとしたレイピアだったが、言葉は最後まで続かなかつた。乾いた音が辺りに響く。

左頬に走る痛み。

レイピアはスキルに平手打ちされたことを知つた。キットとスキルを睨むために顔を上げて、困惑した。スキルは怒りとも悲しみとも取れない表情をしていたから……。

「な、なによ……卑怯者のくせ……」

なおも抗議をしようと声を出そうとするが、限界だった。レイピアは肩で大きく息をはじめる。そして耳鳴りと共に目の前が暗くなり、だんだんと意識が遠のいていった。

次にレイピアが目を覚ましたのはベッドの中だった。右手に何の感覚もなかつたため、腕がくつついでいるのか不安になつてそつと毛布の中を覗き込んだ。

右手はちゃんとくつついでいた。包帯でぐるぐる巻きになつていたが。

おそらく縫つたのだろう、麻酔が効いていたために腕に感覚がないのだ。

いつのまに……？

疑問が頭に浮かぶが、すぐに考えるのをやめる。

頭がひどくぼんやりしていて考えるのが面倒くさい。そのぼんやりとした瞳で天井を見上げると、銅製のランプが目に映つた。風に揺られるテントと共にそのランプもゆらゆらと揺れる。

「レイピアさん、入りますよ」

ためらいがちに声がかかる。聞きなれたその声はリグのものだつた。

レイピアは毛布を被つて眠つてゐるふりをした。あんなことがあつた後だつたから顔を含わせづらかった。リグもレイピアが眠つていると思つたため、すぐにして行つてしまつた。単に起きているか確認に来たのだろう。

リグがいなくなると、再びぼんやりしあじめ、いつの間にか眠つてしまつた。

痛い

。

腕がちぎれそつなほど痛い。

「う……」

強烈な腕の痛みを覚えてレイピアは再び目を覚ました。麻酔が切れたのだろう。先ほどまで何の痛みも感じなかつたのに、今は腕がちぎれるくらいに痛かつた。そして体も熱っぽい。

怪我が原因かしら……？

動く左手を額にのせてみると、案の定熱かつた。これからもっと熱が出るかもしない。

「今……何時だろ……」

あれからどれくらい時間が経つたのだろうか。薄暗く、ランプが火を灯していることから夜なのは間違いない。

カラカラに乾いた喉を押さえてぼんやりとした目で時計を探す。その時ふいに頭上から声がかかる。

「7時だ」

不機嫌そうなその声の主はスキルだった。驚いて声の方を向くと、彼はすぐ側に腰を掛けっていた。

慌てて毛布を被つてしまおうと思つたが、腕に痛みを覚え派手に顔をしかめた。

「あまり動かすな。15針も縫つたんだ」

「15針も！？」

後が残るわね……と思いながらレイピアは包帯に巻かれた腕を見

た。怪我の具合を聞いてますます気が遠くなりそうだった。

すぐにテント内は重い沈黙に支配された。スキルは不機嫌な顔をしたまま、じっと腰掛けてレイピアを見つめている。いや、睨んでいるといつた方が正しいかもしない。

レイピアが気まずさを覚え始めた頃、ようやくスキルが沈黙を破った。

「どうしてあんなことをした？」

怒りを含んだような声とその迫力にレイピアはぐ、と息を詰まらせ、つん、とそっぽを向いて唇を引き結んだ。

「意識を失う直前に言つた裏切り者ってどうことだ？」

「その言葉のままよ。あなたが卑怯なことするからじゃない！」 団員を使って私を追い出そうとするなんて…」

「な……なんだって…？」

スキルは一瞬レイピアの言葉が理解できなかつた。そんなことをした覚えはないし、指示したこともないからだ。

しかしレイピアはスキルの驚きを団星を言われて戸惑つてゐるものと解釈した。顔に怒りの色を浮かべて睨みつける。

「約束を守る気なんてなかつたくせに、何が『俺は約束は破らない』よ、笑ひちゃうわ。所詮盜賊の約束なんてそんなものなのね」

言いたいことを全部言つと、レイピアはぜえぜえと熱のために荒い息をした。

「ちよつと待て、一体何のことを言つてるんだ」

「とぼけないで！ 聞いたんだから。あなたとシャンナリーが話し

てこるところを

スキルは少しの間考え込んで、ハツとする。もしかしたらレイピアが言つているのは朝のことかもしれない。

……しかしスキルはちゃんとシャンナリーに「やめろ」と言つたはずだ。

「俺とシャンナリーの会話のことを言つてこらへんなら誤解だ。俺はそんな指示なんて出していない。シャンナリーにもやめろと言つた」「うそばっかり、だから盗賊なんて大嫌いよ……」

「おい、落ち着け……」

レイピアがスキルに向けて右腕を振り下ろすとしたため、慌ててその腕を押さえ込む。

「触りないでっ！ 大うそつきの約束破り！ あっちへ行つて！」

そこまで言つてスキルを突き飛ばしてから、ハツとした。スキルが傷ついた顔をしてレイピアを見つめていたからだ。  
なぜ彼がそんな顔をするのかわからなかつた。  
嘘をついていたくせに……何故？

思わずズキリと胸が痛む。

「そうか。俺の言つことは信じられない……か。それなら勝手にするといい

スキルはかぶりを振つて椅子から立ち上がり、レイピアから背を向けて出て行つてしまつた。

あつさりと取り残されたレイピアは呆気にとられた。スキルがもつと言い訳をしてくると思つていたからだ。

最後の言葉はまるで別れの言葉のよつだった。見捨てられてしまつたような、そんな気分になる。

「な、なによ……もつと預定しなきこよ……」

違うなら、違うとハッキリ言えぱいに。熱があると人は弱くなるのかもしれない。レイピアはまさにそれだつた。

自分からあつちへ行けと言つたにも関わらず、こぞスキルが出て行くと途端に寂しさを覚えた。

「う……う」

熱と腕の痛みと心の痛みのせいで涙がポロロと溢れて止まらないかつた。枕に顔をうずめて傷みをこらえて泣いた。

「なによ……なんなのよ……」

ヒクヒクとしゃくりあげ、顔を横向きにした。田からじまれ落ちた涙は重力に逆らじきれずに横に伝つて布団に流れ落ちた。

しばりべすると急にテントの入り口が開き、レイピアは田を見開いた。

先ほど出で行つたはずのスキルが戻ってきたからである。泣き顔を見られまいと彼から背を向けるよつとして寝返りをうつた。

「ど、どうして……？」

「俺も言ひ過ぎたと思つて……それに君が泣いていると思つた」  
「な、泣いてなん……かつ」

そう言いつつも、震える声は泣いていたことを物語つている。ふとスキルが微笑んだ気配が肩越しに伝わった。

スキルはゆっくりとレイピアに近づくと、そつと体を自分の方に向かせた。しかしレイピアは涙でべしょべしょにした顔を見せまいと必死に毛布で隠して抵抗した。

「意地つ張り。泣くのはそんなにも恥ずかしい」とへ。

「あなたに見られるのが嫌な……だけよつ」

「そうだつた、君は素直じやなかつたね」

ふーっと大げさにため息をつく。それからポケットから薬を取り出すとレイピアの方に差し出した。

「痛み止めだ」

しかし毛布を被つたまま、レイピアは受けとらなかつた。

「いらない！ 私のことなんて放つておけばいいのよ

ありがとう、とたつた一言。

レイピアのためを思つて薬を持ってくれたスキルに本当はそういう言つて受けとるべきなのに。

自分の心と正反対の言葉を口にしてしまつた。

先ほどのわだかまりを引きずつて出た言葉だつた。

スキルにはそれがわかつていたから、腹を立てることはしなかつ

た。ただ、行動を起こしただけ。

水と一緒に痛み止めを口に含む。

次に顔を覆っていた毛布を強引にひっぱり上げると、スキルはレイピアに口づけ、薬を流し込んだ。左手はレイピアの頬を、右手は覆い被さるよつこべッシュについて逃げられないようにして。

「むー……っー？」

突然降り注いできた口づけに驚き、レイピアは動かせる左手をフル回転させてスキルの背中を叩きつけた。けれどレイピアが薬を飲み込むまでスキルは唇を離そつとしなかった。

重ね合わせた唇がやけに熱いのは熱のせいだらうか・・・。

熱のせいなのか何なのか頭がくらくらとして思考が閉ざされてしまい、とうとう抵抗をやめて薬を飲み込んだところで、よつやく解放された。

「な、なにを……っー」

手の甲で口をぬぐい、熱のために赤くなっている顔をせりに真っ赤にして、レイピアは抗議の声を上げた。

「悪かった。いつもしないと君は薬を飲んでくれなそつだつたら  
「う

意外にもスキルは謝罪の言葉を口にした。だからレイピアの怒りはしゅるしゅると収まってしまい、唸つてそっぽを向くだけだった。

「色々と話はあるがそれは明日にしよつ。ただ、これだけは言っておきたい。俺は約束を破つてなんかいないから……おやすみ」

レイピアは布団をかぶつたまま、何も答えなかつた。  
スキルもそれ以上もとめなかつた。

じつと布団の中では息をひそめていると、彼が立ち上がつた氣配と  
テントから出て行く氣配が伝わってきた。

彼の言葉が本当なのか嘘なのか、レイピアには判別がつかなかつ  
た。

本当のような気もする……けれど心のどこかでまたコーヴザのとき  
みたいに裏切られるかもしないという不安があつた。  
裏切られるのは恐い、だから信じるのも恐いのだ。  
ちくちくと痛む心、そして腕の痛み。  
レイピアはなかなか寝付けずにいた。

待つて

待つて

どこに行くの、コーヴィー？

叫びながらレイピアには彼がどこに行くのかわかつっていた。コーヴィーは自分の元からいなくなるのだ。

いくら泣いて叫んでも、コーヴィーは決して振り返ることはない。今日もそのはずだった。

けれど違った。

彼はレイピアの方を振り返ったのだから。レイピアの頬を伝う涙をそっと拭うとどきりの笑顔を向け、そして差し出した右手をぎゅっと握った。

痛いよ、コーヴィー

コーヴィーに握られた手、いや腕がひどく痛む。彼に握られているのは手の方なのに……。なぜだらう。

けれど痛みよりも胸に生まれたのはほっとするような安心感だった。

再び、コーヴィーが歩き出さうとする。

待つて！ 待つてよ！

私を置いて行かないで。ずっと側について！

慌てて追いすがる。

白くてもやのかかった地面を走る。一生懸命走っているのになかなかコーネザに追いつくことができない。それでも置いていかれないように前に進んでいく。

いつもは無視して行ってしまつのに、今日の彼はなんだか違つた。レイピアを待つよつこして足を止めた。

逆光のせい？

顔が良く見えない。でも微笑んでるのはわかる。恋人に向ける、とびきりの笑顔だ。

行かないよ。ずっと側にいるから

わわやくよつこ、わわじこ言葉が返ってきた。

その言葉が嬉しくつて、レイピアさついい悪ノリをする。

愛してゐるつて言つて。……ね？

コーネザは一瞬ためらつた後、照れたよつこ顔を細めて

愛してゐるよ、レイピア

胸がきゅん、とするくじらせたつて言つた。

ああ、これは夢なんだな

レイピアはそれが夢であることを理解した。コーネザは決してそんなことは言つてはくれない。けれど夢でも彼が言つてくれたことに変わりはない。

とても……嬉しかつた。

ユーザは右手でそつとレイピアの頬に触ると、ゆっくりと顔を近づけた。レイピアはその意味を察し、瞳を閉じる。ユーザの唇はほんの少し冷たかったけれど、とてもやわらかく口づけだった。恋人達がする、甘い口づけ。

ユーザ

私もね、私も……

愛してるよ

\* \* \*

頭にひやりとした感覚を覚え、レイピアの意識は急速に覚醒していった。

何かとてもいい夢を見ていた気がする。まだ夢を見ていたかった気もあるが、あまりよく覚えていない。

「ん……？」

右腕がちりりと痛んだのでそちらの方へ顔を向け、ぎょっとして目をみはった。手のひらを包み込むようにしてスキルが握っていたのだ。しかも肝心の本人は、というと、いつも彼らしくもなく髪の毛を乱れさせて椅子に腰掛けたままスヤスヤと眠りこけていた。

「なっ、なっ……なんでっ！？」

昨日スキルは確かにテントから出て行つたはずである。わけがわからずレイピアは狼狽するばかりだった。

その気配に気がついたスキルはぼんやりと目を開けて身じろぎをする。慌ててレイピアはスキルの手を振りほどくと勢いよく体を起こす。その途端頭の上に乗っていた濡れタオルが毛布の上に転がり落ちた。

「えっ、えー？」

左手で濡れタオルをつかむ。  
それから昨日の熱が嘘のよう引いてくることに気づく。

もしかしてスキルが……？

看病してくれたといつか。

みるとみるうちにレイピアの頬が赤く染まつていった。狼狽し、困惑し、慌てて毛布にくるまる。

「あ、あ、あの……スキルが……これ？」

すっかり動搖しながら毛布の隙間から濡れタオルをちょこんと出す。スキルがガシガシと頭を搔いて欠伸をする気配が毛布越しに伝わってくる。

「ん……、ああ」

朝が弱いのか、半分眠っているような返事だった。しかしレイピアは信じられない思いでスキルの言葉を聞いていた。困惑して震える左手で口元を押さえる。

なぜ  
。

どうして酷いことを言った私にこんなに良くしてくれるのであるの？

……母がいなくなつてから今までこんな風に誰かに看病されたことなんてなかつた。一晩中付き添つて、手を握つてくれる人なんていただらうか？

いつもレイピアがベッドに倒れているときは1人きりだった。

あの時も・・・ゴーザに刺されて病院のベッドで寝ていたときも

……。

本当に裏切るつもりだったら……騙すつもりだつたらこんなことはしてくれない。

レイピアは昨日スキルにぶつけた言葉を後悔した。そして昨日の行動も。1人で子供みたいに癪癩を起こして、馬鹿な行動をした。スキルに頬を叩かれて当然ではないか……。

つーつとレイピアの頬に一筋涙が零れ落ちる。

「どうした？」

寝ぼけ眼だったスキルはそこによつやく目を覚ましたらしく戸惑つた声で尋ねてくるが、ゆっくりと首を振る。

「……看病されるのって……とても温かいものなのね。ずっと……忘れてた」

途端にふつとやわらかくなつたスキルの視線が何だか照れくさくて、視線を外したまま言葉を続けた。

「あ、あの……ありがと……」

レイピアはぶつかりまくり……小声でお礼の言葉を呟いた。

しばらく何の返事も返つてこないから不思議に思つて顔を上げると、スキルが顔をしかめているのが目に飛び込んできた。しかも熱

を測るようレイピアの額に手を置いてきたのである。

「なによ」

半眼になつて問い合わせる。

「いや、熱があるんじゃないかと思つて……君がとても素直だから  
「失礼ねつ！　だいたいあなたがいつも私をからかつてくるからじ  
やないの！」

「ああ、それでこの君らしきな」

いつもは腹を立ててしまふからかうようなスキルの口調が、今日は何だか心地良かつた。

\* \* \*

「若君……ひょっといですか？」

テントの外から声がかかる。

リグはためらいがちにテントの中に入つてくれるトレイピアの方を向く。田が合つと途端に大股で近づいてきた。思わず昨日のことでも怒鳴られると覚悟していたトレイピアは身を強張らせるが、それはいつまでも来る気配がなかつた。恐々と顔を上げてみるとこの間にカリグがへなへなと床に崩れ落ちているのが視界に映つた。

「よかつたあ……」

彼の口から出たのはその一言だけだった。けれど彼の気持ちは充分にレイピアに伝わつた。昨日は心配して眠れなかつたのだ。リグの田の下はうすらと青くなつていて、表情もどことなくやつ

れている。

リグはほっとして胸をなで下ろしたのもつかの間、すぐに手を吊り上げて得意の説教を始めた。

「まつたくもう、あなたときたら本当に無茶ばかりするんですから！ あれほど檻に近づくちゃ駄目だと言つたでしょう！？」

「腕に傷まで作つて……もうこんなことはこれつくりにして下さいよー！」

「ああ、もうまるで若君が2人いるみたいですよー。 2人とも私に心配かけるのが天才的に得意なんですから！ ……って聞いてるんですか？」

それまであたふたとレイピアの傷の具合を見たり、熱がないか測っていたリグは行動を中断してじろりとレイピアを睨む。けれど笑いは当分收まりそうになかった。あまりにもその説教がリグらしくて。心配してくれる人がいてくれるのが嬉しくて、心が温かくて。なんとか笑いを噛み殺して、レイピアはリグに向き直る。

「こんなことはもうしないわ、約束する。『めんなさー……』

心からの言葉だった。

けれど、リグときたら驚いたような表情でスキルと同じように熱を測るようにしてレイピアの額に手を置いてきたのだ。

「まつたく、失礼な人達だわ」

憤慨した口調で言いつつも、レイピアは顔をほころばせていた。それは今までスキルとリグが見たことがないくらいじびきりの笑顔だった。

眩しそうにレイピアの笑顔を眺めていたリグは、ようやく自分がここに来た使命を思い出したようにハツと顔を強張らせた。それから一瞬考え込んでちらりとレイピアの方を見た後、ためらいがちにスキルに耳打ちをする。どうやらレイピアにはあまり聞かせたくない内容らしい。

「これから……ライを……します」

レイピアが聞き取れたのはそのくらいだった。ライとは昨日レイピアを噉んだライオンのことだ。  
ライは一体どうなったのだろう?

スキルはリグの言葉に神妙な顔で頷くと、席を立つた。  
何かあつたのだろうか……？

ただならぬ様子にレイピアは体を起こしてためらってがちに尋ねる。

「ライオンが……どうしたの？」

そこで初めてレイピアに気づいたようにハツとした後、2人はお互い顔を見合わせる。

「何か……あつたの？」

再び問い合わせてみる。  
重い雰囲気に嫌な予感が生まれる。  
やがてためらいがちにスキルが重い口を開く。

「ライはこれから処分される」

声のトーンは同じなのに、その言葉だけがやけに静かになつたメント内にひとりきわ大きく響いたように感じられた。

すつと背筋が冷たくなる。

「どうして…？　だつて……あれは私が原因でしょう。あのライオンが悪いわけではないわ」

「一度でも人を噛んだ動物は処分されることになつている。……これは規則だ」

ピシャリとした物言いに、レイピアはなおも抗議の声を上げようとしたが、スキルの苦いものをただよわせた顔に思わず閉口する。彼にとってもこれは辛い決断なのだ。

団員の上に立つ立場のスキルが規則を破つたのでは下に示しがつかない。

「でも……でも……」

レイピアはその後に続ける言葉が見つからなくて、唇を震わせてうつむいた。

若い雄ライオンのライはサークルで火の輪ぐぐりと玉乗りをしていた。

炎のようなタテガミと金色のしなやかな体躯。その雄々しいライオンが調教師の手によって従順に技をこなしていく様は人々を魅了してやまなかつた。つい最近デビューしたばかりだったのだが、瞬く間に人気を集めていつた。

しかし。

ライの最後は静かなものだつた。

食事に混ぜられた毒。苦しまないよう一瞬で逝けるものが使われた。

ライはそのことを知つてゐるのか、知らないのか静かに食事を食べ続けていた。

あんなにも雄々しくて王者の威儀を見せていたライはうずくまるようにその場に倒れこむといとも簡単に、あっけなく……眠るようにして息を引き取つたのだ。

レイピアはその光景を見ていられないと思つた。けれど、必死で目を背けないようにしてその光景を焼きつけていた。

スキルには来るなと言われたけれど、レイピアにはその光景を見なければいけなかつたのだ。

私のせいなんだから……。

私が馬鹿な行動をしたんだから……。

すでに事切れているライと鉄格子ごとに向かい合つ。冷たい鉄格子が妙に生々しかつた。

若い雄ライオンのライは死んでもまだ威厳に満ちていた。  
これからまだ活躍する機会があつたというのに。

未来はまだ続いていたというのに……。

人の手によつて突然切られてしまった未来。

「『めんなさい』……」

はらはらと自然に涙が溢れてきた。涙を拭うこともせずにじつと  
レイピアはその場で涙をこぼした。

ライの最後を見取りに来たスキルも、リグも団員達もじつとその  
場でその光景を見ていた。そうしてしばらく泣いた後、レイピアは  
スキルや団員達の方に向き直り、その場で膝を折った。  
その光景に言葉を失つて、団員達は息をのむ。

「『めんなさい』……」

両手をついて、深く頭を垂れる。

「私は……っ、あなたたちの大切なライオンに酷いことをしました

かされた声で「『めんなさい』」と呟きながら何度も何度も頭を下  
げる。

はらはらと瞳から落ちた涙は地面に染みをつけた。黄土色の土が  
その部分だけこげ茶色に変わる。

「違うつ、あんたじゃない……俺が悪いんだ！」

その静寂を破つたのはブレンだつた。

それまで睡然としてレイピアの姿を見ていたブレンはとつとつ見

かねて声を出した。

「俺が……馬鹿な提案をしたから……」

レイピアの側に駆け寄ると、ブレンも同じように団員達の方に向  
き直つて膝を折つて土下座をした。

レイピアもそれに合わせて頭を下げる。  
ざわめく周囲。

黙つてその様子を眺めていたスキルは、やはり無言のままブレン  
とレイピアの腕を掴んで立ち上がらせた。

「もういい……もう充分だから」

スキルの言葉に刺激されたように団員達はすぐにレイピアとブレ  
ンの側に駆け寄ってきた。

誰もがすまなそうな、照れたような顔をしてレイピアを見る。

「そうだよ、もう充分だよ。顔をおあげ、美人が台無しじゃないか。  
ほらブレンも……」

「今まであんたのこと貴族で鼻持ちならない態度の女って誤解して  
たよ……」「めんな」

それは今までの彼らからは想像がつかないくらい温かい声だった。  
その声が嬉しくて、またレイピアは涙をこぼした。

\* \* \*

その事件がきっかけになつたのに間違ひなかつた。  
初め、団員達はレイピアを見たときに「貴族の娘」「スキルの敵」  
とこうことからあまり好意を持つていなかつた。

けれど昨日のレイピアはまさしく貴族の娘ではなく、1人の人間として土下座までして自分達に謝罪をしたのだ。それがとても好ましかった。同時に自分達が彼女に持っていた偏見を恥じた。

相変わらずレイピアがスキルの敵であることには変わりはないけれど、今では少し見方が変わっていたのだった。

なぜなら……2人のやりとりはとても楽しそうなのだ。

お互いに皮肉ばっかり言い合っているが、どう見ても仲の良い2人がじやれあつていてるとしか思えない。

この様子ではレイピアがもし賭けに勝つたとしてもスキルを捕まえることはまずないと思った。

だから団員達がレイピアと仲良くなるのにたいして時間はかかるなかつた。

「今回のこととは全面的に俺が悪かつた……処分は受ける」

そっぽを向いたまま、ぶつきりぱりぱりブレンは言った。スキルはため息をつくと、皿を細めてブレンの頭を軽く小突く。

「それはさつきの土下座で充分聞いた。こつまでも気にするな

スキルはブレンのした行いについて深く追求をしなかつた。

なんとなく予想はついていたから。ブレンはスキルのためにレイピアを追い出そうとして熱くなつていたのだろう。そして今回の騒動が起きた。

ブレンとレイピアの様子からいつて2度とこんなことは起きまい。だから、あえてほじくり返そつとは思わなかつた。

「それでも……俺はライの件で処分を受けなくちゃならない」

頑としてその場から立ち去らないブレン。おそらく彼はスキルが処分を言い渡すまでいつまでもここに居座りつづけるだろう。長い付き合いのスキルには、容易に想像がついた。

仏頂面であぐらをかいている頑固な親友に対して苦笑する。

「なんて頑固な奴だ。我が親友ながら恐れ入るよ」

「親友だからって特別扱いはナシだ。どんな処分でも受ける」

どうしたものかとスキルは考え込む。

ブレンを罰する気はない。もちろんレイピアも。2人はすでにそれ相応の償いはしたのだから。

しかしそれではブレンは納得しないのだろう。

「それじゃあお前はこれから2週間の謹慎だ」「わかった」

謹慎とはステージに立てないことを意味している。2週間はかなりのブランクになるのだが、しかしながらそれが当然であるようにブレンは頷いた。

「ああ、謹慎中はリグの仕事でも手伝ってやれ」

名案が浮かんだとばかりに手を打つてスキルはにこりとブレンに笑いかける。

真面目とも冗談とも取れないようなスキルの発言にブレンは派手に顔をしかめて抗議の声をあげる。

「リグの！？ 勘弁してくれ。あいつの側に一日中いたらお説教の嵐で胃に穴があく！」

それはブレンの言い分だつたが、リグにとつても同様だろ。

「ブレンと一緒に行動なんてしたら私の胃がもちませんよ。」

「あつとやつ言つて違ひないが、こりはリグに我慢してもいいこと

しよ。

「性根をたたき直してもらえるかもしれんぞ？」

「へつ、それだったら俺だけじゃなくてお前も一緒にやるべきだね

お互い軽口を叩き合つた後、顔を見合させて笑つた。

あの事件から2日経つた今、団員達がレイピアに対して妙に好意的になつてゐた。食事を取りに行くときも、顔を洗いに行くときも決まつて声を掛けてくれる。

シャンナリーと一部団員の嫌がらせは完全にとは言えないが確實に少なくなつてきてるので、たいして気にならなくなつていた。

団員達のレイピアへの態度が変わったように、彼女の団員達への態度も少しずつ変わりつつあつた。積極的とまではいかないが、関わりを持とうとは思つてゐるらしく団員達の顔を覚える努力をしていた。

レイピアが得た情報としてはこのサークスには60人もの団員が生活していて、1人1人がきちんと役割を持つてゐるということだった。

空中ブランコをする者、綱渡りをする者、道化師、調教師、小人として活躍している子供の団員までいた。ステージに使われる音楽の演奏も彼らが行なつていたし、ライトの調節や様々な雑用をこなす者もいた。

サークスを良く知らないレイピアにとっては空中ブランコや綱渡りと聞いてもピンと来なかつたが、練習する彼らを見る限り人間離れした技をやさうとしていることがわかつた。

彼らは實に氣さくでレイピアを見つければバシバシと肩を叩いて快活に笑うのだった。

まるで仲間のような扱いだ。

不思議とレイピアはそれが嫌ではなかつた。むしろ嬉しく思つて

いる。

しかし

。

「せりほり、やつやと食べとくれよ」

声を掛けられてハツとして顔を上げると田の前にアリーが立っていた。アリーはこのサークルで彼らの食事を作ることを任されていた。ふくよかな体型をしていて、ハキハキ物を語るタイプの女性である。しかしながら彼女は団員達の母親的役割をしているため誰からも好かれていて、レイピアも彼女を好いている一人だった。最初のうちはアリーのストレートな言い方に辟易することがしばしばあつたけれど今ではだいぶ慣れてしまった。

「ええ、『めんなさい』

「なに考え方してんだい、右手が不自由なんだから余計食べるのが遅くなっちゃうだろ？」「食器が片付かないったらありやしない」

しかしその口調とは裏腹にアリーは左手にもつている鍋のスープをすくい上げてレイピアの器に盛りつける。なみなみと注がれたスープは今にもこぼれてしまいそうだ。

「ほんとに食べられるかしら？」

レイピアは包帯をぐるぐる巻かれた右手で不器用にスプーンを使つてそれを飲む。傷は少しだけ痛むが、動かせないほどではない。

「あなたは細いからもつと食べなきゃ駄目だよ」

アリーはそう言ってバシバシとレイピアの背中を叩いて快活に笑う。思わずつられるようにしてレイピアも笑つてしまつ。

「ああ、やつぱりあんたは笑うとかわいいよ。いつもそりしてな、男が放つておかないよ」

アリーの言葉にレイピアはたいして興味がなさそうに肩をすくめるだけだった。

「あら、レイピアにはスキルがいるじゃない」

思わずブホッとレイピアは飲んでいたスープでむせて、恨みがましい目で口を挟んできた少女を睨んだ。そのレイピアと同じ年頃の娘は名前をシアと書いて、スキルの空中アクロバットのパートナーでもある。

美しい栗毛色の髪の毛をポーテールにしていて、その顔は人懐っこさを感じさせる。そして彼女の顔にあるそばかすは立派なチャームポイントになっていた。

彼女とは昨日友達になつたばかりだ。

シアはレイピアがここに来た時から興味を覚えて話し掛けてみたかつたが、きっかけがなかつたので声を掛けられずにいたという。あまり年の近い親しい友達のいなかつたレイピアにとつて彼女の存在はくすぐつたけれど嬉しいものだつた。

シアは人懐っこい笑顔を浮かべると「あら、違うの?」と言つて首を傾げてみせた。

「冗談じゃないわよ。何でスキルなの」

「だつてスキルがこんなにも1人の女性にかまつことつてなかつたもの」

そう言つてシアは意味ありげににやにや笑つ。おそらく彼女はこの手の恋愛話が好きなのだろう。昨日もあれこれとスキルとの話を

聞かせて欲しいと興味津々で尋ねてきたくらいだ。おかげで夜通しでスキルとの出会いから今までのことを話す羽目になつた。彼女が考えているような甘やかな感情をスキルには抱いていないということを話すと、少しがつかりした様子だったが。

レイピアはいい加減うんざりした顔つきで盛大にため息をつく。

「馬鹿らしい。だいたいスキルにはシャンナリーがいるじゃない」「ああ、それはねえ……レイピア」

シアは少しだけ困ったように眉をひそめて言葉を濁らせる。

「スキルって特定の女性に執着しないのよ。だからね、あいつが色んな人と関係を持つのはお互い合意の上なの。割り切っている。シャンナリーとのこともそうなのよ。だから……えーっと……つまりシャンナリーは恋人というわけではないのよ」

一言一言シアは言葉を選びながらしゃべつた。スキルとシャンナリーの関係を否定しているようだが、結果としてスキルの悪癖を暴露する形になつていて。レイピアは冷ややかな目でシアを見る。

「不特定多数と関係を持つてるわけね。最低……」

そこでシアはハッとしたように首を横に振る。

「あ、でもねスキルがあなたに対する態度はちょっと違うのよね。とっても楽しそうっていうか。あなたが来てからはスキルの悪い癖も治ったみたいだし。これはもう脈アリかなって」

一人納得したようにシアはうんうんと頷く。

実際、レイピアが来てからはスキルのテントに女性が入りするということは無かつた。

「スキルが私をかまうのはダイヤの争奪戦をしているからよ。それ以外何でもないわ」

「あなた本気で言つてる？　だとしたらかなり鈍感よ」

「私はスキルに弄ばれて捨てられるのなんてごめんだわ。……それに男なんて大嫌いなの、そういう話はして欲しくないわ」

不快感をあらわにしてレイピアはそこで話を打ち切つた。もう何も聞きたくないと言わんばかりに立ち上がる。

かつて恋人だった男に裏切られた。

そんなレイピアの過去を知らないアリーとシアは急に不機嫌になつたレイピアにただ困惑した顔を浮かべることしかできなかつた。

\* \* \*

団員達と仲良くなれたのは嬉しい、けれど。

いつかそれは終わりのくる関係でしかなかつた。1カ月という期間が終われば、それまで。

たとえゲームに勝つたとしても、負けたとしても同じこと。別れは必ずやつてくる。

そのことがレイピアの心にしごりとして残つている。

彼らと仲良くなれば、なるほどそれは大きくてなつて心に黒い染みを落していく。空気のように扱われていた時はそのことで心を重くして、今度は仲良くなつたことで心を重くしている。なんて矛盾しているんだろう。

何を弱気になっているのかしらね。

私はただピンクダイヤを取り返す、そのことだけ考えていればい

いんだから。

レイピアはテント街から少し外れた所に生えている大きな木に寄りかかってそっとため息をついた。

「よう、何シケた面してんだよ」

突然後ろからかけられた声にぎくじと動きを止めてその主、ブレンをまじまじと見る。

ブレンと顔を合わせるのはライのことがあった日以来だ。しかも彼が今までレイピアにこんなにもぐだけた口調で話しかけてきたことは一度もなかった。

また何か企んでいるのでは、という疑念が浮かんで自然と身を固くして警戒する。

「はっ、嫌われたもんだな」

ブレンはたいして気にする風でもなく肩をすくめてみせる。

レイピアはブレンが苦手だった。彼が近くにいるだけで居心地の悪さを覚える。こないだまで嫌がらせをされていたことが理由の1つにある。しかしそれだけではない、別の理由があるようと思える。それが何なのかレイピア自身ハツキリとわからなかつた。今まで

は。

レイピアの視線はブレンの褐色の肌に留まる。ホットリープ周辺ではあまり見かけないその肌の色は大陸の東に住む人間特有のものだ。大陸の南にあるホットリープと東の方では髪の毛の色も、肌も、顔立ちも、そして生活習慣までも全く異なっている。ブレンはおそらく東の出身なのだろう。

褐色の肌。

……そ、うか、コーヴの肌の色と一緒になんだわ。

コーヴの肌も彼と同じような褐色の肌だった。ブレンとコーヴの容姿は全く異なっているため、今までブレンに抱いていた居心地の悪さの正体に気がつかなかつたのだ。

レイピアが黙り込んでじつとブレンを見据えていたので、不審に思つたブレンは顔をしかめる。

「なんだよ？」

「……いえ、なんでもないわ。あなたこそ何の用なの？」

「俺がここに来たのは……つまり……え、つと」

言つべき言葉を頭の中で整理できていなかつたらしく途端に言葉を詰まらせてモ「モ」「モ」と口へりもる。動搖しているのか手のひらを握つたり、開いたりして落ち着かなく宙に彷徨わせている。

今度はレイピアが怪訝な顔をする番だ。

「……何が言いたいの？」

レイピアの冷めた問いかけにブレンはほんと咳払いをして言葉を続ける。

「あー……つまりだ、その、何でいうか……今まで悪かつたな

語尾の方は半ば怒鳴りつけるような形で言い放つて、すぐにそっぽを向く。レイピアの位置からブレンの逸らした顔がわずかに上気しているのが伺えた。レイピアは微かな驚きをもつてその言葉を聞いていた。

わざわざそのまま言葉だけを置いてきたのだろうか。

「確かに俺のやつたことはつまんないことだったな。そのことについては謝る。でも、まだあなたのことを認めたわけじゃないぜ。とりあえず今のところはスキルに害がなさそうだから放つておいてやるよ。」

一気にまくしたて言いたいことだけ言つてしまつとブレンは顔を背けたままの体勢で走り去つて行つた。

サークルの芸の基本とは訓練に訓練を重ねることである。そしてひとつの中の形が仕上がつたら、あとはひたすら同じ事をくり返す。疑問は不要、迷いは禁物。

スキルは早朝の訓練を行なつていた。パートナーであるシアとの練習はすでに終えて、ステージにいるのはスキル只一人。

彼のサークルでの役目は空中アクロバット。天井に張られた一本のロープを使って、指の力を頼りに体重を支えてさまざまなポーズを取りながら演技をする。

このアクロバットは天性の体のしなやかさだけでは不十分で、筋肉も充分に鍛えられていなければならぬ。そうでなければ反りかえった筋肉を元に戻したりすることはできないから。

訓練とはいえ、アクロバットには相当の体力を消耗する。すでにスキルの服は汗のせいでピタリと体に張りついてしまっていた。額から流れ落ちる汗を手の甲で拭い取る。

今の季節は春だから良いものの、これから季節を考えると気が重い。中にはその暑さと厳しい訓練ゆえに倒れてしまつものもいるほどだ。

一通り訓練を重ねた後、スキルは床に腰を下ろして休憩をした。力いっぱい空気を吸い込んでまるで猫のように伸びをする。

「『』飯だよ。まったく、こんな時間まで訓練かい？」

そう声をかけて、朝食を載せた盆を片手に現れたのはアリーだった。そのぶすっとした声からは決まった時間にご飯を食べててくれないと困る、という非難めいたものが伺える。スキルはたいして気にする様子もなく片手をあげてアリーを迎えた。

「やあ、アリー。わざわざすまないね。いつもならリグが届けてくれるはずなんだけど……リグはどうしたんだ？」

いつもなら朝食を持つてくれるはずの、今はこの場にいないリグの姿を探す。

「リグならまだ動物達の世話をやつていろよ。ブレンが今日から手伝つてゐるつていうけどあれじゃあ余計に仕事を増やしてただけだね」

アリーの語るところによると、ブレンがつまづいた拍子に動物の餌をぶちまけてしまつて、それを運悪く頭から被つてしまつたリグとで後片付けをしている最中なのだといつ。

話を聞いたスキルは思わず苦笑をもらつた。

「笑い事じやないよ。あなたは昔からリグを困らせることしかしないんだから」「

アリーはあるでいたずら小僧を叱る母親のような口調で言つ。事実いつも温和でのほほんとしているソアラはめつたにスキルを叱ることがなかつたから、変わりに叱るのはアリーとリグの役目だつた。

「あの娘のことだつてそつ。氣づいてるのかい？　あの娘は心に傷を持つてるよ。笑うとかわいいつてのに、つんけんしててめつたに笑わないんだから」

「なんとなくはね、気づいていたよ」

あのとき。

レイピアが腕に怪我をして熱を出して眠つていたとき。

何度も寝言でつぶやいていた言葉がある。

コーナ。

不安そうに眉根を寄せて痛いであろう右手を伸ばして誰かを捜し求めるように何度も宙にさまよわせた。

おそらくそのコーナという人物と何かがあったのだろう。あの事件のときのレイピアの過剰なほどの荒れた様子も少なからずその事が関係しているのではないかと思う。

生憎それが何であるかは鋭いスキルでもさすがにわからなかつたが。

「あんたはそれがわかつてゐるのにあの娘っこをいじめてんのかい！」

？」

まつたくなんて悪ガキだらうね、そう言つてアリーは腕組をしたまま盛大にため息をつく。

スキルは苦笑して肩をすくめる。

「俺にもどうしてだか……。ああ、きっとあれだね、好きな娘にいたずらをしたくなるつていうやつ。あれはそつか……こんな感じなのか」

一人で納得したようにつぶやくスキルに、呆れかえったようアリーは聞こえよがしにもう一度ため息をつく。

「何言つてんだい、いつまでたつてもでつかい子供みたいなんだかうら」

「正直おお嬢さんに対しどう接していいのかわからないんだよ。いつも怒らせるか泣かせてばかりだ」

「まったく不器用な子だよ。経験は人一倍多いくせして肝心の女心

がわかつてやしないんだから……いいかい、これだけは言つとくよ。あんたがあの娘っこに本氣で惚れちまつたってんなら喜んで応援するよ。こんなめでたいことはないからね。でもね、そうでなかつたら、……遊ぶつもりなら深く関わるのは止めておきな

今度こそあの娘の心は壊れちまうからね。

そう言つたアリーの言葉にスキルは「肝に命じておくれ」と、それだけ返した。

アリーの意見は正しい。

レイピアの心はガラスのようだ。性格はレイピアとこの通りの名にふさわしく鋭いものがある……けれどそれは表面上のもの。実際の彼女は触ると壊れてしまふガラスのようだもろい。あのつんけんとした態度はそつやつて人から自分の心を遠ざけてこように思える。……心を守つているのだ。

だからこそどう接してよいものか戸惑つ。

ゲームの対象としてレイピアを見ていくのなら話は簡単だつた。極力関わらないようにして、ピンクダイヤを守つていれば良いだけなのだから。

なのに、ついレイピアの顔を見ると引き寄せられるみたいに近づいてしまう。

わざと挑発したり、からかつて怒らせたり。レイピアの反応一つ一つを見るのがいつの間にか楽しくなつていた。

自分は彼女に惹かれている。

そう思つようになつたきっかけはあの事件。

ライのために涙を流したレイピアの姿がたまらなく美しいと思つた。けれどそれはほんのきつかけにしか過ぎなくて、たぶん最初に一目その姿を見たときから惹かれていたのだろう。

いつもなら……少しでも好意を持った相手がいたら、すぐに口説

いたしめうとこ「の」。しかし、やうじてもかの一步が踏み出せますにいる。

俺らしくもない……。

前髪を搔きあげて自嘲する。

スキルには悪い癖がある。

口説いた女性と長く続かないのだ。いつも関係を持った上で、終わりにする。その繰り返し。

自分でも悪い癖だと思っているけれどどうしようもないのだ。彼女達に対してもう一度冷めてしまふ自分にいつだつたカリグが言った言葉があった。「きっとそれはあなたが彼女達に対して本気ではなかつたといふことでしょうね」と。

レイピアに対する気持ちも、同じなのかもしれない。

単に普通の娘よりも毛色が変わっているから側にして楽しいだけで、一度でも関係を持つてしまえば、そこで終わってしまう気持ちなのかもしねない。

今度こそあの娘の心は壊れちまうからね。

アリーの言葉が頭の中で反芻する。  
そう、だから迂闊に踏み込めない。

\* \* \*

「若君

つ――」

凄まじい程の足音を立てて、サーカスのステージに駆け込んで来たのは顔を怒りで真っ赤にしたリグだった。その後からブレンも同

じょうに顔を真っ赤にして入つてくる。

何事かとスキルとアリーは顔を見合わせて首を傾げる。

「どうして私がブレンと仕事をしなくちゃならないんですかー！  
ブレンときたら手伝うどころか余計に仕事を増やすんですから！  
「俺だつてお前なんかと仕事なんかしたかねえや！ 口を開けばお  
小言ばかり言いやがつてー！」

ぎやあぎやあとリグとブレンは顔を向かい合わせて怒鳴りあつた。  
スキルは先程アリーが言つていたブレンが餌をこぼしてリグに引  
っ掛けたという言葉を思い出す。  
リグを見ると服のところどころに野菜をすりつぶした餌がくつ  
いていた。

「朝から賑やかなだな」

笑いを噛み殺して声を掛けると、途端にリグがキッと睨んで振り  
返つた。そして恨めしそうな顔をしながらスキルに詰め寄る。

「若君／＼／＼／＼／＼ もしかしてこれは私に対する新たな嫌がら  
せですか！？ そうでしょう、そうなんでしょう！？」

「嫌だな。俺は純粋にリグの負担を軽くしてあげようとブレンを手  
伝いに向かわせたとこりのに」

心外だな、とばかりに顔を曇らせる。彼を知らない者から見れば、  
心やさしい青年が純粋にリグの身を案じているように映るかもしれ  
ない。顔だけは穏やかなので余計にタチが悪い。

「そんな顔しても騙されませんよ！ ……ああ、もうどうしてあな  
たは私を困らせてばかりなんですか！」

とうとう泣きそづな顔で詰め寄られたので、今度ばかりはスキルが折れることにした。

さも残念そうに顔を歪めて。

「仕方ないな、ブレンには違う仕事についてもらうとするか……。そうなるとリグには余裕ができるな……じゃあ違う仕事を引き受けでもらうとしよう。もちろん受けてくれるな? リグ」

スキルに浮かんだ笑顔はまさしく新しい悪戯を思いついた子供の顔そのものであつた。笑顔であるものの、スキルの物言いには有無を言わせぬ迫力がある。

嫌な予感がしたリグが何とか断りつつするより前にスキルが差し出したのは一枚の紙。

紙には鮮やかな色彩を使ったイラストが描かれている。  
その長方形の紙はサークスのチケットだった。

「これは……?」

「サークスの招待状さ。もちろんあのお嬢さんには」

今度は何をたくらんでいるんだろう……?

サークスのチケットを受けとったままリグはちらりとスキルの顔を向つ。生憎その顔からは何も読み取ることができなかつた。

「レイピアー！ もうきブレンと話してたって聞いたけど……あのバカ、またあなたに変なこと言つたんじゃないでしょうね？」

慌てた様子でレイピアのテントに駆け込んだシアは開口一番、そつと言つた。

こつも何かしら出来事があるとあつとつう間に団員達の間に話が広まつてしまつのである。噂話や事件の話が好きな団員が多いのだる。今度はどこからそんな話を聞きつけてきたのかしら、と疑問に思ひながらもレイピアは首を横に振る。

「ううん、そんなんじゃないわ」

「え？ それならよかつた。ブレンって単細胞ですぐにカーッとなるし、どうしようもないバカだけどあれもスキルを思つての行動だつたのよ、許してやつてね」

まるでシアは自分のことのようになつてレイピアに対してもまなそうな表情をする。

「あのバカつてばいつも行動に考えなしだし、結局自分の足を自分で踏んで自爆するタイプなのよね~」

「……ねえ、シアつてブレンが好きなの？」

しきりにブレンをけなしていふシアだつたが、その口調に含まれている微妙な雰囲気をかぎとつたレイピアは確信を持つてつぶやいた。途端にシアは顔を真っ赤にして慌てふためく。

「な、なに言つてるのよー！ そんなわけないじゃない！ あいつはただの幼なじみなんだから」

「あなた達つて幼なじみだつたの？」

「そうよ。小さい頃から一緒にいるからあいつは手のかかる弟みたいなもんなの。だから特別な感情なんてないんだつてばー！」

「ふうん、まあそういうことにしておくわ」

むきになつて否定するシアの様子があもしろくてたまらないという風にレイピアは唇を笑いの形に歪めて肩をすくめる。そのレイピアの含み笑いにシアは反対におもしろくなれりむー、と唸る。

「レイピアって……どうして自分のことには鈍いのに人のことにになると鋭いのかしら」

「何か言つた？ シア」

「なんでもない……」

「あ、あのお取り込み中すいませんが……」

ためらいがちにテントの外から声がかかる。恐らくレイピアとシアが話し込んでいたからテントの中に入るタイミングを決めかねていたのだろう、リグは遠慮がちにテントの中に入ってきた。

「どうしたの？ リグ」

「これを受け取つてください」

そう言つたリグから手渡されたのは一枚のチケットだった。

「何なの？ これ……」

レイピアはそれを片手に持つてひらひらと振る。

「サークスの招待状ですよ、若君からあなたへ」  
「どうして私が招待されるのかしら？ 何か罠でも仕掛けあるのかしらね」

チケットを口元に押し当てるで考え込む仕草をするレイピアにリグはさあ、と苦笑いして曖昧に答える。リグ自身スキルがレイピアを招待した理由をわかつていないのだろう。

「前にも言ったと思うけど、私はサークスなんて見る気はないわよ」

それは本心だ。

その思いは前とは違う理由からだけど。

かつて持っていた盜賊に対して軽蔑しきっていた気持ちは自分でも驚くほどに無くなつていた。

彼らは気さくで、親切で、楽しい。それを好ましく思つている自分がいる。だからこそこれ以上、踏み込んではいけないと思つた。ゲームが終わる日のために。

彼らのことを深く知りすぎてはいけないと思つた。

離れられなくなつてしまふから。

レイピアは頑ななまでにサークスを見るのを拒んだ。途方に暮れて困り果てたリグに助け船を出したのはシアだつた。

シアはレイピアの手を握つて懇願する。

「私からもお願ひよ！ サークスを見てちょつだい。レイピアに私のアクロバットを見て欲しいのよ」

「お願いします、レイピアさん。きっと若君はあなたにサークスの楽しさを知つてもらいたいのかもしれません！」

ここに来てからといつもの何かと親切にしてくれたリグ、そして友達のシア。2人に懇願されではさすがのレイピアも断り続けることができなかつた。

もともと押しに弱い性格なのである。

「わかったわよ、でも……つまらなかつたらすぐ出てくからねー。」

\*\*\*

サークスの開演時間までまだ時間がある。

シアもリグも開演前の準備のために出て行つてしまつた。テントに1人になつたレイピアはチケットを握りしめたままベッドに横になつた。

相変わらず右手はまだ痛む。

あの事件から全てのものが少しずつ変わつてしまつたような気がする。

団員達のレイピアに対する態度、レイピアの団員達に対する態度。  
そして……

スキルとの関係。

あの事件の後も相変わらず皮肉ばかり言い合つて、ダイヤをめぐつて攻防戦をくり返している。右手を怪我しているにも関わらず一切手加減をしないスキル。だから初めは考えすぎかもしれないと思った。

けれど……何かが違うのだ。

たとえば食事をしているとき。  
ふと背中に誰かの視線を感じる。振り返つてみると必ずといつて

いいくらいにスキルがいる。田が合つてもスキルは逸らせるビビりかいつまでも、いつまでもじつと見つめてくるのだ。だからレイピアの方がギクシャクとして先に逸らしてしまつ。

たとえば包帯を巻き直しているとき、傷に良く効くと言つて薬草を持つてきたスキル。不器用な仕草で包帯を解くレイピアを見かねたスキルが代わりに包帯を解いて傷に薬草を塗りこんだ。ところが処置が終わつても一向にレイピアの手を取つたまま放そうとしない。痛々しそうな顔をして傷口を見つめる彼に対しても感つた声を出すとそこで我に返つたように顔を上げ、その数秒後にはいつものからかうように口元に笑みを浮かべた表情に戻つている。

何かが変だ……。何かが少しずつ変わつている。

でも考えるのはよそつ。

鈍るから。

迷いが生じるから。何も考えてはいけない。

考えて良いのはピンクダイヤモンドを取り返すこと、ただそれだけだ。

## 第9章 楽しいサークル

「さあ、楽しいサークルが始まるよー。」

レイピアが向かった先、赤と白で縁取った券売所の前では奇妙な格好をした男が身振り手振りをまじえて、今から始まるサークル・ショーを面白おかしく紹介していた。

その男の服装は水玉模様のだぶだぶズボンに赤と白のストライプのシャツという何とも派手な服装をしている。奇妙なのは服装だけではなくその顔。

黄色の毛糸で作られた髪の毛をカツラのように被り、顔は真っ白で真っ赤に塗りたぐられた唇は頬の辺りまで伸びている。そしてまん丸の赤鼻。

その男は団員の誰かが変装しているものなのだろう、しかし声も顔も変わっているため誰なのかはわからない。レイピアが奇妙なもののを見るような目で男を見ていると、男も彼女に気がつきその奇妙で、もとから笑っているようなその顔をさらに笑みの形に歪める。

「おや、お嬢さん。そんなに目をまんまるくしちゃって。私がそんなに奇妙ですかい？ 私はピエロって言つんですけど……ああ、ご存知ない。それじゃあ親愛の丘にこの風船をどうぞ。」

そのピエロはやけに動作を大げさにして片手に持っていた風船の束からその一つをレイピアに差し出した。

「え、あ……ありがと！」

戸惑いながら赤色の風船を受けとる。風船など手にしたのは生ま

れて初めてだった。幼い少女のよつてレイピアの心臓はドキドキと高鳴る。

「いいな」と後ろから声が上がる。サークルを見に来た子供達がすぐ側でレイピアの持つ風船を羨ましそうに見上げていた。ピエロはそんな子供達に向かつて手招きをする。

「ほりほり焦らないで」ひたすらおこで。風船はまだまだたくさんあるよ

その言葉に誘われるようにな子供達は一気に口を囲んだ。それを視界の隅に入れつつ、レイピアはテントの中へと足を運んだ。

テントの中はすでに熱気が立ち込めていた。座席の部分はよく見えるようになりテントの中で照らし出されて、そこだけがやけにハツキリとテントの中に浮かび上がっている。

チケットに書かれた席番号を探して歩き回っていると急に一番前の座席からさつと手が上がった。リグである。

「レイピアさん、いらっしゃですよ」

手招きしてレイピアを呼び寄せるリグの隣には足を組んだブレンも腰をかけていて、何で俺がこんな所に来なくちゃなんねえんだ? とその表情は語っている。

「どうしてあなた達がここにいるの?」

「一人で見てもつまらないだらうから……って」

「スキルが言ったの?」

「ええ。私は仕事が終わって暇ですし、ブレンは謹慎中ですからね」

うつせーよ、と仮頂面でブレンが言つ。

確かに周りを見ると親子や恋人同士ばかりで、1人で見にきている者などいなかつたからそのさりげない気遣いをありがたく思つた。風船を椅子にくくり付けてから腰をおろす。椅子はそれほど固くもなく、ほどよく綿を詰めた布が敷かれてあつたので座りやすかつた。

「もうそろそろ始まりますよ」

観客席を煌々と照らし出していたライトが徐々に消え、ステージの中央だけに光が集められるとそれまで賑やかだった観客席は一斉に静まりかえつた。

それが始まりの合図。

「ようこそ我がサークス団へ！」

朗々とした声がテント内に響き渡る。ステージの中央にはいつの間にか現れた黒い燕尾服とシルクハットを被つた壮年の男が両手を掲げて観客達に感謝の言葉を述べた。

その壮年の男はサークス団の団長、つまりスキルの父親である。レイピアは2度ぐらい会つたことがあるが、その時の団長のイメージというと豪快で荒々しい感じで本当にスキルの父親だろうか？と思わせるような人だつたが、今ステージで観客に声をかけている団長の振る舞いはどこかと貴族的で紳士的に見える。

それは団長だけに限つたことではなくて、団長の側に控える団員達も皆別人のように顔つきが変わつて見える。やがて挨拶を終えた団長が服をひるがえしてその場から立ち去ると、軽快な音楽が鳴り始めてステージ左右の照明が舞台を照らしてキラキラと輝き出した。すでにこの時点でレイピアの心はサークスという名の魔法に捕まつてしまつた。うつとりと頬を上気させて調教師の指示に従つて器

用に足を動かして玉乗りをするクマやへぬへぬと踊るみづとさんぽ  
返りする曲芸師を見つめた。

演目の組み方もまた見事なもので、空中ブランコのように入シリ  
ングで見ていて冷や冷やしたかと思えば、すぐピロロの辺につけ  
て笑いが起きる。スリリングなものとほつと一息つく演目が交互に  
組まれているのだ。

観客まで引っ張り込んでのピロロの道化は本当におもしろくて、  
笑いすぎて思わず涙をこぼしちゃうになつた。

「す」「のね……私、こんなに楽しいものを見たのは生まれて初めて  
よー！」

興奮したまま、両手を握り締めて言つレイピアにリグは微笑みの  
形に手を組め、ブレンは腕を組んだままの姿勢で得意げな顔をした。

「あたりまえじゃねえか！ なんたつて俺達のサークัสだぜ」

「ブレンは謹慎中ですけどねえ」

「だー、ひっせえぞリグ！」

お互この口をひっぱつあつて喧嘩じになるブレンとリグにレイ  
ピアはくすくすと笑いをこぼした。

「次の演目が始まるわ。何かしら？ ……あ

レイピアはステージを見つめたまま、固まる。その視線の先には  
ふわりと妖精のように軽やかにステージに立つシャンナリーの姿が  
あつた。彼女はマスカットの瞳と同じ色のステージ衣装を着ている。  
その衣装は肩とお腹の部分が露出していて体のラインがくっきり出  
るタイプのものだったが、シャンナリーが着ると愛らしい顔立ちゆ  
えに少しも下品さが感じられない。その愛らしい顔でにこやかに觀

客席に手を振るものだから男性客はおろか女性客の視線もシャンナリーに釘付けになつた。

「続きましては我がサークัส団でも指折りの美女、シャンナリーによるナイフ投げでございま～す！」

やけに大げさな身振り手振りで舞台進行をするのは道化師の姿をした団員だった。

観客達がわきあがる中、レイピアだけは釈然としない思いを抱える。

なぜか観客の方に向けられているはずのシャンナリーの視線が、レイピアただ1人に向けられているように思えて仕方がなかつたらだ。

「この演目はお嬢さんの中から1人に手伝つてもらいます。そうですね……それじゃあそここの女性に手伝つてもらいましょう」

シャンナリーは愛らしげに声で言つて、真っ直ぐレイピアの方を指差した。

一斉に観客の目がレイピアに注がれる。

「わ、私っ……!? なんでっ！」

ステージに上げられるなんて一言も聞いていない。

慌てふためいてリグに助けを求めるが、彼も今初めて知つたという風に首を左右に振つてみせた。

「私もこんな話は聞いてません……。でも、シャンナリーのナイフ投げの腕前は一流ですから怪我する心配なんてありませんよ」

声をひそめて、レイピアに耳打ちする。

「違うの、もうじゃなくって……」

私が心配してるのは 。

そう言いかけて口を引き結んだ。

レイピアにはシャンナリーが何か企んでいて、仕掛けてくるのではないかと思えてならないが、しかしリグもほとんどの団員もシャンナリーの本性に気付いていない。きっと何を言つても信じてはもらえないだろう。

「大丈夫ですよ。まあ、ステージの方へどうぞ」

「こっやかに笑うシャンナリーの姿はまさに小悪魔そのものに思えた。

ため息をつくと覚悟を決めたレイピアはステージの上へと足を踏み入れた。

「あいつ……何する気だ？」

ただ一人、シャンナリーの本性を知るブレンだけは眉をひそめてつぶやいた。

ステージに上がったレイピアはシャンナリーの指示されるままに演出のために用意された木の机の所に導かれた。その机はちょうど人間の背丈ぐらいの高さで、4カ所から金属の鎖が延びている。シャンナリーはその鎖でレイピアの両手と両足をゆっくりとした動作で繋ぎ始めた。

「一体どうこいつもりなのよ？」

観客には聞こえないよう声をひそめてレイピアは抗議の声をあげる。するとシャンナリーは観客からは見えないよう真っ赤なルージュで塗られた唇を笑みの形に歪めた。

「あら、そんなに警戒しなくってもいいじゃない。あたしは純粋にあなたにサークスを楽しんでもらおうと思つてこの場に招待したのに」

「嘘ね。その目は私が憎くてたまらないって言つてるわ」

レイピアが鋭く指摘すると、ふいにシャンナリーの顔つきが変わる。マスクット色の瞳に炎を灯してレイピアを睨みつけた。

「……それなら話が早いわ。あたしが何を言いたいかわかる？」

「ああ、皆田見当もつかないわ」

「ふざけないで！ スキルのことよ。自業自得で怪我したくせにスキルに看病されるなんて……つー」

「ああ、それで怒ってるわけ？ そんなの逆恨みもいいところよ。私はスキルに看病してもらいたいなんて頼んだ覚えないわ」

「なんですかー！？」

レイピアの言葉にシャンナリーは怒りに顔を染める。今にも飛びかかって来そうな雰囲気だが、さすがにこの大勢の観客のいる前では何もしてこようとはしない。彼女にもプロとしての意識があるのだ。

レイピアはそんなシャンナリーに向かって冷たく言い放つ。

「いい加減迷惑なのよ。前にも言ったけど……私は男なんて嫌い、スキルだつて一緒に。だから勝手に勘違いして突っかかって来ないで！」

「勘違い？ 本当にそういう切れるの？」

ドクン

シャンナリーの問いかけにレイピアの心臓が1回だけ大きく脈をうつた。

「……いい切れるわ」

「本当に？ スキルが一晩側に居たのよ。何も感じなかつたの？ 何とも思わなかつたの？」

探るような視線を向けられる。心中まで見透かされるような、

そんな視線だ。

嫌だ、ひどく不快だ……。

喉がカラカラになる。

「……つ思わない！ 思つわけがない」

一瞬我を忘れて大声で怒鳴りそうになってしまい、かぶりを振つて声をひそめる。

シャンナリーはそんなレイピアの様子から、あまり信じた様子はなかつた。疑わしげに眉をひそめて視線を向けたままでいる。

「ふうん、本当かしらね？ でも、どうせひしてあなたを放つておくわけにはいかないわ。あなたは自分では気がついてないのかもしれないけど毒を持つてるんだもの」

「毒……？」

シャンナリーの言葉の意味がわからず困惑する。

「毒とは人を死に至らしめたり、麻痺させたりするあの……？ そんなものが私の中にあるというの？」

そこまで考えて、レイピアはますます困惑する。

「……その毒はいつかスキルに悪い影響を及ぼすかもしれない。だから今のうちに摘み取つておかなくっちゃ！ ねえ、あたしがあなたに対して持つている感情って何かわかる？」

無邪気な笑顔を浮かべて問い合わせてくる。

「憎いんでしよう？」

「ちよつと違うかなあ～」

かわいらしく言った後、シャンナリーは氷のような薄笑いを浮かべて言葉を続ける。

「『殺したいほど憎い』かな。さあ、ナイフ投げの時間ね」

シャンナリーは身をひるがえすとレイピアから6メートル程離れた場所に移動して、アシスト役の団員から手渡されたナイフを4本

手に持つた。

そのナイフはライトに照らされて鈍い輝きを放つた。  
思わず息をのむ。

「果たして鎖に繋がれた女性は無事に席に戻ることができなのか！？  
それはシャンナリーの右腕一本にかかっています！」

舞台進行の道化師が熱をこめて解説する。

「ちょっと……っ！」

抗議の声は観客の拍手によつてあつさりとかき消されてしまい、  
両手と両足を縛った鎖がピンと張つてレイピアの行動を遮つた。

もし仮に言葉の通り本気でシャンナリーがレイピアめがけてナイフを投げてきたら？

手元が狂つたといつことであつたり処理されてしまうのだらうか

……？

そんな嫌な考えが頭をよぎる。

シャンナリーが真つ直ぐレイピアの正面に立つてナイフを構えた。

「冗談でしょ……？」

かすれた声で絶望的につめぐ。そんな彼女の思いもおかまいなしに、無情にもシャンナリーの手から離れたナイフは真つ直ぐレイピア掛けて飛んできた。

ヒュウ

空氣を切り裂く音が響く。

「さやあつー」

耐え切れず目をつぶつて悲鳴を上げたその一瞬後には、レイピアの耳元をかすめてナイフが後ろの木の的へと突き刺さった。ナイフが的に刺さった衝撃が木の的ごしにビィイインと伝わってきてレイピアはさっと顔を青ざめさせた。

気がつくと4本のナイフは全て投げ終わっていて、いざれもレイピアに突き刺さることはなく後ろの的に刺さっていた、観客の拍手が沸き起きていた。

どつと鼻の頭に玉のような汗が吹き出す。

いつの間にか近づいてきたシャンナリーの手によつて両手両足を繋いでいた鎖が外されるとレイピアは崩れ落ちるよつにしてその場にへたり込んでしまった。

震える膝を抱える彼女にシャンナリーは手を差し伸べる。

「驚かせてしまつたみたいね、『めんなわ』」

観客に聞こえるように声を少しきめにして言ひ。その言葉はレイピアに向けられたものでないことは明白だった。にっこりと口元に笑みを浮かべるシャンナリーの目は少しも笑っていないかったからだ。

実行はしなかつたけれどシャンナリーは本氣で自分を殺したいくらい憎んでいる、本能的にそのことを感じ取つて再び背筋に冷たいものが伝つ。

「さあ、この勇気ある女性にもつ一度温かい拍手をー。」

よりよろとおぼつかない足取りで席に戻るレイピアに大きな拍手が送られる。

それがやけに耳についた。

\* \* \*

「さあ、いよいよ次で最後の演目になります！ 我がサークス団の星、スキルとシアによる空中アクロバットでございまーす！」

道化師が言つた直後に大歓声が上がつた。その半分以上は若い女性によるもので、いずれも熱を帯びたものである。

思わずその歓声に圧倒されて耳を塞ぐ。

「な、なに？ この黄色い歓声は」

「若君は特に女性に人気がありますからねえ。でもまさかここまです！」いとは思いませんでしたが

こんなにスキルに人気があったなんて  
レイピアにはそのことが信じられなかつた。しかしその考えが一  
変するのはこの直後のことだつた。

地上10メートルの地点にある足場から姿を表したのはスキルと  
シアだつた。

シアはステージに映えるように濃い目の化粧をほどこしており、  
普段の化粧つけのない姿からは想像もつかないくらい別人になつて  
いる。

「シア、きれい……」

思わずそうつぶやく。

そしてスキルは全ての運命が変わってしまったあのパーティーの  
夜のときのように額にかかる前髪をワックスで後ろに流していく。

動きやすさを目的とした黒を基調とした服を纏っているが、金糸で刺繡が施されていて派手すぎず、地味すぎない、デザインになつている。

登場したスキルとシアはお互い固く手を繋いだまま、ゆっくりとした足取りで天井に張られたロープの所まで歩き出した。

スキルはシアを片手に抱え上げるとロープにぶらさがった。

次の瞬間には何の躊躇もなく手を放し、シアが空中に投げ出される。

レイピアはあつ、と息を呑むがシアは難なく彼の足につかまることで落下することを防いだ。そして2人はお互いにポーズを取つてしまらくの間空中で静止する。それが終わるとスキルが足を折り曲げてシアをすくい上げ、片手に抱きしめる。

もちろん2人は命綱などつけていないし、下にはネットも張られていない。しかし2人は「信頼」という名前のロープで結ばれているような気がした。

次々と技を披露していくスキル達を見ながら、レイピアは彼が前に言つた言葉を思い出していた。

私にはまるでこの仮面をつけたようにステージ用の顔と普段用の顔が存在するのです。

その言葉はレイピアをからかうために言つたものだと思っていたが、どうやらそうではないことがわかつた。

今、ステージにいるスキルはまるで別人。普段の皮肉げに歪めた口元は跡形もなく、その姿は神秘的にさえ見え、女性が黄色い声を上げるのも何となく理解できた。

そして最初はシアの方ばかりに向けていた視線も徐々にスキルの姿を追うようになってしまった。動作の1つ1つを目に焼き付けるようにして食い入るように見つめた。

芸が終わり、割れんばかりの拍手が起立つてこる間もレイピアはぽーっとしていた。

「おー、終わったぞーー?」  
「……え? ええ……」

ブレンとログに声を掛けられ、ついでまたさくへ夢かり覚めたよう  
に我に返った。

## 第9章 楽しいサークス③

サークスの公演が終わった後レイピアはリグに連れられるまま舞台裏に足を運んでいた。

体から熱気がおさまらない。

まだサークスが続いていればいいのに……。

いつまでも終わらずにいればいい欲しい。

どうして楽しい時間はあつという間に過ぎてしまうんだろう。

サークスが終わってしまったことへの寂しさがレイピアの胸の中を駆け巡った。サークスが終わった、たつたそれだけのことなのになぜか胸が締め付けられるような苦しい思いに捕らわれる。

舞台裏には団員達が詰め寄せていて、汗を拭きながら今日のステージの成功を喜び合っていた。

「レイピアちゃん、俺達のサークスどうだった?  
「ちゃんと見ててくれたかい?」

レイピアの姿を見つけるなり団員達は次々に声をかける。とても素敵だつたわ、と素直な感想を述べると特に若い男の団員達は大喜びをして飛び上がった。

シャンナリーの姿が視界の隅に映るが、あえて何も言わないでおくことにした。今彼女に文句を言ったところでレイピアの立場が悪くなることは容易に想像がついたし、わざわざ不快な思いまでして話し掛ける必要はないと思った。

それにシャンナリーの気持ちがわからぬもないのだ。嫉妬、それはレイピアも何度か抱いたことのある感情だった。かつてユーヴァが別の女性と話している、それだけで胸がひびくざわめいて不快になったことがあった。

同じ女としてその気持ちがわかるから一重に彼女だけが悪いとは言い切れない。きっと自分もシャンナリーが誤解を抱くような言動をしているのだ。

シャンナリーに「一晩中側にいて何も思わなかつたの？」そう言われたとき、一瞬言葉を言い淀んだ。そして彼女に答えた言葉は半分真実で半分嘘だった。

何も思わなかつたわけではない。

スキルに看病をしてもらつたあの日、確かにレイピアの心は乱れた。しかしあの時は単に熱のせいで心が弱くなつていただけだ。心が辛くて寂しくて助けを求め、怒つてテントから出て行つたスキルに戻つて来て欲しいと望んでいた。

溺れた子供が誰かに助けを求めるように、弱くなつたレイピアの心は誰かに助けを求めていた。だからあの時スキルに向けた感情は恋とかそういう類のものではないし、そんなものになるはずもなかつた。

自分はもう決めたのだから、2度と誰も好きにならないと。  
誰にも頼らないで生きていくと。

「レイピアー！ わざわざここまで来てくれたのね。ね、私達の空中アクロバットはどうだった？」

メイクを落としたばかりのシアが駆け寄ってきてレイピアに飛びついた。

「見ててハラハラしちゃつたわ。……でもとっても素敵だった。綺

麗だったわ、シア」

「えへへ、嬉しいな。その言葉スキルにも書いてあげると喜ぶと思つよ。あ、スキルは外にいるからね」

聞いてもいないのにそんなことを書いてくるシアにレイピアは不快に顔を歪めた。

シアのことは気に入っているけれど、何かにつけてスキルの話を持ち出していくところはあまり好きじゃなかった。いや、むしろ不愉快で仕方がない。

「別に……私はスキルにそんなこと書つたために来たわけじゃないわ！」

「ほこはい、レイピアはダイヤを取り返しに行くのよね

シアはレイピアが少なからずスキルに対して好感を持っているのではないかと思っている。しかしそのことを指摘するとレイピアは余計意地を張つて違つと言い張つてしまつ。この数日で彼女の性格をおおよそ把握したシアはあえて言葉を続けるのをやめた。

「わうよ、その通りなんだから…」

念を押すよつ言ひ放つて不機嫌な表情のまま外へ向かつたレイピアを見てシアはぐくぐくと笑いをこぼした。

「全く素直じやないんだから」

\* \* \*

すつかり辺りは薄暗くなつてしまつテント街には所々に明かりが灯りはじめた。

ほんの少し湿り気を帯びた風がレイピアの頬を撫でる。もつもぐホットリープに短い雨季がやつてくることを告げる風だった。

今年もまた嫌な時期がくるわね。

風で乱れてしまつた髪の毛を整えながらそんなことを考えた。しばらく歩き回つていると、井戸の所に腰掛け髪の毛を洗い流しているスキルの姿を見つけた。おそらく髪の毛を固めたワックスを流しているのだろう。タオルを押し当てて頭をぬぐつていふところで目が合つ。

レイピアは言おうかどうしようか躊躇したが、サークスを見た感想を素直に述べることにした。

「サークスに招待してくれてありがとう。私、サークスのことよくわからないけど心が弾んだわ。……楽しかったんだと思つ」

スキルは水分をしつゝとつと含んで額に張り付いてしまつた前髪を手で搔きあげながら、口元を綻ばせた。

「最高の誉め言葉だね、嬉しいよ」

「でも、どうして今になつてサークスに招待してくれたの？」

「うん？ 僕が君を招待するのに何か特別な理由があると思うかい？」

どうしても彼が何か企んでいるようこしか思えなかつた。だから遠まわしな言い方はやめて率直に尋ねることにした。

「……思つわ。何を企んでいるの？」

「はは、鋭いね。でもそれなら話が早い、実は君にサークスの手伝いをしてもらおうと思つてね。実際サークスがどんなものか見た方がやりやすいだろう？」

「

そう言つてにこりにこり極上の笑みを浮かべた。

今、この男は何と言つたのだろう?

サークスの手伝いをしてもらつ……?

「な、な、な……なんですって

「ムグツ！？」

声を張り上げたレイピアの口をすかさずスキルが片手で押さえ込んだ。

「そんなに大声を出すとみんながビックリする。もつ少し声のボリュームを下してくれた方が嬉しいな」

ふがふがと文句を言つているレイピアをそつちのけで言葉を続ける。

「ブレンが謹慎になつたから人手が足りなくなつてしまつてね。アシスト役でいいからステージに立つて欲しいんだ」

「んむむむ　　っ！　ふはっ、あのねえ！　だからつて何で私がステージに立たなくちゃならないのよー？」

「君にとつて悪い話ではないと思うんだけど？」

途端に暴れるのを止めて、興味を持ったように見上げてきたレイピアの瞳と田が合つて、思わずふつと口元を緩める。

「ステージに上がつてくれるなら舞台裏の出入りは自由に許可しよう」

それはつまり、ピンクダイヤモンド争奪の機会が増えるということだ。今まで部外者だったレイピアは舞台裏に上がるることを禁止さ

れていた。当然スキルがステージに上がっている時間はダイヤを狙うことが出来なかつた。

「それは……確かに悪い話じゃないわね。でも、私なんかがステージに立つても大丈夫なの？」

「その点はもう団長の許可を取つてゐるから大丈夫。言つただろう？ 人手が足りていないつて」

ブレンが謹慎になつたいきさつはレイピアにも大きく関わりのことだつた。ライの事件だ。そのことについて2人共お咎めになつたが、ブレンは自ら処罰を受けることを望んだ。そのことを人づてに聞いて、彼1人が処罰を受けることに罪悪感を抱いていた。私1人が変わらぬ生活を続けていてもいいのかしら、と。

「わかつた、ステージに出るわ」

少しでもライの罪が償えるのならサークスの手伝いをしてもいいかもしけないとthought。

レイピアの衣装はソアラが決めてくれた。背中の部分と腕の部分、つまり傷跡が隠れるような衣装を。シャンナリーが着るような原色を使つた華やかな衣装とは違ひ、アシスト役であるレイピアの衣装は機能性を重視したもので、黒一色のいたつてシンプルなものだつたので、ほつと一安心した。ドレスやステージ衣装のようなひらひらとした動きにくい服装はどうも苦手なのだ。冒険者としての性なのかもしれない。もしあのひらひらした露出の高い服を着てステージに出ると言われたら、すぐに断つていただろ。

仕事内容は演出用の小道具をステージの中央に運ぶといったごく単純な作業で、怪我した右腕に全く負担がかかるないものだったため、仕事内容を教えられた翌日にはさっそくステージに出るはめになつた。

最初はガチガチになつて緊張していたレイピアだが2、3日経つうちにすっかり慣れてしまつた。

合間に見えてはスキルとダイヤの攻防戦。例によつてレイピアが負け通しだったのは言うまでもないけれど。

## 第9章 楽しいサークス4

「さすがに疲れたわ……」

ぐったりと倒れこむようにステージに寝転んで、レイピアは誰に  
言つでもなく呟いた。

今日の最終公演が終わり片付けも終了したが、あまりに疲れてテ  
ントに戻る気力もなければ着替えもする気力もなかつた。ステージ  
に立つようになつてから1週間。体には確実に疲労が溜まり始めて  
いた。

「あー、いたいたレイピア！」

レイピアよりも動いていて疲労も濃いはずなのに、そんな様子は  
微塵も感じられないようなシアの明るい声が響いた。首だけをめぐ  
らせて見るとシアは両手にグラスとワインを持って上機嫌に歩いて  
来る。

「ふつふつふ、こつそり持つて来ちゃつた。さすがに疲れたでしょ、  
レイピア。今日はこれ飲んでぐっすり眠りうよ」「みびき

「そんなの飲んで明日の公演に差し支えないの？」

「まあまあ、固いこと言わないの」

「言つが早いからシアはさつそくグラスにワインをたっぷりと注ぐ。

「私、あまり飲めないんだけど……」

「まあまあ、ちょっとくらいいいじゃないですかー。はい、乾杯～」

ひたすら上機嫌なシアは、渋っているレイピアのことなどおかまいなしにグラスを合わせてから一気に飲み干す。その様子を畠然として見ていたレイピアだったが一口、一口とゆっくり飲み始めた。すぐに胃のあたりがカーッと熱くなつて、しだいに体全体に広がつていく。

疲効が溜まつていろいろに酒を流し込んだのが悪いのか、顔が真っ赤になつて頭がふらふらし始めた。

「あらあ、レイピアって本当に飲めないのね。顔が赤いわよ。かわいい」

そんなレイピアの様子を見て楽しそうにケラケラ笑うシアは、すでに3杯目のグラスに手を伸ばしていた。

「だ、だから言つたじゃない……つ。飲めないって」「あはは。これ以上飲んで一日酔いになつたら困るからレイピアはもう止めといた方がいいかもね」「シア……まだ飲むの？」

口元を押さえて半眼になつてつめくレイピアをよそに彼女は4杯目のグラスに手を伸ばした。まだまだシアにとつては飲んだうちに入らないようだ。

酒豪、シア。

「げ、酒くせえ！？」

いち早くステージの異変に気がついたのは忘れ物を取りにきたブレンだつた。見るレイピアは顔を真っ赤にしているし、シアはぐ

いぐいとワインを飲んでいた。何杯目かわからないがかなりの酒豪であるシアのことだ、恐らく4～5杯は軽く飲んでいるのではないだろうか。足元には空いたワインの瓶が一本転がっている。片手に持った2本目の瓶も空になりかけている。

「あら、ブレンジやない。あんたも飲もう？」

「飲もう？ ジャねえよ、何やつてんだよ……つたく。おー、お前明日の公演大丈夫なんだろうな？」

呆れかえった顔でレイピアの方を見る。

「だ、大丈夫……よつ！」

頭をふらふらさせながらもレイピアは頷いてみせが、すぐに気持ち悪くなつたらしく俯いてしまつた。

「レイピアもがんばつてるんだし、ちょっとぐりこじじゃない、ね？」

「まー……な。確かにがんばつてるかも……な」

ぶすっと仮面のまま照れくさそうに頭を搔いてみせる。

「まあ、今のところ二つとシャンナリーの間でトラブルがないのが幸いだな。そのせいでサークス団内で二つきがあつたら困るしな」

「シャンナリーとトラブル？」

「ん、ああ。お前は知らないんだつけ？ シャンナリーがナイフ投げのときにこいつをステージに上げたのを」

「そんな話知らないわ！」

シアは初耳だとばかりに首を横に振る。シャンナリーがナイフ投げをしている間に舞台衣装に着替えたり化粧をしていたシアが知らないのも無理はない。

「てっきり俺はシャンナリーが何かすると思ったんだけどな……」

小道具の入った箱に近づいたブレンはおもむろにナイフ投げに使われたナイフのうちの一本を取り出した。ぐるぐるとそのナイフを手の中で弄ぶ。

ぱーっと虚ろな目をしたレイピアがブレンの動きに反応するように顔を上げた。

視界に飛び込んできたのはナイフ。

そしてそれを手にしているブレンの姿

褐色の肌。

「あ……」

記憶が、よみがえる。

ちょうどもうじきやつてくる雨季の季節。雨が滝のよつに降り注ぐ、冷たい嵐のことだった。

短剣を手にした褐色の肌の男が、逃げるレイピアを追いかけてきた。

「アア……っ

背中に突きたてられた短剣。

嘘だ、こんなことは現実ではない、そう思った。

しかし生々しいくらいに背中には激痛が走っていて、雨と共に地面に流れ込んだ真っ赤な血が現実であることを告げていた。

倒れたまま、見上げた先には「悪いな、レイピア」そう言って氷

のよつな薄笑いを浮かべている男の顔があった。  
レイピアが愛していた男の顔が

「ん？ なんだよ」

青ざめた顔で体を振るわせたレイピアを見たブレンが、不思議そ  
うな顔をして一歩近づく。

それが、引き金。

いきなりレイピアは首を左右に振つて頭を抱えた。

「嫌あああ つ……！」

絶叫に近い悲鳴を上げて、半ば這いずるよつな形でブレンの側か  
ら逃げ出した。

「おこ、どうしたんだよー？」

ブレンはわけがわからずには逃げ出したレイピアの後を追いかけ、  
悲鳴を聞いて何事かとステージによってきたスキルと合流する。

「どうしたんだ！？」

「いや、俺にもわかんねえって」

「嫌だ……来ないで……来ないで……」

「わ」とのよつこつぶやきながらなおも逃げよつとするレイピア。  
やがてステージの端にたどりつくと、ガタガタと震えてその場につ  
づくまつた。視線だけはブレンの方に向けていて、その瞳には恐怖  
の色が濃く浮かんでいる。

「来ないで、来ないでユーモアアア……つ……！」

それは拒絶というよりも懇願に近い悲鳴だった。

額にはつづり汗を浮かべて目を見開き、唇を震わせた。

「ユーザ……？」

スキルはレイピアの口からこぼれ落ちたその名に眉をひそめた。一体どうしたんだ？ そう尋ねようにも、今にも倒れてしまいそうなぐらいに顔を青くして震えるレイピアには何を言つても言葉が届かないように思えた。それにこれ以上追い詰めるわけにもいかない。

「ブレン、お前を恐がってるみたいだ」

「……みたいだな」

困惑した表情のままブレンは肩をすくめると、レイピアの視界から外れるようにして後ろに下がった。それとほぼ同時にスキルが体を震わせているレイピアの方に手を伸ばす。

レイピアは伸ばされた手をすり抜け、助けを求めるように彼の体にすがりついた。一瞬スキルは体を強張らせるが、すんなりとそれを受け入れた。背中にまわした腕ごとにレイピアの震えが伝わってくる。その震えを止めようとして腕に力を込めてきつく抱きしめた。レイピアは拒まなかつた。普段の彼女ならば放せと言わんばかりに拒絶するはずなのに。そんな心の余裕もないぐらいに取り乱している。

「……助けて……」

スキルの胸に顔をうずめたままつぶやいた。

よく耳を凝らしていないと聞こえないような消え入りそうな声だつたけれど、確かにレイピアはそう言った。

\* \* \*

「一体何があつたんですか！？」

騒ぎを聞きつけたリグはすぐにステージに駆けつけた。

「それが私達にもよくわからないのよ。突然レイピアが取り乱してしまつて……あ、スキル」

シアの視線はスキルに向けられた。彼は取り乱したレイピアをなんとか落ち着かせてテントへ運んで戻ってきたところだ。

「レイピアの様子はどうなの？」

「今は落ち着いてベッドで横になつてるとこだ」

「本当にレイピアさん……どうしてしまつたんでしょう。ブレン、あなたが何かしたんじゃないでしようね？」

ジト目を向けられたブレンは「んなわけないだろー！」と慌てて首を横に振った。

「ブレンを恐がつていたといつより、あれは……ブレンを違う誰かと重ね合わせているみたいだった」

レイピアの怯えた表情、大きく見開かれた瞳。  
そして 。

「ユーザつて叫んでた」

「やういえばそんなこと叫んでたな」

スキルの言葉に頷いてから、ふと何かを思い出したようにブレンは顎に手を当てて考え込む。コーヴ、コーヴと口の中で何回も反芻する。

「ブレン、心当たりがあるのか？」

「ん……。俺と同じ国の出身のやつにそんな名前の奴がいたなあ、と思って。まさか同一人物だとは思えないけどな」「有名なのか？」

「有名っていえば有名かもしない。なんせ悪党の親玉みたいな奴だったから。……まあ俺達も人のことは言えないけどな、同じ穴のムジナつて奴だ」

コーヴ。

レイピアが熱を出した夜に何度もつぶやいていた名前だ。

「どうした？ スキル」

スキルが苦いものを含んだような表情をしていたから、不思議に思ったブレンが眉をひそめる。肩をすくめてスキルはその場を動き出した。おそらく再びレイピアのテントに向かつたためだ。

「やっぱり、本人にそれを尋ねるのは無粋なのかな？」

その際に独り言のようにポツリとスキルは洟らした。

## 第9章 楽しいサークル5

ベッドの中でレイピアは重い頭を抱えてうなだれていた。お酒のせいでも氣分が悪いことが原因の一つにある。そしてもう一つの原因。それは。

ブレンとコーヴィザが重なつて見えたこと。  
ぎゅっとレイピアは唇を噛み締めた。

あの日から2年経つた。

当時はささいなことがきっかけで先程のように取り乱すことが多かつた。例えば短剣やナイフのような刃物を見たり、褐色の肌を見たり、大雨の日だったりと全てコーヴィザに関わることが原因で。しかし最近ではそんなことも無くなり安心していたというのに……。

いつまでコーヴィザの影がまとわりついてくるのか。  
いつになつたらこの心が解放されるのか。

心が、重い。

「気分は、どう?」

スキルの声に慌ててレイピアは枕に埋めていた顔を持ち上げた。テントに入ってきたスキルとそこで目が合う。思わず先程彼にすがりついてしまったことを思い出し、顔を赤らめて視線を逸らした。どうかして、取り乱していたとはいえ一番弱みを見せたくない相手に助けを求めてしまつなんて……。

「もう大丈夫……」

弱々しく返事をする。

そんなレイピアの心中を知つてか知らずか、スキルは特に気にする様子もなく、『ぐ当たり前のよつてびっど』の前に椅子を置いて腰掛けた。

テントの中にはそれきり沈黙が訪れる。

気まずさを感じて彼の方に視線を向けるが、何やら考え込んでいる様子で声を掛けるのをためらつてしまつよつな雰囲気である。

しばらくするとスキルの方から口を開いた。  
ポソリと独り言のよつにつぶやく。

「ゴーザ……」

レイピアは思いもかけないその言葉に目を見開く。  
今1番聞きたくなかったものだつた。レイピアが耳を塞ぐよりも先にスキルが言葉を続ける。

「ゴーザって……誰？」

真つ直ぐレイピアの目を見据えたまま問い合わせてきたのである。

「だ、誰だつて……いいじゃない。どうしてそんなこと聞くのよ」  
「…………知りたいから」

レイピアは困惑する。

今までスキルがレイピア自身のことについて問い合わせたことなど一度もなかつたはずだ。

それは必要の無いことだつたから。

レイピアとスキルの関係は、あくまでも盗賊と宝石を盗まれた領主の娘。その関係ですらゲームの終了とともに終わってしまうもの

でしかないのだから。

「あなた、こないだから変よ……つ。何か、変。態度が違うんだも  
の……！」

レイピアは何となく感じていたが、なるべく考えないようにして  
いた疑問を口にした。

真っ直ぐ見据えてくるスキルの瞳はいつもと違う風に見える。彼  
が最近になつてからときどきレイピアに向けてくる視線と同じ種類  
のもの。

熱を帯びた、視線。

だからいつものように睨み返して受け流すことはできなくて、レ  
イピアは視線を下に向けることによつてなんとか逸らした。

「ふうん、気付いてたんだ……？　じゃあ俺がコーナーについて尋ね  
る理由もわかるんじゃない？」  
「わ、わからないわよ」

首を振るレイピアにスキルは頬杖をついたまま盛大にため息をつ  
いた。鈍すぎる、そう言いたげに。  
それからふ、と真剣な顔つきになつた。

「君が好きだから、って言つたら？」  
「な、何を……つ！」

レイピアは弾かれたようにスキルの方に顔を向けて怒りをあらわ  
にした。

人が落ち込んでいるというのに、こんな時によくそんなことが言  
えるものだ！

顔が真っ赤なのは怒りのせいでもあるし、彼の言葉の内容のせい

でもある奴に」思える。

「やつやつてからかってー。冗談にしても悪趣味すぎるわ……っー。」

「冗談？ まさか。俺はいつだって本気なんだけど」

「な、なに言ひしのよー。」

スキルの口調はいつものように軽く、『じから本氣でじ』から『冗談なのか全く区別がつかない』。さうと全部『冗談なんだ、やつ思おうとしても心臓だけは意志に反してバクバクと早鐘をうつ。

「もう2回もキスした仲なのに」

「バ……っ！ あ、あれはキスなんて呼ばないわ」

2回のキスは両方ともレイピアに薬を飲ませるためだけの行為。無理矢理でレイピアの気持ちなどおかまいなしの、愛情の欠片もないもの。

「それじゃあ今度はちやんとしたキスをしようつか。それとも思いつきり濃厚なのにする？」

からかうような響きを面葉に含ませてスキルは身を乗り出した。ついたれるレイピアをよそに、慣れた手つきで耳の辺りの髪の毛に指を差し入れる。

「ちよ……っ、何考えてるのよー。？」

「キスのこと」

「やつこいつ意味じゃない

レイピアは腹が立つた。

こんなにも自分は戸惑つてこないとこうのこ、当のスキルは涼しい

顔しているのだから。

いや、今はそんなことをいつている場合ではない。

一刻も早く逃げなくては

。

そう思つてゐるのに、体が動かない。

掴まれた右手がやけに痛くて抵抗すらできない。

だんだんとスキルの顔が近づいてくる。

「や、やめ……っ！ やめてっ！」

ぎゅっと目を閉じて、思ひつきり顔を背けて体を震わせた。  
しかし、いつまで経つても口づけが来る気配がなくて、恐る恐る  
片目を開けてみると飛び込んできたのは体を2つに折り曲げて笑い  
を堪えるスキルの姿だった。やがて堪えきれなくなつたように思い  
つきり吹きだした。

「く、くく。はっ、はは！ 傑作」

状況が飲み込めず呆然としていたレイピアだが、徐々に理解  
するにつれて体を小刻みに震わせ、見る見るうちに顔を赤くして  
つた。

からかわれた

！

「う、うの……っ……」

「うの……っ……」

「大馬鹿

……！」

パシーン！

テント内には頬を張る音だけがやけに大きく響き渡った。

「イタタ……。半分は本気だつたんだけどなあ  
「もうその手には乗らないわ！」

苦笑いしながら頬を押さえるスキルと、険悪な顔でそれを睨みつけるレイピア。

怒りが收まらずに握りしめた拳がぶるぶると震えた。

怒ったせいで先程まで沈んでいた気持ちがほとんど吹き飛んでしまった。沈んでいたことが馬鹿みたいに思えてくる。スキルがそれを狙っていたのかどうかは定かではないけれど、どちらにしても腹が立つのは事実だった。

先程のは、落ち込んだ者を相手にやる行為ではない。悪趣味にもほどがある。

「最低、変態、ドスケベ人間！ 出でつて。私はもう寝るんだから！」

「ひどい言われようだね。傷つくなじゃないか」

ちつとも傷ついた様子などなくにっこりと極上の笑みを浮かべるスキル。

「あーの一ねえ、私は今気分悪いの、早く寝たいの、あなたにかかる余裕なんてないの、わかる？」

「それじゃあ子守唄でも歌つてさしあげましようか？ お嬢さん」

わざとらしくこくりに恭しく胸に手をおいて歌う素振りをみせる。

「余計に眠れないわよ……。」

これ以上何を言つてもレイピアの方が腹が立つだけのよつな気がする。口では絶対に勝てないのだ、この男には。

「あーもづ、勝手にすれば！」

スキルを追い出すことを諦めたレイピアは、布団を被つてさつさと彼の方から背を向けた。その際に思いつきりドスをきかせた声で釘をさした。

「言つとくけど、変なことしたら殺すからねー。」「はいはー」

本当に何を考えてるのか。

こつものことだけじ、今日は特に意図が読めない。何のためにここに留まるのだろうか。様子を見にきただけならもう帰つてもいいといつのに。

「……ねえ、そんな風にただ座つて退屈じゃないの？」

肩越しに視線を向けると、肩をすくめるスキルの姿が映つた。ちよつかいをかけられるのは腹が立つけれど、黙つてそこに居られるといつのもなんとも居心地が悪い。こんな状況で眠れるはずがない。

もしかして本気でユーモアの話を聞きたいと思っているのだろうか？だから帰らざるにこの場に留まるのだろうか。

「……少し、話でもしましょうか」

「いいね。どんな？」

「そうね……女を騙した酷い男と、騙されている」とも気が付かずにはいた馬鹿な女の話

体に残っているお酒のせいで口が軽くなっていたのかもしれない。  
誰かに話を聞いてもらいたかったのかもしれない。気がついたら言葉が口について出ていた。

レイピアは自嘲気味に笑った。

伏目がちの表情からは悲しみと、微かな怒りと、苦しみが混じつたような色が伺える。

「うん。聞かせてくれるの？」

「きつとこんな話つまらないわよ」

「それでも……聞きたい」

レイピアは覚悟を決めるとポツリポツリと話し始めた。

2年前の、あの日の事を

爽やかな朝だった。

空は青くて雲一つない。

まるでレイピアの新しい旅立ちを祝福していくように頬を撫でる風が心地良い。

両手いっぱいの荷袋を抱えてレイピアはホットリープの街を歩いていた。

目的は1つ、この街を出て冒険者になること。

レイピアは幼い頃から冒険というものに憧れを抱いていた。けれど冒険者になるためにこれからどこへ行つて、何をしたらいいのかわからなかつたから今はホットリープの街をぶらぶらと歩いている。今まで家から一人で外へ出したことなどなかつたから、不安もあるけれどそれ以上に心は弾んでいる。大嫌いな家から、そして父親の元から離れられたことが嬉しくてたまらない。

屋敷を飛び出したのは今朝のこと。

元々あつた確執が今朝になつて埋めようがないくらいに広がつたからだ。仕事だ、そう言つて父は1ヶ月も前から約束していた母親の墓参りを放り出した。少しも悪びれることなく当然のよつた顔をして仕事に向かおうとした。

腹が立つたから思いつきり平手打ちをした。人を引っ叩いたのは初めてだつたから手は痛かつたけれど、それ以上に心の方が痛かつた。

少しばしは私とお母様の心の痛みを知ればいいんだわ！

それなのに父はレイピアの気持ちを知るどころかさつさと仕事に行つてしまつた。悔しくて悲しくてレイピアは出て行くことを決意

をして、すぐに荷物をまとめると屋敷を飛び出した。

もう2度とあの屋敷に戻ることはない、そう思つて。

初めは田に映る景色が珍しくて、田を輝かせて歩き回つていた。かわいい雑貨のお店を覗いたり、普段食べたこともないような珍しいお菓子を買つたり。屋敷から持ち出したお金や宝石があつたので金銭面では当分困らないだろう。

しかし楽しくてたまらなかつたといつのこと、だんだんと田が沈んでいくにつれて気持ちも沈んできた。勢いで屋敷を飛び出したものの、これからどうしたらいいのだろうかと途方に暮れる。

歩き慣れていないせいもあつて、足はぐとぐとでとつとて限界を迎えていた。

宿を取りたいと思つたが、お嬢様として育てられてきたレイピアには宿の取り方もそして肝心の宿の場所もまるつきりわからなかつた。

「どうしよう……」

夜になると急に冷え込んできた。寒さから身を守るよつとして胸の前で荷袋を抱え込む。こんな風に冷え込むことなど予想してなかつたから、荷袋には薄着のものしか詰めていない。そのことがいつそうレイピアの心を沈ませた。

伏田がちにした青い瞳が潤んでいく。

いつの間にか路地の方に来ていたらしく、ハッと顔をあげると今までまばらにあつた人通りがまったく無くなつていた。

積み重なつた空き箱が路上の半分を覆い尽くしていて、息苦しさえ感じるような、そんな場所。

やがてしばらく歩いていると、一件の店から漏れる明かりが田に飛び込んできた。その明かりに引き寄せられるようにレイピアは近づいて行つた。

おずおずと扉越しに中を覗いてみると、中には見たことも無い光景が広がっていた。たくさんのテーブルにたくさんの椅子、そして談笑しながらグラスを傾ける人達。

何のお店かしら？

酒場というものを見たことがなかつたレイピアにはその店が何なのか見当もつかなかつた。

楽しそうな場所であることはわかつた。

すると急に扉が開き中から人が出てきた。中に入ることもなく突つ立つて、いるレイピアに不思議そうな視線を向けると、そのままその人達は暗い路地へと消えていった。それをぼんやりと見送つてから、意を決したように店の中に入った。

外とはつてかわつて店の中は熱気に包まれていた。酒の匂いと煙草のきつい匂いに思わずレイピアは顔をしかめて口元を覆つ。店内を見回した後、どうしたらいいのかわからなくて入り口で所<sup>レ</sup>在なげにポツンと佇む。

カウンターには店主らしき男がいて、夜中にたつた一人で現れたレイピアに怪訝そうな目を向けると近づいてきた。

「こんなところに何の用だい？」ここはあんたみたいなお嬢さんの来る場所じゃないよ」

男はレイピアの服装から良い身分の娘であることを判断したのだらう、そんなことを言つた。恐らく親切心から出た言葉だらう。

「あ、あの……私、道に迷つてしまつて……」

顔を俯きがちにして声を震わせた。

「だったらなおさらこんな所に来るべきじゃない。」  
「ここは裏通りの酒場だ。荒くれ者達がいっぱいいるだろ?」

店主の男が顎で店内を指し示す。その方向を恐る恐る見ると、30歳前後の大男達が酒を片手にしながらレイピアの方に視線を向けてにやにやと下卑た笑いを浮かべて居る。そればかりでなく彼女と同じ年頃の男達までもが舐めまわすようにレイピアの全身を見つめてくる。

裏通りの酒場に女が一人で入り込むほど危険なものはない。  
本能がこの場に留まるこことを危険だと告げ、ぞくりと肌があわ立つ。

青ざめた顔で震えるレイピアを見て店主の男はため息をつく。

「どうに向かおうとしてたんだい?」

「や、宿屋へ……」

親切にも店主の男はレイピアのために、わざわざメモ帖に宿屋への行き方を書いてくれた。「気をつけるんだよ」そう言つてくれた男に何度もお礼を言つて早々と酒場を後にする。

早くここから離れなくては、そう思いくたくなつた足に鞭をうつ。しかし、すぐに酒場から追いかけて来たらしく男達によつて囲まれる。

「よお、オネーチャン。俺達が宿屋まで案内してやるつか?」

頬に傷のある大男が口を開いた。

明らかに酔っ払っていて、口元はにやにやと笑みの形に歪めている。

レイピアにはこういうときの対応がちつともわからない。何しろ酔っ払いに困まれるなど初めてのことだつたから。だから無言で首を横に振ることしかできなかつた。すぐにでも逃げ出したいのに足がガクガク震えて言うことを聞かないのだ。

どうしよう、どうしよう。

頭の中は真っ白になつていてパニック寸前にまで陥つている。男は強引にレイピアの腕を掴むと暗い路地の方へ連れて行こうとした。

「や、やめて……っ！」

裏返つて、ほとんど声にならない声で叫ぶ。

レイピアは本当に恐怖を感じてゐるときは声が出ないことを知つた。大声を出して助けを求めたいのに、それができない。

「ハツハツハ。聞いたか？ やめて、だつてよ。何てかわいらしい声なんだ」

「それに美人だな、こんな極上の女そういうねえや」

大男の手が背中の辺りまで伸ばしたレイピアの髪に触れる。その瞬間ぞつと鳥肌が立つて、思いつきり大男の足を踏みつける。レイピアにできる精一杯の抵抗。痛みに堪えきれず叫び声を上げた大男の手を振りほどき、逃げ出した。

先程の店にさえ逃げ込めばあの店主が助けてくれるかもしれない、そう思つて。

しかしすぐに別の男がレイピアの肩を掴んで路上に叩きつけた。石畳の固い路上にしたたかに背中を打つた衝撃で思わず咳込む。

「いの女……っ！」

足を踏まれた男は怒り狂つて馬乗りになると、レイピアの胸倉を掴み上げて思いつきり拳を振り上げた。

殴られる。

そう思つた瞬間、大男の体がいきなり吹き飛んだ。酒場の外壁に沿つて積み上げられた木の箱の山へと頭から突つ込む。

驚いてレイピアが見上げると、そこには男が立つていた。ホットリープの辺りでは滅多に見かけることのない褐色肌の異国風の男。背中まである黒い髪の毛を一本に束ね、闇の中でもギラギラ光るタイガーアイエローの瞳は氷のように冷たい。腰には剣を差して皮の胸当てをつけ、剣士風の格好をしている。

近寄るだけでズタズタに切り裂かれてしまいそうな、抜き身の刃のような男だとレイピアは思った。

「邪魔だ、酒場に入れねえだろうが」

その男は忌々しそうに冷たい声で氣絶してしまった大男に言い放つと、呆然と座り込むレイピアなどまるで眼中にないようになり過ぎた。

「て、てめえ！」

大男の仲間は顔を真つ赤にして怒りをあらわになると褐色肌の男に殴りかかった。

「低脳なサルが！」

男は吐き捨てるように言い放つと腰に下げている剣に手を伸ばすことなく、襲い掛かってきた男達を次々と素手で殴り倒した。剣を抜くまでもない、そう考えているのだろう。

数十秒もしないうちに全員を地面に叩き伏せた。

「クソッタレ。手が汚れたじゃねえか」

そう毒づいて、褐色肌の男は再び酒場に向けて歩き出した。

「あ、あの……っ、ちょっと待……」

その迫力に圧倒されながらも、レイピアは何とか勇気を振り絞つて褐色肌の男を呼び止めた。

振り向いた男は冷ややかな目でレイピアを見た後、いきなり胸倉を掴んで酒場の外壁に押し当てる。その勢いにケホ、とむせ込む。

「そもそもの原因はおまえか？」

レイピアは田を見開いた後、申し訳なさげに俯いた。

「は、はい。「めんなさい……」

男はレイピアの身なりの良い服装を見てつまらなそうにため息をついた。

「どこの貴族の馬鹿女か。どうこうつもつて来たか知らんがさつれと連れてまへ」

田障りだ、と言われそのあまりにきつすぎる言葉にレイピアは心を切り裂かれるような、そんな気持ちだったが深々と頭を下げる。

「あ、あの……ありがとうございました」

「勘違いするなよ。あのサル共が邪魔だつたから退かしだけだ」「それでも……っ、助けてもらったことに変わりはないから。あり

がどういります。私の名前はレイピアと書こます。このお礼な  
何でもしますから!」

男は何の感情もこもらない目で見ていたが、レイピアの発言に考  
え込むそぶりをした。

「ふ……ん。何でもする、ね。よく見るとなかなかの美人じゃない  
か」

一瞬男の目に剣呑な光が浮かんだ。

男はレイピアの顎を強引に持ち上げると、口惑い震える唇に自ら  
のそれを重ねた。さらに口づけを繰り返そうとするが、レイピアが  
何の反応も示さなかつたので興奮めしたように舌打ちをすると男は  
レイピアを突き放した。よし、とようける。

「少しごりご抵抗しないよ。つまらねえ……」

レイピアは唇を押されたまま目を見開いた。

「今の……って」

今一つて……今一つて……。  
もしかして……。

呆然とするレイピアに男は盛大にため息をついた。

「おーおー、まさか本当にお嬢様なのか? キスも知らないなんて  
は、話には聞いたことがあるけど……」  
「マジかよ……」

呆れかえつたように頭をガシガシと搔く。しかしその表情には悪びれた様子は少しもない。ふいに何かを思いついたようだ、男はレイピアの手を強引に引いて歩き出した。

半ば引きずられそうなほどのかに戸惑いの声を上げる。

「あの、どこに……？」

「大方家出でもして行くところがないんだろう？　しばらく面倒見てやつてもいいぜ」

「でも……私、あなたのこと全然知らないもの……」

その言葉に男はつまらなさうに顔をしかめる。

「せうか、それじゃあな。せいぜい同じ田に遭わないよつて氣をつけるよ」

意外なほどにあっさりとレイピアの手を離すと、そのまま歩いて行く。人気のない路地に取り残されそうになつて慌ててレイピアは男を呼び止める。いつまた変な男にからまれるかわからない状態なのだ。

「ま、待つて！」

振り返った男はにやりと笑って手を突き出した。

「来いよ、レイピア」

それは獲物を追い詰めた野性の獣のような笑みだ。その獲物が決して自分の元から逃げることができないのをわかっているようなそんな笑み。

事実レイピアは男から逃げることができなかつた。

惹かれてしまったから。

名前も、年も、職業も、何一つ田の前の男のことを知らないといふのに それでも惹かれた。

男の、孤高の狼のような野性的で荒々しいところ。凍つた月を思わせるような冷たさざるほどタイガーアイロードの瞳に捕らわれた。

おずおずと手を伸ばす。

「……私、足手まといになるかも知れないけど……がんばるから……だから、連れて行って」

突き出された男の手をぎゅっと握った。

置いていかれないように、決して離れてしまわないように。

森の中を素早く歩くのは至難の業である。

雨上がりなどは特に最悪で、歩くたびに泥が靴の裏に張り付いてくる。草木も湿っていてそこを通るたびに容赦なく服がしつとりと水を含んでいく。

踵の高くなつた靴は長時間歩くために作られたものではない、ましてや森の中をそのよつな靴で歩くなど論外である。すでにレイピアの足にはいくつものまめが出てつぶれてしまつていて。

スカートで歩き回つていたため、剥き出しになつた部分は草で切れていくつもの傷ができていたし、そのスカートですら泥まみれで見るも無惨な状態。

ほとんど泣きたい気持ちでレイピアは森の中を歩いていた。

前を歩く褐色肌の男はレイピアのそんな様子などおかまいなしにどんどん進んでいく。

休憩をしたいなんて言つたら呆れられて置いて行かれそうなので、言えるはずもなく必死になつて後を追いかける。

男の名前はコーヴァと言い、冒険者をしていてそれで生計を立てていると語つた。それ以外のことば一切語らず、レイピアもあえて尋ねなかつた。誰にでも語りたくないことの一つや二つはあるだろうし、自分もまた何が原因で家を飛び出したのか語りたくはなかつたから。

昨日あの後すぐに雨が降り出したにも関わらず、コーヴァはホットリープの街を後にした。

行き先はどこかわからぬ。

わからないけれど、黙々と後を追つた。

夜通し歩いていることになる。徹夜をしたことなど初めてで、頭はふらふらして足が痛くてたまらないけれど、何とか気力をふりしほって歩いた。

一歩歩くたびにナイフで切られるような激痛が走る。

ぬるぬると変な感じがする。恐らくまめがつぶれたところから血が出ているのだ。レイピアには傷の具合を確かめる勇気がなくてそのまま我慢して歩いた。

それから1時間ほど歩き、森が開けたところまで来るとコーヴァは腰を下ろした。まだまだ森を抜けるまでは時間がかかるのだ。ついようやく休憩できる。ついでレイピアもそこから少し離れた位置にへたり込む。

木々の隙間から見える太陽が真上に来ていることから、昼を取るために休憩したのだ。

「あの……私達これからどこへ行くの?」

おずおずと尋ねたレイピアにコーヴァは乾燥した干し肉を何枚か放つてよこした。

「セレイラの街に行つてお前の冒険者登録をする。まずはそれだな

セレイラの街。

そこがどんなところかわからず、あれこれ想像しながらレイピアは頷いて固い干し肉を頬張る。干し肉など初めて食べたのでそれが何の肉なのか良くわからないし塩気ばかりが気になつてあまり美味しいとは言えないが、お腹は空いていたので食べることができた。

「それからどうするの?」

「さあ、どうするかなあ」

コーナーはくくく、と喉を鳴らして笑った。

ひどく不安を煽る笑いだと思った。そんな不安そうにコーナーを見つめるレイピアに気がついたのか、彼はくしゃりとレイピアの髪の毛を撫でた。

「どう心配するな、悪いようにはしない」

たつた一言。

その言葉を聞いただけでレイピアは自分でも驚くほど胸が軽くなつた。この人を信じてもいいんだ、そう思った。  
やがて干し肉をすべて食べ終わったコーナーは木の根元に寝転がつて、うとうとと居眠りを始めた。

コーナーに何かお礼がしたいと思つた。

お礼としてお金を払うのは少し違う気がする、それよりももつと誠意のこもったもの 例えは彼のために何かをすること。

(やうだ、果実を取つてプレゼントしよう。)

ここに来る途中、赤い果実がなつている木を見かけた。雰囲気からといって甘いお菓子の類は好みそうにないが、過日のような自然の甘さのものなら食べるだろうと思つた。

今のレイピアにできる精一杯のお礼だった。  
思い立つたらすぐに行動に移す。

コーナーからなるべく離れないようにして森の中を歩き回る。

意外とあっさり果実のなる木は見つかった。真っ赤な大粒の実をたくさんつけている低木。今まで一度も見たことがない果実だ。

レイピアの手に届く範囲だったのでその果実を1粒摘むと口の中に放り込んでみる。

口の中にふわりと甘い味とほどよい酸味が広がる。

自分の手で摘んだ果実は屋敷にいるときに食べたどんな果実よりもおいしく感じられてついつい調子に乗って何個も口にする。

そして手に持っている皮袋においしそうな果実を選んで放り込む。喜んでくれるといいな、と思いながら。

「さて、と。これくらいでいいかな……」

ついつい袋いっぽいに果実を放り込んでしまっていて、気がつくと時間がだいぶ経っていて慌てて元の場所に戻る。

ところが、コーヴの姿はそこにはなかつた。辺りを見回しても静まり返つていて人の気配がない。

いや、もしかしたら本気で連れて行ってくれる気など最初からなかつたのかもしれない。

嫌な考えが頭をぐるぐると回ると、悲しくて見る見るうちにレイピアの目に涙が浮かんだ。それでも何とか唇を噛み締めて堪えると荷物を抱え込んで走つた。男に追いつくために。

どうか追いついて！

祈るような気持ちでレイピアは走つた。

足が痛んだがそんなこと気にしている余裕はなかつた。目まいがして気分が悪いけれどそんなことも気にしてはいられなかつた。

肩で大きく息をしながら、目に入る汗を手の甲で拭う。全力で走つた甲斐があつて、なんとかコーヴの後姿を見つけることができた。

「なんだ？ 帰ったんじゃないのか」

レイピアの方を振り返ったコーヴは驚いたように田を見開いた。姿の見えなくなつたレイピアが家に帰つたと思い込んでいたのだろう。

よかつた、置いていかれたわけじゃなかつたんだ。

安心すると一気に今まで溜まつていて疲れが押し寄せ、レイピアの体はぐらつと傾いた。地面に倒れた時に手にしていた皮袋を下敷きにしてしまつてぐちゃりと潰れてしまつたが、そんなことを気にする余裕もなく意識を手放した。

ひどく両足が痛んだ。

焼けるような熱さと痛みが両足を襲い、レイピアの意識は無理矢理覚醒していった。ゆっくりと田を開けると最初に目に飛び込んできたのは、呆れかえつたようなコーヴの顔だった。

「……あー」

慌ててレイピアは起き上がる。しかし途端にひどい田まごを覚え、よろけたところをコーヴによって抱きかかえられた。

不安で不安でたまらなかつた心に差し伸べられた手。

初めてこの男にやさしくされたような気がして、嬉しさと安心感から今まで溜め込んでいた涙がボロボロと溢れ出した。

「よ、よかつた……よかつた！ お、置いていかれたかと思つ……  
うわああああん」

レイピアは小さい子供みたいに声を上げて泣いた。その間、ゴーザはじつとレイピアを支えたままでいた。

やがて涙を出し尽くしたレイピアは思い出したように果実を入れた袋を探す。しかしそれは無惨にも地面の上でつぶれていた。

「果実……つぶれちゃった……」

落胆の色を見せうなだれるレイピア。

「それを取りに行つてたのか？」

「うん。あなたにお礼がしたくて必死になつて取つてたらいつの間にか時間がいっぱい経つって……あなたは居なくなつてるし、森は暗いし……」

思い出して、また不安になつたのかひつゝへとしゃべりあげる。

「馬鹿な女……。何で他人のためにそこまでする必要がある？」

ゴーザは理解できない、そつ言つたげな目でレイピアを見た。

「ゴーザ……」

「……言えよ、どうせ何か魂胆があるんだろ？」

タイガーエローの瞳が暗く陰り、レイピアは胸ぐらを掴まれる。いつも簡単に体が持ち上がり、つま先立ちの状態になる。

「何をたくさんでる？」

ぎつ、と喉を締め付けられるが何とかかされた声をしぼり出す。

「違うわ……そんなんじゃない。だって……嬉しかったんだもの。来いよ、って言つてくれたコーヴの言葉が。私、行くところがなくて心細かったから・・・だから、お礼をしようと思ったの。つぶれちゃつたけど……」

「お前の言つてることはよくわからねえ……。理解不能だ」

首を締め付けていた手が緩む。

コーヴはひどく混乱した頭を落ち着かせるために右手で額を押さえると、そのまま倒れこむようにレイピアにもたれかかった。

苦しみをこらえるようなまるで子供が痛みを必死でこらえているみたいな傷ついた表情をしている。

「両親ですら……何の見返りもなしにそんなことしないし、子供すら平気で捨てる。ましてや他人なんて……そう、思つてた……なのに……どうしてお前は……」

「コーヴ……」

レイピアがどこかコーヴに對して感じていた微かな寂寥感の正体を今理解した。

父親に約束を破られて家を出たレイピア。

両親に捨てられたコーヴ。

痛みの程度は遙かに違つていたけれど、2人はお互いに同じ痛みを持つついて、そしてお互い心の奥底で親に對して愛情を求めている。

似ているのだ。

似ているからこそ最初に会つたときに寂寥感を感じた。

そつとコーヴを包み込むようにして背中の方に手をまわした。顔をあげた彼と目が合った。

「俺が……怖くないのか？ 正体すらわからない奴だぞ」

「最初は少しだけ怖かつたけど。でも、今は平気。コーヴは私を助けてくれた人、私にとつては光みたいな人なの」

はにかむようにして笑う。

「変な女……。最初に見た人間を親だと思い込んでついてくるヒナみたいな奴」

そう言つてレイピアを見つめるコーヴの瞳は氷のような冷たさではなく、微かではあるがやわらかいものへと変わっていた。

コーヴはレイピアから体を離すと袋からつぶれてしまった果実を取り出し、それを口の中に放り込んだ。目を見開くレイピアの前でゆっくりと味わうように咀嚼してから飲み込む。

「……ふん、まあまあだな。今度からは枝の先端からじゃなく幹に近い方に生つてるものを取れ。その方が甘い」

出来の悪い教え子を諭すように言った。

急にやさしくなった態度にレイピアは戸惑いを覚えながら男を見上げた。

「……悪かったな。お前お嬢様だつたんだよな  
「え？」

コーヴは傷だらけになつたレイピアの足元に視線を落とした。草木によつて傷つけられた足は血が滲んでいて痛々しい。

「無理して歩いてたんだろ？　今度からは痛くて歩けないとか、ち  
ゃんと言え」

「うん。ありがとウ……コーザ」

セレイラの街に無事に着いたレイピア達は、冒険者登録をしてそ  
れから2カ月の間に3、4回ほど冒険に出た。

コーザはレイピアに剣の扱い方や料理の作り方などあらゆ  
る生活技術を教え込み、驚くべき吸収力でレイピアは成長していっ  
た。

そして時が経つにつれて2人の距離も縮まつていった。

幸せ。

その2カ月を表現するのにこの言葉ほどふさわしいものはないだ  
ろ？。

レイピアはコーザを愛していたし、そして彼もまた自分を愛して  
くれているのだと思った。彼はそのことを言葉にすることはなかつ  
たけれど、驚くほどやさしくなった瞳がそう語っている。これから  
先も、この幸せな日々が続していくのだと信じて疑うことはなかつ  
た。

セレイラの街の宿屋に滞在するよになつて2ヵ月経つたある日のこと、コーナーとレイピアの元に1組の男女が尋ねてきた。

朝早くにノックの音が鳴り響いた。

その音で目が覚め、部屋着のままレイピアが扉を開けると1組の男女が廊下に佇んでいた。

明らかに宿屋の従業員とは服装が異なつている。女の方は太股の辺りまで大きくスリットの入ったロングスカートに胸の大きく開いた真っ赤なシャツ。男の方は皮の胸当てと腰巻をした冒険者風の服を着ていたからだ。

一見するとチグハグとも言える2人。

「あのウ……どちらまでしょつか？」

不審に思いながらおずおずとレイピアが声を掛けると女性の方が口を開いた。

「コーナーに用があつて来たのよ。いるんでしょう?」

妖艶。

目の前の女性を一言で表すとまさにその言葉がピッタリだらう。真っ赤に塗られた唇に手を当てて艶やかに笑う。その仕草一つ一つが魅惑的で、レイピアにはない色氣というものがある。女であるレイピアですらドキリとしてしまうほどだ。

肌の色は褐色で豊かな黒髪。恐らくコーナーと同じ地方出身の女性。

「ユーザに……？ 何の用ですか」

こんな綺麗な人がユーザに何の用があるとこいつのだりひつ。  
少々ムツとしながら尋ねる。

女性は面白そうにくすりと笑うと、問いかけに答えることなくレイピアの脇をすり抜けて寝室の方へ向かった。その後に男も続く。

「ちょ、ちょっと… 何なの！？」

慌てて男の手を掴んで引き止めるが、軽く睨まれる」とによつて制される。

頭は禿げ上がつていて、屈強な体格をしている。左耳のところに剣のようなもので傷つけられた跡が縦に走つていてその顔で睨まれると迫力があり、思わずレイピアはたじろぐ。

それでも何とか寝室まで追いかける。

レイピアが中で見た光景は

「起きて、ユーザ。あなたいつもこんなに寝起きが悪くなつたのかしら？」

まるで愛しい恋人を起こすようにユーザの耳元で甘い声を出して、髪の毛に手を差し入れていて女性の姿だった。

レイピアは口を金魚みたいにパクパクさせてその光景を呆然と見つめる。

「な、な、な、何を

！？」

その声に反応するよつとユーザがのろのろと重い瞼を上げる。そしてその視線が田の前にある女性とぶつかる。ユーザは飛び起きるようにして体を起こすと、毛布をベッドの端に寄せた。

「アルジエリカ……！？」それにオリバまで……」

「どうしてここへ？ そう問い合わせるようにユーザは目を見開いた。

「ふふ、そんな驚いた顔しないの。あなたが全然私達に連絡をよこさないから私達の方から尋ねてきたのよ。まさか迷惑だなんて思つてないわよねえ？」

アルジエリカと呼ばれた女性はまさに今、獲物を捕らえようとしている猛禽類のような目でユーザを見つめた。無言のままの彼におも言葉を続ける。

「それにしてもあなたがまさか女と行動を共にしているとは思わなかつたわ。あなたの好みってこういうタイプだったかしら？ まるで清純なお嬢様って感じね」

くすくすとレイピアを見て笑みをもらす。

人を見下しているような、そんな笑い。まるで自分が女として上だというような。

レイピアは怒りと屈辱でカツと顔が赤くなる。

「ああ、それともこの娘って今度の……」「

「黙れ、アルジエリカ」

アルジエリカの言葉は最後まで続くことなく、ユーザの怒りを含んだ声によつて遮られた。

機嫌を損ねたようにふん、と鼻を鳴らしてアルジエリカはそっぽを向く。

「コーナー……？」

今度の……？

アルジェリカは何を言おうとしていたのだろう？ひどく不安を覚えてコーナーに視線を向ける。するとその視線に気付いたコーナーはレイピアの頸を掴んで引き寄せるとサッとくちづけた。続けて瞼と頬にも唇を落とす。

「心配するな」

そうコーナーは言つものの、何となく誤魔化されたような気がしてならなかつた。確かめようとすると、それを遮つたのはアルジェリカのくすくす笑う声だった。

「あらあら、ずいぶんかわいがつていらっしゃること

珍しいものでも見たように、アルジェリカは面白そうに口元を歪める。

「アルジェリカ」

タイガーライロードの瞳が氷のように鋭くなり、「まあ恐い」とアルジェリカは肩をすくめた。

「そんなに怒らないで欲しいわ、軽い冗談なのに。お嬢ちゃん、少しだけコーナーを借りるわよ？」

踵の高くなつた靴を「ツツツツ」鳴らして扉へ向かうとコーナーを手招きした。ため息をつき、レイピアの頬から手を離すとコーナーもまた扉へと向かって歩き出した。

「ちょっと待　！」

慌てて追いかけるレイピアの襟元を掴んでオリバが止めた。その際にぐい、と引っ張られたのでわずかに首が締め付けられる。

「オリバ、レイピアに触るな」

鋭く一喝する。どうやら力関係ではコーラーの方が上のようすで、男は素直にその手を離した。彼からレイピアを引き離すとコーラーは子供をあやすようにレイピアの頭を撫でた。

「少し話をしてくれる。ここで待ってる、いいな？」

有無を言わせぬ口調で言うと、アルジェリカとオリバと共に出て行ってしまい、レイピアはわけもわからず1人取り残されてしまった。

＊＊＊

1時間。  
2時間……。

時計の針だけがチクタクと時を刻んでゆく。  
いくら待つてもコーラーが帰ってくる気配がなく、レイピアの不安は募るばかりだった。

何を話しているのだろう？

の人達は一体誰なんだろう？

コーラーの過去も、そして彼自身のことすらもほとんど知らずにいる自分が歯がゆい。

ため息をついてぼんやりと窓から外の景色を眺めた。  
雲がのんびりと流れしていく。

「ドンドン、ドンドン……。」

いきなり部屋の中の静寂が破られた。  
それは扉を叩き壊してしまった。そのままほどの激しい勢いのノックだった。レイピアは驚き、恐る恐る扉へ向かう。

「ユー……ザ？」

問い合わせるが返事はない。代わりに返ってきたのは扉を押し開ける音だった。そしてそこから顔を出したのは先程ユーザと出て行ったはずのオリバと、何人かの男達。はっと息を呑むレイピアなどおまいまいなしにどんどんと部屋に押し入ってくる。

「ユーザはどうしたの？」

「あの人ももう戻つて来ねえよ」

ふん、と鼻を鳴らしてオリバはレイピアをまるで小動物でも見るようになだめ下した目で見た。

「そんなことない！ 戻つて来るって言つたもの」

「馬鹿な女。そんな言葉を信じてるのか？ あの人があの最初からお前みたいな女を相手にするとも思つたのか？」

オリバと男達はお互い顔を見合わせて笑いあう。

「お前はもう見捨てられたんだよ」

別の誰かがにせにせしながらつぶやいた。

何を言っているんだ?この男達は……。

レイピアはカサカサに乾いた唇をぎゅっと噛んで、男達を睨みつけた。

「そんなの信じない、コーナーは絶対そんなことしない! いい加減なこと言わないで!」

彼がそんな男でないことはここ2ヵ月一緒に過ごしてきたレイピアが一番良く知っている。彼の口から直接その事を聞かない限り、信じられなかつた。

「キーキー喫くな、つるむそこ。おい、いいから連れてけ

オリバが耳を塞いでうんざりした顔をする。  
額でもって扉の方を指し示すと、男達は手にしていた縄でレイピアの両手と両足を縛りあげて肩に担いだ。

「何するのよ!?

「さあてね、どうするかはこれから決めるといいんだ

「は、離しなさいったら!」

ジタバタと手足を動かせるだけ動かして抵抗する。そして愛しい者に助けを求める。

「コーナー、コーナー……っ!

「うああああああああああああ!?

「うああああああああああああ!?

レイピアと、彼女を抱えていたはずの男の叫び声が上がったのはほぼ同時だった。

男は手の力が抜けたようにレイピアを地面に落とすと、そのまま床へと勢い良く倒れこんだ。仰向けに倒れた男は左肩から右腹にかけてざつくりと斬られたらしく、おびただしい量の出血をしている。床に転がったレイピアが痛みを堪えて顔を上げると、そこには血に濡れた真っ赤な剣を手にしたコーヴァが立っていた。

「平氣か？　レイピア」

無表情のままレイピアを縛っていた縄を外すと、コーヴァはオリバに向き直った。微かにオリバの顔が青ざめる。

「……レイピアに触るなって言つたよなア？　オリバ」

その氷のような目と怒りを含んだ声音に射竦められるように、オリバはガタガタと震えながら後ずさりをしほじめた。

「ち、違つ……俺は……良かれと思つて……」

「誰の女だと思つてる？」

「……あ、アアう」

恐怖が先でもはや言葉にならない。

血に染まつてもなお鋭さを失つていしない剣を片手にして、ゆっくりとコーヴァは壁にへばりつくようにして立ちすくむオリバに近づいていく。

「誰の女だと思つてるんだ？」

まるで小さい子供にでも言ひ聞かせるよつと、一言一言を区切りながらゆつくりと言つ。

「や、やめてくれ……」

オリバは懇願するよつに額に汗を流しながらかすれた声を出した。  
「俺を怒らせるどどうなるかわかつてやつたんだろ？　やうだよなア、オリバ！」

オリバが目を見開いてひとつ息を呑み込むのと、ゴーザが手にした剣が真横に払われるのはほぼ同時だった。  
皮膚と肉を裂く鈍い音が室内に響き渡つた。

ほとばしる鮮血。

左手首が床に転がり、パックリ開いた傷口から大量の血が吹きだした。

部屋中に生臭さと鉄臭さが充満する。

「その手癖の悪い右手も落としてやるつか？　ん？」

くく、と喉の奥で笑う。

心底可笑しそうな、狂氣を孕んだ笑み。

「さやああああ！」

口元を覆つて悲鳴を上げたのはオリバでもレイピアでもなく、息を切らしながら部屋に入ってきたアルジェリカだった。オリバは死に至つてはいないものの、すでに気絶をしてしまつていたから。

「ゴーザ！？　なぜ……っ！」

「アルジエリカ、お前もわかつてゐはすだらう？ 僕を怒らせた罪は重い」

すつとコーヴザの目が細まる。

静かな聲音。

こんなコーヴザは初めて見る。

彼が人を斬った所はここ2ヶ月の間に何度か見たことがある。しかしそれは剣を向けてきた相手に對してだ。

オリバはただ震えて懇願していた。無抵抗だった。それを

。

声も出せず、田を見開いてレイピアはぐつたりとしているオリバを見つめていた。

「……こんな、こんなことをしてただで済むと思つてゐるの？」

「さつさと消える、アルジエリカ。今なら見逃してやる」

「許さない……コーヴザ……」

アルジエリカは瞳に憎悪といつちの黒い炎を灯してコーヴザを睨みつけた。

「2度は言わない」

アルジエリカに切つ先を向ける。

コーヴザの腕ならば彼女の細い首を体から切り離す」とくらいうれしいだろ？。さあ、と悔しそうに唇を噛み締める女。

「もう止めてー！」

緊迫した空氣を破つたのはレイピアだった。

「 もう、止めて…… ユーザ」

その声に反応するよつこ、残った男達は氣絶したオリバともう一人の男を抱えると呪をもつれさせながら逃げ出した。アルジエリカも最後にもう一度憎惡の瞳をユーザに向けると扉から出て行つた。

\* \* \*

ユーザはカタカタと震えるレイピアを抱え上げて、隣の部屋に移動した。ベッドにレイピアの体を横たえると、自らもその隣に腰掛ける。

「 …… あの人達は一体 …… 誰？」

震えが収まり、だいぶ頭の中が整理されたといひで口を開く。

「 あの人達はユーザの知り合いなの？ どうして …… 私のところに来て …… あんなこと言つたんだろう …… 」

あの人人が最初からお前みたいな女を相手にするとでも思ったのか？ お前はもう見捨てられたんだよ、そう言つていた。そしてアルジエリカと共に出て行つたユーザは何を話していたのだろう？

無表情のまま、押し黙るユーザ。

「 どうして何も言つてくれないの？」

「 言つて、信じるのか？」

そこひでようやくユーザが口を開く。

氷のように冷たい声。それは2カ月前に出会つた時の、レイピアを空氣みたいに扱つて関心を持たずにいた頃の冷たい響きだつた。

コーヴなのに、まるで知らない人のようだ。  
レイピアの脳裏にオリバの左腕を難なく落とし、狂気に歪めていたコーヴの顔が浮かぶ。

恐い、と思った。

それと同時に困惑が生まれた。オリバのあの震えよう、以前にも彼が怒ったところを見たことがあるような、そんな怯え方だった。彼らが知つていてレイピアの知らないコーヴ。

そして今、田の前にいるコーヴ。  
どちらが本当の彼なのだろう？

「正体すら分からぬ俺の言葉を信じられるのか！？」

コーヴはレイピアの体を押さえ込むようにしてベッドに沈み込ませると、強引に唇を重ね、それを角度を変えながら何度も、何度も繰り返した。

左手で顎を押さえ、開いた口に強引に舌が差し入れられる。

「ん……うう、…………んーっ……」

コーヴの体を押しのけようとするがビクともしない。それビクろか片手で押さえ込まれ、彼の自由な方の手がレイピアの胸元のボタンにかかる。ブツツという音とともにボタンはあつさりとはじけ飛んで、白い素肌があらわになる。

今のコーヴはコーヴであって、コーヴでない。  
心が荒んでいるような状態。  
心の中が見えない状態。  
恐くてたまらない。

「……っ、嫌だ！ やめてコーヴ！」

「嫌だつたら払いのけてみるよ」

力でかなうはずなどない。そんなことコーヴ自身が一番良くわかっているはずなのにそんなことを叫ぶ。そしてわざと彼の力が強まり、息ができなくなるほどじりへりへ抱きしめられる。

「痛い……っ、コーヴ、苦しい……っ」

荒々しいけれど、その抱擁はコーヴの感情が流れ込んでくる程の救いを求めているような、すがりつくようなものだった。レイピアはぐつたりしたように、手足をシーツに投げ出した。途端にコーヴはレイピアを押さえつけたままの姿勢でつまらないうに顔をしかめた。

「何で抵抗しない？」

苛立つたようにつぶやく。

「だつて……コーヴ……辛そうな顔してゐる」

冷たい瞳だが、傷つき今にも泣き出しそうに見えた。先程の恐いくらいの荒々しさは、心の中に渦巻いている痛みを消すためのもの、救いを求めるもの そんな風に思える。そつとレイピアは彼の頬を両手で挟んだ。

「コーヴ、苦しいんでしょう？ 何も言つたくないなら……それで  
もいいから

氷のような瞳はレイピアの言葉によって戸惑いの色へと変化した。

「へんつ……」

コーナーは机を離すと、レイピアの体を離してベッドの端に座った。そして「めぐみつて、たぶん葉を絞り出した。

「悪い、レイピア……。俺は……」

コーナーは額を押さえずまなづけに顔を離めた。

「俺は……お前にまだ言つてない」とがある。でも、今はまだ言えない……聞えないんだ……」

「コーナー……。この、氣にしてないから。だって……私にとってのコーナーは今のコーナーなんだから」

やせりレイピアは今、今のコーナーが本当の彼のようになれる。そしてそれを信じている。

そつと背中越しに彼を抱きしめる。ぬくもりが感じられた。とても心地良いあたたかさ。

「私は今、目の前にいるコーナーが好きなんだから……」

コーナーは毛布にくるまるようにして眠るレイピアを包み込むように抱きしめる。身じろぎをして思い臉を上げると、やわらかく微笑むコーナーの顔が映つて、安心したようにレイピアもまた微笑む。

二つもの彼だ。

「悪い、無茶しそぎたな……」

そう言つて、汗で額に張りついてしまったレイピアの髪の毛を梳  
き上げるとその部分に歯を落とした。

「ううん、大丈夫」

毛布にくるまつたままコーディに寄り添つ。  
その体温が温かくて心地よくて、瞼を閉じると再び眠りに引き込  
まれた。

アルジエリ力達の一件があつて以来、コーヴが考え込むことが多くなった気がする。

冒険に出でているときも、食事をしているときも、レイピアが話しあげているときもどこか上の空っぽんやりしている。

それが気のせいがないことが確信できたのは、コーヴの元に送られてきた一通の手紙だった。真っ白な封筒には宛先しか記載されておらず、差出人は不明。

その手紙を読んだコーヴは顔を強張らせた。レイピアがその手紙を覗き込もうとすると、見る前に懐にしまい込んでしまった。

結局その手紙には何が書いてあるかわからなかつたけれど、それからといふもの彼はますます難しい顔をして考え込む日々が続き、漠然とした不安が胸をかすめた。

「レイピア……俺は冒険者を辞めよつと思つてゐる」

ある日突然コーヴの口から発せられた言葉に、最初それが何を意味しているのか理解できなかつた。

冒険者を辞める？

辞めて一体どうして辞めるなんて……？」

「俺だけじゃなくお前も冒険者を辞めるんだよ。この街を出でだしが小さい村に移つて……2人で暮らさないか」「え……？」

田を瞬かせて、ゴーザを見る。彼は照れたように頭をかいて、おもむりにズボンのポケットから小さい箱を取り出した。

「鈍いな。お前つてハツキリ言わないと駄目なんだろうな……」

ゴーザがその小さい箱を開くと、中には銀の指輪が輝いていた。結婚を申し込むときには、飾りも何もついていないシンプルなデザインの銀の指輪を相手の指にはめることがホットリープ地域の古くからの風習だ。

求婚された者はそれを拒否するならば指輪を地面に落とす。受け入れるならば指輪にキスを落とす。

「……俺と結婚して欲しい」

「……」

その指輪はピッタリとレイピアの指にはまつた。呆然と見ていたレイピアだったが、やがてゆっくりと行動を起こす。答えは迷うはずもなく決まっている。

そつと銀の指輪に口づけた

それは求婚に答えるという証。

「ありがとう……ゴーザ」

幸せいっぽいの笑顔を浮かべる。

あの不安はきっと氣のせいだったのだ。

こんなにも幸せなんだか、ひ。

「俺はこれから最後の冒険に行つてくれる。これが終われば……全て終わる」

そう言つて空を仰ぎ見るコーヴザの瞳には決意めいたものが宿つていた。

「最後の冒険……？ どこに行くの」

「盗賊退治……そんな類のものだ」

「もちろん私も連れて行ってくれるのよね？」

レイピアの問いにコーヴザは静かに首を振り、「お前は連れて行かない。ここで待つてくれ」ときっぱりと言ひ切つた。

「どうして！？」

「お前を危険な目にあわせたくないんだよ……。それに、これは俺のケジメでもあるんだ」

ハツとレイピアは顔を上げた。

『俺は……お前にまだ言つてないことがある。でも、今はまだ言えない……言えないんだ……』

そう言つて苦しげな表情をしていたコーヴザの姿を思い出した。もしかしたら彼の言うケジメとは過去の清算なのかもしれない。レイピアの知らない、コーヴザの過去。

「コーヴザ……」

「昔の俺は……お前に言えないような汚いこともたくさんやつた。この手は血で真っ赤に染まつてゐる。そんな過去の姿をお前には見られたくない……わかつてくれ」

辛そうなコーヴザの表情に心が揺れたが、それでもレイピアは首を

横に振つてここで待つことを拒否した。

「私はそれでもいい！ コーザの手が血に染まつても……結婚したいと思つてゐる。それでも連れて行つてはくれないの？」

彼の過去がどうであれ、関係ない。そう思つてゐるのに肝心のコーザ本人が頑なにレイピアに過去を知られることを拒んでゐる。いや、恐れていると言つた方が正しいか。

いつか彼の方から話してくれる日を待とうと思つてゐるけれど、結婚の申し込みをした今でさえ話してくれようとはしない。  
それがひどく悲しかつた。

レイピアの覚悟を知つたコーザはしばらく考え込んだ後、觀念したようにつぶやいた。

「わかつた。お前がそう言つなら…… 来いよ」

\* \* \*

セレイラの街から2時間ほど歩いた場所。

そこには何軒かの家が立ち並び集落になつてゐた。その家はいずれも壁が崩れ落ち、窓は割れていてまともな家が一軒も見当たらぬい。

人の気配は全く感じられず、生活感もないことから廃墟であることが容易に想像がついた。

歩くたびに枯れた草が力サカサと揺れる。

空を見上げるとどんよりと黒い雲に覆われていて今にも雨が降りそつて、それがまた不気味な雰囲気を漂わせている。

「リリーが……本当に盜賊達のアジトなの？」

不安を覚えたレイピアはおずおずとその疑問を口にする。コーヴィーはしーっと口元に人差し指を当てる。辺りに人がいないか確認し、声をひそめてレイピアの疑問に答える。

「これは見せかけだ。こうして廃墟の状態なら誰も近づかない。自警団の連中もまさかこんなところに盗賊達がひそんでいるとは思いもしないからな……」

セレイラの街には治安維持を目的とした住民組織の自警団が存在している。そして街で起こる犯罪の対処を行なっている。またこの組織は冒険者ギルドとも通じていて、犯罪者を捕まえるために賞金をかけることによって冒険者にも協力を求めているのだ。

レイピアとコーヴィーの今回の目的も盗賊達を自警団へ引き渡すためにある。

「奴らは廃屋の地下にいる」

コーヴィーはまるでここに何度か来たことがあるような慣れた足取りで、一軒の家に近づくと、半分朽ちた木の扉を軋ませながら開き、注意を払いながら中に入る。レイピアもその後に続いた。

かび臭さと湿気が中にはたち込めていて、顔をしかめ左手で鼻を押さえる。空いている方の右手はいつでも抜けるように腰に差した剣に添える。

「こべぞ、レイピア」

少しだけ振り返ったコーヴィーに頷いてみせる。

それが合図。

腰に差した剣を引き抜くと、2人は一気に地下室へ続く階段を駆け下りると中へと滑り込むようにして入った。その地下室は大広間のようなくらい造りになつていて、中に何人も男達が椅子に座つて酒を煽つていた。

「全員動くな！」

ユーザは地下室全体に響くような大声を出した。

男達は酒を飲んでいるせいもあってか、状況が理解できずに呆然と椅子に座つたままユーザとレイピアの方を向いた。

レイピアはその男達の中にオリバの姿を見つけ、目を見開いた。左手首を失い、その部分を包帯でぐるぐる巻きにしているが間違いない。

「……オリバ……」

ユーザもそれに気がついたようだったが、その顔には驚きの色はない。最初から彼がここにいることを知っていたような、そんな表情だ。

やはりオリバとユーザの間には何かあるのだ。

ただの知り合いではない、何かが。

アルジェリカの姿は見えないが、彼女もまたユーザとの間に深い関わりがあるのだろう。

今まで考えないようにしていたことが、レイピアの中で漠然とした思いながらも形成され始めた。  
もしかしたらユーザは。

「ユーザさん……」

オリバは椅子から立ち上がり、ゴーザの手にしている抜き身の剣を見て険しい表情をした。

「まさか……俺達を売るつもりか？」

その言葉に周りにいる男達もざわめく。「まさか……！」「そんなはずはない！」そう言しながら。

「いつから自警団の犬になつた！？　あんたは……」

「黙れ！」

オリバの声を遮るように怒鳴つたが、それでもオリバは続けた。

「俺達を……仲間を売るといつのか！」

「やめろおー！」

しん、と一瞬地下室が静まり返つた。

「仲……間……？」

愕然としてレイピアはつぶやいた。

考えまいとして必死で胸の中にしまいこんでいた考えが的中してしまつた。もしかしたらゴーザは　アルジェリカとオリバの仲間だつたのではないかと。

クク、と心底楽しそうにオリバは笑う。

「そうさ、俺達の仲間なんだよ。もう一〇年ぐらい昔からな

うぐつ

「黙れって言つてるだろ？が！」

ギリ、とコーナーはオリバの首を左手で締め上げ、右手にしていた剣で一気にオリバの腹部を貫いた。ボタボタと血が流れ、コーナーの服もまた返り血で真っ赤に染まる。

「正確に言つと仲間だった……だ。過去形なんだよ」

コーナーは懐から手紙を取り出すと腹を押さえてうめくオリバの目の前で破り捨てた。彼の元に送られてきた差出人不明のあの手紙だ。

「こんな手紙をよこしやがつて……悪いが俺はもうお前らと行動を共にする気はない。もひつ度と干渉して来ないのなら見逃してやる」

氷のように冷たい声だったが、そこにはまだかつての仲間に對しての思いが残つていよいよ感じられた。あくまでも自分に干渉さえして来なければ自警団に突き出す気はない、と。最後の警告だ。

「ククク、フフ……ハハハ！」

血溜まりの中でオリバは狂ったよつて笑い始めた。

「何がおかしい？」

「俺達から離れて……その女と幸せになるとも思つもつか？」

「そのつもりだ」

コーナーの答えに今度は嘲るよつて瞬の奥で笑う。

「そんなこと本当にできるとでも思つてゐるのか？ 血に染まつたその手が今さら洗い流せるとでも思つて……つがあー？」

ぞ  
ぶ  
り。

オリバの腹に突き刺していた剣を抜いて再び突き刺した。致命傷になる位置、心臓へ。

ヨーザの動きにためらいは微塵も感じられなかつた。

「喋りすぎだ」

吐き捨てるよう言い放つたその口調は驚くほど冷たくて、もはや何の感情もこもっていない。かつての仲間に對しての思いも、もはや存在しない。

「がはつ……。馬鹿なことを……。所詮悪人は悪人でしかないのさ。  
幸せなんか訪れやしない。…………、…………、…………つ」

最後の方の言葉はよく聞き取れなかつたが、オリバはヨーザの耳元に顔を寄せて何かをつぶやいた。それが彼の最後の力だつたのだろつ。ニヤリと背筋がぞつとするような笑みを浮かべて絶命した。呆然としたよつて立ちぬくユーザは口元に手を当て、顔を蒼白にしている。

「ユーモアザ?」

レイピアが手を伸ばすとユーザはそれを乱暴に振り払い、手にしていた剣の柄を思い切り握り締めた。

「くそっ……。何だと……？ あくしょう！ ウアアアアアアア

突然ユーザは血に濡れた剣を闇雲に振り払い、近くにいた男を斬り捨てた。

抵抗らしい抵抗を見せない男達を2人、3人と次々にその手にかける。人を斬つたために刃こぼれが生じているにも関わらず力ませに剣を振るう。その切れ味の悪さから一撃で絶命できない者が苦しみにのたうち回った。

転がつた瓶から漂う酒の臭いとむせかえるような血の臭いが入り混じる。

地獄絵図のような光景だった。

なぜこんなことになつたのだろう?

オリバは最後に何を言つたのだろう?

レイピアはコーヴを止めることもできず、ただ恐怖に震えてその場に立ち尽くすことしかできなかつた。

\* \* \*

雷鳴と共に雨が降り出す。

滝のような雨は返り血に染まつた2人の体を洗い流すが、心に残つた苦々しさだけは洗い流すことができなかつた。

セレイラへ帰る道のり、レイピアもコーヴも何も喋らなかつた。何も映さない虚ろになつたコーヴの瞳を見て、掛けた言葉が見当たらなかつたのだ。

あの後、生き残つていた何人かの盗賊達を柱に縛り付けて、レイピア達はギルドへ報告するために帰ることにした。

生き残つた、とは言つても剣による傷を受けていて重症を負つている者達ばかりだつたが。

セレイラの街まであと少しという場所に差し掛かったところで、ふいにレイピアの髪の毛が掴まれ、ザクリという音と共に雨の中に

散つた。背中まで伸ばした髪の毛が肩の辺りまで切られたのだ。

「な……何を……？」

頭が真っ白になりながら振り返つて見ると、コーヴは短剣を手にしていて、その短剣をレイピアに向けた。

驚愕に田を見開く。

「コーヴ……どうして？」

なぜ彼がこんなことをするのか。

信じられない思いで見つめるが、コーヴは何も答えなかつた。代わりに暗い闇の中にタイガーアイロードの瞳だけがギラギラと光つていた。

振り上げられた短剣を見て、とっさに左に避ける。少しだけ右腕が切れ細い糸のように血が流れた。

殺……され……る？

本能的にそう感じた。

逃げなくては、殺されると。

レイピアは背中を向けて逃げ出した。

雨を含んだ服は何倍にも重くなつてレイピアの動きを阻むが、それでも必死に逃げた。コーヴが追いかけてくる気配が背中越しに感じられる。

「嘘だ……何で……こんなこと……」

これは夢？

悪い夢……？

銀の指輪を見る。間違いなくその指輪はレイピアの左薬指で静かに輝いていた。どこからが現実でどこからが悪夢なのかレイピアには判別がつかなかつた。

照れたように結婚を申し込んできたコーヴィア。  
あれは・・・何だつたのだろう。  
あれすらも夢だつたのだろうか。

わからない。

何もかもわからなくなつてしまつたけれど、ただひたすら走つた。  
逃げるために。

しかしレイピアの足ではコーヴィアから逃げきれるはずもなかつた。  
突然後ろから突き飛ばされたような衝撃が走り、雨でどろどろになつた地面に勢い良く倒れこんだ。遅れて背中に痛みが生じる。

「アア……っ」

背中に突きたてられたナイフを肩越しに見つめて、悲鳴を上げた。  
傷口からは真っ赤な血が雨と共に地面へと流れ込んでいく。

「悪いな、レイピア」

レイピアが力を振り絞つて顔を上げると、口元に薄笑いを浮かべているコーヴィアの顔が見えた。

その笑みはどんな鋭いナイフよりもレイピアの心をすたずたに傷つけた。暗くてよく見えないけれど、きっとコーヴィアの瞳は氷のように冷えきついているのだろう。

やがて彼は踵を返してゆっくりと歩き出した。

「ハ……ザ……」

なぜ? エリス?

そう言いたいの元の声は出なくて、右手を伸ばす。けれどその手は歩き出したコーラーには届かない。

「…………」

「聞け……な……」

滝のよつな瀧はコーラーの言葉をかき消し、やがて姿すらも消しちた。

凍るよつこ冷たい瀧の中、レーベンは動べりともできずの場にしづくまつておつべりと皿を開じた。

「これは悪い夢なんだ……。」

次に皿が覚めた時にさうといの悪夢は終わってことだ。

「悪い夢でも見たのか?」やつ言つて笑つてコーラーの姿がある。

そう言じた……。

白い天井が視界に映る。

視界に映る全てのものは真っ白で、いつその頭の中さえも真っ白になってしまえたらいいのに、もう何も考えないで済むように。

レイピアが目を覚ましたのは病院のベッドの上だった。背中に鈍く残っている痛み。切られて短くなつた髪の毛。その2つの事実があの出来事が夢でないことを物語つていた。

夢だったらどんなに良かつたか。

いつそこのまま目を覚まさずにいられたならどんなに良かつたか。

「目が覚めたようだね」

低い声がレイピアの耳をうつた。

病室に入ってきたその初老の男は、白衣を着ていることから病院の医者であることに間違いない、しかしレイピアは虚ろな瞳で天井を見上げたまま答えようとはしなかった。

「君は3日間も眠りつづけていたんだよ」

医者はゆっくりと状況を説明し始めた。なるべくレイピアが傷つかないように、言葉を選びながら。

倒れているレイピアを発見したのはセレイラの街道を頻繁に利用している行商人だったこと。そして手術を終えた背中の傷は完全に跡が消えないということ。

静かに話を聞いていたレイピアはまるで魂が抜けてしまったよう

な声で医者に問い合わせた。

「ゴーザ…… ビー」……？」

医者は首を傾げ、困ったように眉をひそめる。レイピアの体に刺さっていた短剣には『ゴーザ』という名前が刻まれていた。おおよそ何が起きたのか予想のついていた医者はその問い合わせに答えず、代わりに別の言葉を口にした。

「君に面会が来ているよ。女性の方なんだが……」

そう言ってそれまで扉の向こうに立っていた女性を招き入れ、自身は気を利かせて部屋を後にする。レイピアが虚ろな瞳を向けると、そこに立っていたのはアルジエリカだった。真っ赤で毒々しい血のよみがけの花束を両手に抱え、ゆっくりとした足取りで近づいてくる。

「な…… んで……」

なぜアルジエリカがここにいるのか。

目を見開き、唇を震わせた。

まるでレイピアの言いたいことが全てわかっているようアルジエリカは口を開いた。

「お見舞いに、ね。それからゴーザのことを聞きたいだらうと思つてね」

花束を半ば強引にレイピアに押し付けると、ベッドのすぐ側に置かれていた椅子に腰を下ろした。

「コーナーは今、私達の元にいるわ。もつあなたの元には帰らない」

その言葉に弾かれたようにレイピアはアルジエリカの方を見つめた。コーナーがなぜアルジエリカの元にいるのか、全く訳がわからぬい。

アルジエリカはくすりと口元を綻ばせると言葉を続けた。

「あなたは騙されていたのよ」

「私が……嘘、そんなことない……」

首を何度も横に振つてその言葉を否定する。

「どうしてそう言つてきれるの？　じゃあなぜコーナーはあなたを刺して居なくなつてしまつたのかしら。冒険者ギルドでかけられていたあなたの保険金を受け取つて」

レイピアは凍りついたように動けなくなつた。

「保険金を受け取つた……？　コーナーが……？」

「そうよ。その顔だとやつと気がついてきたよつね。まあ思い出してじらんなさい、あなたに保険をかけたのは一体誰だったのかを」

記憶をたぐり寄せる。

レイピアに保険をかけた人、それは　コーナーだった。

セレイラの街について冒険者ギルドに登録した際に、レイピアに冒険者保険に入ることを進めた。この保険に加入していれば怪我や死亡などいざという時に保障してくれるものだつた。そしてレイピアは彼に言われるまま保険金の受取人をコーナーにしていた。

「ち……違う！　コーナーは……違う！」

必死で否定をする。

認めたくない、認めてしまつたらコーナーと過(い)した日々は全て嘘になつて崩れ落ちてしまつから。考えなによつに何度も何度も首を振る。しかしアルジエリカの言葉が止まることはなかつた。残酷なまでに冷え切つた言葉をレイピアに向けた。

「そもそもコーナーは本当にあなたを愛してこた?」「も、もちろん愛されていたわ……」

やれしかつたコーナーの瞳。

幸せだった日々。

あれが全部嘘偽りだつたなんて信じられない。

「本当に……彼に愛していると……そう言われたの?」

レイピアは顔を強張らせた。

『愛している』

自らが言つことはあつても彼の方から一度も言われたことは無かつた。コーナーと過(い)した日々をじくら想ひ返しても、見つかなかつた。

どんどん頭が混乱して、呼吸すら困難になる。

「言われたこと……ない……でも、でも……」

だんだん言葉は弱々しくなつていき、それ以上続けることができなくなつてしまつた。もう何も見つからなくて、わからなくて泣かれていたと言い切ることができなかつた。

「コーナーは誰も愛したことないのよ……そういう男

そう言つて目を細めるアルジェリカの瞳は切なげな色をしていた。ゴーザは誰も愛さない、その中にはアルジェリカ自身も含まれているのだろう。

「私達はね、盗賊まがいのことをしたり、あなたみたいな世間知らずの小娘に保険金をかけて殺したり花街に売り飛ばしたりするのを仕事にしているの。……あなたは運が良かつたわね」

運が良い。それはレイピアが殺されたり花街に売り飛ばされたりしなかつたことを言つてゐるのだろう。しかしアルジェリカはすぐにつの言葉を訂正した。

「……でも、そうとも言えないわね。ゴーザに愛されていると思いながら死んだ方がよっぽど楽だったのに」

かわいそうにね、と同情の入つた声でつぶやいた。

「もうゴーザの事は忘れることね。そしてこれからは人を疑うことを見えた方がいいわ。所詮この世の中は裏切りと憎しみばかり

頼れる者なんて誰一人いないのよ」

頼れる者なんて誰一人いない。

その言葉はレイピアの胸に深く刻み込まれ、同時に胸をえぐつた。アルジェリカは懐から短剣を取り出すと、レイピアにそれを渡した。『ゴーザ』の名前が刻まれた、レイピアの背中を刺したあの短剣だ。医者から受けとつたのだろうか。

「これからどうするかはあなた自身で決める」とね

そう言い残すとアルジエリカは踵を反して病室を出て行った。

残されたレイピアはその短剣の柄を掴むと、のろのろとした動作で研ぎ澄ませた刃の部分を喉元にあてた。  
もう何もかもがどうでも良くて、今はただ楽になりたかった。  
短剣で喉をかき切れば楽になれる。

アルジエリカと入れ違いになるように再び病室に戻つて来た医者はレイピアのその姿を見て、慌てて駆け寄り短剣を取り上げる。短剣は硬くて真っ白な床の上に落ちてカシャン、と乾いた音を上げた。

「何を馬鹿なことを……っ！」

医者の叫びはレイピアの耳には入つておらず、白く曇ったガラスのような虚ろな瞳で天井を見上げていた。  
まるで魂を失つてしまつた抜け殻のように。

「何で……私……生きてるの……」

レイピアは微かに聞き取れるが、取れないかの声でつぶやいた。

「何で……死ななかつたの？ 私……」

いつそあの時、コーナーに刺された時に死んでしまえばよかつた。  
目が覚めなければよかつたのに。

そうしたらこんな風に辛くて、心がバラバラになつてしまいそう  
な思いを抱えずに済んだのに。

何日も何日もベッドの上で過ごす生活が続いた。背中の傷は癒え

たけれども、心の傷の方は癒えることがなかつた。医者が言葉を語りかけても決して心も口も開かず、声すら失つてしまつたのではと思われるほどだつた。

レイピアは病室に備え付けられていた鏡を手にとつて自分の顔を覗き込んだ。

生氣を無くした顔は青白く、頬がこけてしまつてゐる。食事もろくに取らずガリガリに瘦せ細つた体。レイピアの姿はまるで別人のように変わつてしまつていた。

誰なの、これは？

愕然とした思いで鏡の中の自分を見た。

いつから自分はこんな風に弱くなつてしまつたのだろうか。

屋敷に住んでいた頃は、独りぼっちでも平氣だつたはずなのに。母が亡くなつてからは特にそう。使用人はみんな良い人達ばかりだつたが、やはりどこかよそしきくて本氣でレイピアに接してくれる人なんて誰一人いなかつた。その中でも平氣でいられた、独りぼっちなんてちつとも寂しくなかつたはずなのに。

一度覚えてしまつたぬくもりはレイピアの心を弱くした。

ユーザというぬくもり。

「ふふ、アハハ、アハハハハツ」

狂つたように、笑い出した。

何の疑いも持たずに、ただひたすらにユーザを感じていた自分があまりに滑稽で、惨めで悲しくなつた。

最初出会つた時に意図があつたからこそレイピアを連れて行つてくれたという事実。本当はそのことに薄々気がついていたのに、気がつかなかつたふりをしていただけなのかもしれない。初めて差し伸べられたその手があたたかくて、離れてしまうのが恐くて。

馬鹿な自分 そう思うと同時にたまらなくユーザを殺した

いほど憎らしく思った。

自分が味わった思いをコーヴァにも味わわせてやりたい。

愛していたからこそその憎しみ。けれど憎しみながらも心の底では  
いまだに彼を愛している自分がいて、それがたまらなく滑稽だった。  
ボロボロと田から涙が溢れ出す。

「あはは……っ、あ……つづ……つづ」

笑いながら、泣いた。

コーヴァへの思いが涙と共にすべて流れてしまひますと泣いた。

「お医者様、私 病院を出ようと思います」「  
「病院を……!? 傷の具合からして充分可能のことだ。しかし……」  
「……」

医者が危惧していることを見越したレイピアはくすっと笑った。

「大丈夫です、もうあんな馬鹿な真似はしません。私は……生きよ  
うと決めたから」

そう言い、真っ直ぐに医者を見たレイピアの瞳には決意のこもつ  
た強い光が宿っていた。病院に運ばれて来たときの弱々しく、絶望  
を抱いた瞳からは到底想像もつかないものだった。

レイピアのはつきりとした生への意欲を見た医者は納得したよう  
に頷き、それから静かに問い合わせた。

「……これから……どうするつもりだね?」

「私にはもう帰る場所がないから……。この街を出て、冒険者とし

て1人でやつてこいつと思します

寂しげな表情でつぶやいた。

「そのつ……君が良ければこの病院で働けばいい。無理して行くことはないんだよ」

「…………ありがとうございます。でも……この街は思い出が多すぎるから……、良い思い出も悪い思い出も。それに今は1人になりたい……」

1人になつて冒険に出て、あれこれ考える暇がないくらいに働いて、全てを忘れててしまいたい。

「やうか……」

レイピアの固い決意を知った医者はそれ以上何も言わなかつた。

荷物をまとめ、全ての仕度を終えたレイピアはセレイラの街の大噴水広場に足を運んだ。小さい子供連れの夫婦やカップル、友達同士の集まるその場所はこの街の象徴であり憩いの場でもあった。レイピアとコーナーがセレイラの街を訪れたときに初めて立ち寄つた思い出の場所。そしてこれからレイピアの出発場所もある。2カ月以上滞在することによって見慣れてしまったこの光景。もう2度ここに戻つてくることはないだろうと思うと少し胸が痛んだ。

「…………強くなれるかしら？ 私……」

もう誰にも頼ることなく一人で歩いて行けるくらいに。いつでも前を向いて生きていけるくらいに。

レイピアは真っ直ぐ天を仰いだ後、左手の薬指にはまつた銀の指輪を引き抜き大噴水に向かつて放り投げた。小さい水飛沫を上げて噴水に飛び込んだその銀の指輪は、すぐに水に呑みこまれて消えてしまった。

「さよなら……」

セレイラの街と、そしてユーヴァに別れを告げた。

「それから後はずつと冒険に出ていて、今に至るわけ」

話を始めてからもうだいぶ時間が経つてしまつたようで、時刻は深夜を回っていた。

全てを話し終えたレイピアはぼう、と息をついた。その表情は悲しみや辛さを含んだものではなく無表情で、そこからは何の感情も伺うことができなかつた。

スキルもまた無表情で、レイピアが話をしている間は口を挟むことなく静かにじっと聞き入つていた。

話を全て聞き終えたスキルは辛かつたね、とかそういう同情的な言葉は一切言わはず

「強いんだな、君は……」

と、それだけつぶやいた。

ライの事件によつてレイピアの内に秘められていた心の傷の存在は知つていたけれど、まさかそこまで大きいものだとは思わなかつた。その思いの強さにより自らの命を絶とうとまでしたレイピア。最初出会つた時、真つ直ぐ挑戦的に自分を睨みつけてきた彼女からは到底想像がつかないものだつた。言い換えれば、その傷の存在すら他者に気付かせないほどにこの2年で立ち直つたというわけだ。いや、完全に立ち直つたとは言い切れないだろうが。

それでも強い、とそう思った。

「強い……？ サあ、どうかしら」

レイピアは曖昧に笑つて肩をすくめる。

「……でも、そうね。1年ぐらこ前からはもつほとんど思ひ出さないとはなくなつてきたの。忙しく動き回つて何も考へないようにしてたから・・・駄目ね、慣れないお酒なんて飲むものじゃないわ」

喋り疲れたのかレイピアは毛布を被り、浅くため息をつく。

「少し疲れたみたい……もう眠りたい……」

「そつか……おやすみ」

すうすうと驚くほど早く寝息をたて始めたレイピアに、スキルはそつとつぶやいた。

\* \* \*

一方、レイピアのテントの入り口前にはリグが佇んでいた。

レイピアの様子を見に来るつもりで来たリグは、スキルとレイピアの間に交わされていた会話が自然と耳に入つてしまつたのである。盗み聞きするつもりは少しもなかつたというのにその話の内容から耳が離せなくなつていて、とうとう最後まで聞いてしまつたのだ。リグはその話の内容に衝撃を受けていた。

そして団員達に嫌がらせを受けていたときに、辛くないのですか？と尋ねたリグに対してもつと辛いことを知つてゐるからこれぐらいなんともないと笑つて寂しそうに笑つたレイピアのことを思い出した。

あの時の彼女は、このことを言つていたのだ。

そう考へると同時に、たまらなく胸が押し潰されるような思いに捕られた。あまりにもかわいそうで、抱えているその傷が大きすぎ

きて。

うなだれるように頭を俯かせていると、急にシャツとテントの幕が開いた。慌てて目元を拭い顔を上げると、驚いた顔のスキルと目が合った。まさか自分がこんなところにいるとは思いもしなかつたような、そんな表情だ。

「あ……若君……」

「リグ……。お前……」

しかしすぐにスキルは表情を元に戻すと、レイピアのいるテントを気にしながら声をひそめ、場所を移すことを提案した。  
2人はスキルのテントに移動し、リグはコーヒーを2人分入れると片方のカップを彼に手渡した。

「一体いつから盗み聞きが趣味になつたんだ?」

そう言いながら呆れかえつたような表情で受けとつたコーヒーを飲むスキル。その言葉にリグは慌てる。

「ちち、違いますよ! ただ、その……レイピアさんと若君の様子を見に来たら会話が偶然耳に入つて……それで……」

偶然耳に入つたとは言つてもその後ずっと聞いていたわけで、結局のところ盗み聞きしたことに違いないので、『こによこ』によと最後の方は消え入りそうな声で言つた。

スキルは頬杖をついた体勢でふーっと盛大にため息をつく。

「まあいいさ。聞いてしまつたものは仕方ない」

「あの……それで若君……あなたはレイピアさんの話を聞いて、どうするつもりだったんですか?」

「おずおずと問い合わせる。

「『じつするかつて？ 別にじつもしゃしない、今まで通りやるだけさ。話を聞いたのはただの興味本位だ。お前だつて興味があつたからこそ盗み聞きしてたんだろう？』」

「それは……まあ。でもあなたはそれだけじゃないでしょ？」

ある種の確信を含んでリグは言い切った。その態度に引っ掛かるものを感じたらしく、スキルは眉をひそめる。

「妙に突っかかるな、何が言いたい？」

「若君は……そのう……レイピアさんが好きなんでしょう？」

リグの言葉にスキルはわずかに動搖したように見えた。

彼はこの考えに自信があった。スキルはすぐに平静を装つて「そんなことあるわけないじゃないか」と肩をすくめて誤魔化したが、ほぼ間違いない。

スキルは良くも悪くも冷静すぎる所がある。血氣盛んな団員達のまとめ役として時には仲裁に入つたり、冷静に物事を判断するように幼い頃からありつけってきたのだから仕方のないことかもしれない。

そのスキルは今、レイピアヒピンクダイヤモンドをめぐつてゲームをしている途中なのだ。相手に情を入れ込んでしまつたらそこでゲームは公平ではなくなるわけだから、普通相手の過去など聞くものではない。ましてやそれが辛い過去ならなおさらのこと。それを侵してまで踏み込んでしまつたのである、あの冷静なスキルが。

今までの彼からは考えられないことだった。

それでもう一つ。

ライの事件でレイピアが怪我を負ったあの日、見てしまったのだ。レイピアの様子を見に行くと、テントにはすでに誰か人のいる気配がした。なぜかそのままテントの中に入るのがためらわれて、外からそつと中を覗くとスキルが彼女を看病している姿が目に入った。スキルがあんな風につきつきりで誰かの看病をしたことがあっただろうか、と首をひねらせているリグにさらに衝撃的な光景が飛び込んだ。

何やうなされて「う」に「ユーザ」とつぶやくレイピアの手を握り、スキルはしきりに「大丈夫、行かないよ」とささやいていた。

あれは

あの表情は。

彼は気がついていたのだろうか？

レイピアを見つめるその瞳が切なげに細められていることを。それは愛しい人を心配する表情そのものだった。

スキルは少し苛立つたように口調を強めて言つ。

「仮にリグの言うとおりだとして、それで俺に何を望むんだ？ 彼女の傷を癒せとでも言つつもりか？」

「それは……」

言葉を濁らせるリグ。

「俺はカウンセラージャない。人の心をボロボロに傷つけることはできても、癒すことなんてできやしないよ。それはお前が一番良くわかつてるはずだろ？ 最低の人間だからな、俺は」

スキルは薄く、自嘲氣味に笑つた。

恐らく、女性に對して本氣になれない彼自身の悪癖のことを示しているのだろう。お互いそのことを同意して割り切っていた上で関係だとしても、途中からスキルを本氣で愛してしまい泣いた女性は数多かった。「別れたくない」「本当の恋人にして欲しい」と泣いてすがつても、一度彼女達への思いが冷めてしまったスキルは決してそれに答えようとはしなかった。

スキルと「ゴーザ」は本質的に似ているのかもしれない。

誰も愛さない、誰も愛せないとこりうが。

レイピアを本当の意味で癒せる者がいるとしたらそれは彼女を本氣で愛することのできる者だ。スキルは自分がそれに当てはまらないことを知っているから、レイピアに深く踏み込まないようにしているのだろうか？

彼の表情はいつもと変わりないものだつたけれど、少なくともリグにどつては苦しそうに見えた。まるで自分の感情を心の奥底へ押し込めてくるような……。

リグは先程答えられなかつた言葉の続きを口にした。

以前「レイピアさんに手を出してはいけませんよ」とスキルに釘をさしたことがある。けれど今は違う。

「私はあなたがレイピアさんを癒す、そういうことを望んでいますよ」

わっぱりと言つた。  
心からの願いだった。

なぜ聞いてしまったんだらう。尋ねるつもりなど少しもなかつたといつのに。あんな過去を聞いてしまつた以上、自分はこれからも同じようレイピアに接することができるのだろうか？

『コーナーって……誰？』

気がついたら口から出でていた。

レイピアがその言葉に驚いた以上に自分自身が驚いていた。同時に心の奥底でコーナーのことを気にしている自分がいることに気づかされた。

コーナー。

レイピアの口からその名が紡がれるたびに胸の辺りがざわついた。彼女がコーナーのことを探していいたといつ事実。死すら考えてしまほどの強い思い。

心の中にコーナーに対する怒りや憎しみや不快感に似た感情が生まれる。

『嫉妬』

その感情を一言で言い表わすのにこれほど相応しい言葉はない。

スキルは自分の中に初めて生まれた嫉妬という感情に戸惑いを隠せないでいた。

ゲームの終わりまであと2週間。

2週間という期間は長いようでも、短い。それこそあつとこいつ間に

過ぎ去ってしまう。

スキルはピンクダイヤモンドを手のひらの上に出して眺めた。本当はもう、このダイヤをレイピアに返してしまっても構わないと思っている。このダイヤにはあまり未練が残ってはいない。それよりももっと価値があつて、魅力的なものを見つけてしまったから。

レイピアという名の、女性を。

たぶん彼女がゲームに勝ったとしても自分達サークルの団員を自警団に突き出すつもりはないだろう。それがわかつている以上、こんなゲームなどもうすでに何の意味もないのだ。それでも彼女にこのダイヤを返さない理由は只一つ。

返したら、レイピアは行ってしまうから。

ダイヤを取り返した彼女にとってこの場に留まる意味は何もない。彼女を離したくない、だからこそ絶対にダイヤを返すわけにはいかない。

彼女の心を癒すこともできないくせに……その資格さえないというのに、離したくないと思っている自分がいる。

……何て身勝手なんだろう。

いつそレイピアの心も何もかも無視して、無理矢理にでも彼女自身を手に入れてしまいたいとさえ思う時がある。しかしそんなことをしたらレイピアの心は今度こそ壊れてしまうかもしない。あの深くて美しい青色の瞳は曇ったガラスのように何も映さなくなってしまう。怒ったり、笑ったりする表情を2度と見れなくなってしまうかもしない。

それが恐い。

それとも自分のことを最低だと罵り、憎むだろうか？

それでも彼女が自分のことを忘れ去つて冒険者として再び旅立ててしまうよりも、一生忘れられないくらいに憎んでくれた方がよっぽどいい。

そういう意味でコーヴはレイピアの一生忘れられない男だ。  
少し、つらやましさを感じる。

スキルは深くため息をつくと、ダイヤを再び胸元にしまい込んだ。  
すでに慣れた重みのはずなのに、なぜかいつもよりもそのダイヤは  
重く感じられた。

\* \* \*

翌日。

スキルはサークスの団長である父、ヴォイルに呼び出された。いつも通り公演の打ち合わせのことかと思つていたスキルはヴォイルの爆弾発言ともいえるその内容に衝撃を受けることになった。

「近々お前に団長の座を譲るつー」

それがヴォイルが開口一番スキルに言つた言葉だった。まるでこの玩具は飽きたからお前にやる、とでも言つような口調で。

元々破天荒な性格をしていて突拍子も無いことを言つ父親だと思つていたが、これにはスキルですら唖然としてしばらく言葉も出なかつた。

団長が交代するということはサークスの大改革であると言えよう。今まで行なってきたサークスの演目は全て団長であるヴォイルによって決められてきた。ところがその権限がスキルに移り変わるといふことはまた一から演目や団員の役割を決め直さなくてはならない。それを行うことによつて初めて初めて『ヴォイルのサークス』から『スキルのサークス』に移り変わるのである。

いつかはその時期が来るとは思つていたけれど、少なくとも今はその時期ではないとスキルは考えていた。

また厄介なことを提案してくれたものだ、そう思い頭痛を堪える

ようになんて片手で頭を押さえる。

「……父上……本気ですか?」

「本気かって? 愚問だな、本気に決まってるだろーが。せっかくかわいい息子のスキル君に譲つてあげようつていうんだから好意はありがたく受けとりなさい」

「……それにしたって時期が早すぎやしませんか?」

「そんなことはないさ。俺だつてお前ぐらいいの年の時にはジジイに後を継がされたもんだ。最近体のあつちこつちが痛くてしょーがねえから隠居してのんびり生活したいんだよ」

そう言つてヴォイルは肩を回してボキボキと骨を鳴らす。それからどうじから取り出したのかパンフレットを2、3枚出すとひらひらとそれを振つてみせた。

「ふつふ、すでに夫婦で行く7日間の旅行計画を立てている最中だ。お前みたいなクソガキが出来ちまたから若い頃ソアラとラブラブ生活が送れなかつたしなあ……」

「それは父上の責任でしょう……」

スキルがジト目で睨みつけるとヴォイルは「まゝそつとも言つかな」と言ってカツカツカと快活に笑つた。しかしそうに真顔に戻すとガリガリと照れくさそうに頭を搔き始めた。

「……まあ、あれだな。ソアラには迷惑かけっぱなしだったからなあ……。せめてこれからは楽をさせてやりたいと思つてゐる」

ヴォイルの皿にははつきりとした決意の念が込められていた。

ソアラとヴォイルが出会つたのは彼が団長に就任して間もなくの頃だつた。その頃はサークスの知名度も低く、経済的にもかなり苦

しくて盜賊稼業で何とか全員の生活を繋いでいるといつてもいい状況だった。それでも貴族の令嬢だつたソアラは家から勘当同然になつてまでヴォイルを選んだ。サークスの団長の妻といふことで貴族の娘だつたソアラには、体力的にも精神的にも苦労は耐えなかつただろう。心の中で家に戻りたいと思つたことは何度もあるだろつ、しかし今まで彼女が弱音を吐いたことは一度もなかつた。

スキルもそのことを充分承知しているし、母であるソアラには充分な休暇を取つてもらいたいと思つている。  
だが 。

「父上の考えはわかりますが……今は……まだその時期ではないと  
思います」

その含みのある言い方にすばやく察したヴォイルは納得したよう  
に頷く。

「おう。あの貴族のお嬢ちゃんのことだら? まあ、何も今すぐ団長になれつて言つてるわけじゃない。嬢ちゃんの件が終わつてからでもいいさ。……とりあえず考え方といってくれや」

ヴォイルはあまり気の進まない様子のスキルの背中をバシバシと豪快に叩いた。

\* \* \*

レイピアは少し後悔していた。

スキルに対して過去の話などするつもりはなかつた。慣れない酒のせいで口が軽くなつていたのもshireない。

しかし過去を話すことによって変わるかに思われた2人の関係は表面上ではたいした変化は見られなかつた。

あの日から2日間お互に変わらずダイヤをめぐつて争つた。

変わらないスキルの態度に安堵を覚えていた。同情されて手加減されるなんて屈辱なことこの上ないし、何としてでもピンクダイヤモンドは自分の実力で取り戻したかったからだ。

今日はレイピアは舞台衣装に身を包んで、シアと談笑しながら舞台裏で出番を待つていて。シアはレイピアに気をつかつていてのか、どことなく氣にしている素振りはあつたものあの件については触れてくることはなかつた。

「今日はいい男いるかしら~」

シアはぐるぐると自分の前髪を指にからめながらつぶやいた。これは彼女が毎回毎回ステージに立つ前に言つてゐる言葉なのでレイピアは苦笑する。

「シアつていつもそればっかりね  
「だつてかつこいい人がいた方がやる気も出るつてもんじやない?  
あ、そうそう。レイピア昨日は休んでたから知らないだろうけど  
かつこいい人がいたのよ~」

両手を握りしめてうつとりと田を輝かせる。そんなシアにレイピアはジト目を向ける。

「あなた……ブレンはどうしたのよ?」  
「レイピアつてばわかってない! われとこれとは別なの

拗ねたように頬を膨らませるシア。

「レイピアだつて好きな人がいても、他にかつこいい人を見ちゃつ

たりするとドキッと胸がときめいたりするでしょ？」

「さあ、どうかしら……？」

「レイピアって一途なタイプ？ 真面目なんだからあ。……あ～あ、今日もあの人来てくれるといいなあ。な～んて、無理だらうけどさ」

ペリッと舌を出して微笑む。

シアはこうこう何気ない仕草がひどく愛らしく。レイピアは「こんな風に微笑むことができないのどうやらやましいこと悪いてしまう。

「レイピアもや、もうちょっと色々と周りに田を向けてみたりむりかな？ きつといい発見があるかもしれないわよ。ね？」

その言葉は「このところあれこれと悩み、塞ぎこみがちなレイピアに対するシアの精一杯の気遣いなのだろう。

「ありがと、シア」

その心遣いに胸の辺りが温かくなるのを感じた。

自分の出番が回ってきたレイピアはステージに立ち、団員達のアシスト役として小道具を出して手渡したりせわしなく動き回った。ステージに立った最初の頃はガチガチに緊張してほとんど観客席を見渡す余裕さえなかつたのに、今ではすっかり余裕がある。今日も観客席は満員だった。

いい男いるかしら？ といったシアの言葉を思い出し、思わず頬がゆるむ。何気なく観客席一人一人顔を観察する。老若男女、さまざまな年齢層がいる。

その中で一人だけ席に座るでもなく腕を組んで立つ人の姿があつた。なぜわざわざ席に座らずに立つているのだろうと不思議に思い、

自然と吸い込まれるようにレイピアの視線がそぞろに向く。  
そこで息を呑んだ。

その人に似ている誰かを、レイピアは知っていた。  
立ち姿がひどく良く似ている。しかし……。

まさか、ね。

レイピアは一瞬、自分の脳裏に浮かんだその考えを慌てて振り払う。薄暗くてよく見えなかつたから勘違いしているだけだろう。彼はレイピアがホットリープの出身であることを知っている。だが、こんなところにあの人人がいるはずがないのだから。

レイピアは再び自分の役目に専念することにした。

今日の最終公演は夕方までだったので、それが終わる頃には辺りは薄暗くなり始めていた。

「お疲れさまー！」  
「おう、お疲れ！」

口々に団員達が言葉を交わす中を進んでレイピアは衣装もそのままで外に駆け出していた。ちょうどお客様が出口に流れ出していくところに出くわす。

田をこらしてじつとその流れを見つめても、田畠での人物は見つからなかつた。

やはり自分の勘違いだったのだ。

きっと過去のことを話していたから客の姿があの人と重なつて見てしまつただけなのだ。

……馬鹿馬鹿しい。

疲れているのかもしれない。早く休もう、そつ思つてかぶりを振るとレイピアは歩き出した。

団員達は舞台裏に詰め寄せていたためテント街には人の気配が感じられなかつた。とぼとぼとその中を歩き、井戸まで来ると水を汲み上げて一気に飲み干した。

水の冷たさにぼんやりとしていた意識が覚醒する。  
その覚醒した意識は背後に迫つた気配を察知した。振り返りうとするが、すでに一足遅くその気配の主はレイピアの両腕」と抱きしめていた。後ろに引きずられるようにして、そのまま地面に尻餅をつぐ。

「……つ！？」

とつさに何が起きたのか分からず半ば恐慌状態に陥りそうになる。両腕を動かして振りほどこうとしてもその拘束が緩むことはなく、代わりに低い声が耳をうつた。

「ずっと探してた……」

レイピアはそのままの体勢で凍りついた。  
もうすいぶんと聞くことのなかつた懐かしい声。

湿らせたばかりの喉が一気にカラカラに渴いていく。かるうじて首だけを動かしてその声の主を見る。

「久しぶりだな、レイピア」

もつ見る」とは一生ないと思っていたタイガーアイローの瞳。褐色の肌、後ろで一本に束ねた漆黒の髪の毛。

見間違えるはずもない。やはりあの時観客席で見た人は……この男だったのだ。

ユーヴ。

かつてレイピアが愛した男が、そこにいた。

「……な……」

なぜ?

なぜあなたがここに?.

そう言いたいのに言葉は出でこなくてただ掠れた声でうめくだけだった。頭の中は真っ白になつて、体に力が入らない。レイピアは田を見開いたまま、ただコーヴの顔を見つめるひとしかできずにいた。

コーヴの姿は前よりも体つきが逞しくなつたように感じる。2年前よりも少し短くなつた髪の毛。何よりも印象が変わつてしまつたのはその顔。左の田元には短剣のようなもので切られた傷跡がある。彼はレイピアと田が合つとにやりと笑つた。獲物を追い詰めた野性の獣のような笑みで。

その笑みはレイピアに懐かしさよりも恐怖を与えた。

コーヴがここに来た理由。

そんなことは考えればすぐにわかる。なぜもつと早くに『気がつかなかつたんだろう。

彼は自分を殺しに來たのだ。あの時できなかつた止めを刺しに。

手足が痺れ、体が震える。

「……は、離して……」

レイピアは両腕でもがき、コーヴの拘束を解くとその体を思いつ

きり突き飛ばした。けれども彼女の力ではたいしたダメージにはならず、少しよろめく程度にしかならなかつた。何とか震える膝を立たせて、ゆっくりと後ずさりしながら彼との距離を取る。

「わ……私を殺しに来たの……？」

声が震え、まるで別人のような声になる。

その問いに微かにコーヴィアの瞳が暗くなつたような気がした。

「馬ア鹿、違う。迎えに来たんだ」

そう言つてレイピアの前にゆっくりと手を差し伸べる。

『来いよ、レイピア』

あの日、レイピアの前に手を差し伸べてくれたコーヴィアの姿と重なる。一瞬、時が戻つたのかといつ錯覚さえ起つる。そんなことあるはずがないのに。あの頃には決して戻れないのだから。

「迎えに……？ 嘘、嘘ばかり。私は……そんなに愚かじやない。何度も騙せると思わないで……」

言葉とは裏腹に、口調は限りなく弱々しかつた。コーヴィアは焦れたようになり半ば強引にレイピアの手を取り自らの方へ引き寄せようとする。

「離せつ！ 私に……私に触らないで……」

レイピアはその手を振りほどき、駆け出した。

同じだ。

あの時と全く同じ。

違うのは雨が降っていないことと、コーヴァがまだ短剣を手にしていないことだけ。しかしそれも時間の問題だった。彼の腰のベルトには短剣と長剣が一本ずつ差し入れてあった。抜くのは容易いだろう。

また何もできないまま、背中を刺されるのだろうか？いや、今度こそ心臓を刺されるに違いない。

嫌だ。

そんなのは嫌だ！

自分はもうあの時のように何が起きたのかもわからず、ただ震えて逃げ回っているだけの人間ではないはずだ。

このままでは駄目。

いつまでも逃げていては……駄目だ。立ち向かわなくては……。

できるのだろうか、彼を相手にそんなことが。  
いや、やらなくてはならない。

レイピアは荒い息のまま近くのテントに滑り込んだ。誰のテントなのか考へている余裕もなく、中に入ると武器になるものを探した。テーブルの上に果物と、そしてナイフが置かれてあるのを見つけすればやくそれを手にする。

追いかけるようにしてテントの中に入ってきたコーヴァに、真つ直ぐそのナイフを向ける。あくまで果物を切るためのものだから戦闘用には向かないけれど、それでも殺傷能力は充分ある。

「何のつもりだ？」

ナイフを手にしたコーヴァは険しい表情をつくる。

「これ以上近づかないで、外へ出て。そうしなければ……刺すわ。  
本気よ……」

「やめろ、レイピア。手元が震えてるぜ？」

そう指摘されカツと頬が熱くなる。

「うるせー……早く……つ今すぐ出て！」

手にしたナイフに力を込める。レイピアは本氣だった。これ以上ユーザが近づくつもりなら刺すことも躊躇いはなかつた。

胸の中にどす黒い感情が生まれる。

奥底にしまい込んでいた感情、憎しみだ。

復讐のためにユーザを探した時期もあつた。自分が傷つけられた分だけ彼にも同じ思いをさせるために。けれどそれがどんなに虚しいことかわかつていたから、彼を追いかけることを諦めた。彼のことも、胸にチリチリと疼く憎しみも忘れてしまおうと思つていた。それなのに。

ユーザは両手を上げて降参の印を示すと入り口に向かって歩き出した。その後にレイピアも続く。これからどうするべきなのか考えているとふいに足を止め、振り返ったユーザが口を開いた。

「変わったなレイピア」

「……変わった？ 私が？」

じつとレイピアを凝視するように開いていたタイガーライエローの瞳がゆつくりと細まつた。

「ああ、綺麗になつた」

ユーザの言葉にわずかにレイピアは動搖し、ナイフを持つ手が震えた。その隙を見逃すよつた男ではなく、すばやくナイフを片手で

抑えた。カラソと音を立ててナイフが地面に落ちる。そして空いている方の片手で銀の髪の毛を一房掴んだ。あの時コーネザに切られて短くなつた髪の毛は2年の歳月を経て再び背中の辺りまで伸びていった。

髪の毛を梳き上げる仕草は残酷なまでにやさしかつた。カリ、と唇を噛み締めてタイガーライロードの瞳を睨みつけた。

「それに、昔はこんな顔しなかつた」

コーネザの手が髪の毛から頬へと移動する。

2年の歳月でコーネザの容姿が変わつたように、レイピアもまた変わつた。

幼さを残した無垢な顔立ちは酸いも甘いも知り尽くした成熟した女性のものへと変わつていたし、性格もまた同様だつた。

冷ややかに相手を笑い飛ばすことは難なくできても、はにかむようにして笑うことなどもつとめうまいこと自分自身自覚していた。

「やうでしうね、あなたの知つているレイピアはこんな風に憎しみに満ちた表情なんてしなかつたでしょうね」

コーネザの手を振り払つと、吐き捨てるよつとして言ひ放つた。

感情が高ぶり、激情が溢れる。

「……変わらなかつたら生きていけなかつたのよー。あなたを憎んで、憎んで、憎まないと生きていけなかつたのよーーー」

そこまで言つと幾分か冷静さを取り戻したらじいレイピアは、声のトーンを落として言葉を続ける。

「今さら……何の用があるっていうの。私を殺して保険金を取る？ それとも人質にして身代金でも要求するおつもり？」

その声は冷ややかなものだった。

コーヴの瞳が暗くなる。傷ついた少年のようにびざく幼く見えた。

「レイピア……」

「今度はそうはいかない……あなたの思い通りになんてさせない……っ！」

レイピアはすばやくナイフを拾い上げると、そのまま彼に向けて一閃する。しかし寸での所で避けられてしまい僅かに服を裂く程度だった。

「剣を抜きなさいコーヴ！ 私だつてただでは殺されてやらないわ

レイピアに剣を教えたのはコーヴだ。

いくつもの実戦を積み上げ何人もの人間を斬り殺してきた彼と、レイピアの腕では天と地ほどの差がある。その上レイピアは右手がまだ完治していない状態なのだ。勝ち目など最初からあるはずがない。

それでもこのまま大人しくしているわけにはいかなかつた。

「俺の話を聞けって言つても……無理みたいだな」

その様子を見て、諦めたようにため息をつくとコーヴは腰の短剣を引き抜き、真っ直ぐレイピアの方に向けた。

「俺が手加減できない性格なの……知ってるよなア？ レイピア。覚悟は、いいのか？」

一言、一言区切るようにしてゆっくりと語り始めた。

短剣を手にしたコーヴィアの顔つきが変わる。野性の狼のような獰猛な顔。

背筋に恐怖が走り、じくじくと白い喉が上下する。それでも瞳だけは真っ直ぐ睨みつけ、コーヴィアに動搖を氣取られないようにした。

「もちろんよ。私と戦つて、勝つたら殺すなりなんなり好きにすることいいわ」

「そうかい。俺もそっちの方が話が早くていい」

短剣の切つ先をペロリと舐めると薄く笑った。

「行ぐぞ！」

ひゅっと空気が切れる。

次の瞬間には刃と刃がぶつかり合つキンという金属音。レイピアは最初の一撃をナイフによって辛うじて受け止めたが、勢いが殺しきれずに衝撃を負い2、3歩後退する。テントの中はあまり動けるスペースがなくこの2、3歩はかなり不利になる。

「そんなもんか！？ お前の腕は！」

手加減はできないと言いつつ、彼が本気を出していないことは明白だった。彼の腕ならば最初の一撃でレイピアを吹き飛ばすことなど軽いだろう。けれどコーヴィアはあえてそれをしなかった。レイピアの攻撃を最小限度の力で受け流し、弱つた獲物を相手にするようにじりじりと追い詰めていく。

そんな状態だったから真っ先に息があがったのはレイピアだった。

「まだよつー

荒い息をしながらもナイフを握る手は決して緩めなかつた。しかし次にレイピアが攻撃をしかけた瞬間、右腕が疼いた。痛みに似た疼き。ライによつて負つた怪我の部分。反射的に右腕は痛みを和らげるためにその動きを鈍らせる。ナイフの動きもそれに伴つて鈍る。

「遅いっー。」

聞合<sup>い</sup>いを一氣に詰めたコーヴは短剣の柄でナイフを弾き飛ばすと、そのままレイピアの腕をからめとつて体<sup>い</sup>と地面に叩きつけた。

「あやあー。」

受身を取ることもできずまともに背中から叩きつけられ、一瞬呼吸が止まる。

「ゲホ……っ」

体を折り曲げるようにして咳き込む。

レイピアの手から離れたナイフはカラカラと地面を滑るようにして手の届かないところまで行つてしまつた。なんとか体を起こそうと試みたが、コーヴによつてあつせつと押さえつけられ適わなかつた。

「俺の、勝ちだな」

そう言つて薄く笑つた。

タイガーライロードの瞳が薄暗いテントの中であえぎララと光っていた。

「うう……」

レイピアの目から涙がボロボロと溢れ出す。ぜえぜえと荒い息をしているレイピアに対しユーザは呼吸一つ乱していない。傷一つつけるどころか、呼吸すら乱させることができなかつた。

悔しかつた。

何一つ彼に適わないのだ。

彼と離れてから約2年、一人で生きていけるように必死になつて剣の腕をあげた。それ以外レイピアがすがりつくものは何もなかつたから。全てを忘れるようにそれに打ち込んだ。それなのに、この結果。惨めでたまらなかつた。

「俺が憎いか?」

「憎い……憎いわ

ユーザはレイピアを組み敷いた体制のまま静かに問い合わせた。

一瞬ユーザの瞳が揺らいだように見えた。

しかしすぐに心底可笑しそうにくく、と喉の奥で笑つた。

「何が……おかしいの」

「俺を……愛しているからこそ憎いんだり?」

その言葉にレイピアは弾かれたようにユーザを睨みつける。

「何を言つて……つー愛してなんて! 愛してなんていない!」

胸にあるのはギリギリと締め付けるような憎悪だ。それ以外の感情などあるはずがない。

「そんなくだらない質問をするために来たの？ 違つでしょ？ 」

「さつさと殺しなさい」

レイピアは全てを諦めたようにだらつと両手の力を抜いた。皿を固く閉じ、やがてくる心臓への衝撃に備えた。

私が死んだら悲しむ人がいるかしら？

そう考えて、リグとシアとソアラなら涙を流して悲しんでくれるかもしぬないと思った。

あの人は？

スキルはどうだろ？

。

少しは悲しむだろうか？ いや、もしかしたら心の奥で喜ぶかもしれない。ダイヤを取り返そうとしつこいぐらいに追つかけてくる女がいなくなるのだから。そう考えたらひどく胸が痛んで、潰れそうになつた。

つー、と溜まつた涙が流れる。

その涙が拭い取られる。

不審に思ったレイピアがわずかに目を開けるが視界は覆われていた。近づいたユーザの顔はそのままレイピアの唇を塞いだ。

「……っ！」

「……殺すために来たわけじゃない」

唇を離したユーザが静かに言葉を紡いだ。

「……迎えに来たんだ……」

レイピアは目を見開く。

唇を震わせて掠れた声を出す。

「嘘だー。そんなの……そんな嘘に騙されないわ……今わらわ……今  
わらわ……ー」

首筋に下りた脣がレイピアの言葉を遮る。ゴーザの意図する通り  
を察したレイピアが手足を動かし抵抗する。

「やめてー離せー離しなでーゴーザ」

レイピアの抵抗も虚しくゴーザは首筋を吸い上げ、白い肌に赤い  
痕を残す。まるで自分のものであることを主張しているかのような  
印。

「レイピア……」

切なげな吐息をもらすとレイピアを抱きしめた。

「もうまことにしておこでもいいが

冷ややかで、それでいてざつとするような聲音が背後から響いた。  
ゴーザが振り返ると、そこにはテントの幕をすぐこ上げるような  
して手に持ったスキルが立っていた。

「スキ……ル……」

レイピアは驚愕に目を見開く。

彼が来るとは思つてもいなかつた。

助けに来てくれた？ そう思い安堵するが、それも一瞬のこと。

彼の顔を見た瞬間にぞくりと恐怖が走つた。

スキルの表情は無表情なものだつたが、静かな怒りの気配がピリピリと空気を通して伝わつてくる。少なくともレイピアは彼がこんな風に怒つているのを見たことがなかつた。

「レイピアを離せ」

スキルの視線は真つ直ぐユーザの方を向いていた。

公演が終了し、テントで椅子に腰掛け一息ついていたスキルの耳に鈍い音が届いた。地面に体を打ちつけたような音。すぐ後に掠れたような悲鳴が上がつた。その悲鳴は間違えるはずもない、レイピアのものだつた。

「何……だ？」

ドクドクと心臓が早鐘をうつ。

嫌な予感を覚えたスキルは勢い良く立ち上がり、椅子が派手に床に転がってしまったことにも構つことなく駆け出していた。

音のするテントの幕を開いて、固まつた。知らない男がレイピアを組み敷いて争っている。いや、スキルはこの男を知っていた。

「コーヴィーだ。

田の前の男はレイピアの語ったコーヴィーの姿に合致するし、何より直感的にそう感じた。

「そこまでにしておいてもらおつか」

そこで初めてスキルの存在に気付いたコーヴィーが振り返る。タイガーアイエローの瞳と田が合うが、すぐにレイピアの無事を確認するために彼女に視線を滑らす。

顔を青ざめさせているが無事だ、怪我もしていない。視線がレイピアの顔から首筋に下りる。

白い肌に残つた赤い痕。

その痕を認めた瞬間カツと畠の辺りが熱くなつた。

「レイピアを離せ」

再びコーヴィーと視線がぶつかる。お互に一歩も譲らないことばかりに睨みあう。

コーヴィーは抱きしめていたレイピアの体をゆっくり離すと、向き合う形でスキルと対峙した。

「お前は？」

「……スキル。ここの人間だ  
「サークルの人間、ね」

コーヴィーはつまらなそうに鼻を鳴らすと再びレイピアを引き寄せた。ピクリ、と微妙にスキルの眉が動く。

「見ての通り俺はレイピアに用事がある。気を利かせて席を外せよ  
「彼女が嫌がつてゐるよつにしか見えなくてね。放つておくわけにはいかない」

「俺はレイピアに剣で勝つた。それで充分だ」

その言葉を聞いた瞬間、スキルの顔が険しくなった。

「だつたら選手交代だ、今度は俺が相手をする。あんたがレイピアに用事があるよつに俺にも譲れない用事がある。彼女を渡すわけにはいかない」

「ふ……ん。……成る程……」

反対にユーザは口元を歪めおもじろそうに笑う。

「そういうことか。尚更こいつちとしてもレイピアを譲るわけにはいかねえな」

タイガーライエローの瞳がギラリと光る。腰に差した長剣に手をかけると素早く引き抜きスキルの喉元、わずかに切れるか切れないと位置に鋭くなつた切つ先を向けた。

レイピアが声鳴き悲鳴を上げる。顔を青ざめさせ、膝を震わせる。しかし剣を突きつけられた当の本人は眉をわずかにひそめただけで微動だにしなかつた。

「ほう、微動だにしないか。その根性はたいしたものだ。いや、單に動けなかつただけか?」

今ひとつスキルの力量を見極めることができず、不満そうに口元を歪める。

「ずいぶんと荒っぽい挨拶だな。しかしとしても礼儀に法つた挨拶

を返さなくては失礼にあたるといつものだ」

「くく。おもしろい、やってみろよ。決まりだな 剣で白黒つけよつせ？」

テントの入り口に歩き出したコーナーがくい、と人差し指を曲げてスキルを招く。外で勝負をつけようと言つてゐるのだ。確かにこの狭いテント内では行動に制約がありすぎる。お互に本来の力を出すことはできないだろう。スキルは険しい顔のまま頷くとコーナーの後に続いた。

それまでシヨツクで呆然としていたレイピアはハッと我に返ると、慌ててスキルの後を追いかけ、その袖を掴んで引き止めた。

「無茶よ！ あなた、これから自分が何をしようとしているのかわかってるの！？ コーザは剣の腕で生活してきたのよ。敵うわけがないじゃない。大体なぜあなたがこんな馬鹿げたことをする必要があるの？」

スキルは足を止め、レイピアの方に顔だけ向けると意味ありげに微笑んだ。

「なぜ、ね。さあどうしてだろうね？ あいつが気に入らないから、ゲームに決着がつかないうちに君を連れて行かせるわけにはいかない、このどちらも当てはまりそつで……実はそうじゃない」

謎かけのような言葉をつぶやいた。彼の言つていることが何を示しているのかわからなくてレイピアは眉をひそめた。

「意味が……わからないわ

「それじゃあ考えておくといい。時間はたっぷりありそ娘娘だから」

再びスキルは歩き出した。

井戸のある中央広場まで来ると、見知らぬ剣を持った男とスキルの物々しい雰囲気を感じ取った団員達が遠巻きに見つめながらざわめいていた。

「俺達が見せ物つてわけかい？」

「ゴーザは自らの肩にトントン剣を押し当てながら鼻を鳴らした。しかしその表情は鬱陶しいといつよりも面白がっている感がある。

「連中は暇だからな。話題に飢えているのさ。おい、リグ

団員達の中についたえでいるリグを見つけ、呼びつける。

「わ、若君……」

「剣を持ってきてくれ。刃を潰してないやつがあつただろう？」

しばらくしてリグが戻つてくるとその手に剣が握られていた。サ

ークスの演用に買い、まだ刃を潰していないものだつた。

カトラスと呼ばれる長さ60cmほどのサーベル型の剣。それは元々船乗り用のもので、船上での戦闘を想定されて比較的短く、丈夫に作られている。

スキルは剣を受けとるとその重さを確かめるよじて上下に動かしてみた。

「丁度いい重さだ」

刀身を鞘から引き抜き、眺める。

レイピアは再び駆け寄り、スキルを引き止めようとする。

「やめて……本当に殺されるわよー!」

「嬉しいね。心配してくれるの?」

緊迫した雰囲気の中ですらスキルはいつもの涼しげな表情を崩してはいなかつた。

「馬鹿! 何言つてゐるのよ……茶化さないで。あなたはコーヴの腕を知らないからそんな余裕でいられるんだわ!」

「それを言つなら君だつて俺の腕を知らないだろ?」

「あなたの腕……?」

スキルの腕前など知るはずもなかつた。剣を握つたところなど見つことがなかつたし、第一前に自分自身で「盗賊は剣を振り回したりしないのさ。強盗になつてしまつだろ?」と言つていた。剣を避ける素早さで言えば天下一品だつ。しかし避けているだけでは到底コーヴに敵つはずがない。

「君はどうちらを望んでる? 僕が勝つか、コーヴが勝つか」

「……え?」

レイピアが一瞬答えを詰まらせると、スキルの碧色の瞳が微かに翳りを帯び、唇の端が上がつたように見えた。

とん、と肩を押される。それは決して強くない力だつたが、レイピアはヨロリとよけ、3歩後ろに下がつたところをリグに受け止められる。

「頼んだぞ、リグ」

決意を秘めたような口調だった。

涼しげな表情から真剣な表情へと変わる。そして背を向けて歩き出した。

リグにも止められる雰囲気ではないのがわかつていいのだらう。無言で頷いてレイピアの肩を支えた。

「リグ、お願ひ……2人を止めて！」

リグはそのレイピアの懇願に對して無言で首を振った。

「どちらか死んでしまうかもしないのよ！？」

「……私達には止められないんです。止められないんですよ、レイピアさん」

スキルもコーナーもお互に譲れないものがある。

一步も譲れないし、譲る気もない。だからこそ、戦う。戦う」とでしか決着をつけることができない。

男の意地といつやつだ。

第三者が口を挟めるはずなどない。

「そんな……」

動かないリグを見てとうとうレイピアは諦めた。そして歯を引き結び、コーナーと対峙するように立つスキルに不安げな瞳を向けた。

2人は剣を構えて対峙した。相手の最初の出方を伺うようにお互い睨みあつ。

長い沈黙が続き、焦れて最初に動いたのはコーヴィアだつた。

「せいぜい楽しませてくれよ？」

地面を蹴り上げ一気に間合いを詰めてくる。唸りを上げて風が切れ、スキルは体をわずかに左に傾けることでその一撃を交わした。速い。

しかしコーヴィアがこの最初の一撃に本気を出していないことは明らかだつた。恐らくスキルの腕がいかほどか確かめているところなのだろう。

「イツとコーヴィアの口の端が上がる。

よく避けたな そう語つていて見えた。

腰をひねり続けざまに剣を叩き込んでくる。そう、叩き込んでくるという表現が最も相応しいものに思えた つまり攻撃が重い。カトラスで受け止めるものの、そのまま体ごと数歩飛ばされる。柄を握る手が痺れる。それでも剣ごと叩き斬られなかつただけ幸いといふべきだ。

やはり、強い。

一筋縄ではいかないよつだ。

「ほお。俺の剣を止めたか」

「まあね。これでも少しは剣を使つたことがあるんだ」

スキルの剣の腕は盗みのためにあるわけではなく、純粹に護身用

のためにある。旅芸人である彼らが街から街への移動中に山賊の類に襲われることはたびたびある。幼い頃から自分の身と、団員達を守るためにビザオイルに鍛えられていた。

あくまでも護身用のためだからあまり戦い慣れしていない。

なんとかユーヴィーの攻撃を巧みに剣で受け流すが、避けきれずに服が何箇所か切れ、腕や足にも細かい傷ができた。

それはたいした出血量にはならないが長期戦になればなるほど、じわじわとスキルの体力を奪っていく。

「どうした？ 守つてばかりいなで仕掛けてきたらどうだ」

何度も目か剣を交わした後、ユーヴィーが挑発めいた言葉を放つ。

「冗談じゃない。

スキルは内心で舌打ちをしていた。

久々に触れた剣の感触に慣れるのと、ユーヴィーの斬撃を防ぐだけで精一杯の状態なのだ。

だが、負けるわけにはいかない。

渡すわけにはいかない。

内心の焦りを悟られないように表情だけは冷静を装つ。

「それじゃあ、お言葉に甘えてっ！」

お互ひ一歩も譲るまいと鍔迫り合っていた剣をはじき、その勢いに乗つて一閃する。素早いスキルだからこそできる芸当。ユーヴィーの手にしている剣はロングソード。両刃の剣だ。スキルの手にしているカトラスはロングソードよりも刀身が短い。そのため余計に間合いを詰めなくてはならないが、重さがない分非常に扱いやすいものだった。

力と鋭さを兼ね備えたユーヴィーの腕に対しスキルは素早さと技を生

かしたもの。彼の特性をより生かす上でもカトラスは非常に役立つた。

キン、と乾いた音が上がる。  
微かな手こじたえ。

「……ツー」

コーヴの首にかかっていた金の鎖が切れて床に散った。鎖で切れたのか、剣で切れたのか判別がつかなかつたがその頬には糸のよくな血が流れる。

手の甲で無造作に拭うとコーヴは獰猛な笑みを浮かべた。それはまるで最高の獲物を目の前にした狼のようだ。

「クク、おもしれえ……」

不気味なほどに楽しげな声。

つー、とスキルの頬に汗が流れ落ちた。

レイピアは両手を胸の前で合わせ、祈るようにその光景を見つめていた。

「どうして……こんなことに……」

唇を噛み締める。

スキルの動きは驚くほど滑らかだ。巧みにコーヴの攻撃をかわし、自らも仕掛けている。両者の腕前はほぼ互角。正直スキルがこれほどまでの腕前だとは思わなかつた。

いや、レイピアは彼の腕前を知っていた。

ピンクダイヤモンドを取り返そうとしても決して彼は隙を見せることがなかつた。それが何よりの証拠ではないか。

きつと心のどこかで認めたくなかったのだ。

スキルが強いという事実。

決して自分が適わないという事実を。

スキルの腕前が相当なものであることはわかつたけれど、レイピアの心中が安らぐはずもなかつた。時に息を呑み、時に短く悲鳴を上げながら戦いを見つめる。

両者はお互いに斬撃を繰り出し隙が生じるのを狙いあう。激しい金属音。このまま決着がつかないのではないかと思い始めたその時、スキルの体がふいに傾いた。

バランスを崩したらしい。あの時断ち切つたコーナーの金の鎖に足を取られたのだ。

レイピアにはその光景が信じられなかつた。

いつも飄々として、完璧すぎるくらいに完璧なスキルが自らが断ち切つた鎖に足を取られる光景など。

コーナーが薄く笑い、スキルに剣を向ける。

殺されてしまつ。

スキルが

そう思つたら体が動いていた。

「コーナーアアアア！」

レイピアはナイフを握りしめた手を突き出し、そのまま抱きつくような形でコーナーの元に飛び込んだ。そしてその体 わき腹の辺

りにナイフを突き立てていた。

決して慣れることのない肉を裂く嫌な感触。すぐ後に温かい、真っ赤な液体が溢れ出してレイピアの手を染めた。

青いレイピアの瞳にコーヴィアの驚愕に見開いた瞳が映りこむ。彼の瞳には深い愁いの色が浮かんでいた。

「レイ……ピア……」

うめくような掠れた声が耳をつつ。

コーヴィアは膝をつき、ゆっくりと力が抜けるように地面に倒れ込んだ。

「あ……あ……」

呆然とレイピアは自分の真っ赤になつた手を眺め、その手を自らの頬に当てた。べつとりと血がつく。頭が真っ白になる。

崩れ落ちるように地面に座り込み、コーヴィアの体から流れる血を見つめていた。どんどんと流れ、地面に染み込んでいく血。まるで地面が貪欲なまでに彼の血を吸い取つているようにさえ見える。

刺すつもりなどなかつた。

スキルが危ないとthoughtたら体が自然に動いていたのだ。けれど、心のどこかでこうなることを望んでいたのかもしれない。ずっと、復讐を果たしたかったのかもしれない。自分が味わつた痛みを彼にも味わわせてやりたくて。

だがこの苦々しさは何だらう? 後に残つたものは晴れやかな気持ちではなく、胸を締め付けるほど後悔の念だった。

ナイフを抜かなくては……。  
このままだと、コーヴィアが……。

のろのろとした動作でユーザの体に刺さっているままのナイフに手を伸ばした。しかし、触れることができなかつた。

「引き抜くなつ！」

駆け寄つて来たスキルがレイピアの手首を掴み、行動を阻んだのだ。

「だつて……ユーザが……死、死んじゃう……」

荒い息づかい。

顔色を青ざめさせ力なくうずくまるユーザ。傷の具合はわからないけれど、このまま放つておいたら死ぬかもしれない。

「離して。離してつたらー！ナイフを……ナイフを！」

激しい混乱によつて半ば恐慌状態に陥つたレイピアはスキルの手を振り払おうと、もがき激しく暴れる。

「レイピアー！」

鋭い叱咤の声にビクリを身を震わせる。焦点の定まらなかつた瞳がそこでよつやく落ち着きを取りもどした。

「わからないのかー？　このナイフが栓の役目をしている。引き抜くと一気に血が吹き出する。このまま医者の到着を待つんだ！」

鋭くそつ言い放つと自らの上着を脱ぎ、ユーザの出血している傷口を覆うようにして被せる。団員達に指示し、あるだけの布を集め

させるとその上に次々と覆い被せ、手際よく応急処置を施していく  
た。

その間、レイピアはどうすることもできずただ震えて見守ること  
しかできなかつた。

一通り応急処置が終わるとスキルはレイピアの方に顔を向け、ゆ  
っくりと、言い聞かせるような口調で言つた。

「大丈夫だ、ユーザは死なない」

落ち着いた、耳に心地よく響く声。

その声に励まされるようにレイピアはもう一度ユーザに目を向け  
た。息づかいは荒いもののちゃんと体が呼吸のため上下している。  
安堵の念が押し寄せる。スッと視界が暗くなるのとそれはほぼ同  
時だつた。

## 第1-1章 過去との決別<sup>6</sup>

あの後駆けつけた医者によつて手術を施されたゴーザは大事には至らなかつた。鍛えられた体だったためナイフはそれほど深く彼を傷つけなかつたのである。

一夜明けた今はスキルのテントで眠つている。氣を失つたレイピアもまた自分のテントで休息をとつていた。

テントに入つてきたスキルを一瞥し、少し顔を俯かせてレイピアは尋ねた。

「ゴーザは……？」

「無事だよ。今は俺のテントで眠つてる」

「……そう……」

ホツと安堵の表情をつづつたように見えたがそれも一瞬のこと、すぐにポツリと抑揚なくつぶやいた。

それきりレイピアは押し黙り、毛布を被り頭からすっぽりと顔を隠す。

「ゴーザは、これから旅に出ると言つている」

ピクリ、とわずかにレイピアの肩が動く。それを横目で見ながらスキルは言葉を続ける。

「会わないの？」

「今さら会つて、話することなんてないわ。あんな裏切り者に会

つてどうじゅうていうのよ！　あの人は2年前私を殺そうとしたのよ

はじかれたように顔を上げスキルを睨みつける。彼はそれを正面から受け止め、なおも静かに言葉を続けた。

「逃げるの？」

「……シ！？」

「やうやうひ逃げて、一生コーラに会えづづけるんだ？」

そのスキルの静かな問いはレイピアの胸を貫くのに充分すぎるほどだった。

なぜ彼はコーラに会えなどと言つのか。

わかつてゐるくせに。レイピアが彼に会いたくないと思つ理由を知りながらあえてそれをしろといつ。

みるみるうちに顔を怒りに染める。

「……シ！　あなたには……あなたにはわからないわよ。愛していた恋人に裏切られて傷つけられることの苦しさが！　コーラになんて会わない。会うつもりなんてない！」

「もし、コーラが裏切ったのに理由があつたとしても？」

「そんなの決まってる！　お金のためよ。それ以外に何があるっていつの！？」

「これ以上は聞きたくないと言わんばかりに言葉を荒げ、吐き捨てるように言つて放つ。

「それは君がコーラに直接聞くべきことだ。ただ、俺に言えるのはコーラは2年前のあの時君を殺すつもりはなかつたところのことだけだ」

しん、とテントの中が静寂に包まれる。

「殺すつもりが……なかつた？」

口の中がカラカラになり、何とか掠れた声をしぶりだした。

「そんな嘘、信じない。信じられるわけがない！」

「もし殺す気だったら背中ではなく胸を刺していた。戦つてみてわかつた。あいつ程の腕があつたら君を殺すのにまず仕損じる」とはない」

「…………ツ！」

「例え間違つて背中を刺してしまつたとしよう。なぜあいつは短剣を引き抜かなかつた？ 君の背中に刺さつたままで放つておいた？」

昨日の光景がよみがえる。

ユーザの体に刺さつたナイフを引き抜こうとした時、

『引き抜くなっ！』

そう言つてスキルはレイピアの腕を押さえ込んだ。もしあの時、ナイフを引き抜いていたら？ 彼は出血多量で死んでいたかもしれない。

もし2年前のあの時、背中に刺さつたナイフをユーザが引き抜いていたら？

彼がその結末を予想できないはずがない。  
確実に殺すためにその方法を選ばないはずがない。

「あ……」

の匂の匂とベッドから起き上がる。

「なぜわざわざ発見されやすい街道近くで君を刺した?」

「あ……あ……」

田を見開き、震える唇を押さえて呆然と立ち尽くす。

「本当に? あの人は本当に私を殺すつもりじゃなかった……?」

スキルはその問には答えず、代わりに別の言葉を口元した。

「このまま会わずにいたら、きっと後悔する」

その言葉が、引き金。

気がつくと体が動いていた。初めはゆっくり。だんだんと早足に。

「私……私……つ。確かめてくる」

きゅっと口を引き結ぶと堪えきれなくなつたよつて、駆け出しき  
いた。

レイピアがテントから出て行くのを見送った後、スキルはテント  
の壁に体をもたせかけて浅くため息をついた。

彼女を行かせてよかつたのだろうか?

もしかしたら、レイピアはこのままコーラの元に帰つてしまつかも  
しれない。

それでも、このまま放つておくことができなかつた。

永遠にコーラを憎み続けるレイピア。

永遠に誤解の解けぬまま、それでも彼女を思い続けるコーラ。このままではどちらも不幸でどちらも救われないような気がして。

全ての真実を知る権利がレイピアにはある。そして、その上でどう行動するかも全て彼女次第。ただスキルは少しだけ、出口の見えない闇の中を歩き回るレイピアの道標になつただけ。

「全く何やつてるんだか……」

くしゃくしゃと前髪をつぶし、自嘲気味につぶやいた。

スキルとレイピアが会話をする1時間前に話は遡る。

スキルは自分のテント　コーラの眠る場所に向かつた。  
幕を開け、中に入ると彼の微かともいえる気配を敏感に反応した  
コーラは薄く目を開ける。体を起こし、その痛みに顔をしかめた。

「……痛ツ！」

「あまり体を動かさない方がいい」

コーラは包帯で何重にも巻かれたわき腹を見、浅くため息をついた。

「……俺は……わつか、レイピア」「……」

昨夜の出来事を思い出したのか、その瞳は深い愁いを帶びている。

「なぜ手当てをした？」

スキルの方に首だけめぐらして睨みつけるよつこにして言った。  
まさに手負いの獣だな、とスキルは思つ。傷つきながらも決して  
相手には屈しない力強さを感じる。敵ながら見事なものだと思つ。

「決まつてゐる。死なせるわけにはいかなかつたからさ」

「俺はお前の敵だぜ？」

「あんたが死ぬとレイピアが悲しむ」

「ハツ。それで俺を助けたのか？ お人好し野郎」

鼻で笑い飛ばしたコーヴに軽く肩をすくめてみせる。

「さあ、どうかな。自分の利になることしかしない性格でね。そう  
いつわけだから感謝する必要はないよ。それより、これからどうす  
るつもりだ？」

「…………これから…………か。また1人旅に戻るつもりだ」

かぶりを振り、薄く目を閉じた。全てのことを諦めてしまつた表  
情だ。

「レイピアには……会わないのか？」

「可笑しな奴だな。レイピアを渡したくなくて戦いを挑んできたの  
に、今度はその逆をするのか？」

わき腹を押さえたままの状態で皮肉っぽく笑う。

「結果はつやむやになつてしまつたけれど、レイピアが行動を起こ  
さなかつたら負けていたのは俺の方だ」

「経過がどうであろうと、結果がこれだ」

「ユーザは怪我を負つたわき腹を指し示した。

「レイピアの心は俺を拒絶した」

「それがわかつた以上、もうここに止まる理由はない。そう言い、薄く笑う。

「あんたは、それでいいのか？」

スキルの問いにわずかにユーザは眉を寄せた。

「誤解されたままでいいのか？　あんたがレイピアを裏切ったのは……理由があるんだろう。少なくとも、裏切ったように見せかける必要があった……違うか？」

ユーザは微かに目をみひらいた。

「……なぜそう思う？」

「彼女は気がついてないみたいだつたが……話を聞いている限りではあなたの行動には矛盾があつた。最初は何となくそう思つただけだけどね。それが確信に変わつたのは闘つてからだ」

「……」

「それほどの腕がありながら胸ではなく背中を刺したのはどうしてだろう？　つてね」

長い沈黙が続き、突然ユーザが瞼を覆い隠すように手を当て体を震わして笑い始めた。

「……ククク。ハハッ。レイピアには伝わらなかつたのに、お前だ

けが全部お見通しつてわけか

自嘲氣味な口調。皮肉めいた笑い。それら全ては自分自身に向けたもの。

見ていて痛々しくなる思いがした。

「レイピアはあんたに裏切られたといつ思いが強かつたからな。そこまで考えることができなかつたんだらう。俺のような第三者だからこそ、気がつくこともある」

「やうか……。確かに、お前の言つとおり俺にはレイピアを裏切つたように見せかける必要があつた。　　あいつを、レイピアを守るために」

呼吸を乱しながら、レイピアは真っ直ぐスキルのテントへ向かった。テントの幕を開くと、全ての身支度をしたコーヴァがベッドの上に腰掛けていた。ちょうど、出発の準備が終わつたらしい。怪我もあまり塞がつておらず、血も足りない状態なのに本当に彼は旅に出るつもりだつたのだ。

「コーヴァ！」

振り向いたコーヴァは驚き、信じられないといつ表情でレイピアを見つめ返した。タイガーアイエローの瞳と視線がぶつかる。ゆつくりと彼との距離を詰める。

キリ、と苦しくなる胸を押さえつけ、静かに問い合わせる。ずっと聞きたかった答えを得るために。

「どうして……あの日……私を裏切つたの？」

皿を見開くコーヴァ。

一瞬戸惑つた表情をし、「アイツめ……」とレイピアをここに寄越したスキルに対して小さく舌打ちをした。

「答えて欲しいの。……私には聞く権利があるはずでしょ？？」

長い沈黙の後、コーヴァはおもむろに語り出した。

「……盗賊団のアジトに乗り込んだことを覚えてるか？」

2年前。

最後の冒険としてオリバ達のいる盗賊団のアジトに行つたときのことだ。

もちろん、覚えている。忘れてくとも、忘れられるはずがない。まるで昨日の出来事のように鮮明に覚えている。

レイピアは黙つて頷いた。

「あの時オリバが死ぬ間際、言つたんだ。所詮悪人は悪人でしかない。血に染まつた手を洗い流すことはできないと。そして こうも言つた。俺達を裏切ればレイピアを殺す……と」

『ぐり、とレイピアは息を呑みこんだ。語られる内容に動搖を隠し切れない。

「お前が狙われるかもしれないといつことは薄々わかつていた。だからこそ あいつらが動き出す前に決着をつけようと思つたが、……あの時点ではもうすでに遅すぎた」

吐き捨てるよつこ、苦々しげにコーナーは言い放つた。

「アルジェリカが俺達を殺すために組織の人間をかき集めていやがつた。 だが、レイピアを裏切り、自分達の元に戻るならお前を見逃してやると……言つたんだ」「だから……あなたは……？」

コーナーは答えなかつた。

しかしレイピアは全てを理解した。

彼は全てを一人で抱え込んで、レイピアの身を守るために裏切つたふりをしてアルジェリカ達の元に戻つたのだ。

保険金を受け取つたのもそのため。

あの時病室に来たアルジェリカ。あれは本当にコーヴィアが裏切ったかどうか確認するためだつたのだろう。

「アルジェリカ達とは、その後……？」  
「決着はつけた。組織の奴らは残らず自警団に突き出してやつた。  
中には殺した奴もいたが……覚えちゃいない」

額を押さえ、ため息をついた。

ひどく苦しげで、ひどく疲れた表情だつた。

2年間、彼はたつた1人で戦い続けていたのか……。レイピアは言葉を詰まらせるが、それでも半ば叫けぶようにして言つ。

「何でっ、一言言わなかつたのよ!? 全部1人で抱え込んで、全部1人で決めて!! 話してくれたら、言つてくれてたら……！」

「今の状況は違つていたか?」

レイピアの言葉を遮る形でコーヴィアが言つた。

「そうよ。きっと……私達は恋人同士でいられたわ……」「だが、あの時はそれが1番最善の方法だと思つた。俺のような男に関わつたばかりに一生奴らに命を狙われるよりは……」「言つてくれればよかつたのよ! 理由さえわかつていたらあなたに刺されたつて決して恨みはしなかつた」

……コーヴィアが全ての事を片付けるまで何年でも、何年でも待つて  
いたのに。  
それなのに。  
。

「もう2度と……お前と会うつもりはなかつたんだ。俺と関わると

口クな田に合わない。だから

「

「だから、何も言わずに刺して、一方的に関係を終わりにしようとしたの？ そんなの自分勝手すぎるわ！ 何が幸せで、何が不幸なのか……それを決めるのは私自身なのに」

激情が溢れ、レイピアは声を荒げた。

「どうして選択肢の中に2人で戦うという道がなかつたの？ あの時の私は幸せだった。敵に狙われていつ死ぬかわからない状況だつたとしても……きっと幸せだった……。愛してる人に裏切られたと思ふよりは、ずっと……！」

涙が頬を伝つた。

この2年間 レイピアの歩んだ道、ゴーザの歩んだであろう道、そのことを考えると涙が止まらなかつた。

片方は相手を憎みつづけ、片方は憎まれながらも相手を守るために戦いつづけた。

どちらも報われなくて。どちらも傷ついて。それを思つと悲しくてたまらなかつた。

「レイピア……

ゴーザはそつとレイピアの体を引き寄せ、その腕に包み込んだ。

「俺と、もう一度旅に出ないか？」

「ゴー……ザ」

「2度とお前と関わらないと決意したこともあつた。だが お前を忘れることがなんて…… できない

「ゴーザの腕の中。

2年前を少しも変わることのないないぬくもり。ずっと帰りたかつた場所。忘れることのなかつた場所。

ボロボロと涙が溢れる。

「ユーザ……。ユー……ザ」

けれど

レイピアはそつとユーザの体から自分の身を離した。  
そのぬくもりは変わらないけれど、自分の心は2年といつ歳月の中で変わってしまったから。

「レイ……。パー……」

タイガーエローの瞳が翳りを帯びる。

レイピアは静かに首を振った。

「『めんなさい』……ユーザ。……もう戻れない。一緒にに行けない……。2年の歳月は……長い。人を変えるのに充分な年月だわ」

自らの涙を拭い、ユーザを真っ直ぐ見据える。

「2年前の私はあなたを愛していた。でも、今は違う」

今は 違うの。

静かに、けれどはつきりとそう告げた。

「そうか……。お前はもつ見つけたんだな。自分の道を」「自分の道と呼ぶものがどうかはわからない……でも、私には……やうなくちやいけないことがある……」

ピンクダイヤモンドを取り戻すこと。それが今の自分の  
たつた1つの、居場所。  
レイピアの心がもう自分には無いことがわかるとコーヴは静かに  
頷くだけだった。

「あなたはこれからどうするの……？」

「さあな。……あてもなく旅でもするわ」

そう答えるコーヴの顔は寂しそうだったけれど、自分の気持ちを  
告げることができた為か晴れやかなものだった。

大小2本の剣を腰のベルトに差し入れ、コーヴは立ち上がった。

「お前は鈍いからな。一応言つておいてやる。お前の側には……お  
前のことを心から想い、大切してくれる奴がいる。……早く気づ  
いてやれよ」

コーヴの言葉が誰を指しているものなのか、そしてその時一瞬脳  
裏に浮かんだ顔が誰だったのか　　しかしレイピアは即座にその  
思いを否定した。

何も言わず、ただ首を横に振った。

微かにコーヴは苦笑しただけで、それ以上触れる事はなかった。

「……元気でな」

コーヴは微かに微笑み、そつとレイピアの肩をたたいた。

その瞬間、感情が溢れた。

楽しかった思い出、悲しかった思い出、全てが脳裏に浮かんで。

胸が苦しくなって、切なくなつて。

「私……ずっとあなたを憎んでいた。出会わなければよかつたって思つた時もあつた。でも……でも……。今は、違う。あなたに会えてよかつた……。2人で旅をして……恋人になれ……て、……っ。  
…………  
」

とうとう堪えきれずにしゃくりあげ、最後の方はほとんどの声にならない。

コーヴと恋人になれてよかつた。心からそう思つた。あの日彼と出会えたからこそ、彼に恋をしたからこそ、今の自分はある。

「俺のために泣いてくれるのか？ それだけでもう充分だ」

お前にもう一度だけ会えてよかつた。

そう言つてレイピアの涙を拭つと、背を向けた。

「待つて……聞いてもいい？ あの日、あなたが去る時何て言つたの……？」

レイピアを刺した後、立ち去る間際にコーヴが残した言葉。  
雨の中に消えた言葉。  
ずっと気になっていたその言葉。

コーヴはわずかに顔だけ振り向かせ、口を開いた。

「…………『愛してる』って。そう言つた  
「…………！」

レイピアに背を向け、歩き出す。

コーヴの頬につー、つと涙が伝つた。それはレイピアを愛してい

た、証。

彼はもう一度と振り返ることなかつた。振り向いてしまつたら  
きっと耐え切れなくなつてしまつから。

「ありがとつ……わよつなり……」

両手で顔を覆い、レイピアはぺたりと地面に崩れ落ちた。静かに  
涙を流す。

「ユーザ……ユーザ……、ユーザ」

彼の姿が見えなくなつて、消えてしまつまでレイピアは彼の名を  
つぶやき続けた。

ユーザがいなくなつた。

今まで思つてゐた憎しみは全て誤解で、彼はレイピアのことを裏切つてはいなかつた。全ての真実を知つた。本当ならこうこうの場合、心が晴れやかになるものだけれどレイピアの胸はボッカリと穴が開いた氣分だつた。

大切なものを失つたよつた、何かが胸の中から出て行つてしまつたよつた……。

寂しさが心に残つた。

今、レイピアがやらなくちゃ いけないと、それはピンクダイヤを取り返すこと。けれど、正直今のレイピアは行動起こす気分ではなくなつていた。

舞台も休んでいる。

そしてスキルとも顔を合わせることを避けている。今回のこととで彼には世話になつたのだから、お礼を言わなくてはならないのに行動を起こさぬまま日にちが過ぎてゐる。

スキルもレイピアに気をつかつてか、テントに顔を出すことはなかつた。

「レイピア、いる?」

テントの外から声が掛かつた。

「シア? 入つていいわよ

「お昼ご飯持つて來たよ。一緒に食べよつ」

両手にお盆を2つ抱えて、シアが入ってきた。盆の上にはスペゲティとサラダと鶏肉を煮込んだスープが乗っていて、それを手際よくテーブルに並べていく。

シアはこうしてレイピアがテントの中に引きこもってからも良く世話を焼いてくれた。リグとソアラもまた同様で何かと理由をつけではテントを覗きに来るのだった。

レイピアは申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

彼女は先日のコーナーの引き起こした騒動を目の当たりにしている。気になつていてあるうちに、それにも関わらず何一つ尋ねてこようとはしない。そしてレイピアもまた何一つコーナーのことやそれに関わることを話していないのだ。

「シアは……どうしてそんなに良くしてくれるの？」

「どうして……って。友達じゃない。当然よ」

思い切ってレイピアが尋ねてみると、シアはまじめ当たり前のような顔をして、いつもあつたりと返されてしまった。

「だつて……私、シアに何一つ話してない。それなのに……」

「それなのにおかしい？ そうかな、私はそうは思わない。それにね……何となく聞かなくてもわかつてたから」

レイピアが弾かれるようにして顔を向けると、シアは穏やかに笑い、口を開いた。

「私もね……まだレイピアに話していないことがあるの。……私ねえ、昔貴族に騙されたことあったんだ」

その言葉の内容とあっけらかんと語るシアに、レイピアは驚いたように目を見開き、息を呑んだ。彼女はレイピアを静かに見据えた

後、ゆっくりと語り出した。

「お密さんだつた人にサークルで働くのを辞めて、自分の所に来な  
いかつて言われたの。その時の私つて馬鹿だつたから、その誘いに  
乗つちゃつたんだ。たぶん、好きつて言われの初めてだつたから舞  
い上がつてたのね」

言葉を発することもできず、にじるレイピアに特に気にする様子も  
なくシアは淡々と続けた。

「でも実際は違つてた。その人は私のことを好きでも何でもなく、  
花街に売り飛ばそうとしてただけなんだよねー。そのとき助けてく  
れたのがブレンとスキルだつたの。2人ともすぐ怒つてたなあ。  
元々あの2人つて貴族が好きじゃなかつたから余計にね」

その光景を思い出したのかくすくすと口元に手を当てて笑う。

「騙されたことがわかつて、当時はすっごく辛かつたけど……今は  
もう笑つて話すことができるんだ。これは乗り越えた証拠なんだつ  
て思つてる。レイピアも……いつか、そうなる日が来るといいね」  
うシアにたまらなくなつて。

胸が詰まる思いだつた。

辛かつたことを、何でもないという風に笑つて話す。気丈に振舞

「やつ……ね。 そつなる口が……来るといいな

時間が経てばなんとかなるものよ、そつと聞いてシアは穏やかに笑  
う。

「シアは強いのね」

シアの肩に頭をもたせかけた。

「ふふ、やだレイピアつたら～。酔つ払つてゐるの？ なんか、かわいいぞ」

くすくす笑いながら、田元を縋ればせた。そうして母親がするみたいにレイピアの頭をやさしく撫でた。

「これからレイピアせざりあるの？ ビウしたいの？」  
「私は……」

考え込むように聞を空け、やがて少し苦しそうな表情でつぶやく。

「私は……ピンクダイヤモンドを取り返したい……。たぶんこれが、今私の……たつた一つの居場所」

シアはそのレイピアの様子がひどく追い詰められているように感じてならなかつた。今のレイピアはピンクダイヤを取り戻すことしか頭にない。いや、そのことしか考えないようにしていふ。前々からそういうた傾向はあつたけれど、今日は特にそれが強く現れていふように思える。

そうすることで心を守つてゐるのかもしれない。

だが もしピンクダイヤを取り戻したら、レイピアせざりあるのだろうか？

彼女の心はどうなつてしまふのだろうか？

シアにはそれが氣がかりでならなかつた。

「これだけは覚えといて。私はレイピアの味方だつてこ'う」と。た

とえ ピンクダイヤモンドを賭けた勝負が終わつたって……  
私はあなたの友達」

レイピアはしばらく答えなかつた。間を空けて やがてポツリ  
とつぶやくよひに言つた。

「ありがと……シア……」

シアの肩に顔をうずめた。

だから、シアは気がつかなかつた。レイピアの瞳が微かに翳りを  
帯びていたことに……。

\* \* \*

「最初は……騙すつもりだつた」

あの日、全ての真実をスキルに語つた後コーナーはその言葉をつぶ  
やいた。

微かにスキルは顔を上げ、彼を見た。その表情は何の感情も映さ  
ず、そこからは何も読み取ることができなかつた。

「セレイラの街に着いたら、あいつを売り飛ばすなりなんなりして  
金を稼ぐつもりだつた。けど あいつはいつの間にか、どんどん  
と俺の中に入り込んできやがつた。純粹で、屈託ない性格に癒され  
ていたのかもしれない いや、事実癒されていたんだろ?」な

スキルは静かに、その言葉を聞いていた。

「初めて、誰かを幸せにしてやりたいと思つた。この血に染まつた  
手でも、あいつ一人くらい幸せにしてやれると思つていた……。だ

が、やはり罪人は罪人でしかないということだ。汚れきった手が洗い流せるはずがなかつた。もつ、どう足搔こうとも抜けられない蟻地獄に陥つていたんだ」

その表情が苦渋に満ちたものへと変わつた。やがてコーヴは俯かせていた顔を上げてスキルを見、ポシリとつぶやく。

「お前は 同業者の臭いがする」

静かなその問いかけにスキルは頷いてみせた。やはり、同業者にはわかつてしまふのだ。何気ない仕草や雰囲氣から。隠すつもりはなかつた。

「…………ああ、俺もあんたと同じようだ。盗賊だ」「…………ううか……。やめられるなら、今のうちに止めることだな。…………いつか……俺のようこそそのツケを払う日が来る」

重い言葉だつた。

経験した者だけが語ることのできる、言葉。

レイピアが塞ぎこんでテントに引きもつてゐる頃、スキルは公演のために忙しく動き回つていた。

スキルはここ数日間で、レイピアへの思いが止められないくらいに強く成長したのをはつきりと自覚していた。シャンナリー やかつて関係を持つたことのある女性達に抱いた軽い思いではなく、今まで他の誰にも抱いたことがないくらいの強い思い。

愛しいという想い。

離したくないという想い。

その思いを自覚している以上、レイピアが気がかりではないと言つたら嘘になる。しかし、今はしばらくそつとておいた方がいいような気がした。

彼女はユーラと一緒に行く道を選ばなかつた。けれどもそれで気持ちの整理がついたかといふと 答えは、否。

2年の歳月は決して短くない。

2年間心を占めていた苦しみから解放されたからといってすぐに気持ちを切り替えることなどできないだらう。

だが、スキルに時間がないのもまた事実だつた。

勝負の終わる期日は確実に近づいてきているのだから。

スキルは一つの覚悟を決めると、父であるヴォイルの元に向かつた。

「父上、話がある」

ステージでのリハーサルを終え、一息ついているところを見計らつてヴォイルに声をかけた。

ヴォイルはそのただならぬスキルの雰囲気に眉をひそめた。

「おう、どうした？ 改まって  
「俺に団長の座を譲つてほしい」

一瞬、呆然とした表情をするものの、次の瞬間には満面の笑みを浮かべてバシバシとスキルの背を叩いた。

「お前……そつかー！ とうとう決心してくれたか。で、いつからだ

？」

「今すぐこでま。とこつても今日は無理でしょうから明日にでも式を行なつて欲しい」

そのスキルの急すぎる申し出に、さすがのヴォイルも目を丸くする。普通、こうした团长交代には最低でも5日ぐらい準備期間を設けた後に式を行なうものである。

「明日あ！？ ……そりやまたずいぶんと急だなあ……」

「無理は承知の上ですよ。今回は少し……時間がなくてね」

いつになく焦った様子のスキルに珍しい物を見たとばかりに、ヴォイルはにやにやと口元を歪める。

「うわこつといひはひびく似ている親子である。

「ふうん、まあ息子のワガママを聞いてやるのもパパのお仕事ですね？ いいぜ、明日に決定だ」

「ありがとうございます」

スキルは頭を下げる。

「よせやい。もともとこつちが先に無理言つたんだ。まあ、これで俺も無事にソアラとラブラブ旅行に行けるわけだ。いやー妹ができるやうかもね、スキル君」

「冗談とも本氣とも取れないヴォイルの言葉にスキルは呆れ返つてため息をつく。

「いい年して……。20歳以上も年の離れた妹なんて冗談じやない」「素直に喜ぶとかできないもんかね。一体いつからこんな風にかわ

いくなくなつちまつたのかねえ？

「なんせ父上の子供ですからね……。その時点でかわいくないのは決定しますよ」

「まー。ほんととかわいくないクソガキです」と。髪の毛の色と田元がソアラに似てなかつたら愛の百叩きの刑に処すのに。あーあ、パパはこんなスレまくつたクソガキじやなくつてかわいい娘が欲しかつたなあ～」

もちろん俺に似て愛らしい子がいいなあ……とつぶやいた。

父上に似てる妹なんて不気味すぎる、その言葉を向とか飲み下し、聞き流した。

「パーティー！？」

寝耳に水とばかりにレイピアは素つ頓狂な声を出した。

「ええ、そうです。今夜は若君の団長就任パーティーがあるんですね」

リグはにこりと笑つて告げた。

「団長……？」「スキルが……？」

レイピアは呆然としてつぶやいた。

自分がテントに引きこもっている間に、一体何があったというの

卷之三

「あの……私、イマイチ状況が掴めないんだけれど……団長の身に何があったの……？」

「ああ、レイビアさんはご存知なかつたですね。団長が体を壊したとかそういう理由ではなく、単に引退したいと言い、若君がそれを引き継ぐ形になつたんです。正式に決まつたのはつい昨日の話なんですよ」

スキルが団長になつたことが余程嬉しいようで、リグはまるで自分のことのように嬉しそうに言つた。頬が緩みきつている。

「レイピアさんも出席してくださいね」

リグの言葉にレイピアは困り果てた顔をした。

「あの、でも私……パーティーなんて……。服も持つてないし……」「大丈夫ですよ。シアに言つてありますから。彼女に借りてくれさい」

「でも……でも……」

「レイピアさん」

何とか理由を見つけ欠席しようとしたレイピアの言葉を押しとびめる。

「必ず出席するよ」と、若君が言つてましたよ」

ぐつと言葉を詰まらせた。

自分の気持ちが全て見透かされているみたいでひどく居心地が悪くなつた。それでも渋々と頷く。

「…………わかった…………」

それを満足そうに見届けると「ではパーティー会場で」やつとつてリグは出て行つた。

正直、パーティーに参加することに乗り気ではなかつた。騒ぎたい気分ではないし、今は1人になりたい気分。だが。

いつまでもこんな気持ちでいるのは良くない」とと思つのだ。前に向かなくては。歩き出さなくては。

また、弱いままの自分に戻つてしまつから。

\* \* \*

それからレイピアは日が暮れるまでの2時間、嵐のよくなシアとソアラによつて着せ替え人形にさせられることになる。

「まあ、レイピアちゃん。とっても似合つわ」

「本当〜！ レイピアかつわいい〜」

両手を合わせてうつとつとしながらソアラがつぶやき、シアもまた田をキラキラ輝かせた。

「もし私に娘がいたらひとい風に着せ替えしてみたかったの」

そう言つてソアラはにっこりと笑つた。

レイピアが今着せられている服は赤色の服。最初は青色の服、次は紫色の服、これが3枚目の着替えになる。いい加減疲れ、どの服でもいいじゃないかと思うが2人はそれを許してくれそうにはない。衣装箱をあさつていたシアは白い服を取り出してきた。

「ね、ね、ソアラ様。このちの白い服なんてどうかしら？ レイピアに似合つよう」

「あら、素敵。レイピアちゃんこのちの服も着てみて」

「また……ですか？」

恨めしそうに見上げるとソアラとシアはもうりんとばかりに頷いて見せた。

「2人とも私のことより自分達の仕度をすればいいのに……」

「あら、私達は見ての通りもう準備は整つているもの。ねえ、ソアラ様」

「ね、シアちゃん」

2人は顔を見合わせてにっこり笑いあつた。言葉通りシアもソアラもパーティー用の洋服を身にまとい、綺麗に化粧も終わっていた。レイピアはおもしろくなくて頬をふくらませてむくれる。

「大体、こんなにお洒落しなくつてもいいんじゃないの？ 団員間でやるパーティーなんだから」

「駄あ～目。だからこそ気合入れなくっちゃじゃない！ みんなすつごい気合入れるのよ～。それとも何？ レイピアだけ普段着でその場から浮きたいの？」

「う……それは嫌かも…………」

「でしょう？ じついう機会でもなくっちゃなかなかハメを外せないんだから。ほら早く着ないと。パーティーが始まっちゃうよ」

促されて渋々とレイピアは白い服を受けとると、着替え始めた。その服はワンピース型で膝より少し長い丈。裾と袖の部分にレースがついている。その見た目の軽やかさといい、服の薄さといい今の季節に良く合っている。

「きやあ、それいいじゃない！ それに決まりね」

シアはレイピアを見るなり飛び上がって喜んだ。

「さあ、次は髪の毛と化粧よ」

腕まくつし、今度は化粧に取り掛かった。

「わふっ。シア～……。化粧なんていってば……」

レイピアは今にも泣き出しそうな、情けない声を上げる。

「駄目駄目、今日くらいしなくちゃ。レイピアって普段お化粧しないでしょ。元が良いから化粧しなくっても綺麗だなんて、うらやましいつたらないわ」

私なんてソバカスが気になつて仕方がないのに、なびぶつぶつ言いながら粉をはたいていく。ひと通り化粧が終わるとシアは化粧箱の中から手のひらに乗るくらいのガラスの小瓶を取り出した。

「最後は香水」  
「香水なんていいつてば……」  
「遠慮しないのー！」

言つなり半ば強引にショックとレイピアの首筋に噴きつけた。ふわりと爽やかな香りが辺りを漂つた。今までかいだこともないその香りにレイピアは首を傾げた。

「Jの香りは……？」  
「スズランよ」

バラや柑橘系の香水なら見たことはあるけれど、スズランの香水はめずらしい。ふうん、と感心しながらレイピアはしげしげとその香水瓶を手にとつて見た。

得意げな顔でこいつとシアが笑う。

「Jの花は私のレイピアのイメージなのよね。スズランってかわいくって綺麗でしょう？ それでちょっと毒があるところ」

くすくす笑うシアにレイピアは顔をしかめた。

スズランの根に毒があるのは誰でも知っている事実。

「…………。そんなに毒っぽいの？ 私つて……」

前にシャンナリーにも毒があると言われたことを思い出した。

「ああ、氣を悪くしないでね。悪い意味じゃなくて良い意味でよ。レイピアの持ってる毒は人を痺れさせちゃうの。んふふ」

「痺れさせる……ねえ」

それって良い意味になるの？

そう思つたけれど、あえて口には出さないことにした。

「レイピアちゃん、このスカーフなんてどうかしら？」

顔をこれ以上ないくらい幸せいっぱいに綻ばせて、ソアラが持ってきたのは青色の厚さの薄いスカーフだった。ソアラはこのスカーフを探すために今まで席を外していたのだろう。

「私が若い頃に使つていた物だけど……」

ゆつたりとレイピアの首に巻きつけた。そのスカーフの色といい涼しげな薄さといい白いワンピースにとても良く映えた。

「わー、いい感じいい感じ」

手を叩いて喜ぶシア。

「よかつたわ。」のスカーフ、レイピアちゃんにあげるわね

「え、で、でも……」

「いいのよ、レイピアちゃんに使つてもうつた方がスカーフもきっと喜ぶわ

「……それじゃあ……、ありがとうございます」

照れくわいしてレイピアは首に巻かれたそのスカーフに触れた。

丁度その時、楽師達の演奏する軽快な音楽が鳴り始めた。それはパーティーの始まりを告げる合図。

「よーし、思いつきり楽しむぞーー！」

待つてましたとばかりにシアは勢い良く立ち上がった。テントの外からは早くも団員達の笑い声や歓声が上がっている。

「ほい、レイピア早くーー！」

急かすようにしてシアが手をパタパタ振る。

ため息をついて立ち上るとシアの後に続いた。

「ああ、若君……。立派になりましたね……」

ハラハラと落ちる涙を拭いながら感慨深げにつぶやいたのはリグだつた。団長達が全員集まつた中央広場で、サークスの正装である燕尾服を着たスキルの団長就任挨拶は無事終了した。

いつも苦労ばかりかけられていた彼が今、こうして団長の座に就いている。ついこの間までは考えられないことだつた。

「おめでとー！」

団員達は次々と祝福の言葉を述べる。

せん「若君和は少田といふ田をこんなにも嬉しいと思ふことはない

そのリグの様子に呆れかえつたようにブレンはため息をつく。

「いいんです。私にとつて若君はいつまでたつても若君なんですか  
らー。」

そう言つリグの顔には誇らしげな表情が浮かんでいた。

۱۵۱

挨拶を終えたスキルはもう一度口を開いた。

「堅苦しき」とは抜きにして今日は思いきり楽しんでくれ。だがその前に一つ、言つておきたいことがある」

何だろ？と首を傾げる団員達に対して彼は高らかに宣言した。

「今日をもって黒のペルロ団を解散したい」

ザワ

その突然の宣言に会場全体が震えるようにざわめいた。それもそのはず、彼らの盗賊稼業はサークスの創始者でもある曾祖父の時代から続いているものだった。ある意味伝統ともいえる盗賊稼業の終結宣言は彼らに与える衝撃としては充分なものだった。

「皆知つてのとおり、前団長の代からサークスの経営が軌道に乗り始めた。そしてこれからもますますこのサークスの発展を目指す。盗賊稼業をしなくても飢えや貧しい思いは決してさせない。約束する。だから　どうか俺を信じてきて欲しい」

水を打つたように静まり返った。

しかし、次の瞬間ワッと団員達の歓声が響き渡った。

「あつたり前だろー！　俺達はいつだって団長についていくぜえ！」  
「しつかしまあ、よく決心したもんだぜ。貴族連中のお宝を盗めないのはちつとばかり残念だけよ。せめて一言くらい俺に相談しろつてのー！」のやう

スキルのこめかみにグリグリと拳を押し当ててブレンは飛びついた。次々と団員達も押し寄せ一気にスキルを取り囲んだ。

レイピアは遠巻きで、複雑そうな表情をしてその光景を見ていた。

\*\*\*

スキルの宣言が終わつた後は、サークルの新しい門出を祝つて飲めや歌えのドンチャン騒ぎになつた。中央広場に設置されたテーブルの上には所狭しと料理が並べられたし、会場内にはワインの樽ごと運び込まれる始末で、それらは次々と団員達の胃袋に流し込まれた。

歌い出す者、ひたすら話に興じる者、大笑いをしそうに転倒する者すらいた。

ソアラとヴォイルがダンスをし、それをうらやましそうに見る団員達。

リグは羽目を外しそうにして田を回した団員の介抱のために、会場中を駆けずりまわる。

シアはブレンをダンスに誘おつとして失敗。結果いつも通りの口喧嘩になりお互いそっぽをむいてしまつた。

スキルはパーティーの主役として詰めかける団員達とお酒を飲みながら話に興じていた。

そしてレイピアは「……」。

団員達によつて半ば強引に誘われ、ダンスをしていた。

彼らの間で踊られるものは貴族の社交場で踊られるものとは違つて、型が決まっていない。軽快な音楽に合わせて自分の好きなようにくるくると回りながら踊る。時に手と足を鳴らしてリズムを取り、隣り合う人と視線が合つたらにつこりと微笑む。そんな踊りだった。初めての踊りに戸惑いながらも、レイピアは心の底から楽しんでいた。

パーティーは最高潮に達し、夜もだいぶ更けてきた頃。レイピアは会場を後にし、一人木に背をもたせかけて考え方をしていた。

黒のピエロ団の解散を宣言したスキル。

その意図は……？

「「」んなとこりこった」

「…」

いきなり背後から声を掛けられ、レイピアは飛び上がるくらいに驚いた。なぜいつもスキルは気配も足音も無く現れるのだろうか。心臓に悪い……。

「パーティーの主役がこんなとこりこいでいいの？」

「まあね。あとは団員達で勝手にやるわ。君にセビシヒ「」んなとこりこ？」

「私は……少し疲れたから」

人込みに酔つてしまつたのだ。浅くため息をつくと、スキルを見上げ問い合わせる。

「ねえ。どうして……」

盗賊をやめるなんて言つたの？

レイピアの言わんとしていることを察したスキルはレイピアが言い終わるよりも先に口を開いた。

「今回のことで、少し……考えた。俺はこのサークスを守つていかなくてはならない立場だ。盗賊稼業で団員達を危険にさらすわけにはいかない」

スキルが盗賊稼業をやめようと決めた最大のきっかけはやはりコーザのことだった。彼の身に起こったことは何も特別なことではない。形こそ違つても、スキルの身にも起きえることなのだ。盗賊稼

業を続けていの限りその危険は常に付きまとつ。

「こつまた君みたいに追いかけてくる貴族が現れるかわからないしね」

「そうね。きっと……それが一番いいのかもしれないわ」

心からの言葉だった。

団員達やスキルが捕まる姿など見たくはなかつた。そしてユーヴガのよつな悲しい人を出してはいけないと思つた。

「でも、このダイヤは……返さない」

スキルはそう言つて、ダイヤの入つてゐる胸元にそつと手を置く。レイピアもまた彼のそんな態度に口元を笑みの形に歪めてみせた。

「望むところよ。絶対に、期日内に奪い返してやるんだから」

「さて、決意も新にしたところで……せつかくのパーティーですから踊りましようか？」

半ば強引にレイピアの手を取り、踊り出す。似てるな、と思つた。初めて会つたときだ。

レイピアは領主の娘としてパーティーに参加し、スキルは『ランス』という名の貴族として現れた。

あの時もこんな風に踊つたつけ……。

軽やかなステップで優雅な振る舞い。リードが上手いと思つた。

「香水つけてる。この香りは……スズラン?」

なんでそんなことまでわかるのよ、と思いつつ頷く。

「……ええ」

「君に良く似合つてゐる……」

真顔で言われ、不覚にも心臓が跳ね上がった。

「ひたえたるレイピアに

「　　毒があるところなんて、特に」

そう付け加え、ニッと唇の端を吊り上げた。またしてもスキルにからかわれたと知り、怒りで顔を染める。

「ええ、そうでしょうとも。びつせ毒だらけよつー。」

くつくつとスキルが喉の奥で笑う。

苛立ちつつも、レイピアはそのやりとりに、最初出合つた頃みたいに明らかな嫌悪感を抱かずにはいた。むしろ、心地よさを感じている自分に気がついていた。

ステップしていく足を止め、レイピアは一回深呼吸をすると、まるで独り言を言つようにつぶやいた。

「ありがとうございます。今回のこと……感謝……してゐる」

スキルはわざかに肩をすくめただけで答えなかつた。

「あなたがあの時、言つてくれなかつたら……私はコーラを永遠に憎んだままだつたと思つ。本当にありがとうございました」

深々と頭を下げる、そしてそれからスキルを真つ直ぐに見据えた。

「でも、わからない」とある。なぜあなたは助けてくれたの…

…？」

レイピアの問いにスキルは苦笑をもらした。

「本当、鈍いね。まだわからないの……？ 前にも言つたださうつ、好きだからつて」

「何言つてるの……。いつもそつ、冗談ばかり言つて……。からかわないで……」

視線を外し、顔も背ける。

「冗談なんかじゃない。好きでもない女のために命の危険を侵してまで鬭つたりしないよ」

レイピアの髪の毛を一房すくい上げ、愛しげに唇を寄せた。

「美しいな……」

その熱を帯びた声に弾かれるように、スキルを見上げる。

「何? 何を言つてるの……。おかしい、変だ。」

「酔つてるの……？」

「いたつて素面だよ」

「嘘。さつき飲んでたじやない」

微かに上気した頬。

そして向けられたのは熱を帯びた視線。

その視線から逃れるようにレイピアは再び顔を背けた。自分の顔

に急速に血が集まつていくのがわかる。息が苦しくなつて頭がくら  
くらした。

「おかしいかな？」

「変……。変よ、あなたさつきから自分で何を言つてるかわかつて  
いるの？」

後ずさりする。

2歩ほどトガつたところでトン、と背中に木の幹が当たる。動搖  
し、顔を上げるとスキルが微かに笑うのが視界に映つた。

「キスしてもいい？」

「え……？」

それは問い合わせとこより余図のようなものだった。

レイピアが驚き、目を見開くよりも先に唇が重なつた。まるで壊  
れ物を扱うように軽く触れるだけのものが1回、2回。

以前のような薬を飲ませるためのものではなく、純粋に唇を重ね  
るための行為。いつものからかうような態度とは明らかに異なつて  
いるその態度。

「な……」

何で、と思つ。

頭が真っ白になる。バクバクと鳴る心臓の音が耳にまで届いてく  
る。逃れようとして手を突つ張つて押しのけようとしたが逆に押し  
戻されてしまった。

「逃げないで」

耳元で囁かれる、声。

ゾクリと体が震えた。

レイピアの顔を挟むようにして木の幹に両手をつくスキル。顔を背けることもできそうにない。

スキルと視線がぶつかる。

レイピアは若干の冷静さを取り戻した。ほんやりと今、手を伸ばせばスキルの懷にあるダイヤを取り返せそうだと考えた。  
隙を見せたことのないスキルが初めて見せた、隙。絶好のチャンス。

少し手を伸ばせば……。

その手を伸ばしさえすれば……。

だが、実際にレイピアがとった行動はスキルの背に両腕をまわすことだった。碧色の瞳に吸い込まれるようにゆっくりと瞳を閉じる。  
再び重ねられる口づけ。  
唇を割りスキルの舌が侵入していく。

深い。

思考能力が奪われる。頭がくらくらする。木の幹に背をもたせかけていなかつたら、その場にへたり込んでしまったかもしれない。

サワ……。

風が吹いて木々の枝がこすれ合う音がした。

「…………ツー」

その瞬間、レイピアは夢から目覚めたように一気に現実に引き戻され、思いきりスキルを突き飛ばした。

「…………私…………つー」

唇を覆つて絶句する。

スキルの碧色の瞳と視線がぶつかると、たまらずレイピアはその場から逃げ出していた。

がむしゃらに走った。

頭が真っ白になつてなにも考えることができない。途中、何人かの団員に出てわしたけれど、それを押しのけるようにしてひたすら走つた。

「あ……っ！」

何かに足を取られ派手に転んでしまつた。

運の悪いことにそこは小石がたくさん落ちてゐるところで、転んだ拍子にワンピースのスカートが破け、擦りむいた膝からは血がにじみ出た。

それでもレイピアは怪我に構つともなく偶然としてその場に座り込んでいた。

私、忘れてた……。

あの時の一瞬……ダイヤのことを。一番忘れてはいけないものなのに。それを取り返すことだけがレイピアの唯一の居場所。それなのに。

「何で……！？」

両耳を押さえてうずくまる。頭が混乱し、平静を取り戻すことができずにいた。

「どうして！」

「いや、ダイヤのことなど、もうもことは思つてしまつたのだ

そんな風に思つてしまつた自分が許せなかつた。母親の顔が脳裏に浮かぶ。

「お母様……お母様、お母様…………」

「めんなさい、めんなさいと何度も心の中で謝る。  
ダイヤのことを忘れてしまつてごめんなさい……。

スキルの所為でいつも簡単に心が乱れてしまつ自分がたまらなく嫌だつた。初めて出会つたときからいつも、そう。  
スキルの一拳一動に心が乱される。

ある者は困惑し、ある者は胸に熱情を抱き、ある者はそんなものとは無関係に飲み食いに精を出し、ある者は片付けのために忙しく駆けずり回った。

様々な人の思いが交錯した長い、長いパーティーの夜が明けた。特にレイピアにとってはこの夜が永遠に明けないのではないかとさえ思えるほど長いものだった。

四  
三

朝早くからドタドタドタドタ、と地響きにも似た音を立ててスクリのテント目がけて走つてくるものが一人。

「ちよつとおおスキルウウウウ！－－！」

栗色の髪の毛を揺らし、目を吊り上げて飛び込んできたものの正体、それはシアだつた。今にも湯気が出そうなくらいにカンカンに怒りで顔を染め、怒鳴り声を上げた。そのただならぬ様子にスキルも、そして打ち合わせで話し合いに来ていたリグも目を丸くするばかりだつた。

「あなたはつ！つ！レイピアに一体ナニしたのよお！？！」

いまいち、スキルには事情が掴めなかつた。

「ナニつて……その妙に誤解を招く言い方はやめてくれないか。リグ、なんでそんな目で俺を見る？」

後半の言葉は半眼になつてスキルを見るリグに向けたものだつた。

「若君…… 一体ナニしたんですか」「だから、どうしてそういう方向に話がいくんだ」「つるつさ い！ 私の話に答えなさいよ。なんで、レイピアの服がボロボロになつてんのよおつ！？ 膝は怪我して血が出てたしつ！ 震えてたしイ！」  
「…………は？」

スキルは初耳だとばかりに目を瞬かせた。シアもその様子に気付き、訝しげに眉をひそめる。

「…………あんたが犯人じゃないの？」  
「免罪だ。何で……俺が……」  
「だつて、考えられる原因つていつたらあんたしかいないじゃない」

断言されビシッと指され、スキルは苦笑する。

「酷い言われようだね。そんな心当たりなんてな …… あ

そこでスキルの言葉が止まる。  
もしかしてあれが原因で？

あの時、ひどく動搖して逃げ出すように駆け出したレイピアの姿が脳裏に浮かんだ。あの動搖ぶりでは転んでもおかしくはないだろう。

だが、事情を知らないシアはスキルの一瞬考え込むような素振りを別の解釈で受けとつた。  
彼が無理矢理レイピアに何かしようとしたり、と。

「あ、あんたって奴はああ　　！！　なんて最低なの　　！」

シアは近くに置いてあったアルミ製の椅子を両手で持ち上げ振りかぶった。

「ちょ、ちょっと待てシア！」

いつも冷静なスキルもさすがにこれには慌てる。

「若君……あなたという人は……」

いつかやると思ってました、そんな言葉が聞こえてきそうな表情でリグ。頭を抱えてうめくスキル。

「…………だから、何でそういう目で俺を見るんだ……リグ」「ええい、つべこべ言うな。成敗してくれる！ 天誅うううつー！」

「…………ツー！」

その日、ガン、という鈍い音がテント内に響き渡ったとか……。

\* \* \*

鏡を覗き込んだレイピアは田の下にできた隈を見てため息をついた。もともとレイピアは悩んだり憤慨したりすると眠れなくなることがあり、隈ができやすい体质なのだが今日は特にひどい。とても見られた顔じゃない、と自分でも思つ。

「酷い顔……」

原因は考えるまでもない。のことだ。  
昨日の、夜の 。  
無意識のうちに唇に手を当てた。

視線を膝に移す。膝には包帯が巻かれてある。あまりたいした傷ではなく痛みは引いたものの、触れると少しだけ痛む。

「ここ最近怪我が絶えない、と思う。」

スキルと出会ったパーティーの夜でついた短剣による傷。ライに噛まれたことによつてできた傷。そして昨日の転んだ拍子にできた傷。いずれも完治する前に負傷している。だんだんと情けない気持ちになつてきた。

「……少しいいかい？」

テントの外から掛かつたその声に驚き、肩が跳ね上がる。手にしていた鏡が手から滑り落ちた。割れはしなかつたものの、床に落ちたときにガシャンと派手な音があがつた。

レイピアはそれを拾わなかつた。いや、鏡を拾うだけの心の余裕がなかつたと言つべきだろう。

慌てふためき、顔を青ざめさせる。

見かねて代わりに鏡を拾つたのはスキルだった。

「怪我は大丈夫？」

スキルは鏡をレイピアの手に戻しながら、問い合わせてきた。視線が膝に向いていることから腕の怪我のことを言つているわけではない。おそらくシアに聞いたのだろう。

「ふんふんと音がしそうなくらいに思いつき首を縦に振る。

「だ、大丈夫っ。そうだ、わ……私……シアに用事があるんだわ」

唐突に何かを思い出したようにレイピアは椅子から立ち上がり、半ば強引にスキルの問いかけを打ち切った。その動作はかなり不自然なのが、本人に自覚はないようだ。なおも声を掛けようとしたスキルを振り切るようにして足早にテントから逃げ出した。

本当はシアに用事など何もない。ただ、あの場にいたくなかったのだ。

スキルと顔を合わせるのが恐い。だから逃げ出した。

朝から夕方まで、そんなことが続いた。

公演の合間を縫つてスキルはレイピアの所へ来るのが、レイピアはというと彼の姿を見つけるたびに脱兎のごとく逃げ回った。公演中に声を掛けられたら逃げることができないと不安に思っていたが、さすがにその間はスキルもプロとして仕事に徹していた。

1日の公演が終わり、片付けも全て終了した。

自分のテントへ戻るために曲がり角を曲がると、腕を組み木に背を預けたスキルの姿があった。

その姿を見るなりレイピアはギクリ、と身を強張らせた。まるで死神でも見たように顔を青ざめさせ、悲鳴を上げそうになつた。

いつも気配もなく側にいるのだ、この男は。

そんなレイピアの様子を一瞥したスキルは特に気分を害した様子もなく静かに問い合わせてきた。

「避けられてるのかな？ 僕は」

レイピアは明らかにスキルを避けていた。それは事実だ。スキルも当然気がついているだろう。だが、わかっているくせにわざわざ疑問形で言つといふが何とも人が悪い。

「…………」

「まあかあれだけ逃げ回つて『避けてない』なんて言わないだろう?」

しりばっくれようと思つたがそっぽいかなかつた。

言いたいことを先に言われてしまい、レイピアはぐつと言葉を詰まらせた。退路を絶たれ、追い詰められてしまつた気分になる。どうしよう、どうしようと考えているとスキルの方が先に口を開いた。

「昨日は……」

弾かれたようにレイピアは顔を上げ、強引にスキルの言葉を遮る。

「や、昨日はつ! 昨日は……パーティーに呼んでくれてありがとう」

眉をひそめた後、スキルは再び口を開けようとする。

「昨日……」

「りょ、料理もとてもおいしかつたし。団員のみんなもとても楽しもうだつたわ」

だが、またしてもレイピアは強引にスキルの言葉を遮つた。明らかに必死になつて「昨日の出来事」から話を逸らせようとしている。

これにはスキルも気分を害したようだつた。

「話を逸らさないで欲しいね」

鋭くそつ指摘され、とうとう観念したようにレイピアはスキルに向き直つた。

「……昨日のことだつたら……あれは……氣の迷いよ……」

昨日のキスは氣の迷いだつた。声を絞り出すよつとしてレイピアはそう告げた。

その言葉にスキルは微かに眉をひそめる。

「氣の迷い？」

「そう。少しお酒を飲んでいたの。だから……」「飲んでなかつたみたいだけどね」

再び鋭く指摘され、レイピアはまた言葉を詰まらせ黙り込んだ。とここん退路が絶たれてしまう。沈黙が訪れる。スキルは腕を組んだままレイピアの解答を待つた。

「でも……あなたは飲んでいたでしょ？　それにあの時は周り全體が浮かれた雰囲気だつた。だからあなたも私もその雰囲気に呑まれただけのこと。……ただそれだけなのよ」

2人が口づけを交わしたのは雰囲気に流されてのこと。だから、あれは自分の意志じやない。そう言い聞かせるように言った。スキルだけでなく、レイピア自身も含めて。

「それに、あれは……あなたにとつて悪戯みたいなものだつたんで

しゅう?」「

「悪戯だつて?」

スキルは明らかに苛立ちを帯びた声を出し、顔を険しくさせた。

「そり。あなたにとつては挨拶みたいなもの。違う?」

「違つね。挨拶のキスで舌は入れない」

「…………なつ」

ストレートな物言いに、カツと顔を真っ赤に染める。

「君が雰囲気に流されてのことだったとしても、俺は違う。本気だつた」

「やめてー。とにかく……。あの」とはもつぶれて頂戴」

もうそのことについては以上話しあひことはないとばかりに鋭く言ご放つとスキルに背を向けて歩き出す。

だが、3歩ほど歩いたところでスキルの言葉によつて引き止められる。

「恐いの?..」

「…………ツー」

レイピアは弾かれたように振り向き、歩みを止めた。スキルのその言葉はレイピアの抱えている思いの核心をつくものだった。

「俺が恐い?」

「こ……」

恐くなんてないわ。さう言おうとしたのに、言葉は出なかつた。

スキルの瞳と目が合つたから。

恐い。

恐かつた。

レイピアの心に踏み込んでくるスキルが。いつの間にかすっかり  
レイピアの心の半分以上を占めるようになったスキルが。

顔を俯かせる。

そして唇を噛み締めると再び歩き出した。いや、駆け出したとい  
つた方が正しいかもしれない。とにかく今は一刻も早くこの場から  
立ち去りたかった。

スキルも引きとめはしなかった。

いつの間にかレイピアの心にはスキルが入り込んでいた。気がつくとすぐ側にいて、さりげなく心を癒してくれた。

ユーザの剣に貫かれそうになつたスキルを見たとき、心臓が凍りつきそうになつた。気がついたら短剣を手に行動を起こしていた。恐かつたのだ。

彼を……スキルを失うことが。

「私は…………」

私は…………。

スキルのことが…………。

好きなんだ…………。

もう誰も好きにならないと誓つた。

だからこそ、その思いを認めたくなかった。

心の奥底に頑ななまでに閉じ込めていた思い。本当はその気持ちに気付いていたのに、ずっと蓋をして気がつかない振りをしていた。いつからだろう?

こんな思いを抱えるようになつたのは、

きっと、最初に出会つた頃からずっと。『ランス』としてレイピアの前に現れたときから……。けれどその頃はユーザへの憎しみが心を占めるあまりに自分の心に生じた微かな思いに気がつくことはなかつた。ユーザのことが吹っ切れて、そこで初めて気がついた。だが、その思いに気がついたところで一体どうしたらいいというの

だらう。

恋愛などもう一度としたくないのに。  
もう何も考えたくない。

どうして、心といつものは自分で操ることができないのだらう。  
心なんていつそ無くなってしまえばいい。そうすればこんな風に  
胸を締め付けるような苦しい思いを抱えなくてすむのに。

\* \* \*

シャンナリーは焦っていた。

レイピアに対しても憎しみと、嫉妬の念だけが膨らんでいく。盜賊  
稼業をやめると宣言したスキル。それはシャンナリーにとって深す  
ぎるほどの衝撃を与えた。

彼がそう宣言した背景にレイピアの存在があつたことはシャンナ  
リーはおろか団員達誰もが知る事実だった。

それほどまでにレイピアのことが大事なのか。

「団長もとうとう本気の恋に目覚めたようだねえ」 そう彼らの  
口から言葉がもれるたびシャンナリーは唇を噛み締めた。

そしてとうとう彼女は行動を起こした。スキルのテントに向かう。

「シャンナリー……？」

スキルは目を通して書類からわずかに顔を上げて、テントに入ってきたシャンナリーを見た。「何か用か?」と声を掛けるよりも先にシャンナリーが動いた。

スキルの体に抱きつく。

ふわりと香水の甘い香りが鼻をかすめて、一瞬、スキルの体が強

張った。

「お願い……抱いて……」

耳元でそつと囁く。切なげで、それでいて熱を帯びた声で。

「シャン……ナリー……」

スキルが掠れた声でうめく。

彼が次に起こした行動、それは抱きしめることでも口づけを交わすことでもなく、そつとシャンナリーの体を自分から引き離すことだった。

1ヵ月前とは全く違う反応。

1ヵ月前の彼だったらためらいもなくシャンナリーを抱いていただろう。

そのあまりに変わってしまった態度にシャンナリーは傷つき、今にも泣き出しそうな表情でスキルを見上げた。スキルはすまなそうな表情ながらも、ハツキリと田の前の少女に告げる。

「すまない……もう……抱けない」

「レイピアさん……？　あの人人が大切だから？」

スキルは何のためらいもなく頷いた。

シャンナリーのマスカットのような瞳が絶望の色を灯して大きく開かれる。

「どうして…？」

声を荒げた。

「どうしてっ！今まで誰にも本気にならなかつたじゃない。なん  
で、レイピアさんなの！？」

どうして私じゃないの！

サークスに入団した時から、ずっと。  
ずっと見ていた。

スキルが本気で誰も愛さないことは知つてた。それでもいいと思  
つた。そのスキルの性格を承知の上で最初に抱いて欲しいと言つた  
のはシャンナリーの方だつた。彼は拒まなかつた。

スキルはやさしい。やさしくて、酷く残酷な男だと思つた。愛さ  
れていなくて、まるで愛されていると錯覚してしまう。いや、少  
しの愛情はあつたろう。けれどそれは本当の愛とは違つ。

レイピアがスキルを追つて來た時、嫌な予感がしていた。  
彼女の存在は危険だと本能が告げていた。

だから彼女に嫌がらせをして追い出そうとした。色々な手をつか  
つて。けれど予想外にレイピアはしづくと全然帰る素振りも見せなか  
つた。

そして、シャンナリーはある口気がついてしまつた。スキルがレ  
イピアに向ける視線は他の誰に向ける視線とも違うことに。今まで  
誰にも本気にならなかつたスキルが変わつてしまつた。

嫌な予感が当たつてしまつた……。

「すまない。だが俺は、レイピアを……」  
「言わないで！」

スキルの言葉を半ば強引に遮る。

「聞きたくない。あなたの口からそんな言葉ー。」

聞きたくなかった。

スキルの口からハツキリ「レイピアを愛している」という言葉を告げられたくなかった。いつそ「お前に飽きたから抱けない」とか、そんな言葉を聞いたほうがましだった。ボロボロに傷つけてくれた方が良かつた。

残酷な人。

やさしすぎる、残酷な人。けれど憎めない。憎めるはずも無い。まだスキルを愛しているから。

\* \* \*

レイピアが眠りについたとベッドに入り込んだとして、思わぬ来客があった。

飛び込んできたシャンナリーはマスカットのような瞳を涙で潤ませ、いきなり右手を振りかぶった。そしてそのまま勢いよくパン、とレイピアの頬を張る。そのいきなりの出来事にレイピアは驚き、防ぐことはむづか少しも反応することもできなかつた。

「どうしてあんたなのよ……っー

たて続けにもう一回レイピアの頬を張る。張られた頬はみるみるうちに赤く染まる。それでもシャンナリーの行動は一向に止まらない。

「あたしの方がずっと、ずっとスキルを見てきたのに。あたしの方があずつとスキルのことを愛してるのにー！」

ヒステリックに喰くシャンナリーの瞳からはポロポロと涙が零れ落ちる。

「いつもせうだつた。スキルはいつも誰も本気で愛さないんだ！  
今のうちだけよ。……きつとあんただつて飽きて捨てられるん……」

言葉が言い終わるか終わらないかのうちにパシン、とそれまで黙つて聞いていたレイピアがシャンナリーの頬を張った。一瞬呆気に取られたシャンナリーだが、頬を押さえ噛み付くよつとして怒鳴る。

「何すんのよつ！」

「そんなこと、わかつてゐる！」

負けじとレイピアも怒鳴り返した。

「言われなくたつてわかつてゐわよー。」

震える声で。

今にも泣き出しそうな声で。

「スキルは手に入らない玩具が欲しくてそれに執着してゐる子供と一緒に。あの人抱いている思ひは愛じやない！ そんなの……そんなの初めからわかつてゐわよー！」

スキルの抱いている思ひは本当の愛情ではない。彼は錯覚しているだけ。ただレイピアが少しだけ他の娘よりも毛色が変わっているから物珍しく思つてゐるだけなのだ。

玩具を入れた子供はいづれその玩具に飽きてしまつ。飽きたれた玩具は捨てられる運命。

スキルもいづれは

……。

愚かだと思つ。

傷つくとわかつてゐる相手を好きになつてしまつなんて。

2人して頬を打ち合つて、顔を真つ赤に腫らした。

「馬鹿、大馬鹿、あんたさえ来なければよかつたんだ！　早く帰りなさいよ……。」

「私だつて、こんなところ來たくないなかつたわよー。」

盗まれたものが母親の形見のピンクダイヤモンドさえなれば、こんなところまで追いかけてこなかつた。予告状さえ送りつけられてこなければスキルと出会うこともなかつた。

その一方で、スキルに出会えたからこそコーヴィーへの誤解が解け、気持ちを整理することができた。けれどその代償として彼がレイピアに植え付けたのは冷めない熱病。

自分の思いは危険だ。その思いが育てば育つほど周りが見えなくなる。コーヴィーの件で痛いほどわかつた。

こんな気持ちに気がつかなければよかつた。

せめて最初に出会つた頃の気持ちに戻れたらいいのに。お互い皮肉を言い合つて、レイピアはダイヤを取り戻すことだけ考え、スキルはダイヤを守ることだけ考える。

その関係だけでよかつた。他の感情は知らない。だが、それがもうできそうにないことはレイピア自身わかつていた。

一度動き出した感情は止められない。じりじりとどんどんと膨らんでいく。

レイピアのスキルに対する思いはこれから成長を続けるだらう。彼女の気持ちとは裏腹に。

「入ってこないで……」

これ以上、心の中に。  
踏み込んでこないで。

「どうして……」

どうして入ってくるの。

「入ってくんな……入ってくんな……」

呪文のように繰り返し唱える。両腕で自分自身をかき抱き、つづくまる。それは自分の心を守るために防衛行動。

恐い。

もう傷つくのは嫌なの。恋愛なんてしたくない。

捨ててしまいたい

こんな思ひは。

早くピンクダイヤモンドを取り戻さなくては、と思つ。取り戻して、スキルの元から離れたい。離れなくては……。

逃げたい。

今ならまだ間に合ひ。

今ならこの思いも忘れることができる。

ゲームの終わりまであと5日。

その数字は確実にレイピアを焦らせていた。

今、レイピアの心にあるのは最後の決着をつける ダイヤを取り戻すことだ。そして、一刻も早くスキルの元から離れること。それだけだった。

「シア、教えて欲しいの。スキルの弱点を……何でもいいから」

ひどく追い詰められたような、沈痛な面持ちのレイピアにシアは怪訝な表情で眉をひそめる。

「レイピア……？」

「何でそんなこと聞くんだよ」

木の枝に腰掛け、足をぶらぶらさせていたブレンもまた怪訝な表情をして口を挟んだ。「それは……」と言つたきり黙りこんでしまつたレイピアを見かねたシアが口を開く。

「私はあまりそういうこと知らないんだけど、ブレンは知ってる?」「何で俺がそんなこと言わなきやいけねえんだよ」「お願い……どうしても……知りたいの」

自分の親友の弱点を何で教えてやらなくちゃいけないんだ、とブレンは思つたのだが懇願するようなレイピアの瞳に見つめられ少々たじろいだ。彼女がこんな風に自分に頼みごとをしてきたことなど

一度もなかつたから。

一時期レイピアに酷いことをしていたブレンだったが、今は改心しているし根は悪くない性格をしているのにいつした頼みごとに弱かつたりする。

「う……そ、そうだな……。朝が弱いことかなあ。あいつ寝起きの間にコーヒーを流し込まないと完全に目が覚めるってことがないんだ」

「朝……」

レイピアは口元に手を当て、何やら難しい表情で考え込んだ。

「それを聞いたといひでどうすんだよ。まさか寝込みでも襲おいつてんじや……」

「あーむへ、あんたほつねこつー！」

バシ、とシアは手にしていたタオルで木の上のブレンを叩く。叩かれた本人は痛いと言いながら文句をたれるが、無視する。

「他には何がないの？ もつと、すぐに使えるような……犬が嫌いだと、刃物を見ると恐怖ですくみあがるとか……そういうの」「ねーよ。そんなもん。あいつには基本的に弱点なんてないんだよ」「そう……」

期待したような収穫がなく、レイピアはうなだれるように肩を落とした。

「ね、レイピア……びつかなかったの？」

気遣わしげなシアのその問いかけにレイピアは力なく首を横に振

つた。

ここ最近元気がないと思っていたが、今日はいつもそれが激しい。シアには思い当たる節が一つあった。といつよつそれしか思つてことができなかつた。

スキルが団長就任したパーティーの夜。

あの日が原因ではないかと考へてゐる。だがそれを考へてみたところで今、目の前にいる落ち込んだ様子のレイピアにあれこれと追求するのは気が引けた。

こんな時、力になつてあげることができない自分がひどく歯痒い。

\* \* \*

パーティーの夜以降、スキルの姿を見るたびに脱兎の如く逃げ出していたレイピアだったが、今日は違つた。

スキルの姿を見つけると逃げ出すこともなく、田を逸らせる如くもなく、真っ直ぐ見据え唇を引き締めた。

「今日こそダイヤを返してもいいわ……・・・」

スキルの対しての宣言とこゝより、まるで自分自身に言つて聞かせるように言い放つた。

スキルはそのレイピアの様子がこれまでのものと違うことに驚く。殺氣立つていて、ひどく追い詰められた表情をしてくる。

「どうか……したのか……？」

気遣わしげにレイピアの顔を覗き込もうとする。  
しかし

「べつにどうもしない！　あなたには関係ない！」

スキルがこれ以上言葉を紡がないように。鋭く言葉を放つことでも強引に振り払う。

「レイピア……」

「言ひなつ！」

もう何も聞きたくない。

これ以上彼の言葉を聞いたら自分の感情を押さえ込む自信がなかつた。一滴の水を落としただけで決壊してしまったダムのように心がギリギリの場所にある。

「くだらない」と言ひて……これ以上私の心を乱さないで…」

言い終えると同時に地面を蹴り上げた。

レイピアの手には武器も何も握られていない。ただ独うのはピンクダイヤモンドのみ。

このまま闇雲にスキルの懷に手を伸ばしても避けられることは目に見えている。すばやさでいうとスキルの方がはるかに上なのだから。

何とか地面に引き倒し逃げ場を無くさなくてはならない。これまでに何度も繰り返してきた攻防戦でレイピアが学んだことだった。

懷に飛び込み、身を屈めるとスキルの足を払つた。スキルは若干体勢を崩したものの、倒れこむところではなくすぐに体勢を立て直してレイピアと距離を取つた。

彼は崩れたバランスを即座に立て直すことができる。サークルスで幼い頃から鍛えられているためできる都合なのだろう。

だがレイピアにとってはこんな時ですら風のように避けるスキル

がたまらなく憎らしかった。

この気迫が伝わっているなら、ダイヤを返してくれたらいいの。ピンクダイヤモンドなど、今まで彼が盗んできた宝物に比べたら価値が低いものだ。「どうして返してくれないので、とレイピアの心は焦れるばかりだった。

「どうして返してくれないので……っ！」

声に出して叫ぶ。

その瞬間、動きに隙が生じてしまった。スキルはそれをついてレイピアの手首を掴んだ。

「…………ッ！」

弾かれるようにレイピアは体を仰け反らせた。咄嗟にスキルから逃げようとしたのだろう。足がもつれ体勢が崩れる。

視界が反転して

転げてしまった。

同時に掴まれていた手も離れる。砂埃が上がって白い頬を汚す。

地面上に倒れこんだままの自分の前にスキルの手が差し伸べられた。だが、その手を叩くようにして振り払う。汚れのついた顔を手の甲で拭い、涙で滲む瞳で睨みつける。

一瞬、スキルが怯む。

「泥棒っ！」

感情のままに叫ぶ。

「返してよ、返してっ……。私の……っ」

ピックダイヤモンドと心を

。

喉を詰まらせ、最後の方は言葉にはならなかつた。

ブレンとシアに頼み込んでスキルの弱点を聞き出やうとした。弱点についてダイヤを取り戻そと考えたのだ。けれど期待したようなスキルの弱点はなく、やむなくいつも通り正攻法でダイヤを奪い返そうとした。

だが、結果はあのとおり。

完全に負けた、と思つた。

戦意は完全に消えてしまつた。

けれども戦意と共に胸にしづめいていた熱だけはどうしても消えてくれそうになかった。

もう駄目だ、もう……駄目。

「うっ……あ、うっ……」

苦しかつた。

だんだんと病魔に蝕まれていくよつこ、強くなつていくその思いはレイピアの心を締め付ける。

樂になりたかつた。

苦しみを無くしてしまひたかつた。

その苦しみを取る方法　　それは……。

一つの考えがレイピアの脳裏をよぎつた。

そしてレイピアにはその方法以外樂になる術を知らなかつた。その方法を使うことによって後々レイピアの心はさらにつらさや苦しみを深めるかもしない。

だが一時、苦しみを消すことができる。その一時の安らぎが今のレイピアには必要だつた。

吐き出してしまうおづと思つた。

胸にうずまいている想いを……全部。

のどのひどいびく億劫そつな足取りで向かつた先　それはスクリのテントだつた。

湿り氣を帶びた風がレイピアの頬を撫でる。この一ヶ月ほどで吹く風の温度はだいぶ変わつてしまつた。

あの時はまだ吹く風も冷たかったといふ。サークスに来た初めの頃の夜　スキルのテントを訪れたときは。

あれ以来、夜にスキルのテントを訪れることはしなかつた。

あの時の夜に彼が言つた言葉は「冗談に過ぎないものだつたのだろう。けれども用心するにこしたことはないし、団員達の目も痛かつたことも加えて、自然と足を赴けることは控えていた。

スキルのテントの前まで来て、レイピアは足を止めた。

テントから明かりが漏れている。まだ眠つていないのであつ。浅くため息をつくと覚悟を決め、幕を開いた。

\* \* \*

正直、今のレイピアを見ているのは辛かつた。

ひどく追い詰められた表情でダイヤを返せと叫んだ姿が目に焼き付いて離れない。彼女をあそこまで追い詰めてしまったのはまぎれもなく自分だ。

スキルはピンクダイヤモンドを懐から取り出した。シャラリと音を立てて手のひらに収まる。

このダイヤがレイピアの母親の形見の品であることを知ったのはつい先日のことだった。だから自分の危険も顧みずたつた1人で追いかけてきて、ダイヤを取り返そうと必死になっていたのだ。それを知ったとき、もちろん罪悪感は生まれた。だがそれ以上に彼女を離したくないという思いの方が強かつた。

たとえそれがレイピアの思いを無視していたとしても。

レイピアがダイヤを取り返すために向かってくるときはいつも本気で相手をしていた。その中に多少のからかいはあつたけれども。

最初の頃は仲間達と自分自身を守るため。そして今ではその思いも変わりレイピアを帰さないために必死になつてダイヤを守つている。

ダイヤを取り戻した時点でレイピアの目的は達成され、彼女の性格からいつて絶対に帰ろうとするだろうから。

レイピアの腕はなかなか筋がいい。

油断しているとあつという間に取り返されてしまうだろう。表情では平静を装っていたものの、何度もひやりとさせられたこともあった。自然体でいるようでいて、実は常に気を張っていた。だが、それも今日までのこと。

スキルは明日にでもダイヤを返そと決意した。あくまでもダイヤを返すだけであつてレイピアを帰す気はない。

明日になつたら改めて自分の思いを伝えようと思つた。

好きだと言つたことは「冗談ではなく本気だ」ということを。  
自分の側から離れないで欲しいということを。

拒まれることは目に見えているけれど……それでもかまわない。  
諦めるつもりはないから。

パサ、とテントの幕が開く音がした。  
もうすでに夜更けといえる時間だというのに。一体誰が？…そう思  
つて顔を上げると毎回の時と同様にひどく追い詰められた表情のレ  
イピアが立っていた。

## 第13章 ゲームの行方2

スキルはレイピアの夜更けの来訪に驚いた様子だった。呆然とした表情で椅子から立ち上がり、ゆっくりと近づいてくる。

自分がどんな表情をしているのかわからなかつた。顔を赤くしているのかもしれないし、青くしているのかもしれない。いずれにしてもきっと酷い顔をしているに違いない。

「どうしたの……？」

スキルが少し心配そうに問い合わせてくる。

おそらく毎回のことを気にかけているのだろう。

「……中、入る？」

何も答えずにいると顎で中に入るよう促す。それでもやはり顔を俯かせたまま答えずにいるとスキルは少し困ったような表情をして背を向け、歩き出す。

レイピアは一瞬ためらいを見せたが、覚悟を決めるとその背にそつと額を寄せた。

「…………

スキルは普段あまり動搖を表に出さない人なのに、今は違つた。石のように固まるという言葉を使うとしたら丁度この時だろ。ぎこちない動きで肩越しにレイピアを振り返り、半ば掠れた声を出した。

「あ……の……？」

「……昼間は『めんなさ』……。少し……あの時はどうかしていたみたい」

レイピアの声はよく聞いていないと聞き逃してしまいそうなほどか細い声だった。

今の君の方がどうかしている、とスキルは半ば混乱する頭でそう思つたのだが言葉には出さずにいた。ただ驚いた表情でレイピアを見つめるだけ。

顔をスキルの背に埋めたまま、レイピアは身動き一つしなかつた。

やがて数秒の沈黙の後

。

「……前に言つたこと覚えてる？」

突然、スキルがそう切り出した。

前に言つたこと それは以前、ダイヤを取り返そうとレイピアが夜にスキルのテントに忍び込んだときの言葉だ。その時スキルは「次に来たら襲つていいいものと見なすぞ？」と言つた。

もちろんあの時は冗談で言つたのであって、本気ではない。今も

そう 警告の意味を込めて言つただけだ。

だが、レイピアは無言で頷いた。覚えている、といふ意味を込めて。

言葉を失つたスキルの代わりにレイピアが口を開く。

今まで溜め込んでいたものを吐き出すように。

「私……あなたが好きなの……」

スキルはその告白に動搖を隠し切れず、信じられないといつ表情をつくる。

「くやしいからずっと認めないよ！」していただけれど……もう限界みたい。たぶんあなたに最初に会った時から惹かれていたの……」

彼はそこで理解した。レイピアが夜更けにも関わらずテントを訪れた理由を。

今にも消えてしまいそうなレイピアを腕の中に抱き込む。スキルの腕の中に入る娘は逃げ出すことも、拒むこともなかつた。顔を俯かせたまま、おずおずと両手をスキルの背にまわした。

「俺も……最初に会った時から君に惹かれていたんだ」

顔を上げたレイピアは微かに微笑んだ。今にも泣きそうな顔で、胸を詰まらせたようだ。

お互いどちらともなく瞳を閉じて口づけを交わす。

スキルは息ができなくなるくらいに強くレイピアの体を抱きしめた後、横抱きにして軽々と抱え上げた。それほど筋肉があるように見えないのでここにこんな力があるのだろうか、とレイピアはぼんやり思う。

ベッドにレイピアの体を降ろすと、上から覆い被さるようにして華奢な体を押し倒した。しゅる、とリボンが解かれ胸元が開く。恥じらい、顔を赤らめたレイピアに微笑をもらすとスキルはもう一度唇に口づけを落とした。

やがて唇が離れ、頬から首筋、胸元へと場所を移動していく。時々混じる浅い吐息と何度も重ねられる唇にレイピアはだんだんと思

考能力を奪われていった。

ポツポツとテントを弾く雨音で目が覚めた。

やけに体が重い、と思つたらスキルの腕によつてしつかりと抱きこまれているからだつた。わずかに顔を傾けると静かに寝息を立てて眠るスキルの顔が見えた。ドクン、と心臓が鳴る。

あの時のような狸寝入りではなく、本当に眠つている。そのことがわかると安堵のため息をもらす。

レイピアはスキルの腕を持ち上げ、その拘束を解いた。だいぶ熟睡しているようで起きる気配は少しもなかつた。

ブレンの言ひとおり本当に朝が弱いのだ。

毛布を巻きつけたまま体を起こし、ベッドの下に落ちてゐるスキルの服に手を伸ばした。シャラリと音がして服の中からピンクダイヤモンドが転がり落ちた。それを拾い上げ、胸に抱きこんだ。

1ヶ月ぶりの感触。

あれほど取り戻すことができなかつたダイヤがこんなにも簡単にレイピアの手の中にある。

やつと取り戻すことができた。

ハラハラと涙が零れた。

それはダイヤがこの手に戻ってきた嬉しさでもあり、別の理由でもあつた。

樂になりたくて、苦しみを消したくて彼に身を委ねた。

一瞬の安らぎを得るために。だが、やはりそれは一瞬だけのことだつた。満たされた心はすぐにさらなる望みを欲する。

ずっと側にいたい。

愛して欲しい。

それが無理なことはわかっているのに。

彼は女性に執着しない人だから。いつかは冷めてしまう人だから。

彼と肌を重ねたのは抱かれたいと望んだからでもあり、ダイヤを取り戻すことでもあつた。

朝が弱いというブレンの言葉に従つて。

朝ならば確実に取り戻すことができるから。

ダイヤを取り戻すこともなく帰ることができなかつた。それどころかスキルへの思いを植え付けられてしまつた。このまま帰るのは屈辱的であり惨めだつた。

どのみちゲームの期限が終わつたら団員達ともスキルとも別れなくてはならないのだから、せめて最後くらい一矢報いたかつた。

これ以上自分が惨めにならないように。

だが、こんな方法でしか一矢報えない自分は何て愚かなんだろう。

ダイヤを手にしたレイピアを見て団員達は、そしてスキルはどう思つだろつか。

軽蔑し、最低だと罵るだろうか。けれどこれで彼に対して一矢報いた女として記憶に残つてくれるだろうか。それとも他の女性達と

同じよひにこひつかは彼の記憶からなくなってしまったのだから。

そつとスキルの頬に手を当て、口づける。

相変わらず田を覚ます気配がない。わざと踝つたふりをしている  
んじやないか、とさえ思える。

青色の瞳を翳らせ、かぶりを振るとベッドから下りて服を身につけ始めた。

レイピアはスキルを追つてこの場所に来たとき、ほとんど荷物を持つてきていなかつた。ダイヤさえ取り返すことができれば他の荷物などどうでもいいようなものだつたから。

着替え終わるとのろのろと酷く遅い動作でテントの入り口まで向かい、幕を持ち上げた。そして顔だけ動かしてスキルの方を振り向く。

今、スキルが田を覚まして引きとめてくれたら……。

一時の感情だけの言葉でもいい。

嘘でもいい。

行かないでくれ、と。

愛してる、と言つてくれたら……。

この先どんなことがあってもスキルの言葉だけを信じて側にいる道を選んでしまうのだろう。

たとえ彼の自分に対する気持ちが冷めてしまつても。  
他の女性に心が傾いてしまつても。

(私はどうしようもなく……愚かね)

周りが見えなくなつてしまつてからスキルのことを愛してしま

つた自分も。ダイヤを取り戻したいがためにこんな方法を取つてしまつた自分も。彼の気持ちが変わつてしまつたのを恐れて逃げ出すことしかできない自分も。……全て。

そう、自分は逃げ出すのだ。  
サークス団と、彼の元から。

ポツポツと最初は小さく控えめだつた雨音がだんだんと大きくなつていいく。どうやら雨は本降りになつてきたようだ。  
雨雲がたち込めた今の空のよつに心は晴れやうになかった。

### 第13章 ゲームの行方③

スキルのテントを後にすると雨は滝のように、とまではいかないけれどだいぶ降り注いでいて地面に浅い水溜りを作っていた。その容赦ない雨はレイピアの体温をゆっくりと奪っていく。

深くため息をついて空を見上げた。

最後に一度スキルのテントを振り返ると、覚悟を決めたように背を向けて歩き出した。

時間は早朝。団員達が起きだしてくる気配はまだ無い。

今ならば誰にも見咎められずにここから サーカス団から抜け出すことができる。自分の行動に後悔はしていないけれど、やはり胸の奥底に後ろめたさがある。誰にも見つからずに済むのならその方が良かつた。

「……レイピアさん？」

レイピアの思ひもむなしく、誰にも見つかずに出て行くことはかなわなかつた。その背後から掛かつた声にギクリと身を強張らせた。青ざめた顔で振り返るとそこにはヤカンを片手にして立つているリグの姿があつた。

「リグ……」

おそらく「一ヒーを入れるために井戸へ向かう途中だつたのだろう。そのタイミングの悪さにレイピアは舌打ちをせずにはいられない氣分だった。

「……あなた朝早くに何をしてるんですか……？」

首を傾げるリグだったが、次の瞬間にはアッと息を呑んだ。彼の視線の先にはピンクダイヤモンドを握っているレイピアの手があった。

リグの表情に気付き、慌ててスカートのポケットにしまい込む。だが、リグには全てわかつてしまつたようだつた。  
なぜレイピアがダイヤを持つているのかも。どうやってそれを取り戻したのかも。

「…………あの…………少しお話をしませんか？　コーヒーを入れますから」

視線をずらし、顔を俯かせて黙り込んでしまつたレイピアにリグはさう声を掛けた。

「軽蔑したでしょ?」

顔を俯かせたレイピアは掠れた声で、その言葉だけしぼり出した。

「…………え？」

「正攻法で取れなかつたんだもの。仕方ないじゃない、こうするしかなかつたんだから」

体を使って、ダイヤを取り返した。さう語つているのだ。だが、その言葉の内容とは裏腹に表情は今にも泣き出してしまう。ひどく見ていて痛々しい。

「…………あなたはそんな女性じゅありませんよ。そんな風に自分を貶

めてはいけません」

リグはゆっくり首を左右に振った。途端にレイピアはムツと唇を歪め、険しい顔つきになる。

「あなたに……何がわかるの」

「わかりますよ。レイピアちゃんはこいつも一生懸命でがんばってました。そんなことをする女性じゃありません。私は知っています」

「…………シー、どうして……そんな……」

「私は人を見る目だけは確かなんですよ」

そう言つたリグの表情は穏やかなもので、レイピアは言葉を詰まらせたようだつた。

「若君のことを見本氣で愛しているんですね。だからあなたはそんなにも追い詰められてしまつた。……そつでしょ?」

レイピアは数秒の沈黙の後、無言で頷いた。

「…………私の思いはこれから先どんどん膨らんでいく。でも、スキルは違う。彼の思いと私の思いは違うの……。いつか……彼の気持ちは変わっていくんじゃないかつて、そんなことばかり考えて不安になつて……。そんなことになつたら……きっと耐えられない……」

ああ、やはり。

やはりレイピアがここ最近表情を暗くして思いつめていたのはそのことが原因だったのだ。

だが、レイピアはそのままうなれどリグには本当にやうだらうか?と思つ。

スキルはたぶんレイピアが考へている以上に彼女のことを深く愛

していのではないだろうか。少なくともリグにはあんなにも1人の女性に熱くなっているスキルを見たことがない。

お互い相手を深く思って呑みしているはずなのに、ビビががすれ違つてしまつていて。

今ここで「若君は本氣であなたのことを愛しているんです」と言つてしまつたかった。けれどそれでは結局何の解決にもならないと思うのだ。たとえそれを言つたところでレイピアは納得しないだろう。彼女はスキルの態度から「愛されている」という事実が知りたいのだ。

「…………そろそろ行くわ」

そこで話を打ち切るとコーヒー カップをテーブルに置いて、立ち上がつた。そのレイピアに声を掛ける。

「本当に…………行つてしまつつもりですか？」

引き止めるために声を掛ける。

今ならまだ間に合う。目を覚ましたスキルとレイピア、2人が話し合ひ時間を持ちさえすれば、すれ違つてゐる心が寄り添いあうことは充分可能なのだ。

「もう…………ここに用は……ないもの」

だが、レイピアにはここに留まる気持ちはないようだつた。

「…………本当にそれでいいのですか？」

問い合わせに無言で頷いた。

「シアには会つていかないのですか？ ソアラ様にも……」

レイピアはその言葉に一瞬心が揺れ動いたようだったが顔を俯かせたまま、何度も首を横に振った。

「会わないわ。2人には」「めんなさい、って……伝えておいて……

会えば決心が揺らいでしまうと考えたのだろう、頑ななその決意は変わることがなかった。深くため息をつくと、リグはどうとうレイピアを引きとめるのを諦めた。

「…………わかりました……」

「リグ、あなたが最初、親切してくれたから……私は頑張れたのよ」

団員達に冷たくされていても頑張れたの。…………ありがとう。  
そう言って、笑った。その笑顔は以前1度だけ見た心から笑っていた時の晴れ晴れしいものではなく、愁いを帯びているものだった。胸を詰まらせる。

「私も……あなたがいた1ヶ月はとても楽しかったですよ」

レイピアにはいつもハラハラさせられていたし、心が休まることがなかつたけれど本当に楽しかった。最近では、レイピアが本当にサークス団の一員になつたのだと思つてしまつほどだつた。

あつという間の1ヶ月だつた。

楽しい時には終わりが来るのが早いところのは本当だ。

「…………お元氣で」

「さよなら、リグ。……元氣で」

レイピアが手を差し出した。リグは半ば涙のせいでもやけてしまつた視界でそれを捉えると、手を伸ばし握手を交わした。やがてするりとレイピアの手が離れる。

その日、サークス団から領主の娘が姿を消した。

「レイピアッ！ レイピアー！」

スキルが血相を変えて、レイピアを探しテント街を走り回る。いつも彼らしくなくひどく取り乱している。

彼はリグの姿を見つけると、駆け寄ってきた。

「彼女を レイピアを見なかつたか？」「朝早くこ、ここを出て行きましたよ」

顔をこれ以上ないぐらいに青ざめさせる。

「…………ッ！ ビラしてだ！？ ビラして引き止めなかつた！」

まるでリグに掴みかかりそつなぐらいの勢いで、怒鳴る。対するリグはあくまでも冷静に首を横に振った。

「……私にはレイピアさんを引きとめることはできません。彼女は……悩んでいました。『私とスキルの抱いている思いは違う』と、そう言つてました。彼女の中にあるその思いが消えないかぎり今引きとめたところで、いずれ再び逃げ出すでしようね」

静かな声で伝える。

スキルはリグを通して、レイピアの言わんとしていることを理解した。

自分の、レイピアに向ける気持ちがいつかは冷めてしまつものだと彼女は考えたのださう。

「クソッ！」

ダンシと片手を木の幹に打ち付ける。

ようやく気持ちが通じたのだと思つた。  
レイピアに向ける気持ちが遊びではなく、本氣だとこいつことを。  
そしてスキル自身、これからもずっと彼女のことを愛していくことを  
確信した。

だから、抱いた。けれど朝になつて目が覚めたらレイピアは消え  
ていた。スキルの前からいなくなつてしまつた。  
まるで最初から存在していなかつたように。

むしょうに腹が立つた。

何も告げず、ダイヤだけ持ち出して逃げたレイピアに対しても怒  
りが少しど、それ以上に自分に対する怒りだつた。レイピアがそ  
う考え、思い詰めてしまつた最大の原因はまぎれもなく自分にある。

「報い……か」

今まで女性に対して本気にならずに、軽い付き合いばかり続けて  
きた報い。レイピアが誤解しても仕方がない。それだけのことをし  
てきたのだから。

「あなたがレイピアさんを本気で愛しているのなら追うことです。  
けれど、そうでないのなら気持ちを切り替え仕事に打ち込んでください。  
あなたはサークルを率いる団長なのですから」

「そうだな……俺は……団長だ」

レイピアを愛している。

その気持ちはこれから先も変わらない。そして追いかけたいという気持ちも大きい。だが、自分には団長としての役目があり、60人の団員達をまとめていかなくてはならない。自分の都合で団を離れるわけにはいかない。

目を閉じ、深くため息をつくと力を無くしたように木にもたれかかつたまま、ずるずると座り込む。肩を落とし、意氣消沈した様子。リグは黙つてスキルの背中を見つめた。

どれほど時間が経過しただろうか。

シアとブレンが息をらせながらスキル達の元へ走って来た。

「レイピアがいなくなってしまったって聞いたの…」

「おい、本当なのか！？」

スキルが肩を落とし、力無く座っているのを見て、2人はそのことが事実であると語る。

「……その様子だと、本当みたいね」

唇を噛み締めるシア。

「どうして何も言わずに行ってしまったの・・・レイピア」

「そんなの決まってるじゃないの。会わせる顔がなかつたからだわ」

声のする方向を振り向くと、いつのまに來ていたのかシャンナリーの姿があった。

「……シャンナリー、それどういう意味なの…？」

微かにシアの顔が強張る。

「あの人、スキルに色仕掛けで迫って、ダイヤを取り返して逃げたのよ。だから合わせる顔がないんだわ」「何でこと言うのー？」

シアとシャンナリーは真っ向から睨みあう。険悪な空気が流れる。それを打ち破つたのはスキルの静かな声だった。

「あいつは……そんな女じゃない」  
「どうしてそんなにあの人の肩を持つのっ！」  
「……ずっと見てたから、わかるんだ」

1)の1ヶ月の間、ずっと。

彼のことを考えない日はないぐらいに。

ダイヤを取り返すためとはいえ、好きでもない男に体を預けられるほどレイピアは器用な女ではない。昨夜聞いたレイピアの告白。あれには間違いなく嘘偽りはなかつた、彼女の本心からの言葉だ。

「俺は……彼女を愛してるから」

シャンナリーは唇を噛み締めるとぐるりと背を向けた。

「だったら、すぐに追いかけたらいいのよー」

「……シャンナリー？」

「そんな顔するスキルは、もう私の知ってるスキルじゃないもの！  
勝手にしたらいいのよ」

言い終えると、シャンナリーは駆け出して行つてしまつた。次に

スキルに声をかけたのはブレンだつた。仏頂面で、言ひ。

「シャンナリーの言うとおりだぜ。お前はこのサークス団の団長だろ。自分の思うとおりに行動したらいい」

「だが、俺には団長としての役目がある」

「つかつか！ わかつてない、お前」

ブレンはガリガリと頭を搔きむしると、スキルを小突いた。

「サークス団」と移動すりやいいんだよ。団長はお前だ。俺達はどこへだつてついていく！ シャンナリーだつてそういう意味で言つたんだ

「そうよ、スキル！ みんなレイピアのことが大好きなんだから」

あの子はもう私達の仲間なのよ、と言ひ。

小突かれた頭を押さえ、スキルは驚いた表情でブレンとシアを交互に見つめていたが、やがて微笑を浮かべる。シャンナリーの最後の言葉、あれはもしかしたら彼女なりにスキル達のことを認めてくれた証なのかもしれない。瞳を閉じ、感謝に胸を震わせた。

「ありがとうブレン、シア。シャンナリー……」

「レイピアを追いかけよう！」

そう言つたスキルの顔には迷いも、落ち込んだ様子も見あたらなかつた。中央広場に集まつた団員達は威勢良く頷く。彼らの気持ち

も同じだった。

レイピアともう一度会つて、そして再びサークス団内に戻つて来て欲しいのだ。

リグの顔にも微笑が浮かぶ。

「でも、一体どこへ行つたのかしら……レイピア」

シアの眩きにスキルは首を横に振る。

「わからない。だが、とにかくしらみつぶしを探すしかないな。もしかしたら……このまま一生会えないのかもしれないけれど」「おや、めずらしく弱気な発言ですね。あなたらしくもない」

リグが言った。

「仕方ないだろう。世界は広い。たった1人の人間を探すのは容易なことじゃない」

「いつものあなたなら自信満々な表情で、不可能なことをやってのけるはずでしょう?」

「簡単に言つけどな……」

何か含みのある表情で自分を見つめているリグに訝しげな視線を向ける。

「……リグ、お前何か知つてるのか?」

その言葉を待つっていましたとばかりに、リグはにっこりと笑つた。自信満々に。それはいつもスキルが得意としている顔なのに、今ばかりはリグのものだった。

「これ何だかわかります?」

彼の手に握っていたのはスキルも見覚えのあるものだった。

「お前……それ……」

「はい、探知機ですよ。以前レイピアさんが若君を追つてきたとき  
に使つていたものです」

探知機の画面上には光が点滅している。その光はレイピアの居場所を指し示している。

「レイピアさんの服にこいつそりとオリハルコンをくつづけておいた  
んですよ」

「こつの間に……」

最後に握手を交わしている時に、隙を見計らつて。にっこり笑つたままリグは言つた。スキルは呆けた顔でリグを見た後、笑いを堪える形に表情を移す。

「お前つて……」

「絶対若君はレイピアさんを追いかけるだらうつて思つてましたからね。準備に抜かりはありませんよ。ふふふ、すごいでしょ?」

やがてスキルは堪えきれなくなつたように吹き出す。体を折り曲げて笑い、リグの背中をバシバシ叩く。

「ああ、なんてす”い奴なんだ!」

「出発は一週間後ですね」

まずはホットリープでの公演を終了するビラを街に配らなくてはならない。最終公演をして、テントをたたんで、レイピアを追うために次の街へ移動する準備が終了するまでにかかる期間は一週間。一週間我慢すればレイピアを追いかけることができる。

スキルは二ツと唇の端を上げて笑った。

「……ああ。忙しくなるぞ」

サークス団を出たレイピアはそのままの足でホットリープの自分の屋敷へと戻ってきた。

ダイヤが盗まれた日、レイピアは屋敷の者に何も告げずすぐにスキルを追つた。そのためレイピアが行方不明になつたとして屋敷では騒がれていたのだ。屋敷に帰ると、使用人達は駆けよつ口々に「無事だったのですか！？」、「今まで一体どにいたんです！？」と言つた。レイピアはそのことに関しては適当に言葉を濁して父のいる書斎へと向かつた。

「レイピア……お前」

驚き、田を見開いてレイピアを凝視する父親の田の前にダイヤを突きつける。

「盗まれたピンクダイヤモンド、盗賊から取り戻してきました」「これ……は。お前、今まで行方不明だつたのはこれを探していたのか？」

レイピアは頷く代わりに冷たく言葉を放つた。

「あなたのためではないわ。これは……お母様の思い出を守るためにやつしたこと。あなたにしてみれば……单なる宝石にしかすぎないのでしょうけど」

その言葉に、レイピアの父の瞳が微かに寂しそうな色を帯びて搖らぐ。やがてじばりくの沈黙の後、ポツリポツリと語り始める。

「「」のダイヤはな……私があれに送つた唯一のもので、あれも生涯大事にしていたものだ」

母を思い出し、懐かしむように父は手を細めた。

自分がダイヤを母の思に出として大切にしていたよ「」、父もまた同じ思いを抱えていたというのか。

信じられないという思いでまじまじと父の顔を見る。

だが、そこにはまぎれもなく母への愛情に溢れている父の姿だった。母が亡くなつてから初めて見る姿でもあった。

思わず息を呑む。

「……「」の宝石だけは、どうしても盗まれるわけにはいかなかつたのだよ……」

そう言つて、とても大切そうに宝石を握りしめる。レイピアは混乱を隠し切れず言葉も出せない。その心情を察してくるよ「」、父は言葉を続けた。

「……今さら信じてもられないかもしねないが……」

「当たり前じゃない……。今さらよー、あなたは一度だつてお母様のお墓参りに行かなかつた」

怒りで震える声で言つ。

「それど「」か毎日毎日仕事ばかりでお母様の「」とすら口に出せなかつた。まるで存在すらしてなかつたよ「」……」  
「すまない。だが……私も辛かったのだ。あれの「」とを思つ出せないよつに仕事に逃げることしかできなかつた」

そういうことでしか孤独感を紛らわすことができなかつた、そういう父は語る。

そこにはいつも氣難しい顔の父の姿はなく、代わりに人間らしい弱々しさが垣間見えた。レイピアはそんな父から顔を背ける。

「……あなたはこの2年、私を探しにすら来なかつた」

屋敷を飛び出してから、父からは一度も音沙汰がなかつた。その気になればレイピアの行方を探すことなど容易にできたであつた。元通りいつものだつたんでしょう?」「私の存在なんて、どうでもいいようなものだつたんでしょう?」

そのレイピアの言葉を聞き、彼はハッとしたように田を見開く。

「探さなかつたのは少し冷却期間を置いたほうがいいと思ったからだ……お前は私の顔など見たくないだろ?と思つていた。だが、それが余計にお前を傷つけていたとはな……すまなかつた」

戸惑いながらも、撫でるよつてレイピアの頭にそっと手を置いた。父に、こんな風に触れられたのは何年ぶりだろうか……。

「…………」

「……盗賊から予告状が来た時、お前を呼び戻すいい機会だと思つた」

けれど実際2年ぶりに会つてどう接したらいいのか、ビリ声を掛けいいのかわからなかつた。

無口な男は何度も言葉を途切れさせながらも、レイピアに自分の気持ちを伝えていく。

「これだけはわかつて欲しい。……お前が旅に出てからは、毎日無事でやつているのか不安でたまらなかつた」

レイピアはわずかに顔を父の方に振り向かせた。

家を飛び出した時、本当はずつと探しもられたかった。「家に

帰ろつ」と、たつた一言父の口から聞きたかった。

「あなたの愛情は……わかりづらいわ。私は……鈍いから今みたいに言葉にしてもらわないとわからないのよ」

「私達は……少し、話し合ひの機会が少なかつたのかもしれないな……すまない、レイピア」

途切れ途切れながらも、言葉にしてもうつてようやくわかつた。父はちゃんと母のことを愛していた。そして、自分のことも。愛する者を失つて仕事に没頭することしかできなかつた父の思いも、今ならわかる。2年前とは違い、レイピアも今は大切な人を失いつひとの苦しみも悲しみを知つてゐるから。

思い出すのはスキルの顔。

いつも、さりげなくレイピアの心を癒してくれた人。

スキルとコーナーと決闘をする時、なぜあなたがそんなことをする必要があるのと問いかけたレイピアに対して彼はこう言つた。  
それはまるで謎かけのような、言葉。

「なぜ、ね。さあどうじつだらうね？　あいつが気に入らないから、ゲームに決着がつかないうちに君を連れて行かせるわけにはいかない、このどちらも当てはまりそうで……実はそうじやない」

意味がわからなかつた。いくら考へても考へてもわからなくて。いや、違う。わからなかつたのではない。わからうとしなかつたのだ。その時は、その言葉が表していいる意味を知つてしまつのが恐かつたから。

彼の言つた言葉の意味、それは。

『君をユーロに渡したくないから』

謎かけのような言葉は、遠まわしだけどレイピアに対する思いが確かに込められている。

スキルはレイピアに対して『愛している』という言葉を一度も言つていなければ、彼は自分が考へているよりもずっと自分のことを愛してくれていたのかもしれない。逃げ出してしまわず、話し合つて、きちんと彼の気持ちを確かめるべきだつたのかもしれない。

だが、もう遅い。

彼のことを信じることができず、いつか捨てられてしまつのではないかとこう不安にかられて自ら離れてしまつたのだから。もうサークス団に、スキルの元になど帰れるはずがない。

「……レイピア？」

不思議そうに自分を見つめてくる父と母が合つて、ハッとする

慌てて何でもないという風に首を左右に振る。

「これからどうするんだ……？」  
「……旅に出ます。お父様のことが嫌いだからとか、そういうこと

じゃなくて……私には冒険者が合ひてこるみたいなんですね

少し寂しげに父の瞳が揺れる。

「せうか……。お前の好きにあるとこ。屋敷の」とほんにするな

無言でレイピアは頭を下げる。

「でも……いつかはお父様の顔を見に、立ち寄りたいと思つてこます  
「いつでも歓迎する」

2年間、見ないうちに増えてしまつた顔のしわをさらに深くして  
父は笑つた。レイピアも微笑する。2人の間に深く、修復のきかな  
いほどに広がつていた溝がゆっくつと埋まつていつた瞬間でもあつ  
た。

遠慮するレイピアに父は旅の資金としてかなりの金額を援助して  
くれた。そのため馬車を1台借り切ることができた。それほど大き  
くない馬車だったが、レイピアと荷物を乗せてもまだ余裕がある。

「お嬢さん。どちらへ?」

御者に問われ、レイピアは顎に手を当てて考え込む。  
まだ具体的にどの街に行こうか考えていかない。

「そうね……。これから暑くなるから北へ」

「北? 具体的な場所などは?」

「どこでもいいわ。ホットリープを離れた場所なら……どこでも

レイピアのことを自由気ままな旅人だと理解したのだろう。御者の男はそれ以上深く尋ねず、思いついた考えを提案する。

「それじゃあここから馬車で3日ほど行つたところにあるアクアアクアリストの街はどうですかね？ 水の都って呼ばれていてこれから季節にはうつてつけですよ」

「うん！ 決まり。そこがいいわ」

ゆつくりと馬車が動き出す。

遠ざかっていくホットリープのどかな景色を見ながら、レイピアはスキルのこと、そしてサークัส団の仲間達のことを思い出していた。

楽しかった1ヵ月間。

たぶんこの先どんなことがあってもそこへいた1ヵ月ほど楽しいことはないだろうと思つ。

知らずのうちに涙が頬を伝つていた。御者に不審がられないよう慌てて拭うと、荷物を枕がわりにして眠りについた。

眠つてしまえば泣いてしまうともないから。

馬車はゴトゴトと揺れながらホットリープの北 アクアクリスの街を目指して進んでいく。

アクアクリスの街、宝石商人口ワーズ宅。

街に2日ほど前についたレイピアは現在ここに住み込んで働いていた。働いているといつても宝石の売買というわけではない。冒険者として口ワーズの屋敷と口ワーズ自身を護衛をしているのだ。

アクアクリスの街は現在盗賊団が多く出没している。裕福な家庭や商人宅 特に宝石商などは狙われやすい。

実際口ワーズの屋敷も盗賊に何度も狙われたという。そのため冒険者を屋敷の護衛として雇い入れている。

住み込みも可ということで仕事と滞在場所、両方を探していたレイピアはすぐに飛びついた。しばらくここに滞在してこれからのことを考えようと思つて。

宝石商人口ワーズは護衛の仕事をしたいと言つたレイピアに最初は驚きこそしたけれど、女だという理由で差別はしなかつた。

もつとも、本当に仕事ができるかどうかテストをさせられたけれど。

\* \* \*

「お願いします、ここで働かせて欲しいんです」

「君が……護衛に？」

口ワーズは30代半ばぐらいで、口髭をたくわえた穩やかな感じの男だ。パツと見、宝石商人には見えない。客との駆け引きをする商売よりも、のんびりと園芸でもしている方が似合つている。

その彼は驚いた顔で、レイピアを見る。無理はない、いくら給料

がいいからといつて好き好んで盗賊と対峙する危険な仕事につきた  
がる女性など滅多にいないから。

少し困った様子で、ロワーズは口髭をかむる。

「うーん……。護衛の仕事はきついよ？ 危険も伴つ。ちやんとこ  
なすことができるかい？」

「大丈夫です！」

レイピアにとつてはその方が好都合でもあった。  
忙しく働いていれば、いろいろ考えないで済む。2年前の父も、  
きっとこんな気持ちだったのかもしれない。

「ふむ。それじゃあテストをしようか」

「……テスト？」

眉をひそめるレイピア。

「これは君だけに限らず全員にやつているテストだから。なに、簡  
單なものだからあまり固く考えなくともいい。……ラグス」

ロワーズは『ラグス』と声を掛けた。

レイピアとロワーズのいる応接間の奥の扉が開き、ラグスと呼ば  
れた男が入ってきた。

レイピアの体の2倍はあるのではないかと思うぐらいの屈強な大  
男だった。顔にも腕にも体にも至るところに刃物の傷があつて、何  
度も死線を越えてきたことを伺わせる。護衛者というより、むしろ  
彼の方が盗賊に見えなくもない。

思わずごくり、と息をのむ。

「ほーお。今度はどんな奴が来たのかと思つたら小娘か」

ラグスはレイピアを見るなりおもじろそつに鼻を鳴らす。

「彼と、戦えといつことですか？」

ロワーズはここやかに笑つたまま、レイピアのその問いには答えなかつた。

屋敷の庭園に出たレイピアとラグスはそれぞれ刃を潰した剣を手に対峙した。

「止めてもいいんだよ？」

「いいえ、やります」

ロワーズの声を振り払い唇を噛み締め、キッとラグスを睨みつけた。

勝負はそれほど長くは続かなかつた。

ラグスは一撃で勝負が決まると思つて過信していたのだろう。

上段から振り下ろされた剣をレイピアは頭上すればのとこりうど受け流した。その際に剣と剣が甲高い音を立てる。

「……つなー？」

受け流されるとほ露ほども思つていなかつたらしい、ラグスが驚きの声をあげる。

スキルとユーモアの剣の腕には適わなかつたものの、レイピアの腕は決して悪いというわけではない。2年間のうちに剣の腕を上げたレイピアはそこら辺の者に負けないほどの力を身に付けている。

剣を引き、素早くラグスの背後に回り込むと腰に下げていた鞘で  
もつて大男の膝の裏を打つた。

思わぬ攻撃をくらったラグスはバランスを崩し、どう、と派手に  
地面に倒れる。

呼吸を整えると剣を鞘へと収める。

「いや、なんといつか……お見事」

戦いの行方を見守っていたロワーズが、少々驚いた表情でパチパ  
チと両手を打つ。相手に怪我をさせることもなくラグスを見事に倒  
したレイピアに対する素直な賞賛の証だつた。

「まさかラグスを倒すとは思わなかつた」

「……そういうテストでしょ?」

女だと思って、ラグスを倒せるはずがないと思われていたのだろうか……。レイピアはムツと顔をしかめる。

「ははは。このテストはね、別にラグスを倒さなくてもよかつたん  
だよ。彼と対峙して、逃げ出さなければ合格だつたんだ」

「……はっ!？」

ロワーズの口から出た意外な言葉にレイピアは目を丸くした。

「私はラグスと戦えなんて一度も言つていないよ」

確かに彼は一言も言つていない。レイピアがそう思い込んだだけ  
だ。だが、あの状況だったら誰でも戦うものだと考えるではないか。

「最初に言つたよね? 簡單なものだつて」

ロワーズのテストとは、盗賊を田の前にしても逃げ出してしまわないかどうか確かめるテストだったのだ。ラグスの顔立ちと体格、それを見ただけで怯え、逃げ出してしまう者は多いだろつ。

そこで逃げ出してしまえば雇い入れはなし。

逃げなければ雇い入れる。そういうことだったのだ。

確かによく考えてみれば刃を潰した剣とはいえ、本気で戦えばどちらか怪我をしてしまう可能性が大きい。普通に考えたらこれから雇い入れようという相手に怪我をさせるはずがない。戦力にならなくなってしまうのだから。

そういうことだったの……。

レイピアは一気に脱力感を覚える。

「それなら、本気で戦う前に止めてくれればよかつたのに……」

「ははは、すまないね。なんだか君の勇ましい姿を見ていたら止めるのを忘れていたよ」

ロワーズはにこやかに笑う。

やはり商人をしているだけあって、食えない性格だと脱力したレイピアは心の中で思った。そして宝石商人のその人を食つたような態度はどこかスキルを思い出させるものだった。

ちく、と胸がざわめく。

感情の揺れを、深く息を吐くことによって胸の奥に押し込んだ。

いつしもレイピアは正式にロワーズの屋敷の護衛として雇われることとなつた。寝所として屋敷の一室を『えられたため、そこに向かおうと歩き出す。

「待つてくれ！」

起き上がったラグスが巨体を揺らし、レイピアの元へ走ってくる。さつきは油断したとか、納得いかないもう一度勝負しろとか、そういう内容の言葉が彼の口から出てくるのだと思った。だが、ラグスの口から出た言葉、それは。

「おみそれしゃした、姉さん！」

だった。

大男はレイピアの前に跪き、手を取り目を輝かせる。

「…………姉、さん…………？」

ヒク、と口の端が引きつる。

「俺は今まで誰にも負けたことがなかった。自分の腕を過信しきっていた……恥ずかしいことです。……姉さんに負けてしまうやく自分が井の中の蛙であることに気がついた。それを気付かせてくれたあなたは女神だ……っ！」

感動にうち震え、巨体が揺れる。先程までの威圧感はどうやら、凶暴な大型犬を思わせるラグスは今はまるで従順な子犬のようにしか見えない。

「……俺を導いてくだせえ！」

「…………」

ぐり、と心なしかレイピアの頭が揺れる。

頭痛を堪えるよつて、片手で額を押さえた。

## 第15章 領主の娘の帰る場所2

ロワーズの屋敷で働き始めてから1週間が経つた。もともとレイピアは仕事覚えがいい方だったのでも、1週間も経つた今ではだいぶ慣れたものである。いつものように朝早くに起き、仕事に向かうため準備を始める。

「姐さん！ 姐さん姐さん」

服を着替え、腰のベルトに剣を差し入れたところで、朝もまだ早いというのに辺りを憚らないラグスの大声が扉越しに響いた。レイピアは苦笑する。

ラグスと戦ったあの日以来、すっかり彼はレイピアのことを姐さん扱いしている。尊敬の眼差しで見つめ、子犬みたいに後をくついてくるのだ。特に害を囁くものでもないから好きにさせていい。

扉を開けるとラグスが目の前に立っていた。

「ラグス……朝からそんな大声出したらみんな驚くわ

「へ、へえ。すみません」

注意を受けると、顔を赤くし巨体をこれ以上ないくらいに小さくして反省する。しゃんぱりとした様子はどこか憎めないものがある。思わずくすっと笑う。

「一体どうしたの？」

「姐さんは今日1日フローだそうですぜ」

「え？」

ラグスの口から出た言葉はレイピアにとつて意外なものだつた。目を丸くする。

「1週間働きっぱなしだつたから今日はフリーで構わないって、ロワーズの旦那から言付けられました」

「そんな……」

レイピアがあまり嬉しくなさそうな顔をしているのを見て、ラグスは首を傾げた。思つている疑問を正直に口に出す。

「姐さんは休みが嬉しくないんですかい？」「休みなんていらないわ」

キッパリとレイピアは答える。  
自由な時間が多ければ多いほど、忘れてたまらない人の顔を  
思い出してしまっから。  
休みなんていらない。

「私、ロワーズさんに言つてくる！」

言い終えるか終わらないかのうちにロワーズの部屋に向けて歩き出す。

\*\*\*

「困ります、休みなんて」そつ訴えたレイピアに対しロワーズは困った顔をした。

「休みがこりない……？ 休みとこっても有給だから気にする」と  
はないよ

「いえ、やうこりわけではなく……働いていたいんですよ」

頑としてレイピアはやずらなかつた。

その頑なな態度から何かを察したようでロワーズは口髭を撫で、  
ジッとレイピアを見つめた。まるで心の中を見透かされてしまつよつ  
だつた。

思わず居心地の悪さを覚える。

「どうしてかな、商人なんていう仕事をやってこると相手の心の動  
きとこゝものが自然と見えてきてしまつ」

「…………」

じう答えて良いのかわからず沈黙する。

「仕事に打ち込むことで、何かから田舎者を背けようとしてこる……君  
はそんな風に見えるよ」

「あ……」

口元に手を当て、顔を俯かせる。

「もう……かもしれません。きっと逃げているんです、私は。でも、  
決して仕事に支障はきたしません。だから働かせて欲しいんです」

ロワーズは一つだけため息をつくと、レイピアに向けてこいつ  
と笑いかけた。

「わかった。そこまで言ひのなら自由にしなさい」

そして言葉を続ける。

「だが、君がもし君の抱えている事情と向き合つ日が来たら迷わず正しいと思つた行動を起こしなさい」

それは自分の抱えている事情と向き合つ日が来たらこの仕事を辞めてもかまわないということなのだろうか、そう思つたがあえて尋ねようとはしなかつた。ただ無言で頭を下げてロワーズの部屋を後にした。

ロワーズの部屋から外へと向かう長い廊下には大きな窓がいくつもあつて、庭園を見渡すことができた。何気なくレイピアが窓の外へ目を向けると警備にあたつている男達の姿が視界に映つた。

そこで彼女は表情を凍りつかせる。

警備の者は3人いて、その中の1人……ちょうどレイピアから背を向けていて顔はよく見えないのだが、彼の髪の毛は金色だった。

サラサラの。

そう、あの人と同じ。

「…………ツ！」

違う、別人だ。

頭の中ではそのことを理解しているのに、過剰に反応してしまつた。

「レイピア姐さん？」

ロワーズの部屋から出てきたレイピアを追いかけて来たラグスが

不思議そうに首を傾げて、その顔を覗き込む。レイピアの顔色は真っ青で、今にも倒れてしまいそうだった。けれど視線だけは同じ場所をずっと見続けている。驚き、レイピアの視線を追うと金髪の男が立っている。

「あの金髪野郎が何かしたんですかい！？」

いきり立つたラグスは金髪の男に殴りかかるため、袖をまくり上げる。窓から飛び出そうとしたところでの、それを止めたのはレイピアだった。弱々しく首を振る。

「違う、違うのラグス……」

そつそつやいたきり、レイピアは顔を俯かせもつ言葉を続けられなかつた。

\* \* \*

レイピアはその日の仕事をいつも通りきちんとこなしていただけど、顔はずっと青ざめたままで、話し掛けてもどこか虚ろでほとんど返事が帰つてこなかつた。仕事が終わると食事も取らずに部屋に戻つた。半ば駆け込むような形で。

そんなレイピアを見てラグスは心配で仕方がなかつた。

「一体どうじまつたんだ姐さん……っ！」

思い当たる原因といえば庭の警備についていた金髪男を見てからだ。どう考へてもそれしか思い浮かばない。

だが、レイピアは彼には全く関係がないといつ。関係がないのに、なぜあんなにも怯えるのだろうか？

金髪が関係しているのだらうか？

おひおひとラグスはこれからどうするべきか考えた後、レイピアに夕飯を持っていくことにした。

「レイピア姐さん！ 食事を持ってきやした

ドアをノックする。

しかし、しばらぐ中からは何の反応もなくてラグスの不安は高まつた。もう一度ドアをノックしようと手を伸ばしたところドアが開いて返事が返ってきた。

「…………めんね……食べられないわ。食欲がないの」

ドア越しに響く弱々しいレイピアの声。

ますますラグスの不安が高まる。

「でも姐さん、食事をちゃんと取らないとぶつ倒れちゃいますぜ？」  
「今は胸がいっぱいですけども食べられないの。明日はちゃんと食べるから……」

「姐さん……」

巨体に似合わぬ今にも泣きそうな声を出した。

ラグスが見ている限りレイピアはここに初めて来た日から今まであまり食事を取っていないように思えた。もともと食が細いのかかもしれないが、それでも仕事量に比べあの食事量は異常なほど少なかった。

現に最初に会った日よりも痩せているような気がする。  
ラグスの不安は頂点に達していた。

\* \* \*

その翌日のこと。

門の警備をしている男が、暇を弄びくあ～と欠伸をする。ここ数週間、特に事件もなく平和な日々が続いている。

だが気を緩めてはいけない、そう思い直した男は頬をピシャリと叩き気持ちを引き締める。と、そこへいつの間にやってきたのか1人の青年がすぐ側まで来していく、にこやかに片手を上げて挨拶してきた。

「やあ、じんにちは。今度この街でサークス公演を行なうことになつてね。ビラを配りに来たんだ」

青年はそう言って、ビラを一枚警備の男に手渡す。ビラには青年の言つとおりサークスのプログラムや舞台の写真が載っている。身元がハッキリとしていて、なおかつ昼間から堂々と侵入してくる盗賊もいないだろうと考へた警備の男はわずかに警戒を緩める。彼らの目の前にいる青年がどこから見ても盗賊の類には見えなかつたことも大きな理由の一つにある。

髪の毛はサラサラで、貴族の血を濃く継いだ金色。娘に黄色い声を上げられるような甘いマスク。ビラ配りをしているよりもテラスで優雅に紅茶でも飲んでいる方が似合つ青年だった。

「ほお。サークスか……一度も見たことがないな。おもしろいものなのか？」

「もちろんだ。見て必ず損はさせない、保障するよ」

余程自信があるようで、キッパリと断言してみせる。思わず警備の男は苦笑する。

「はは、す『』い自信だな」

「まあね」

得意げに口の端を上げてニッとした笑う。

警備の男は不思議な感覚に捕らわれる。田の前の青年が言つと、それまであまり気にもしていなかつたといふのに、サーカスに対する興味がわいてくるのだ。

数分ほどサーカスについて雑談を交わした後、青年が話題を変えた。

「それにしてもこの屋敷はずいぶんと警備が厚いようだけど?」

「ん、ああ……。これはな、盗賊対策なんだ。最近アクアクリスは物騒でなあ……」

「ふうん、なるほどね」

青年は門に寄りかかり、チラと屋敷を見上げる。何か言つために口を開きかけたが、それは言葉にすることができなかつた。

「おい、コラ ッ！」

いちばんに向かって駆けてきたラグスの怒声によつて阻まれたのだ。警備を怠つて話をしていたことを怒られるのかと思つて、警備の男は身をすくませたがラグスの怒りは別のものだつた。

「金髪野郎は屋敷に近づくんじゃねえ！」

といつ内容のものだつた。明らかに金髪だけを限定している。

シッシッ、と蠅を追い払つように手を払つ。青年はそのラグスの行動に特に気分を害した様子もなく肩をすくめてみせる。どことなくおどけた感じで。

「ひどい扱いようだね。ここでは金髪差別でもしてるのでかい？」

「そういうわけじゃねえ。ただ、金髪を見ると姉さんの気分が悪くなるんだ！」

「……姉さん？」

ラグスの言葉を耳に留めた青年の目が、一瞬鋭くなつた。探し求めていた獲物を見つけた獣のように。それは本当に一瞬のことだったので大男は少しも気がつかなかつた。

「ああそうだ。俺はあの方の表情が曇るのを見ちゃいられねえ！ああ、おいたわしいレイピア姉さん……っ。いいか、わかつたらあっちへいっちまえ！」

目を潤ませて拳を握り締める大男に青年は少々呆気に取られるもの、すぐに表情を元に戻すと納得したように門から離れる。

「わかつた。それじゃあ俺はこれで失礼するよ。もしよかつたらあんたもサークスを見に来てくれ」

そう言い残し、踵を反して走り去る。それはとても軽やかな身のこなしだった。

「おかえりなさい、若君」

金髪の青年 スキルがサークルに戻ると出迎えたのはリグだつた。

ここはアクアクリスの街の中央広場に立てられた公演用のテントの中である。つい先日この街に着いたばかりのスキル達はその日のうちにアクアクリスの領主の元へサークル公演の許可を取ると、テントの設置に取り掛かった。

団員達のテントと獣舎は街の外れに設置することにして舞台となる大テントだけは人が賑わう中央広場に立てる变成了った。

スキルは団員達にテント設置のための指示を与えて、その一方でレイピアの居場所を探した。

探知機が指し示しているのは宝石商人としてこの街で有名といわれているロワーズの屋敷だった。

それがわかるとスキルはいてもたってもいられず、また団員達の勧めもあって現場の指揮をリグに渡してロワーズの屋敷に向かつたというわけだ。

「まだテントを立ててる途中だったのに、抜け出して悪かつたな」「構いませんよ。ここに来た1番の目的はレイピアさんと再会することなんですから。どうでした、いましたか？」

リグの問い掛けにスキルは腕を組み、眉間にしわをつくつて少し複雑そうな顔をした。

「………… 番犬が、いたな」

スキルの脳裏に巨体を揺らし、怒鳴り込んできた大男の姿が浮かぶ。しきりにレイピアのことを「姐さん、姐さん」と叫んでいた。そうとは知らないリグは「はあ、番犬……ですか」と曖昧に相づちをうつ。

「困ったな。あの屋敷は少し警備が厚いようだ」

状況から考えてレイピアがあの屋敷で働いているのは間違いない。問題はどう接触するかということだ。

正面から訪ねて行つて、果たして彼女が会ってくれるかどうか。

まず無理だろうな。

スキルはそう考えた。

それどころか自分が来たことを知つたら再び逃げ出すかも知れない。レイピアの性格からいつて充分ありえることだった。

「さて、どうしたもんかな……」

\* \* \*

今日もまた一日の仕事が何事もなく無事に終わつた。レイピアが屋敷の仕事についてから現在まで盜賊と接触する機会はなかつた。けれども一日中立ちっぱなしの仕事であるから体力をかなり消耗する。

部屋に戻るなりレイピアはぐつたりとベッドに倒れこんだ。今日はこのまま寝てしまおうと思い、うとうとしかけたところで扉がノックされた。

連續で3回強く叩く

このノックの仕方はラグスだ。

ベッドから体を起こすとのひのひとした足取りで扉を開ける。案の定ラグスが立っていた。

食事を乗せた盆を持ってくる。

「姐さん！ 今田こそ食事を取りてもらいますぜ」

「……あの、今日もあまり食欲がないの……」

「わざわざと思ってとつとおきの秘密兵器も持つてきやしたー！」

失礼します、と言つなりラグスは部屋の中に入つてくる。少々呆気に取られながら彼の後を追つよつにレイピアもまた部屋に戻る。ラグスはテーブルの上に食事の盆を乗せ、それまで小脇に抱えていたワインを取り出した。

「秘密兵器つて……お酒なの？」

「へい。とつておきのもんですぜ」

得意げに言つたりラグスとは対照的にレイピアは困った表情をする。お酒にはあまりいい思い出がない。

以前シアと飲んだときはブレンをコーラと間違えて大騒ぎを起こしてしまったのだ。そういうた苦い経験があるのでお酒は飲むまいと誓つたのである。

「私、飲めないのよ。弱いの」

けれどラグスは2つのグラスにワインを注いでしまう。

「酒を飲むと食が進むんですよ。医学でちやんと解説をされます

医学……。ラグスの口からそんな言葉を聞くと不思議な感じだ。

「その上嫌なこと、みんな忘れて楽しい気分になっちゃう…」「でも……」

「一杯ぐらい俺に付き合ってください。一人で飲むのはどうも味気なくて」

ラグスはなおもしぶるレイピアに半ば強引にグラスを握らせた。しばらくグラスを握りしめて眉間にしわを寄せていたけれど、やがてゆっくり口をつけ始めた。

少しごらげなら……大丈夫だろ？ よく眠れるかもしれないし。

ラグスを横目で見ると、上機嫌でぐいぐいと飲んでくる。見た目通りお酒はかなりいける口うらじー。

「ねえ、ラグス……」

問い合わせるとラグスはワインの入っているグラスを置き、「なんですかい？」と顔を上げた。

「……あなたには帰る場所がある？」

彼は少し驚いた表情をした。

考えてみればラグスとは仕事の話や簡単な自己紹介以外に突っ込んだプライベートの話をしたことがなかった。それは今までそれとなく避けていた話題でもあったからだ。

レイピアはあまり自分のことを話さなかつたし、ラグスもレイピアのそんな素振りにうすうす気づいていたらしくあえて聞いてくることはなかつた。そして彼もまたあまり自分のことは話さなかつた。問い合わせに対してラグスはレイピアと虚空に交互に視線を彷徨わせ、眉間にしわを寄せていなつた。

「うーん……。俺の帰る場所……」

「……」  
「普通は故郷つて答えるべきなんでしょうけど、運悪く山火事に襲われちゃつてしまつたと一いつ々の昔に無くなつたんだよ」

レイピアはハッとしたみひで口元を離して、慌てて頭を下げる。

「…………」「ごめんなさい」

「あ、いや、あやまちねえでくださいよー。なんせもひずつと昔のことなんで両親の顔すら忘れちゃつたる親不幸者ですぜ、俺は」

その軽い口調と同じくラグスの顔は實にあつけらかんとしたものだった。彼はぐい、と再びワインを飲むと逆に問い掛けてきた。

「姐さんこはしあう場所、あるんですかい？」

「…………。私、つっここの間まで父と喧嘩をしていたの。それが原因で家まで飛び出したり……でも、よしやへ仲直りをすることができたわ」

「そりゃあよかつた！」

パツと顔を輝かせるラグス。それに対しレイピアは曖昧に笑い、寂しそうに瞳を揺らした。

「でもね……本当に帰りたい場所は……もひ……」

レイピアの脳裏に浮かぶのはサークัส団のひと、気のいい仲間達のこと、そしてスキルのこと。もう2度と帰る事のできない場所。膝を抱え、顔を俯かせる。

「その場所は無くなつちまつたんですかい？俺の故郷みたいに」

「ううん、ちゃんと存在してる。人も、みんな」

「なり大丈夫です。帰る場所がちゃんと残っていて、帰りたいつ

てこう気持ちが姉さんにある限り、絶対に帰れる日が来やすよ」

まるで確信でもしているように力強い言葉。

顔を上げ、ラグスを見ると彼はレイピアを力づけるように口に

りと笑つた。

「帰れる場所があるっていうのはいいことです。俺は姉さんがうらやましい」

「ラグス……」

レイピアはワインを一気に飲み干すと再び膝を抱え、顔をつざめた。

「……ラグス」

「ん、どうしたんです？」

「……眠い……」

そうつぶやいたと思つたら、いきなりバッタリと床に倒れこんだ。驚いてラグスが振り向くとレイピアの口からすーすーと規則正しい寝息が聞こえる。

どうやら酔っ払つて寝つてしまつたらしい。

「うあ、姉さん……つ本当に弱いつすね……」

途方に暮れた表情でポツリとラグスが洟らした。

ベッドにレイピアを寝かせると毛布を掛け、見かけとは裏腹に几帳面な性格の大男はきちんと空き瓶とグラスの片付けをして出て行

レイピアは夢を見ていた。  
とてもいい夢を  
つた。

これは夢だとわかっている。

会いたいといつ気持ちが強すぎて、とつとつ夢の中まで出てきてしまつたのだろう。

何度も求めた姿。

彼は自分に向けてこれ以上ないくらいとろけそうな笑顔を向ける。そして1番囁いて欲しい言葉を言うのだ。

現実の彼が決して言いそうにならない言葉を

だから、これは夢だということはわかっている。

深夜。

アクアクリスは大きな街だったが、酒場が建ち並ぶ通り以外は夜も更けると眠りに落ちる。

ロワーズの屋敷がある通りもまた同様だった。もつとも警備の者だけは盗賊に備えて眠りにつくことはなかつたけれど。

ゆら、とロワーズの屋敷を囲む堀の上で影が動いた。

その影の動きは無駄がなく、体重を全く感じさせずに軽やかに地面に降り立つた。それはまるで猫のよつな動きだったが、猫ではない。

人間 スキルだった。

彼は黒ずくめの服を身に纏つている。足音も気配もせずに動くものだから完全に闇へと同化している。

「盗賊稼業を辞めたつていうのに再び人の家に忍び込むはめになるとはね」

そっぽやかずにはいられなかつた。

正面からレイピアを訪ねても彼女はきつと会つてはくれないだろう、それどころか逃げ出してしまつかもしない、そう考えたスキルは奇襲作戦に出た。

ロワーズの屋敷の周りは深夜といふこともあり昨日の昼間に来た時よりもはるかに警備が厚かつた。庭には数分おきに代わる代わる見回りが来るのだ。スキルはその度に植木の陰に身を潜めたりしながら、警備の目を巧みにかいくぐつていとも簡単に屋敷へ辿り着くことができた。

レイピアがいそうな部屋の日星をつけると、屋敷の外壁を登り始めた。窓枠に足を掛けながらすると上へ上へと登つていく。

この外壁はいただけないな、とスキルは胸中でつぶやく。

非常に登りやすいのだ。この外壁では盗賊の侵入を手助けしているとしか思えない。庭の警備さえかいくぐつてしまえば屋敷内へ侵入するのは容易いだろう。

もつとも、今のスキルにとつてはこの方が都合がいいのだが。

。

屋敷の2階部分の部屋を2つほど覗いたところで、目的の人物を探し出すことができた。

鍵がかかっていると思っていた窓には鍵がかかっておらず、いつも簡単に開けることができた。鍵を外す手間が省けるので好都合ではあるのだが、無用心じやないか、という気持ちの方が大きくてスキルの心中は少々複雑であつた。

レイピアはベッドの中で毛布にくるまるようにして、すうすうと

寝息を立てて眠っている。近づいてみても眠りが深いのか目を覚ます気配はない。

1週間ぶりだが、もうずっと長く会っていなかつたような感覚だつた。思わず抱きしめたい衝動に駆られる。

ずいぶん痩せた。もともと華奢な方なのこさらに痩せて見える。

抱きしめてしまつたら壊れてしまいそうで、何とか理性を働かせ

気持ちを押し止める。

代わりにそつと髪の毛を梳いた。

頬に片手を這わせて、ひんやりとした膚に口づける。

「ス……キル……？」

気がついたらしい。わずかに目を開けたレイピアは、掠れた声で彼の名を呼んだ。だが、その瞳も声もどことなく虚ろで半分夢の中にいるような状態だつた。

「やあ、お嬢さん。久しぶり」

につこり笑つて片手をひらひら振る。

大きく目を見開くレイピア。

逃げ出してしまつかな、と警戒したスキルはそれとなく体をズラしレイピアの逃げ道を無くす。だが、レイピアが起こした行動は彼の予想に反しているものだつた。

「わ……」

ぐい、と体が引っ張られ不意を付かれた形のスキルはレイピアの体に覆い被さるような形で倒れこむ。

驚き、目を丸くしてスキンを抱きしめレイピアが「あつたかい……」「とつぶやく。

微かにレイピアからお酒の匂いがする。

ああ、だからこんなに素直なのか。

妙に納得してしまったスキルである。

\* \* \*

夢の中のスキルは相変わらず憎たらしこちらにマイペースで飄々としていた。「やあ、お嬢さん」なんてまるで最初に会った頃のままの態度ではないか。夢の中でぐらりと思い切り抱きしめて「会いたかった」という言葉を言つてもらいたいものである。少し彼を驚かせてみたくもあり、また夢の中だから自分の気持ちを素直に解放させてみようとも考へ、手を伸ばし彼を引き寄せてみた。あっさりと倒れこんでくる。

案の定、驚いたようでスキルは目を丸くしてレイピアを見つめる。

「あつたかい……変ね」

レイピアのつぶやきにスキルが反応する。

「変つて……何が?」

「夢なのにビックリあつたかいの」

小首を傾げる。

「夢じやないよ

「嘘。だって……ふわふわしてるもの」

頭がぼつっとしている、体がふわふわとしている。これが現実のものだとは到底思えない。それに彼は今ホットリープでサークスの公演をしていてアクアクリスになぞいるはずがないのだ。

「それは君がお酒を飲んでるからだ」

スキルは苦笑し、上体を起こすとレイピアから離れてしまった。ギュッと胸が締め付けられる感覚に襲われる。

スキルがいなくなる……夢が終わってしまう……。

「大丈夫。どこにも行かない」

よほど不安な顔をしていたらしく、彼はそんなことをつぶやいた。その言葉に胸を撫で下ろす。同時にある疑問も胸の中に生じる。

「どうしてここにいるの？　あなたはホットリープにいるはずなのに……」

「追いかけてきたんだ」

「追いかけて？　一体どうやつ……」

レイピアの言葉は最後まで続かなかつた。急にスキルに抱きしめられたからだ。呼吸すら苦しくなるほどの抱擁。ドクドクと心臓が脈をつつ。

「スキル……？」

「会ったかった。……リグから聞いた。君が俺の元からいなくなってしまった理由を

「だったら……こんな風に抱きしめないで！」

顔を背け、手を突っぱねてスキルから離れようとする。

「……期待してしまつじやない。期待して傷つくなのは嫌なの。恐いのよー」

だが、彼はレイピアの頬を両手で挟み込み逃げることも顔を背けることもできないようになってしまった。

「どうしてわかつてくれない？ 遊びのつもりなんかじゃない……

愛してるんだ。これからもその気持ちは変わらないと確信した。だから君を抱いた」

レイピアの顔が赤く染まる。嬉しそうな顔をしたのも一瞬のこと

で、すぐに表情を暗くし瞳を伏せた。

「やつぱりこれは夢……なのね。現実のスキルはそんなこと言わないもの」

スキルはその言葉を聞いて、呆れかえった表情を浮かべため息をつく。

「……俺の寝起きの悪さもたいしたものだと思うが、君の寝ぼけっぷり……いや、酔っ払いぶりもたいしたものだね。いい加減これが夢じやなについてことに気がついて欲しいんだけど？」

「だつて……」

「確かに俺は今までその……女性に対してもう失礼だった。君がそのことで思い詰め、追い詰められてしまつたのも仕方がなかつたと思う。だが、君に対する気持ちは今までのものとは違う。本気なんだ。俺なりに精一杯気持ちを伝えたつもりだった。そしてそれは通じているものだと思つてた。だから朝起きて君がいなくなつていたときは……正直辛かつた」

驚き、伏せていた瞳を上げると暗闇の中に浮かび上がるスキルの表情があつた。その表情はまるで置いてけぼりにされた子供のよう

に傷ついたものだった。

胸をつかれ、思わず彼の頬に手を伸ばし、触れる。

「スキル……」

「逃げ出してしまつのではないか、君の口から言つて欲しかったよ。

君の抱えている気持ちを……」

「…………」「めんなさい…………」

「こんな風に逃げているばかりじや何も解決はしない。そういう？だから……逃げないで俺と向き合つて欲しい」

「向き合つ…………？」

スキルは頬に伸ばされたレイピアの左手を取るとすばやく行動を起こした。

「これ…………一？」「

彼がレイピアの指にはめたのは銀の指輪だった。

以前レイピアはスキルに銀の指輪のことを話したことがある。ホットリープでは銀の指輪は結婚を申し込むためのものであり、求婚者は相手の薬指に指輪をはめ、もらつた相手はその求婚を受け入れるなら指輪に口づけ、拒否するなら指輪を地面に落とすというものである。

田を見開いたレイピアは指輪とスキルの顔を交互に見つめる。

「あなた…………この指輪の意味がわかつているの？」

「もちろん。記憶力はいい方でね。意味をわかつてやつているんだけど？」

「そんな…………」

スキルは急に真剣で、それでいて緊張した面持ちになる。

「これが俺の気持ち。これからもずっと側にいて欲しい。君が必要なんだ」

「わ、私……私は……」

レイピアは自分の身に起こった事態にすっかり困惑しきつていて、今にも泣き出しそうに言葉も詰まらせ、何も答えられずになつた。

ふとスキルはその真剣だった表情を和らげる。

「もう2度と俺と会いたくないと思ったら、明日この指輪をサークス団のテント内にでも投げ入れて。そしたらもう2度と君の前には現れない。でも、もし指輪がテント内になかつたら」

一田言葉を切つて、それからレイピアを見つめると不敵に笑つた。

「絶対に諦めないから」

「…………！」

「覚えておいて。俺は狙つた獲物は逃さない。だから君の答えを知るまでは何が何でも逃がさないから」

「スキル……」

「明日、答えを聞かせて欲しい。いいかい？」

一瞬考え込んだ後、無言で頷いた。その答えに満足した表情を浮かべたスキルはレイピアから離れ、足音も立てず窓枠に近づき足をかけた。そして顔だけレイピアの方に向ける。

「もう一度言つよ。俺の気持ちはこれから先も変わらない。……愛してる」

これ以上なごくらいのところかうな笑顔で言った。

「それじゃあおやすみ。……また明日」

そう言い残すと、体重を全く感じさせない動きで外壁を伝い降りていった。慌てて窓から見下ろしてみると、彼の姿はすでに闇の中へと消えて見えなくなっていた。

「……畠田……」

後に残されたレイピアはしばらく外を見つめていたが、やがてずるずると床にへたりこんでしまった。

「う……ん」

翌朝。

この日は朝から日差しが強く、レイピアは窓から差し込む光が眩しくて目を覚ました。

昨夜お酒を飲んだせいで一日酔いで頭が重い。頭を押さえ、のろのろと体を起こす。

昨夜はとても良い夢を見た。

会いたくて会いたくてたまらなかつた人が現れ、そのうえプロポーズをしてきたのだ。

良い夢を見ると気持ちが弾み心が軽くなるものなのだが、レイピアの胸中は少々複雑であった。寂しさと切なさが心の半分ぐらいを占めている。

「やつぱり……あれば夢だったのよ……ね

夢は夢であつて現実ではない。覚めてしまえばそこで終わる。それにしてもやけにリアルな夢だったと思う。いや、そうとも言いい切れない。感触は確かにリアルだったのだが、内容はそれほど遠いものだつたから。

彼はホットリープに伝わる風習をちゃんと覚えていてくれて、銀の指輪をはめてくれたのだ。そして「ずっと側にいて欲しい」と言った。

愛してる、とも言つてくれた。

これ以上ないくらいの真剣で、緊張した面持ちで。

レイピアは特に結婚という形にこだわっていたわけではない。むしろ彼と結婚したいという思いは一度も抱いたことはなかった。どう考へてもスキルは結婚などするようなタイプではない。彼は何者にも縛られることなく、風みたいに自由に生きる人だから……。意図的に考へないようにしていたのかもしない。

形などどうでも良かつた。ただ彼に愛されて側にいることができたらそれだけで良かつたのだ。

だが、夢というのは心の奥底にある願望を表すともいう。あんな夢を見てしまったということは自分は心の奥底では彼と結婚することに憧れを抱いていたのだろうか？

「銀の指輪。……結婚、か」

何気なく左手の薬指を見て、レイピアはその動きを硬直させた。まぎれもなく夢の中で見たものと同じものが薬指にはまっていたのだ。

「うそ……」

視線だけは指輪に落としたままで絶句する。

「あれは夢じゃなかつた？」「うそ、うそ」

頭を抱え、しきりに「うそ、うそ…？」と繰り返しつぶやく。「体どこからどこまでが現実でどこまでが夢だったのだろうか。

それとも全部現実のものだったのかもしれない。

しばらく頭を抱えてうなづいているとドンドンドン、と扉がノックされた。続いて「姐ちゃん！」と呼ぶ声。

「どうしたの、ラグス？」

「あ、姉さん。明日の仕事が終わったら息抜きにサークスでも見に行きやせんか？」

「サークス！？」

「なんでも明日から公演があるらしいですぜ」

そう言つてラグスはサークスのビラをレイピアに見せる。

「どこで、これを……？」

「昨日屋敷の前にサークスのやつがビラ配りに来たんですよ」

それはまぎれもなくスキル達サークス団のビラだった。団ごとレイピアを追つて来たのだ、彼は。呆けたようにそのビラを見ていたレイピアだったが、突然額を押さえ泣き笑いを始めた。

「何で無茶苦茶のかしら……あの人は……」

「わあ！　ね、姉さん。どうしたんですかい！？」

突然レイピアが泣き笑いをはじめたので戸惑い驚くラグス。大丈夫、と言つて首を振つて涙を拭つ。

「私……つ。行かなくちゃ！」

「へ？　行くつて……どこへ」

「……私ね、ある人の元から逃げ出してしまったの。その人と向き合つのが恐くて……でも、その人は私を追つて来てくれた。そして逃げるなつて。逃げないで自分と向き合つて欲しつて言ってくれたの」

「姉さんが昨日言つてた帰りたくても帰れない場所……。そいつが姉さんの帰る場所なんですね」

額ぐレイピアを見てラグスは自分の両手を握り締め、顔を輝かせる。まるで自分のことのように喜んでくれている。レイピアの胸に熱いものが込み上げる。

「だったら姉さんはそいつのところへ行くべきです……そいつと決まつたらこんなところでグズグズしてちやあいけやせん。ロワーズの旦那には俺から言つておきますから姉さんはそいつのところへ行つてくださいせえ」

「ラグス……ありがとうございます。今すぐにあの人に伝えたい言葉があるの。それが終わつたらまた改めて挨拶に来るから…」

時間を惜しむようにして駆け出す。

一刻も早く、スキルに答えを伝えたかった。

彼のプロポーズを受け入れようと思つていてる。  
嬉しかった。

彼の申し出は本当に嬉しかった。  
自分はもう一生、結婚とは縁がないと思つていたし、何よりその申し出を受け入れることによつて彼とずっと一緒にいられるのだから。

もう迷わないし、逃げない。

すれ違いを繰り返してしまつたけれど、今ならわかる。彼と一緒にだつたら、きっと上手くやっていけるに違いないと。

温かい仲間達のいるサークス団と、スキル。

(あそこが……私の帰る場所)

レイピアがロワーズの屋敷の門まで差し掛かつたとき、突如それは起つた。

一瞬、閃光が空を走り、続いてドオン！と地を揺るがすほどの凄まじい爆発音が響き渡った。

「きやあっ！」

そのあまりの大きな音にレイピアは耳を塞ぎ、悲鳴を上げた。恐る恐る片目を開けて音のした方向を見て、凍りつく。

真っ黒い煙を上げて屋敷の一部が燃えていた。

窓を突き破つて炎が上がり舞い散った火の粉は次々と別の部屋を焼いていく。その勢いは凄まじく門の付近にいるレイピアの元にまで炎の熱が伝わってくる。

「な、なにこれ……？」

状況を理解することができず、しばらく呆然と屋敷を見上げる。

「レイピア姐やーん！」

名前を呼ばれ、その方向を振り向くと屋敷の窓から飛び出してきたラグスの姿があった。駆け寄り、彼が無事であるのを確認する。

「ラグス！ 無事だったのね。ねえ、これは一体どうしたことなの？」

「盗賊団が爆弾を使って攻めて来やがったんですね。ここは危険ですから、姐さんは早く行ってください」

「盗賊団が！？」

爆弾を放つて屋敷を燃やし、その混乱に乗じて盗みをする。火を

消すために人出の大半が流れてしまうので火の回りにさえ気をつけなければ捕まる心配もなく盗みを行うことができる。リスクを伴う方法だがある意味効率のいいやり方である。

レイピアはハツと我に返つて辺りを見回す。使用人達が次々と逃げ出してくるが、いくら目を凝らしても屋敷の主人の姿がないのだ。

「ロワーズさん！ ロワーズさんはまだあの中にいるの？」  
「や、そういうえば……ロワーズの旦那が見あたらねえ！」

口を押さえて絶句する。

「大変！」

屋敷から離れるどころかそちらに向かつて駆け出したレイピアを見て、慌てふためいたラグスもまたその後を追つ。

「姐さんっ！ 何する気ですかい！？」  
「何つて助けに行くのよ。賊も放つておくわけにはいかない」「何を馬鹿なことを！ 危険です。下がつていってくだせえ」「そんなことこの仕事に就くときに覚悟していたことだわ！ 今は一刻を争うのよ。こんなことを言ひ合つている場合じゃない」「姐さん！」

半ば叫ぶようなラグスの制止を振り切る。

「ラグス、あなたの心配は嬉しいわ。でもね、本当にこのままだと危険なの。屋敷全体に炎がまわつてからでは遅いわ。ロワーズさんを助け出せなくなつてしまつ」  
「だつたら俺も行きやす！」

「駄目よ！ あなたは消火のために人を集めてきて。広場にいるサーカス団に助けを求めるの。きっと……手伝ってくれるわ。そして外にいる護衛の人達を集めて屋敷から出てきた盗賊を捕まえるよう指揮してちょうだい！」

なおもレイピアと共に屋敷に入ろうとしたラグスだが「これはあなたにしかできない仕事なの！」と言われ、結局彼の方が折れた。

だが、その表情は心配と不安で暗く沈んでいた。

「……わかりやした。でも、姐さん。くれぐれも無茶はしねえでくださいよ。俺は、俺はあなたに何かあつたら……」

「ありがとう。気をつけるわ。……お願いね、ラグス」

レイピアは屋敷へ。

ラグスは逃げ出してきた者達に、盗賊対策の指示を教えると助けを求めるため、サークัส団へと向かった。

屋敷内の廊下は火の手はまわっていないものの、煙が立ち込めていて視界が悪い。

レイピアはタオルを口に当て煙に喉を焼かれないようにし、できるだけ姿勢を低くして進んでいく。盗賊と遭遇する危険も考えて空いている方の手で剣の柄を握りしめる。

ロワーズがどこにいるのか見当もつかなかつたので、まずは彼の部屋から確かめることにした。

「ロワーズさん！ いたら返事をしてください」

声を掛けながらロワーズの部屋へ向かう。

階段を上がるにつれて熱気も上昇していく。とうに暑いという段階を越えていて体が焼けそうなほどに熱い。滝のように汗が流れていぐ。せめて水を被つてから中に入れればもう少し状況は違っていたかもしねり。

(馬鹿ね、私は……)

いつも冷静な判断を失つて行動に移してしまうのだ。  
ピンクダイヤモンドを取られてスキルを追つて一人、乗り込んだ時もそう。そして今も 。もう少し配慮をしていれば状況はずつと良くなつているはずなのに。  
だが、今さら悔やんでも仕方がない。  
やるべきことをやるだけだ。

ロワーズを助け出して、絶対に帰るのだ。彼の元に  
の返事をするために。  
だから絶対にこんな場所で力尽きるわけにはいかない。  
再び前を見据えるとロワーズを探すべく歩き出した。

昨日

「田のトガ青いですよ若君」

早朝訓練をするためにやつて来たスキルにすでに準備を終え、待機していたリグが声を掛けた。

「ああ……。昨日あまり疲れなかつたからな」「そうですよねえ……。さすがに神経の太い若君でもプロポーズを断られたらどうしようと思つて眠れませんよね」

「……………何で……………そのことを……………知ってるんだ?」

「何で俺がレイピアにプロポーズしたって知ってるんだよ」「

スキルはまだ誰にも昨日のこと話をしていない。当然リグも知っているはずがないのだが……。

目を半眼にしてリグに詰め寄る。

「ふふふ、私の情報網を甘く見ないでください」

にやにやと楽しそうに笑うリグ。同じように早朝訓練に来ていたシアも意味ありげに笑いながら話に参加してきた。

「そりそり。もう団のみんな全員知ってるわよー。あんたが振られるかどうか賭けしてると人もいるんだから」

視線を他に向けると団員達も皆同じよつこやにやと呰み笑いをしながらスキルの方を見ていた。

「…………」

スキルは盛大にため息をつき頭をうな垂れさせた。――にひらには隠し事はできないな、と心の中でつぶやく。

「上手くいくといいですね」  
「放つといてくれ……ん？」

ふてくされるスキルの耳に爆発音が届いた。そしてざわめく街の人の声でその異常さに気がつく。

「一体何の騒ぎだ？」  
「……何かあつたんでしょうか？」

スキルとリグはお互いに顔を見合させ、舞台のあるテントから外へ出る。すると外にはすでに数人の団員達が出ていて、その中にブレンの姿があった。

「どうかしたのか？」

「それが、よくわからねえんだ。何か爆発騒ぎでもあつたんじゃないかって街の奴らは言つてる。ずいぶんと物騒な話だよな」

こえー世の中だぜ、とぶつぶつ言いながらブレンは何事かと様子を見に行く人の流れを見つめている。

その人の流れに逆らうようにしてスキル達の元へ大男が走ってきた。大男の顔に見覚えがあることに気がつく。

「……あんたは、ロワーズの屋敷にいた……」

大男もスキルに気がつくなり、すがりつくようにして助けを求めてきた。

「助けてくれ！」

そのただ事ではない様子にスキルは眉をひそめる。

「どうかしたのか？」

「大変なんだ。屋敷が……屋敷がつ！」

「屋敷がどうした！？」

「盗賊団に襲われて爆弾を投げ込まれた。消火作業のために人出がない。手伝つて欲しい」

その言葉にスキルはある悪い予感が頭をかすめる。荒く息をしているラグスの肩を掴む。

「レイピアはどうした！？」

「……へ？ なんで姉さんのこと知つて……」

「そんなことはどうだつていい。レイピアはどうしたんだ！？」

「そ、そうだ。姉さんは・・・屋敷の主人を助けるために屋敷の中へ……」

「なん……だつて！？」

スキル、そして2人の話を聞いていたリグ達も絶句する。

「……つあの無鉄砲娘！」

スキルは言葉を終えるか終えないかのうちに屋敷に向かって駆け出す。その後をラグスとリグ達が追いかける。

彼らがロワーズの屋敷に着くと、屋敷はますます勢いを上げて燃えていて屋根の一部分が崩れて地面に落下している状態だった。その現場の状態に全員が言葉を失う。

「これは……まあいな」

屋敷の天井が崩れ始めるのにそう時間はかかるないだろう。スキルの額を汗が流れる。

「消化作業だ！ 団員達を全員呼んできてくれ

「はい！」

アクアクリスが水の都と呼ばれているのは街中のいたるところに水路が走っているからである。

屋敷の使用人達はすでに水路から水を汲み上げ、消化活動に入っている。サークスの団員達もそこに加わることになった。

スキルは彼らが汲み上げているバケツの一つを受けとると頭から水を被つた。全身水浸しになつて、服も水を吸い重くなる。軽くしぼつて余分な水分を落とす。

「若君？ 一体何を……」

「あの無鉄砲娘を救出してくれるー」

ラグスにロワーズの部屋の位置を聞き出し、レイピアはそこに行くことにした。かつたのだと確信し彼もまたそこに行くことにした。

「若君！」「

リグが制止の声を上げるが、駆け出したスキルにはレイピアを助け出すことで頭がいっぱいで聞こえていないようだった。

\* \* \*

レイピアがロワーズの部屋を開けると、後ろ手に縛られ床に転がされている主人の姿があつた。

「ロワーズさん！」

急いで駆けより、その縄を解く。衣服が寝巻きのままなところから、眠っていたところに盜賊に侵入され、縄で縛られたのだろう。その際殴られたらしく頬や腕が赤くなっている。

うめいているロワーズの口から猿ぐつわを外すと彼は苦しそうに息を吐き出した。

「大丈夫ですか！？」

「……ああ、すまない……」

大きく肩で息をし、のろのろと立ち上がる。

「……君は一人で来たのか……。何て無茶なことを……」

レイピアが1人でここに来たことを知るなりそうつぶやいた。ダメージが大きく残っていたようで、体をふらつかせる。すかさずレイピアが彼の体を支える。

「ロワーズさん……しつかりして」

レイピアの言葉にロワーズは静かに首を横に振った。

「助けに来てくれてありがとう……。だが、私のことはもういい。君だけでも逃げるんだ」

その瞳はひどく穢やかなものだった。まるで死を受け入れることを静かに望んだようだ。

ロワーズの手が力を無くしたようにレイピアの肩からするりと外れる。

ドクン、とレイピアの心臓が脈をうつ。

「何を……何を言つてるんですか！」

外れたロワーズの手を再び血らの肩にかけて支える。

「絶対に生きていこから脱出するんです。絶対に・・・絶対に！」

レイピアの瞳にあるのは強い生への執着。ほとんど諦めていたロワーズはそれにつられるように少しづつ生への希望を持ち始め、弱々しくであったが微笑んだ。

「ああ。……それじゃあもう少しだけ頑張るところつか……。だが、本当に危険な状態になつたら……私のことは置いて逃げるんだ、いいね？」

「…………はい」

「まだ近くに賊がいるかもしれないから気をつけて行こ！」

ロワーズを支えたまま廊下に出たレイピアはすぐに顔を青ざめさせることになる。先程彼女が通ってきた道から火の手があがっていた

たからだ。炎の燃える音が唸り声のよつに耳に響く。

「つむ……」

声を恐怖に震わせ、絶望的な思いでその光景を見つめる。ロワーズもまたその光景を見つめ絶望のうめき声を上げた。

「まだ……大丈夫。大丈夫です。反対側の廊下から……行きましょう」

幸いにもまだ反対側の廊下は火の手があがつておらず、脱出への望みは消えていない。ロワーズの体を支え直して、2人は再びのろと歩き出した。

だが、すぐにレイピアは次の問題と向き合つことになった。

体力の限界が近づいていた。彼女の力ではロワーズを支えるだけでも大変なことなのだ。足も腕も痺れて小刻みに震えていて気力だけで歩いている状態。その上熱さと焦りとで汗が次々に全身から流れ落ち、ますますレイピアの体力を奪つていく。

とうとう堪えきれずロワーズの手を離してしまい、2人はそろつて廊下へと倒れこんでしまった。肩で大きく息をして、咳き込む。

「ロワーズ……ち……、『め……なさ……』

息が上がつて言葉を出す」とすらできなかつた。

「もういい、もういいんだ……。君の体力はもう限界だ。1人で逃げなさい」

レイピアは嫌だ、と首を何度も横に振る。

廊下に倒れこんだままの状態で、必死に呼吸を整える。

「もう大丈夫です。……行きましょう」

ロワーズの方に手を伸ばすが、それはいきなり開いた扉によって阻まれることになる。

驚いて扉を見開いたレイピアの視界に黒づくめの男の姿が映る。その男は背中に大きな袋を抱え、彼は驚いた様子でロワーズの方を見つめていた。

すぐに賊だ、と頭では理解したが、疲れきっていた体ではすぐに反応ができなかつた。

「こんな……時に……」

レイピアが腰の剣を引き抜くより盗賊が行動を起こす方が早かつた。殴られたロワーズの体は壁に打ち付けられ、ぐったりと廊下に倒れこんでしまつた。

「ロワーズさん！」

その悲鳴を聞き、振り返った盗賊は次の狙いをレイピアに定め向かってくる。

このままやられるわけにはいかないとほんと氣力だけで立ち上がり剣を構える。盗賊もまた同じように短剣を抜き放つ。

「死にな！」

低く、ぞつとするような声音だつた。

男が振り上げた短剣がレイピアの喉元を狙つてくるが、それが実

行されることはなかつた。

カシャン、と金属音を上げて短剣が床に落ちる。彼の右手に短剣が深々と突き刺さったためだ。男が短い「めき声」をあげる。すかさずレイピアが体当たりをして男の体を跳ね飛ばした。

恐怖と疲れとで荒く息をしながらも、盗賊に短剣を投げレイピアの危機を救つてくれた人物を見上げる。

「まったく、君つて本当に俺の寿命を縮めるのが得意なんだな」「スキル……」

驚き、目を見開きその人物の名を呼んだ。

疲れが見せている幻覚というわけではなく現実のものだ。彼はいつものように唇の端を上げて笑みを浮かべている。

信じられない、という思いでスキルを見つめていたレイピアだったが、その顔を急に強張らせた。

「後ろ！」

突如、スキルの背後から火が上がった。

盗賊は状況が不利になつたと悟ると右腕の出血部分を押さえたままさつそうと身を翻した。その際に持つっていた小型の爆弾を投げつけ、辺りを炎で包ませスキル達の脱出する最後の道を完全に塞いでしまつた。

「なつ！……くそつ！」

不覚にも盗賊を逃がしてしまつたことと炎が上がつたことに大きく舌打ちをする。だが深追いするのは諦めすぐさまレイピアに駆け寄り無事を確かめる。

「怪我はないか？」

怪我は見あたらないものの、息が上がりついて膝をつき辛そうな状態だった。瞳を閉じぐつたりとしている。スキルが抱き寄せるとなずかに目を開き、弱々しく微笑んだ。

「来て……くれたのね……嬉しい……」

「よく頑張ったな。後は俺にまかせて」

レイピアはその言葉にゆづくつ頷き、安心したようにスキルの胸に顔を埋め意識を失つた。

「……とは言つたものの、びついたものかな」

先の廊下も後ろの廊下も炎にまかれて完全に脱出口を絶たれている。どう見ても絶望的な状態であることに違ひなかつた。

今まで何度か危険な目に会つたことのあるスキルも、さすがにこれほどまで死を身近に感じたのは初めてだつた。生きて戻れるだろうかという考えが脳裏に浮かぶ。すぐにスキルはかぶりを振つてその考え方を否定し、レイピアを抱きしめた。

「死なせるものか……」

意識の無いロワーズとレイピアを左右に抱え一番近くにある扉を開け、部屋の中へと逃げ込む。

その部屋もまた炎が上がっている状態だった。かるうじて炎にまかれていらない場所を通り一気にバルコニーへと向かつ。

「ここには2階だつたらな……飛び降りるのは無理か……？」

彼1人だつたら何とか下へ降りることができんだろう。だが、今はレイピアとロワーズがいて2人とも意識のない状態だ。せめて下が土か芝生だつたら2人を抱えて飛び降りても助かる可能性は大きい。怪我を負うというリスクはあるけれども。

コンクリートでないことを祈りながらバルコニーから身を乗り出す。

「……はははっ」

突然、スキルが笑い出した。

炎がすぐ背後に迫つてゐるこの状態では何とも異様な光景といった。だが、炎のせいでの頭がおかしくなつたというわけではない。彼は極めて正常な状態にある。

「俺は、世界で1番最高な仲間達を持っているかもしねり」

彼の視線の先にはリグ達サークル団の団員達がいて、なんと厚手のシーツを広げて待機していたのだ。さらに驚いたことに屋敷から逃げ出した盗賊を捕らえたらしく庭には何人かの賊が縛られ転がされていた。

バルコニーから姿を現したスキルを見るなり、リグは大きく手を振つた。

「若君　　っ！　私達が支えますから、この上に降りてきてください　　いつ！」

「わかった！　最初に屋敷の主人を受け止めてくれ」

口ワーズを抱え、バルコニーから下へと降ろす。団員達は落っこちた口ワーズの体をシーツで受け止めることに見事成功した。ホッと胸を撫で下ろし次はレイピアを抱え上げる。

「……スキル……」

名を呼ばれハツとしてその方を見ると、氣を失っていたはずのレイピアが微かに瞳を開け、彼の方を見上げていた。

「…………私…………？」

「少しの間氣を失っていたんだ。でも、もう少し眠っていた方が良かったかもしねない」

氣を失っていたままの方が恐怖を感じることなく下に降ろすことができたから。

「これから君を下に降ろす。リグ達が受け止めてくれるから少しの間恐くても我慢してくれ」

「…………あなたは？」

「後から行くよ。一緒に降りるより一人ずつの方が危険は少ないから」

レイピアは突然目を見開き、悲鳴を上げる。

「危ない！」

その悲鳴のような叫びにハツとして後ろを振り向くと、燃えた外壁の一部がスキルの背中に崩れ落ちてくるところだった。間一髪でそれを避ける。まともに直撃していたら彼の体は火に包まれていただろう。

「……急いで」

レイピアを抱え直し再びバルコニーに向かつ。背後ではズズズ…と建物が嫌な音を上げているのが聞こえる。

「スキル、駄目。一緒に降りましょ」

レイピアは懇願するような瞳をスキルに向けた。

もうこのバルコニーがいつ崩れてもおかしくない状態なのをレイピアもわかっているのだ。リグ達がレイピアを受け止め、次にスカルを受け止める準備をするのでは間に合わない。

「一緒に……お願い、スキル」

絶対に離れまいとスキルの服を強く握りしめている。レイピアの思いを知ったスキルはゆっくりと頷く。

「レイピア……わかった。一緒に降りよ」  
「私……あなたと一緒にだったら……」

死んでもかまわない、そう言おうとしたレイピアだったがその言葉はスキルの言葉によって遮られる。

「……俺は死ぬ気はないよ。もちろん君も。返事を聞くまでは何が何でも生きのびてやる」

ニッと不敵に笑う。

そしてスキルはレイピアを抱え上げたままバルコニーに足をかけ、躊躇うことなく飛び降りた。それとほぼ同時に彼がいた場所に外壁

が崩れ落ちバルコニーが炎に包まれた。

落下の時間は実際は一瞬のことなのに、彼らことひどい時間のように感じられた。

レイピアを固く抱きしめ、落下への衝撃に耐え瞳を閉じた。

次にスキルが目を開けたのは、シーツに受け止められる感触を背中に感じてからだった。包み込まれるようにやわらかい感触。思つていたよりずっと衝撃が少なかつた。

「……助かった……」

抱きしめているレイピアを見ると彼女もまた無事で怪我一つ負つていなかった。大きく安堵の息をついた。

瞳を開けたレイピアもまたスキルを見上げ、おずおずと問い合わせてくる。

「スキル……私達……無事なの？」

「ああ。どうやら悪運が強いらしい」

レイピアは安心したように深く息をつき、それからクスッと笑い出した。

「あなた、服も顔もドロドロよ」

スキルの顔も体もバケツの水を被ったのと汗とススとが混じつてドロドロの状態だった。くすくすと笑っていたレイピアの声は次第に涙声へと変わっていく。

同じように 스스로汚れているレイピアの頬を涙が伝い落ちていく。

「助けにきてくれて……守ってくれてありがとう……」

2度と離れまいとするよつこ、固くスキルを抱きしめたまま瞳を閉じた。スキルは微笑み、愛しげにレイピアの頭を撫でた。

\* \* \*

視線を感じて顔を上げると、声を掛けようか掛けまいが悩んだ様子で見下ろしているラグスとサークル団の皆の姿があった。

「…………みんな…………」

レイピアは胸がいっぱいですそれ以上言葉にならずラグス、リグ、シア、ブレン、団員達の顔を見渡すだけで精一杯だった。

「姐さん。俺は…………俺は！…………心配したんですね」

「ラグス、『こめんなさい』…………でも、あなたが知らせに行つてくれたおかげね。ありがと！」

ラグスは大きな体を揺らし、ワッと涙を流して泣き崩れる。団員達は驚いた表情その様子を見つめていたけれど、誰も彼のことを苦笑いしたり馬鹿にしたりはしなかった。

「レイピアさん…………よかつた。心配したんですよ」

リグもまたラグスと同様に今にも泣き出しそうな顔で深く息を吐き、胸を撫で下ろした。

レイピアとスキルが無事であることを喜んでいた彼だが、それも束の間のこと。すぐに顔を真っ赤にしてカンカンに怒り出した。

「まつたく、あなたときたら… もつ無茶はしないって私と約束したじゃありませんか！」

レイピアは申し訳無さげに泣き止み以上ないくらい身を縮みこませる。

「「」「」めんなさ」「…… リグ」

「本当に今度という今度は心臓が破けてしまうかと思いましたよ… 私が早死にしたらどうしてくれれるんです…？」

今度は笑いを堪えて震えているスキルをキッと睨みつけた。

「若君… あなたもそうです。笑ってる場合じやありませんっ！ あんな状態になつてる屋敷に入るなんて無茶もいいといひます！」

スキルは苦笑しながら手をひらひらと振った。

「今後は気をつける。悪かつた、リグ」

言葉ではそういうつとも、態度にはちつとも反省の色が見られな  
いスキルに再びリグが「若君…！」と怒鳴った。

「レイピアの馬鹿、馬鹿、大馬鹿 つー」

次にレイピアの元にきて大声を張り上げたのはシア。こんな風に彼女がレイピアに対して怒鳴りつけるのは初めてのことだった。

「一人で悩んで、勝手に出て行つてしまつなんて！ その上炎の屋

敷に飛び込むなんて！ いっぱいいっぱい心配したんだから 一

彼女の怒りはもつともなこと。色々とレイピアのことを気にかけてくれて、いつも助けてくれたシアに対してもレイピアがしたことといえば何の相談もせずに黙つて出て行つてしまつたことだ。その行動がどんなに彼女を傷つけてしまったかと思うと申し訳なさでいっぱいになる。

「シア……『めんなさい。本当に』『めんなさい』……」

シアはペチ、と軽くレイピアの頬を叩き、それからニコニコと笑う。

「これで許してあげる」

「シア……」

「レイピアも辛かつたんだものね。でもね、これからは1人で悩まずに私に相談して……それとも私じゃ頼りにならないかな？」

何度も何度も首を振つて否定する。

「そんなことない！ ありがとう……シア。大好きよ」

シアに飛びついで抱きしめる。

すると周りからパチパチパチ、と拍手が沸き起つた。

驚いてシアから離れ、顔を上げてみると屋敷の庭には見物にきたたくさんの街の人達がいて、「俺、感動した！」とか「いいもの見させてもらつたぜ！」とか口々に叫んでいる。レイピアは恥ずかしさで顔を真っ赤にさせて俯く。

「この屋敷を救つたのは俺達サークス団さー。中央広場で公演を行なつてるのでぜひひ見に来てくださいねーー！」

そんな中、何人かの団員達は屋敷の様子を見に来ていた町の人1人1人に「よろしくねー」と言ひてビラを配り歩いていく。レイピアは団員達とスキルとを交互に見た後、お腹を押さえて笑い出す。

「まつたく……。みんな商売根性が逞しすぎるわ」

「はは、これが俺達の新しいサークル団のやつ方さ。宣伝活動はどんな時でも抜かりなく、つてね」

「……あなたらしいわ」

2人してひとしきり笑った後、お互いを見つめ合つ。

先程にも増して顔を赤らめたレイピアは、スキルが見つめている前でゆっくりと左の薬指にはまる銀の指輪に唇を落とした。それは求婚を受け入れるという証。

「私ね……夢だと思っていたの。あなたが逃げるなって言つてくれたこと、結婚を申し込んでくれたこと。でも……それが夢じやないとわかつて……とても嬉しかった」

「うん」

「……あなたはいつでも私を守ってくれるのね」

「そりゃあ……惚れていますからね。これ以上ないくらいに」

照れくさそうに頬を搔いて笑う。同じように照れてしまったレイピアも顔を俯かせる。

「明日からとても忙しくなる。サークル団で暮らしていくつていうのは大変なことも多い。それでも一緒にきて欲しい。いいかい？」

「はい！」

顔を上げたレイピアは満面の笑みを浮かべ、幸せそうな表情で答えた。スキルはこんな表情をするレイピアを初めて見る。たまらなく綺麗だと思った。

自然とお互い瞳を閉じ、引き寄せられるようにゆっくりと唇が重なる。

ワツと団員達と街の人々の歓声が上がる。「おめでとーー」という祝福の声をもらうレイピアは顔を真っ赤にして俯きながらも嬉しそうだった。その光景を見つめていたラグスは「お幸せに、姉さん」と言いながら唇を噛み締めこつそりと涙を流した。

翌日、街では2つの出来事に話題が集まっていた。

盗賊に襲われ半焼してしまったロワーズの屋敷のこと。そしてロワーズの命を救つたサークス団のこと。

屋敷はすぐに建て直しがされることになり朝から屋敷には大工が詰め掛け大いに賑わっていた。

一方サークスの方は屋敷とは違う賑わいを見せている。昨日の一件が元で一躍有名になつたスキル達を見ようと朝からステージとなるテント前には人が押し寄せている。チケット売り場は大変な混雑で売り場の者達は、忙しさと嬉しさの悲鳴を上げっぱなし。

公演が始まり、観客の前には団長としてステージに立つスキルと、その婚約者として傍らに寄り添うレイピアの姿があり、誰の目から見ても2人は幸せそうだった。

ステージは大成功。

観客からの割れんばかりの拍手が上がり、ステージの幕はゆっくりと閉じていった。

END

**番外編 その1・・・ゴーザ編（前書き）**

11章 読後推奨。過去編の話。

嬉しかったんだもの。来いよ、って言つてくれたコーヴの言葉が。

真つ直ぐな瞳で。  
娘はそう言つた。

ホツトリープの街中で助けた娘、名はレイピアと言つた。いや、あれは助けたというものではない。道を塞いでいた男が邪魔で退かしたのを娘が勝手に助けられたと勘違いしたのだ。

娘を連れて行こうと考えたのはある考え方があつたからだ。親切心から困つているのを見かねて面倒をみようとしたのではない。

セレイラの街についたら娘を売るつもりだった。

そこでは「花街」というものが存在しており、娘……特に生娘は娼館に高く売ることができる。売つて、金を受け取つてそれで終わるはずだった。

そのはずだったのだが……。

何度も花街に連れて行こうと考えた。

冒険者ギルドの保険に加入させて事故を装つて殺すことも考えた。もちろん受取人は自分にして。

だが、どうしてもその一步が踏み出せなかつた。行動を起こそうとするたびに娘の言葉と笑顔が頭を反芻した。

コーヴは私を助けてくれた人、私にとつては光みたいな人なの。

光などといつ自分とは最も縁遠いものに結び付けられたのは初めてだった。

世の中のことを何も知らない世間知らずの貴族の娘。  
だから、こんなにも愚かなのだろうか。  
素性もわからない自分のことを少しも疑つこともなくついてきた  
愚かな娘。

その愚かな娘にはまったく自分はもっと愚かだな、と自嘲する。

「レイピア……」

幸せそうに自分の隣に眠る娘の髪の毛を梳き上げる。薄暗い中で  
すら、その滑らかな銀色の髪の毛は輝く。

「…………ん」

微かに身じろぎしただけでレイピアが目を覚ます気配は無かった。  
レイピアの背に腕をまわし、引き寄せるときの閉じられた瞼に唇  
を落とす。愛しさがこみあげてくる。

まだレイピアに話をしていないことがある。

自分の過去のこと 盗賊団に所属しているということを。それ  
を話したとき、一体目の前の娘はどんな表情をするのだろうか。

その青の瞳は灰色に染まるのかもしれない。

言えるはずがなかつた。

これまでに何人の命を殺めた。剣士としても、盜賊としても。かつては逃げ惑い、泣き叫んで助けてくれと懇願する者すら手にかけたこともある。仲間達と共に街を焼き払い、掠奪した金品を手に薄く笑つた。

もう掠奪行為をしようとは思わない。  
あれほど虚しいものはないから。

仲間とも手を切ろうと考えている。

しかし、人の血で真っ赤に染まつた手……」そればかりは洗い流しても洗い流してもその罪が消えることは決して・・・無い。レイピアに触れるのが躊躇われるぐらいにこの手は血に染まっている。だが、たとえこの手が穢れていたとしても、この娘だけは幸せにしたいと思つた。

初めて誰かを幸せにしてやりたいと思つた。

レイピアを愛している。

だから、言うことができずにいる。知られたくない。自分に対して絶対の信頼を寄せているこの無垢な娘には……。知らずのうちにレイピアの背にまわしていく腕に力が入ったのだろう。苦しそうに眉間にしわを寄せる。

「……コーヴァ……？」

微かにレイピアが瞳を開ける。

どうしたの?と問いただげに眠そうな瞳のまま見上げてくる。

「何でもない。いいから……もう少し休め」

そう言つて微かに笑みを浮かべると、それを見たレイピアは安心したよつこまた幸せそつな表情ですすりと眠りこつぐ。

守りたい。

この先、どんなことがあってもレイピアだけは……。

**番外編 その2・・・スキル編（前書き）**

12章 読後推奨。過去の話。

## 番外編 その2・・・スキル編

シアは幸せそうに笑っていた。「私、幸せになつてくるから」そう言つてサークス団を抜けたのはつい先日のことだった。

貴族の男にサークス団で働くのを辞めて、自分の所に来ないかと言われたらしい。シアはサークス団の重要な戦力であり、彼女がいなくなつてしまふのは大きな痛手となる。話を聞いたときは驚いたものの、シアの嬉しそうな顔を見ていると反対する気分もなくなり、心から幸せになつて欲しいと思つた。

だが今日、サークス団に戻つてきたシアの姿……それは見ていて痛々しいものだつた。

殴られた顔は腫れ、紫色に変色しているし体中痣だらけだつた。小刻みに肩を震わせ、嗚咽をもらしている。シアは何も言わなかつたが彼女の身に起こつたことは容易に想像がついた。  
騙されたのだ、あの貴族に。

「あの野郎……」

ブレンは幼なじみの少女の肩を抱き、こめかみに青筋を立てた。彼の心の中にはシアを騙した貴族の男への怒りでいっぱいだつた。そしてスキルもリグもまたその気持ちは同じだつた。

「若君！？ どこに行くんですか」

「……散歩」「わ、若君！」

スキルはそう言つて出て行つたけれど、とても散歩に行くような雰囲気ではない。怒つた様子などその表情からは感じられないけれ

ど、静かに怒っているのは付き合いの長いリグにもブレンにもわかつた。

「シアを頼む」

「ブレンまで！？ 待ちなさいっ！」

リグの止める声を無視してブレンもまたスキルの後を追った。

＊＊＊

スキルの心中は苦々しさでいっぱいだった。

今回のシアのようなケースは初めて起こったというわけではない。以前にもたびたび団内で起こっているのだ。流れ者として各地を点々としている彼らはこうしたトラブルに非常に巻き込まれやすい。

幼い頃からそんな男女のいさかいを見てきたスキルだつたから恋愛というものに対して少々冷めている部分がある。

シアの話を聞いたときもその可能性があることに気がついていたのだが、しつかり者の彼女が選んだ相手ならば大丈夫だろうと軽く考えていた。

だが結果はあの通り。

スキルは唇を噛み締め、シアを騙した貴族の家へ向かった。

屋敷には正面から入らず、警備の目をかいくぐって裏口から侵入した。誰にも見咎められることもなく貴族の男の部屋に入ると、突然の侵入者に驚いたらしい男は慌てふためいた。

「何だお前は……っ！？」

スキルはその問い掛けを無視し、無言で近づいていく。

「お前は……シアの仲間か！」

男の言葉にスキルは表情を険しくさせる。

「……シア？ うちの団員のこと【反女】呼ぶなよ」

吐き捨てるよつこ、彌々しだす。ひゅつ。

「勝手に屋敷に入り込むなんて……。どうなるかわかつているんだろうな？」

「へえ。どうなるんだ？」

その言葉を言い終えるなり、スキルは握りこぶしで男を殴りつける。

ガツ

鈍い音を立てて貴族の男の体が飛ぶ。

「シアの顔を殴った分だ」

淡々と言葉を言い放つその表情は氷のよつて冷めきつてこる。

「……痛いか？ でもシアの受けた痛みはこんなもんじゃない

男の腹を蹴り、そのまま足で踏みつけ、逃げられなよつ壁に縫いとめる。ポケットにしまい込んでいたナイフを取り出すと男の首筋に押し付けた。

少しの無駄もない流れのような動作だった。

「ひ、ヒヤ……」

ひんやりしたナイフの感触に男は表情を凍りつかせる。

「今度同じようなことをやつたら、こんなもので済むと思つな……」

男にわざと見せつけるように大げさにナイフを振り上げると、そのまま男の首筋をかすめて壁に突き刺した。

つ、と男の首に糸のような血が流れる。

「次は……殺す」

低く、ぞつとするような声音だつた。その言葉は効果絶大だつたようだ。男は失神し、へなへなと床に崩れ落ちてしまった。そして効果絶大だつたのは貴族の男だけでなく、ここにもまた1人。

「い、こえええ……」

ブレンだつた。スキルの後を追つて来たブレンはその現場を一部始終見ていた。

両手で頬を押さえ絶句し、顔を青くしてスキルからじりじりと後ずさりする。かなり引いてしまつた様子。スキルはやれやれとため息をつく。

「なんだよ、ブレン。お前が恐がつてどうするんだ」

「いや、だつてさあ……。お前があんなに怒つてるの初めて見たから

スキルは笑う形に唇を歪める。

「ら

「最後のアレは単なる脅しで本気じゃない。あれだけ脅かしておけば後から問題が起ころる心配も無いからな」

確かにその脅しは効果絶大だったようでの男の怯えようでは今後シアはおろか、サークス団に危害を加えるとは考えにくい。

「あーなるほど。てっきり俺は本気で殺つちまうのかと思った……」

「馬鹿だな。俺は人殺しはしないよ」

現にスキルは男の首筋に押し当てたナイフを一旦引き、わざと見せつけるように振りかぶつてから再び壁に刺した。本気で殺すつもりだったらナイフを引かずにそのままかき切つてしまつた方が早い。スキルは盗賊だけれど、彼なりに信念はある。

絶対に人殺しはしない。女子供に刃物は向けない。その信念はこれから先も変わることはない。

「それにしても、お前ばっかりいいところどうじゃねえ？」

ブレンは口を尖らせてぶつぶつ文句を言つ。

「遅れてくるのが悪い」

「ちえつ」

「お前にはもっと大事な役目があるだろ？ シアのことを支えてやつてくれ」

スキルの言葉にブレンは目を丸くさせて驚いた表情をする。

「俺が？」

「人の心を癒すとか、……俺はそういうのよくわからないからな。

それに、シアはお前の大事な幼なじみだら？」

シアが笑顔を取り戻すのには時間がかかるだろう。

彼女を傷つけた男に報復することはできる。やさしい言葉をかけることもできる。だが、シアを完全に癒すことはできない。スキルは自分自身でそのことをよくわかつていた。

その点ブレンなら大丈夫だ。

彼女の幼なじみでもあり、態度こそ悪いがシアを本当に大切にしているから。

「……ああ」

スキルの予想通りブレンは真剣な表情で頷いた。

「さて、帰るとするか。早いところ戻らないとリグがうるさい」「もう遅いと思うぜー。どうせまた『勝手に飛び出していいて！心配したんですから』とか何とか言つて延々とお説教されるんだぜ」「……ありえる」

ぐるぐると手の中で弄んでいたナイフをしまつ。

大きく伸びをしてから2人は再び警備の者に見咎められないよう屋敷を後にすることにした。

番外編 その3・・・スキル編『戸惑い』（前書き）

8章読後推奨。その時スキルが思つていたこと。

子供達の笑い声が響き渡る。

いつだつて子供達は元気だ。あの事件　ライの処分によつて団員達が暗く沈んでいる中からいちはやく抜け出したのも子供達だつた。まだ生き物の死というものについてあまり理解していないのかもしれない。けれどもその明るい声につられるように大人達が立ち直りつつあるのも事実だ。

スキルはテント街の外れにひつそりと造られたライの墓の前に足を運んでいた。土が盛られたその上に小さい墓石が置かれただけの簡素な造りの墓だつた。

スキルはそこに膝を折ると墓石の隣に今朝手に入れたばかりの一輪の白い花をたむける。

人の手によつて処分されてしまつた若い雄ライオン。ライのことを考えると胸が痛んだ。ライを処分したことはスキルとて辛いことだつたのだ。団長である父の意見に従つて最終的に判断を下したのはスキルだつたが、ライを処分せずに済むのならどれほど良かつたか。

スキルのいるサークルは曾祖父が最初に始めたもので、古くから続いているものだつた。今のように有名になつて興行収入が上がつたのはごく最近のことで、曾祖父の時代には思うように収入を得られない時期が続いた。その曾祖父の時代に同じよつてライオンが人を噛んだ事件が起こつた。その時は調教師がライオンを叱り付けただけで処分はされなかつたのだが、数日後の人を噛むことを覚えてしまつたライオンはその調教師を噛み殺してしまつた。猛獸を相手にするというのは犬や猫を相手にするのとは違うということを改

めて思い知らされる事件だつた。

それ以来サー・カス団では1度でも人を噛んだライオンを処分することに決めた。これは曾祖父の代から続いているルールなのだ。

団員達の安全を考えた上での処分だった。

「じめんな、ライ

ライに對して謝罪の言葉を口にした後、立ち上がる。

「若君何してるの～？」

先程までテント街の方で走り回っていた子供達3人がいつの間にかスキルを囲むようにして、不思議そうな顔をして首を傾げていた。

「祈つていたんだよ、ライの魂が安らかになりますよつこつてね。お前達も祈つてくれるか？」

子供達はスキルの言葉に大きく頷くと、ぎゅっと手をつぶつて手を合わせた。その一生懸命な姿に思わず顔をほころばせると、くしゃくしゃと子供達の頭を撫でた。

「ありがとう。さ、向こうに行つて遊んでおいで」

「あのね、僕達これ取つて来たの」

男の子は小さい手にいっぱい握りしめていた草をスキルに差し出した。その新緑色の草は薬草で、煎じて飲むことも絞り汁を塗り薬として使用する事もできるものだった。

「どうしたんだい？ これ

「僕達が取つてきたの！ お嬢さんにー！」

「……お嬢さん?」

「うん!」

誇らしげに顔を上気させて頷く子供達。

子供というのはいつだって大人の口調を真似したがるものだ。周りの大人がスキルのことを「若君」と呼ぶから自然と子供達もスキルのことをそう呼ぶようになったし、スキルがレイピアのことを「お嬢さん」と呼んでいるものだから自然と子供達も同じように呼ぶようになった。

「どうして俺に? お前達が直接持つて行つた方が喜んでくれるんじゃないか?」

スキルの問いかけに子供達は困ったような表情を浮かべてもじもじと体を揺らす。

「あのね、あのね、僕達若君とお嬢さんに仲良くなつてもらいたいの。だつて若君つてばお嬢さんをいじめるんだもん」

「い……いじめて……?」

確かに怪我をしているレイピアに対してもスキルは一切手加減をしなかつた。隙を狙つてはダイヤを奪おうと手を伸ばすレイピアの腕を掴んでは引き倒す。そもそもゲームについて詳しく内容を知らされていない子供達からしてみればその様子が彼女をいじめているよつにも見えるのかもしれない。

思わず苦笑してスキルは降参の形に両手を上げた。

「わかつたよ。これは俺からお嬢さん」渡しておくから

「本当? 仲良くしなくっちゃ駄目だよ」

「ああ、努力はしてみるよ」

薬草を受け取り、そのままレイピアのテントに向かって歩き出した。

「……まさか子供達にまで言われるとはね」

スキルもレイピアについては少しやりすぎかと後悔している部分がある。しかし手を抜いたらレイピアに怒られることは容易に想像がついたし、スキルもついレイピアの顔を見ると本気で相手をしてしまう。

調子が狂っているのだ……。

\* \* \*

「君は案外不器用なんだね」

レイピアのテントに入ったスキルがそつぶやいたのは、レイピアが右手に巻かれた包帯を取るのに悪戦苦闘している姿を目にしたからである。

スキルの言葉にカチンときたレイピアは顔を真っ赤にして睨みつける。

「う、うるさいわねー！ 片手で包帯の結び目を解くのが難しいんだからー。」

スキルはレイピアの隣の空いている椅子に腰掛けると、先程子供達から受けとった薬草の束をレイピアの前に突き出す。

「この薬草は子供達からもらつたものなんだ。傷口に塗ると回復が早くなる……と言つてもその様子じやあ塗れそつもないみたいだな」

なかなか包帯が取れずにはじめたレイピアに苦笑して、スキルが代わりに結び目を解く。驚いて目を丸くしたレイピアだが、「ありがとう」とぶっきらぼうに言い放つとそれきりスキルに任せた形で大人しく腕を突き出した。

解かれた包帯からは生々しい傷跡が見えた。縫つたために皮膚が大きく引きつれたようになつて痛々しい。一生残る傷跡だが、それでも腕が引きちぎられなかつただけ幸いといつべきだろう。

レイピアの手を取つて薬草の絞り汁を丁寧に塗りこんでいく。

驚くほど白くてほつそりとした腕だ。

ほんの少し、胸の中に熱が生まれる。

恐らくスキルが少し力を入れて手前に引くだけであつさつとレイピアは体勢を崩して倒れこんでくるだろう。

いつそここの手を思いきり引いてしまおうかという衝動に駆られたその時。

「も、もういいからっ！ 終わったんでしょ？」

うわずつたレイピアの声がスキルの耳をうち、一気に現実に引き戻された。顔を上げるとレイピアの戸惑つよつに細められた青い瞳と視線が絡み合い、思わず先程胸に生まれた熱を誤魔化すように口元に笑みを浮かべた。

「あとは……自分でできるわ……っ」

半ば強引にスキルの手を振りほどいて、視線を外す。顔を俯かせた状態のまま自分で包帯を巻いている。必死で。

スキルの態度に戸惑つているような感じにも見える。

「そうかい？ ぐるぐる巻きにして//マラにならないよつて注意した方がいいよ」

軽口を叩いてスキルはその場から退散する。「そこまで不器用じゃないわ！」そう怒鳴りつけるレイピアの声を背にして。

テントから出たスキルはそのまま天を仰ぎ見てため息を洩らした。あの時胸に生まれた熱。

今まで何度もレイピアの手に触れる機会はあったし、それ以上のことすらしていたというのに何故今さらになつてこんな思いが胸に生じるのか。

「本当に調子が狂うな……」

誰に言ひでもなくポツリとつぶやいてスキルはもつ一度ため息を洩らした。

番外編 その4・・・帰宅（前書き）

ロワーズの屋敷から脱出した後の話。糖度注意報。

燃えたロワーズの屋敷の消化が終わり、騒ぎが収まつたのは夕暮れ時だつた。屋敷は半焼の状態で、残つた部分もいつ崩れ落ちるかわからなかつたため、一から建て直しをしなければならなかつた。だが、死者も大きな怪我を負つた者もいなかつたのは不幸中の幸いといえよう。

ロワーズもまた「建物が燃えてもまた建て直せば済むことや」と快活に笑つた。

レイピア達はロワーズ宅を離れ、アクアクリスの街の外れに構えたサークルス団のテント街へと戻つて来た。サークルス団に戻つてくるのは2週間ぶりぐらいなのだが、もうずっと長い間離れていたようにも感じる。

「私は食事の準備をしてテントの方へ持つていきますから、とりあえず2人ともお風呂に入つちゃつてくださいね。すすぐだけなんですから」

リグに言われ、あらためて自分達の状態を見るとかなり酷いものだつた。服はあちこち焦げているし、顔も手足もすすぐ所々黒くなつていて。

あまりの格好に2人はただ苦笑するしかなかつた。

「えつと、荷物を置きたいんだけビビーへ置けばいいのかしり?」

以前、ホットリープのテント街にいたときはレイピア用のテントがあつたけれど、今はアクアクリスに移つてしまつたからレイ

ペイペイアのテントは無くなっている。

「俺のテントでいいよ。ついてきて」

スキルが立ち上がり、レイピアを手招きした。  
彼のテントに荷物を置く、ということは今日はそこに泊まるということなのだろうか。

カーッと顔が赤くなる。

婚約もしたし、久しぶりの再会だし、状況としてはおかしくないのだが何とも恥ずかしいものがある。

その上、団員達がみんなにやにやと笑って見送っているのだ。  
スキルなど団員達に寄つてたかって背中をバシバシと叩かれたり、  
小突かれたりしている。その度に半眼になつて「痛い」とうめいでいる。

そのことがますますレイピアの頬を赤くさせた。

急にスキルによって手を取られた。団員達を振り切るために駆け出すのかと思ったら、そういうわけでもないようだ。ただ手を繋ぐという行為。

ピュー、と団員達の口笛が聞こえる。

その中を2人で歩いていく。

レイピアが急に黙り込んでしまったので、スキルが問い合わせてきた。

「どうかした？」

「手、繋いで歩くのは初めてだから……」

レイピアはこんな風に手を繋いで歩くという経験をしたことがなくて。恥ずかしい気持ちもあつたけれどそれ以上に嬉しかった。  
ふふ、と笑うとスキルもそれにつられるようにつっこりと笑う。

「じゃあ今度手を繋いで『デート』でもしましょつか？お嬢さん」

「『デート』……！」

再びレイピアは驚いた顔をする。

実は、『デート』というのもしたことがないのだ。ユーザと一緒にいた頃は冒険や戦いばかりの日々で、『デート』と言えるようなものはなかったから。

「嫌？」

『デート』、というのはどこへ行けばいいのかもよくわからない。何しろレイピアはそういう方面に疎いのだ。でもスキルに任せてしまえば上手くワードしてもらえそうな気がする。

スキルの言葉に対して首をぶんぶんと振つて否定する。

「ううん、そんなことない。行きたいわ！」

そんなことを話しながら、2人はスキルのテントに入った。

彼のテント内は相変わらず余計なものは置いておらず、簡素な感じだった。荷物を下ろす。

スキルは椅子に腰掛け「お風呂、先にどうぞ」とレイピアを促す。

「あ、ありがとうございます。いいの？」

彼だつてすすぐらけの状態なのだ。先に入つていいものなのだろうか。レイピアが躊躇していると、スキルはにつこつ笑つた。

「もちろん。それとも一緒にいる？」

心底楽しそうに言うのだ。冗談とも本氣ともつかなくて。カーッと顔に血が昇つてくる。

「ば、ば、ば、馬鹿！」

慌てふためき、手元にあつたクッシュョンを彼に向けて投げる。避けられてしまつて、当たることはなかつたけれど。

あちこち軽い火傷を負つてしまつていたため、お湯に浸かるとヒリヒリと焼けるような痛みを感じたけれど、何とかすすを全て落とすことができた。

テントに戻ると、机の上にはリグの用意してくれた食事が2人分あつた。サンディッチと温かいスープだ。

スキルは先に食べてて、と言つたけれど彼がお風呂から上がるまで食事は待つていようと思い、椅子に腰掛けて休むことにした。

ひどく瞼が重い。

疲れが出たのか、机の上に頬杖をついたままうどんと頭を揺らす。

無理も無い。男の口ワープを支えながら炎の屋敷を動き回つていたのだ。体は相当疲労している。

まだスキルと話したいことがあるし、食事も2人で取りたいし、起きていないと頭では考えているのに襲つてくる睡魔には勝てず、やがてとうとう堪えきれなくなつたように机の上に顔を置いて、すーと寝息を立てはじめた。

しばらくして、スキルがガシガシとバスタオルで髪の毛を拭きながらテントに戻ってきた。

彼もまたところどころに火傷を負つていて、お湯に浸かつたらか

なりヒリヒリと痛んだよつた。だが、そんなことは微塵も表情に出さずに痩せ我慢するところはさすがと言つべきか。

スキルはしん、と静まり返つたテントに首をひねつた。もう日も落ちたといつのに電氣すらついていない。

「レイピア？」

問い合わせてみるが返事はない。

またどこかへ行つてしまつたのでは、といつ不安に襲われる。明かりを点けてみるとレイピアは椅子に座つたまま、頭を机の上に置いて眠つていた。ホッと安堵する。

近寄つてみても、全く起きる気配がない。疲れているのだひつ。穏やかな寝顔だつた。思わず微笑がこぼれる。

起こさないように気をつけながら、レイピアを抱き上げてベッドに運び、毛布をかけた。

「お疲れさま」

体を屈めて、レイピアの頬と瞼に唇を落とす。

くあーっと大きな欠伸をして、首をコキコキと鳴らすとスキルは机に向かつた。今日やるはずの公演がロワーズの屋敷の火事騒ぎで中止になつてしまつたため、いろいろと調整を行なわなければならぬのだ。

まだゆっくりと眠るわけにはいかなそうだ。

\* \* \*

深い眠りから目覚め、目を開けると、微かなランプの光が入つてきた。その方向へ顔だけ向けてみるとスキルが机に向かつていて、

書類にペンを走らせていた。

レイピアが目覚めた微かな気配に気付いたのだろう。スキルがこちらを向く。

「ごめん、起こしちゃったね」

「私、眠つて……？」

スキルを待つているうちに二つの間にか眠ってしまったのだ。ハツとして慌てて上半身を起き出す。

「「めんなさい！」

「疲れてるんだよ。まだ夜中だから、もう少し眠つていい」と

「うん。もう、大丈夫」

起き上がって、机の方に向かつ。

「何か手伝えることはない？」

「いや、平氣だよ」

「でも……」

「これから、ゆっくり覚えていけばいいよ。時間はいっぱいあるんだしね？」

だから休んでいなさい、と言わんばかりにベッドへ押し戻されてしまい、その上毛布までかけられる。

仕方がないので、ベッドに入つたままスキルをじっと見上げる。

視線に気付いたスキルが首を傾げた。

「何？」

「怒らないの？あなたにもいっぱい迷惑かけてしまったわ。だから

……もつと色々言われると思つたの」

無鉄砲な行動ばかりして！と怒鳴られることを覚悟していたのだ。自分でももう少し考えて動けば良かつたとか、馬鹿なことをしてしまったという自覚があるから。だが、彼はそのことについて何も言わない。

「言いたい事はもうなんありたよ。でも、君の無事な姿を見たら……

「マニン

「もう危険な  
スギ川……」

危険なことはしないよ」にね。俺の寿命を縮めなして欲し

「うん……。気をつける」

レイピアが頷くと、その答えに満足したように彼もまた頷いた。  
そして、とろけそうな笑顔で笑う。

「スキルがやさしいわ……」

信じられない、といった表情でレイピアがつぶやく。

「じゃあ、今までの俺は何だったのかな？」

心なしか、少し肩を落としたように見えた。

「前のおなたは、もつと……何ていうか……そう、いじわるだったもの

スキルが苦笑する。

思い当たる節があるといつ感じだ。

確かにスキルには、レイピアにいじわるをしていた覚えがある。いや、いじわるというよりもからかっていたという方が正しいかもしない。

すぐにムキになるレイピアを見るのが楽しかったのだ。それは、好きな子をいじめたくなるといつ心境によく似ている。

「まあ、どちらも俺なんだけどね？」

「そりなんだけど。でも、何か変……」

とろけそうなほどの彼の笑顔は、間違いない恋人に向ける笑顔だ。そしてそれは自分に向けられていて。『 』。いまだにそのことが信じられなくて、夢ではないだろうかと思ふ。

「 」

スキルの問い掛けにふるふると首を振って、否定する。

「ううん。嫌じゃない……」

もちろん嫌なわけがない。

ただ、慣れないのだ。こんな風に甘い笑顔を向けられるということに。慣れていない上に、スキルの変わりぶりに戸惑っているだけだ。あまりに自分の記憶の中にある彼とかけ離れているから。

「まだまだあなたの知らない所、いっぱいあるわ。これからもっと知つていきたい……」

「俺も同じ意見。俺達が年寄りになるまでもまだ時間はいっぱいあるわけだから、これからゆっくりと、ね？ 未来の奥さん」

奥さん、などと不意打ちのよつよつ呼ばれてしまい顔を赤くし、あたふたと戸惑つ。

「奥つ！……そつか、そうなるのよね」

「これからは、このサークルの一員として暮らさなくてはならない。」

ダイヤをめぐって滞在していた時も大変だったけど、これからはもっと大変になるに違ひない。いずれは団長の妻として、サークルを盛り立てていかなくてはならないのだから。

でも、彼と一緒にだつたら何でもやつていける気がするのだ。それに気のいい仲間達もいる。

レイピアは体を起こし、ベッドの上に緊張した面持ちで膝をつき、深々と頭を下げた。

「あのつ、ふつつか者ですが……よろしくお願ひします」

キヨトゾ、とした顔でその様子を見つめていたスキルだったが、すぐに笑いを噛み殺すように肩を震わせた。

「な、何よ！」

「いや、かわいいなと思つて」

「だつたらどうして笑うのよ」

「それは、愛が余つて」

そう言つスキルを疑わしげな目で睨みつけて、頬を膨らませた。

「嘘つやー、前言撤回、やつぱりあなたつていじわるだわ」

「でもそんなところも好きでしょ？」

「……自信過剰」

「じゃあ嫌いなのかな？」

嫌いなわけがない。

わかつていて、こんな質問をするなんて、本当に

。

「……いじわる」

拗ねたようにボソリとつぶやくレイピアに対し、スキルは満足そうに微笑んだ。本当に、何ていじわるな人なんだろう！

ピンクダイヤモンドをめぐる勝負は終わってたけれど、彼には当分勝てそうにないと心の底から思った。

**番外編 その5・・・リグは見た（前書き）**

本編、完結後。あの2人は幸せらしい。リグの不運の話。

## 番外編 その5・・・リグは見た

その日行なわれた全ての公演が終了し、明日の準備が終わった頃。団員達は団長とその婚約者、スキルとレイピアの姿がないことに気づく。その理由を何となく察しているので特に気にすることもなく自分達のテントに戻るためにそれぞれ解散した。

肝心の2人はといふと、倉庫として使っているテントの中にいた。

「ね、ちょっと……スキル！」

衣装箱に背をもたせかけたレイピアは、顔を真っ赤にしながら抗議の声をあげる。

なぜこんなことになつたのか。  
単純なことだった。

小道具の片付けのために倉庫に入つたら、同じように片付けに來たスキルがいて、抱き寄せられてしまつたのだ。初めは軽くキスをしているだけだったのに、あれよあれよといつ間に押し倒されてしまった。

「誰か来たら……」

「誰かが来るかもしれないシチュエーションって燃えるよね」

などと、本気だか冗談だかわからないことを言つ。

「なつ何言つてるのよ……！」

「大丈夫、誰も来ないよ」

言いながらも手は休まることなくするするとレイピアの服を脱がしていく。上着を脱がし、服のボタンに手をかける。

「ちょっと待つ……ん」

制止の言葉は最後まで続かず、唇を塞がれてしまった。  
と、その時。

シャツとテントの幕が開く音がした。

「またぐ、どうして私がブレンの忘れ物を取りに来なくちゃいけない……んがっ！？」

ぶつぶつ言いながら入ってきたリグはスキル達を見るなりカキン、  
と石のように固まつた。固まつたのは彼だけでなくレイピアも同様  
だった。

「わ、私っ！　顔を洗つてくれるっ！」

いち早く立ち直ったレイピアがスキルを突き飛ばし、衣服を直し、  
弾丸のように外へと飛び出す。その場に残されたのは顔を俯かせた  
ままのスキルとリグの2人だけになつた。

重苦しい沈黙が訪れる。

「わ、わ、わ……」

顔を青ざめさせて、体を震わせるリグ。

「やあ、リグ」

顔を上げ、にっこりと天使のような笑顔で微笑むスキルの姿があ

つた。ゆっくりと近づいてくる。  
だが、田は少しも笑っていない。

「一体、どうこう、理由があつて、ソニー、やつてきたのかな？」

ソニーにじたまま、ひと言ひと言区切りを入れながら喋る。彼の背中から黒いオーラが出てこるのが見えるのだ。

恐い。

ハッキリ言つて恐い。

「ああああ……」

リグはベビに睨まれたカエルのようにならそその場から動けずにいた。

「ソニー数日公演の方が忙しくてね、よつやく今日になつてレイピアに触れることができたんだよね」

「あつあつあ……」

震えるリグをよそに数口ぶりだつたのにねえ、と繰り返す。

真綿で首を絞められる、といつのはまわにこうこう状況のことを言つのがもしそうない。こつそ思い切り怒鳴られた方がいいのに、とリグは思つのだつた。

恐りしこそその時間からよつやく抜け出し、肩を落としてボトボ歩くリグの視界に

「ふはーっはー、まさか本当に行くとは思わなかつたぜ」

と叫いながら足をばたつかせ、ヒーヒー涙を流して地面を叩くブレンの姿があった。あー苦しいー、と何度もつぶやきながら。

彼はわざと倉庫内に忘れ物をしたふりをして、リグに取りに行かせたのだ。その結果どうなるかも予測済みで。

何のことかわからずポカン、としていたリグだったが、その意味に気づくと見る見るうちに怒りで肩を震わせる。

「ブ、ブレン！ やりましたねあなたは、あなたって人は~~~~~！」

「こんな手に引っ掛けるお前がバカなんだよ。ブワーカー！」

「バ、バカとは何ですかー！」

取つ組み合つての喧嘩が始まる。

「ほんと、ガキなんだから」

傍からその様子を見ていたシアがため息をもらす。まるで男子学生のやるようないたずらだ、と思つ。20代の若者がやるようなものではない。

\* \* \*

顔を洗い、気持ちを落ち着かせ真っ赤になつた顔が元に戻つたのを確認してからレイピアはスキルのテントへと向かう。

まだ結婚をしていない2人はテントが別々になつている。どちらかがもう一方のテントにいる時が多いのであまり関係ないのだが、一応けじめはつけてあるのだ。

ベッドの上で資料を読んでいるスキルはレイピアに気づくなり手招きをした。近づいていくと腕を引っ張られすっぽりと彼の腕の中に包まれてしまった。

田を丸ぐするが、大人しくベッドに腰掛けスキルの胸に頭を預ける。

「リグのこと、怒ってるの？」

問い合わせると、スキルは軽く笑つてみせた。

「まさか。リグははじめると楽しいから」

「やっぱり・・・。あまりいじめるとかわいそうだわ」

「まあ、あんまりいじめないようにしてるんだけど、なんせ俺の生活の一部だしね」

昔からこんな感じだったんだから仕方ないんだ、と言ひ。レイピアは軽くため息をついただけでそれ以上たしなめようとまはしなかった。

「ふふふ。こんな風にゆっくりできるのって久しぶりね」

スキルに寄りかかったまま、レイピアがつぶやく。その顔はとても嬉しそうだ。

「最近忙しかったからね」

アクアクリスの一件があつて以来サークス団は以前の2倍ぐらいの賑わいを見せている。サークスを見たいという客が増えればそれに応えるためにも公演回数を増やす。そのため毎日がてんてこ舞いの状態なのだ。当然団長であるスキルにも負担がかかっている。この数日彼があまり睡眠を取っていないのを知っている。

「体を壊さないようにしてね。今日はゆっくり休んで」

スキルの頬に唇を寄せてから離れようとすると、だが、それは彼に阻まれてしまつて離れることができなかつた。

「君つてわかつてないな。そんなセリフを言わると男は弱いんだ。  
特にそれが自分の惚れてる相手だつたらなおさらね」

「疲れるんじゃないの……？」

「そんなの、吹き飛んだ」

レイピアをこれでもかとこいつへりこで強く抱きしめる。

「せつきの続きを」

頬を染めたレイピアの顎をくい、と上げて口づけようとする。  
と、その時  
シャツとテントの幕が開いた。

「あの、若君……せつきはすみませんでし……んがつ！？」

スキル達を見、再び石のように固まるリグ。

「わわわ……レイピアさん！？ セつきも顔を洗いに行つたんじゃ……」

「わ、私つ……！ 自分のテントに戻ろっつと」

スキルを突き飛ばし、弾丸のように飛び出すレイピア。後に残されたのは先程と同じように顔を俯かせたスキルとリグの2人だつた。たらたらと冷や汗が流れしていく。

「やあ、リグ」

顔を上げたスキルはにつこりと笑いかけた。  
だが、背中からは先程よりもさらに黒いオーラを発しているように見える。サーシと顔が青ざめていく。

「わ、わ、若君……！」

その後、リグの絶叫ともつかぬ涙声が響いたとか、響かなかつたとか。

番外編 その5・・・リグは見た（後書き）

完結。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6993/>

---

盗賊と領主の娘

2010年10月8日22時20分発行